もう１度恋をして

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう１度恋をして

【Ｎコード】
Ｎ９２９８Ｕ

【作者名】
余田史子

【あらすじ】
主人公、結城穂乃香。高校１年の秋に、突然違うクラスの藤堂司から告白される。でも、その場で断ってしまう。翌年、彼と同じクラスになってしまい、気まずい思いでいる穂乃香。だけど、彼のほうはもうすっかり、穂乃香のことなど眼中になかった。そして、穂乃香は司にどんどん惹かれていき…。穂乃香の恋は、果たして実るのか、想いは通じるのか…？

第1話　告白と失恋（前書き）

新しい恋のお話を書き出しました。ちょっとだけ、聖&桃子も特別出演します。

第1話　告白と失恋

それは、突然の出来事だった。
「結城さん。話があるので、ちょっと来てもらっていいですか？」
高校1年の秋、文化祭の日。私は友達と体育館にいた。軽音学部のライブで盛り上がり、目をハートにさせて、そのライブを見ていたときだ。
きゃ～～～！女生徒のものすごい歓声の中、私はいきなり声をかけられた。

振り向くと、知らない男子生徒が立っていた。いや、見かけたことはある。何部だったっけ？ああ、そうだ。弓道部だ。大人しい感じの、男子生徒だ。
「え？私？」
声をかけられたことも、隣にいた友達は気づいていない。私たち3人組は、みんな聖先輩のファンで、このライブをものすごく楽しみにしていたから、友達は聖先輩にくぎ付け状態だ。

「ちょっと来てもらえますか？」
ええ？今？なんで今？聖先輩が歌っているのに、なんで今なの？
でも、その人は私の手を取り、どんどん人ごみの中を歩いていく。
「あ、あの？」
何？なんの用なの？
ああ、先輩のライブ、最後まで見たいよ。

体育館を出て、その人は体育館の裏へと私を連れて行った。そこでも、体育館の中のざわめきは聞こえていた。
そわ…。できたら早くに話を終えて、体育館に戻りたい。

私がそわそわしているからか、その人が、
「あ、いきなりで驚いたよね」
と言ってきた。いや、そんなことよりも、早く…。と思いながら、
その人の顔を見ると、真っ赤だった。

あ、あれ?なんで真っ赤?
もしかして、このシチュエーションって、まさかとは思うけど、
こ、告白されちゃったりして。
まさかね。

だって、私、この人の名前も知らないし、なんの接点もないよ?
たとえば、遠くで見ていて好きになりましたとか言うんなら、もっ
と美人の子やかわいい子を好きになるよね。
私なんて、そんじょそこらにいる、平々凡々な高校生で、どっか
ら見ても、遠くから見て好きになるような容姿をしていない…。

「あ…。俺のこと知ってるかな?」
その人が、顔を赤くしたまま、聞いてきた。
「えっと、名前は知らないけど、1年生だよね?弓道部の」
「あ、知っててくれてたんだ」
いや、ほとんど知らないけど。

「…名前は、藤堂司…」
「とうどう、つかさ…君」
「あ、一回で覚えてくれた?」
「え?うん」

藤堂君はそう言ってから、しばらく黙ってしまった。どうしよう。
ライブ終わっちゃうよ。
私が体育館の出口あたりを気にしているからか、藤堂君は、

「あ、誰かに見られると困る？」
と聞いてきた。

「え？ううん、そうじゃなくて」
っていうか、なんでよりにもよって、聖先輩のライブの最中に声をかけてきたんだろう。それも、すんごい人ごみの中で私を見つけ出し、なんで人ごみの中から、ここに連れてきたの？

「ゆ、結城さん」
「え？」
「今日の後夜祭で、ダンスパーティあるよね」
「うん」
「その、誰かと一緒に踊る約束、してるのかな」

「私？！」
声が裏返った。ここの高校のダンスパーティは、参加が自由だ。最後の1曲だけチークで踊ることになっていて、カップルが踊るらしい。もちろん、彼氏もいない私たち3人組は、パーティに参加もせず、とっとと帰るつもりでいたのだ。

「で、出ないよ。彼氏もいないし」
そう言うと、藤堂君はほっと溜息をついて、
「もし、良かったら一緒に出ない？」
と聞いてきた。

「え？チークダンスに？む、無理」
私は首を横に振った。
「そういうの、恥ずかしいし、苦手だから」
そう困りながら言うと、
「あ、じゃ、ダンスはいい。っていうか、俺もあまり得意じゃなか

ったし」
と藤堂君は言った。

じゃあ、なんで誘ったの？
「えっと。その…。ほ、本当は昨日、声をかけようと思ってた。でも、どうしても勇気が出なくって、こんな時間に声をかけることになっちゃって。昨日のうちに、文化祭を一緒に回らないかって誘うつもりでいたんだ」

「え？」
「その…。俺、いや、僕と、つ、付き合ってもらえませんか？」
「…」
「それで、こんな時間からなんなんだけど、文化祭が終わるまでのあとの時間を、一緒に回りませんか？」
「…」

や、やっぱり、告白～～～～～？！！！

頭、真っ白だ。そうかなとも思ったけど、思ったけど、なんで、私～～？
「あ、え？」
私はまた、聞き返した。
「えっと…」
藤堂君は下を向いて、困っている。

「あ、あの。ど、どうして私の名前とか知っているの？」
「あ、それは、夏休みに知って」
「え？」
「部活、出てたよね」
「うん」

「俺も出てたから」
「…弓道部と美術部、接点あったかな」
「部室行くとき、美術室の前通るんだ」
「あ、そうか。それで、藤堂君のこと、私見かけたことあったんだ」
「うん。それで…、その…。絵を描いてるところを何度か見かけて」

「私が？」
「うん。すごく真剣に描いていて、一回、絵を見せてもらったことがあって」
「私の？いつ？」
「結城さんが休んでた日、あったよね。あ、今日いないんだって、美術室の前でちょっと、結城さんを探しちゃってたら、美術部の顧問の先生に見つかって、絵、見ていっていいぞって言われて」

「…」
「それで、ちょっとだけ、みんなが絵を描いてるところに、お邪魔させてもらっちゃって、結城さんの絵も見させてもらった」
嘘。先生勝手に、見ていいなんて言ったの？

「それで、すごく綺麗な絵を描くんだなって思って。桜の絵だったよね」
「季節はずれでしょ？」
「今日も美術室に飾ってあった。あれ、文化祭に展示するために描いてたの？」
「うん…」
「完成した絵も、綺麗だった」

なんだか、褒められるのは嬉しいけど、恥ずかしいな。
「…きっと、結城さんもあの絵のように、優しい人なんだろうなっ

て思って」
「そ、そんなことない、私、たいした人間じゃないし」
「でも、それから結城さんのこと、ずっと見てて」

「え？」
「友達といるところとか…。いつも笑顔でいいなって思って」
「…」
どこが？どこがいいの？わかんないよ。
「それで、文化祭までには、付き合えるようになれたらいいなとか、思ってたんだけど、なかなか声もかけられなくて」

「…」
わ～～～！！！！体育館から歓声があがった。あ、もしかしてライブが終わったとか？
「私、ごめんなさい。す、好きな人がいるから」
「…え？！」
「ごめんなさい」

「か、彼氏？」
「ううん、片思い」
「誰？」
誰って聞くの？聞いてどうするの？
私が黙っていると、
「あ、ごめん。詮索して…」
と藤堂君は謝った。

「じゃ、私はこれで」
今なら、もしかしてアンコールがあるかも。
「結城さん！」
「え？」

「と、友達でも駄目かな」
「友達？」
「うん」
友達って、何？どうしたらいいの？
「わ、私、男の友達っていなくって。そういうの、苦手…」

「そ、そうなんだ」
「ごめんなさい」
「ううん。時間取らせて、ごめんね」
「じゃ、じゃあ」
私は走って、体育館の中に戻った。

「アンコール！アンコール！」
体育館の中では、みんながアンコールと叫んでいる。そしてまた、舞台に聖先輩が現れた。
「きゃ～～～～！」
すごい歓声があがった。よかった。まだ、聖先輩のライブ見れて…。
だけど、頭の中で、さっきの藤堂君のセリフや、顔が何度も浮かんできて、ライブに集中できなくなった。

「穂乃香！」
ライブが終わり、体育館から校舎へと続く渡り廊下を歩いていると、友達の芳美と、麻衣がやってきた。
「どこ行ってたの？」
「うん、実は…」
私は2人に、藤堂君の話をした。

「こ、コクられてたの？」

「うん」
「で、ＯＫしたの？」
「まさか。私は聖先輩が」
「あほ～～～！聖先輩なんて、雲の上の人だよ。絶対に手に届かない人なんだから、彼氏にするならもっと、身近な人で手を打たなくちゃ」

「でも、芳美だって前に、ふってたよね？」
「あれは、思い切り好みじゃなかったから」
「私も知ってるよ、弓道部の藤堂」
麻衣が小声でそう言った。

「私、わかんないんだけど、どんな人？」
芳美が聞くと、
「知らないで、ＯＫしたかどうかを聞いたの？」
と麻衣がちょっと呆れて聞いた。
「うん。で、どんな人？もしかしてまったく冴えないとか？」

「う～～ん、可もなく、不可もなくって感じ？おとなしい真面目な雰囲気で、弓道が似合ってそうな、そんな男子だよね」
「…なんだ。そうなんだ。冴えないんじゃ、しょうがないね」
「だけど、そんなに悪くないと思うよ？私は」

「妥協するかどうかだよね。聖先輩みたいな人を狙っても、無理だと思うしさ」
芳美がそう言った。
「それに、聖先輩、今日彼女連れて来てたっていうしね」
「え？」
麻衣の言葉に驚いて、聞き返した。

「あれ？知らないの？多分、体育館にもいたよ。きっと、今頃一緒にいるんじゃない？なんだか、あのクールな先輩とは不釣り合いな、かわいらしい女の子だってさ」
「…」
嘘。嘘だ、嘘。

「は～～あ。絶対に彼女は作らないと思ってたのに、他校の生徒と付き合ってたとはね」
「芳美、ここらで、その辺の男子で手を打たない？私たちも」
「そうだね、麻衣。クラスでだったら誰がいいかな」
「うちのクラス？いない、いない」
「だよね～～～」

2人はそんな話をしながら、どんどん歩いていく。なんで？なんで聖先輩に彼女がいても、落ち込まないの？
ガク～～。私の足取りは重たかった。

3人で、カバンを持って教室を出た。それから、廊下を歩いていると、前から聖先輩が友達と女の子3人とやってきた。
うわ～～～。あの中に彼女がいるんだ。どの子？どの子が彼女？
そして、昇降口のあたりで、聖先輩は友達と別れた。でも、一人女の子が聖先輩の隣に残っている。

そしてこっちに向かって歩いてきた。私たちの前を歩いていた芳美と麻衣は先輩に、
「ライブよかったです。お疲れ様でした」
と声をかけた。うわ！すごい勇気だ。声をかけちゃえるなんて。

聖先輩は、
「どうも…」

とだけ、無愛想に言って、そのまま私たちの横を通って行った。
「クールだね」
麻衣が聖先輩の後姿を見ながらそう言った。そして、芳美と昇降口のほうに行ってしまった。

私はまだ、先輩の後姿を見ていた。聖先輩が隣に並んで歩いている女の子に、声をかけた。女の子は赤くなっている。すると、聖先輩はものすごく嬉しそうに、その子を見て笑った。
「…」
あんな笑顔、初めて見た。
女の子はもっと、顔を赤らめた。聖先輩が、その子を優しく見ているのがわかる。そしてそのまま、廊下を曲がって行ってしまい、2人の姿は見えなくなった。

「は～～～～～」
重いため息をついて、私は昇降口に行った。すると、昇降口の先に、藤堂君が友達といるのが見えた。
「う…」
会いたくないかも。

グイ！いきなり腕を麻衣につかまれ、下駄箱の影に連れて行かれた。
「今、出て行かないほうがいいよ」
「え？」
「藤堂君が穂乃香にふられたこと、友達に慰められてるところみたいだから」
「え？」

「藤堂君、めちゃくちゃ、暗いみたい」
「…」

まるで、今の私？
「けっこういい男じゃない？なんでふっちゃったの？」
後ろから、芳美がそう言ってきた。

「…だって、聖先輩のこと…」
「先輩に告白する勇気もなかったのに？」
「…だって、ことごとく断られるって聞いてたし」
「あ～～～あ。彼女見たけどさ、ほんと、聖先輩に不釣り合いな、かわいらしい子だったね」
「うん、色白で、小さくて、ふわふわした感じの…」

「男ってああいうタイプが好きなのかね」
芳美がそう言うと、
「私らとはまったく違うよね」
と麻衣が言った。

本当だ。私も全く違うよ。なんで、藤堂君が告白して来たかが、いまだにわかんないよ。
あの絵を見てって言ってたっけ。それって、どう受け取ったらいいのかなあ？
「は～～～～～」
私はまた重いため息をついた。

そのうえ、クリスマスまでに、麻衣と芳美は彼氏を作り、私一人で悲しいクリスマスになってしまい、もっと私は寂しい思いをするはめになってしまった。

「だから言ったのに。藤堂君で手を打ってたらよかったのにって」
と、何度も2人に言われた。
藤堂君のことは、何回か見かけた。男友達と笑っていて、もう私

がふったことなんか、どうでもよくなってるみたいだった。
それはそれで、複雑。いや、変に暗くなっていられるよりもいいかな。

高校1年の冬、クリスマスもバレンタインも、寂しいだけの何もないイベントとなり、春がやってきた。
春は好きだ。特に桜が好きだ。高校の校門の横に、大きな桜があり、見事な花を毎年咲かせるらしい。それを私は絵に描いた。

今年もまた、見事に咲いている。その桜の木の下を、高校2年になった私は、少しだけ期待で胸を膨らませ歩いていた。
2年のクラスには、好きになれる人がいるんだろうか。私にも彼氏ができるんだろうか。

校舎の入り口に、学年別にクラスと名前が貼り出されていた。そこには人がいっぱいで、なかなか見に行くことができないでいると、
「穂乃花。またクラス一緒だよ」
と、麻衣が私を見つけ、言ってきた。

「え？何組？」
「C組だよ」
「芳美は？」
「芳美はB組になっちゃった」
そうなんだ。クラス違うんだ。

「それとね、穂乃香。彼も同じクラスだよ」
「麻衣の彼？」
「違うよ。私は彼氏と同じクラスになれなかったよ」
「じゃ、誰？」
「彼だよ、君にふられちゃった、藤堂司」

「…え?!」

2年は、どんな人が同じクラスになるだろう。彼氏ができたらいいな。そんな期待を胸に抱き、桜の下を通ってきたのに、いきなり、気持ちが沈んでしまった。

ど、どんな顔をして会ったらいいんだろう。

どんな1年になっちゃうんだろう。あ〜〜〜〜〜。

大好きな春だって言うのに、いきなり私は憂鬱になってしまった…。

第2話　気まずい空気

ドヨン…。
「ねえ、麻衣。私、どんな顔で会えばいいかな」
「藤堂君？」
「うん」
教室に向かう途中、麻衣を呼び止めて私は聞いた。気持はすっかり、ブルー。教室に行くのもすごく嫌で、今すぐ帰りたいくらいだ。
「気にしないでいたら？気にしてたらかえって向こうも、気分が滅入るかもよ」
「気にしないって、どんなふうに？」
「だから、なんにもなかったかのように、振舞ってみたら？」
「そ、そんなことできないよ」
「じゃ、どうしたいの？」
「え？」
「穂乃香は藤堂君とどうしたいの？友達にでもなりたいの？」
ブルブル！首を横に振った。
「気にしないのが１番だよ」
麻衣はそう言ったけど、もし向こうが何か言ってきたら？周りの友達が何か言ってきたら、どうしたらいいの？
教室の前でも足が止まった。もういるのかな。そっとドアから中をのぞいた。
うわ。いる！友達と何か、笑いながら話してる！
私はそっと、気づかれないように教室に入り、藤堂君から一番離れた席に座った。

「そこ?そんなはじに座るの?」
麻衣に聞かれた。
「お願い。そっとしておいて」
私がそう言うと、麻衣は、
「しょうがないなあ。じゃ、私もここに座るよ」
と私の隣の席に座ってくれた。

藤堂君は窓際の席だ。私は廊下側の一番後ろに座った。はあ。どうか、席替えをいきなりしませんようにと願いながら。

私は目立たないように、小さくなってその席にずっといた。麻衣は、知ってる子が教室に入ってくるたび、元気よく声をかけている。私は時々、藤堂君を見た。藤堂君は一回もこっちを見ないで、ずっと友達と話していた。

チャイムが鳴った。と同時くらいに、先生が入ってきた。
「ほら、席につけ!次のチャイムが鳴ったら、体育館に移動する。それまでに出欠をとるからな。名前呼ばれたら、元気よく返事をしろ」
先生は体育の先生でまだ２０代。けっこう生徒から人気のある先生だ。

先生は名前を呼びだした。ア行から始まり、すぐにタ行になった。
「藤堂司」
「はい」
ドキ～～。名前を呼んで返事をしただけなのに、ものすごく焦る。

私は「ゆ」だから、出席簿は後ろのほうだ。ちら…。何気に藤堂君のほうを見た。藤堂君は窓から外を見ていて、まったく顔も見えなかった。

「結城穂乃香」
「はい」
私の声は小さかった。すると先生が、
「結城、もっと元気に返事をしろ。ちゃんと朝ご飯食べてきたのか？」
と聞いてきた。

うわ。やめてくれ。私のことはほっておいてくれ～～。クラスのみんながいっせいに私を見た。ああ、言わんこっちゃない。私は下を向いて、しばらく顔を伏せていた。
でも、どうしても気になり、また藤堂君のほうをちらっと見た。藤堂君はまだ、外を見ているようだ。

「はあ」
ため息が出た。
「暗いよ、穂乃香」
それに気がついた麻衣が、私に小声で言ってきた。
「う、だって…」
気にしないって言われても、気になるものは気になるんだもん。

「さあ、体育館に移動するぞ。廊下に並べ！」
生徒たちはみんな、ぞろぞろと廊下に出た。ドキドキ。私はさっさと麻衣の腕をつかみ、前のほうに並んだ。きっと男子なんて面倒くさがって、後ろに並ぶに決まってる。

「おい、背の順でいくぞ。我こそは小さいと思うやつが前に来い。自分はでかいと思うやつは後ろに行け」
え？
「お、中西麻衣。お前は小さいもんな。我先に先頭に来てえらいぞ」

「先生、それ褒められても、嬉しくないかも」
麻衣がだるそうな声で、先生にそう言った。

「おや？結城穂乃香。お前はもっと後ろだろ？小さいふりしても駄目だぞ」
「う…」
先生に背中をどんと押され、私は渋々後ろを向いた。
藤堂君は？あ、一番後ろのほうにいる。よかった。私はそこまで大きくないし、真ん中あたりにいたらいいよね。

「男子で一番でかいのは、お前ら、バスケ部の連中だろ？ほら、後ろに行け」
真ん中あたりで、ごちゃっとしていた男子に先生が声をかけ、後ろに行かせてしまった。
「お前らは、もう少し前だ」
そして、1番後ろのほうにいた、藤堂君を移動させている。
うわ、やめて。前のほうに来ないで…。

ドキドキ。私は前を向いたまま、後ろがもう見れなかった。いったい、藤堂君はどのあたりまで、前に来たんだろうか。
ああ、こんな思いをいつまでしなくっちゃならないんだろうか。
顔、合わせたくないよ。え～～ん、気まずいよ。

「出発するぞ」
先生が先頭に立ってそう言った。その後ろをみんな、かったるそうにぞろぞろとついていった。
「なあ、藤堂。今度の養護の先生知ってる？」
ドキ～～～。すぐ後ろのほうで、そんな会話が聞こえてきた。藤堂君が、すぐ後ろにいるってこと？

「知らない」
この声、藤堂君？
「若いんだってさ。前は５０代のおばさんだったけど」
「ふうん」
「２０代半ばらしいよ。それも、すごいグラマーなんだって」

「…」
「藤堂、聞いてる？」
「え？ああ、聞いてるよ」
「お前、よく部活で指怪我して、保健室の世話になるじゃん。どうする？いきなり誘惑してきたら」
「誰が？」

「だから、養護の先生だよ」
「それはないだろ」
「わかんないぜ～～」
「ないよ。俺になんか。聖先輩だったらわかんないけど」

「あ～～、でも、聖先輩は保健室行かないだろ」
「怪我しないから？」
「いや、保健室も病院も、ついでに薬も注射も嫌いだって噂、お前知らないの？」
「聖先輩が？」

「どんなに具合が悪くても、絶対に保健室には行かないらしい」
「ふうん」
そうなんだ。聖先輩って、病院嫌いなんだ。って、違う、そこはあまり関係ないよ。それよりも、すぐ後ろに藤堂君がいるってことのほうが、私には一大事。

どうしよう。絶対に後ろ向けない。ああ、やばいな。右手と右足が同時に出そうになってた。
「藤堂って、興味ないの？そういうの」
「う～～ん、あんまり」
「お前変わってるもんな」
「俺？」

「ちょっとじじくさいしな」
「俺が？」
「江戸時代なら、立派な侍にでもなってるんじゃないの？」
「なんだよ、それ」

「女なんか、まったく興味なし？弓道しか頭にないとか？」
「そ、そんなことはないけど…」
あ、藤堂君が困ってる。
「そういえば、俺、１年の時、お前がふられたって噂聞いたことあるよ。誰にだかは知らないけど、あれって本当？」

「…」
それ、私だよね？うわ～～～。
「なあ、藤堂、どうなんだよ」
「もう忘れた」
「え？」

「かなり前のことだし」
「ええ？１年の時のことだよ？もうどうでもいいってこと？」
「…だから、もう忘れた」
ズドン…。

い、いや、引きずっていられるよりもいいかも。そうだよ。忘れ

てくれてたほうが助かるってもんだよ。だけど、なんか、傷つく…。
「もうどうでもいいのか。まあ、引きずってもしょうがないもんな。じゃあ、俺と一緒にこの夏、海にでも行かない？」

「は？なんで海？」
「聖先輩って、海でナンパしたらしいよ」
「え？あのクールな聖先輩が？」
「あ、逆ナンだったかな？」
「まさか、嘘だろ」

…ナンパ？聖先輩が？嘘。
「だから、俺らも行こうぜ！他校の女の子、いいじゃん」
「…興味ない。夏休みも部活だし」
「お前、そんなだから、ふられたんだよ！」

し～～～～ん。その声がでかくて、一瞬ざわついていたその場が静まり返った。
「あ、あ、わりい」
それに気が付いたのか、言ったほうが謝った。えっと、何て名前だっけ？なんだか、失礼なやつだけど。
そのあと、まったく藤堂君は話をしなくなった。

はあ。重い。なんだか、空気がとっても重い。重い空気を引きずりながら体育館に入ると、なんだか、女子が色めき立っていた。
「聖先輩だ～～。かっこいい～～」
え？どこ？どこ？！
いた！友達とふざけあって笑ってる。ああ、笑顔が超まぶじい。
やっぱりいいな、聖先輩。

「穂乃香、穂乃香」

隣から声がした。
「あ、芳美～」
「違うクラスになっちゃったね」
「うん、残念だよ」

「麻衣とは一緒でしょ？」
「うん」
「寂しいけど、私、今年は彼氏と同じクラスだから、ちょっと今浮かれてるの」
「え？そうなの？いいなあ」

「ね、穂乃香。ここから聖先輩見えるね」
「うん」
「今日もかっこいいね」
「うん」
「彼女がいても、まだバレンタインにチョコあげたり、アタックしてる子いるらしいよ」

「そうなんだ」
「穂乃香も一回、コクってみたら？」
「私？！」
あ、やばい。声がでかくなった。
「私は無理」

「ふられてもいいじゃん。そうしたらすっきりと忘れられるかもよ。で、新しい彼氏見つけたら？」
「…」
あ、今の。藤堂君後ろにいたんだよね。聞かれてたかも！
って、別にいいか。関係ないもんね、もう。私のことも忘れたって言ってたし。

「聖先輩には、可愛い彼女いるもん」
「そうだけど」
「いいよ、芳美。聖先輩のことはもう、本当にいいの」
「そう言ってるくせに、暗いよ?ずっと」
「う…」

それ、聖先輩に彼女がいるってだけが、原因じゃないんだ。麻衣にも芳美にも彼氏ができたのに、私にいないってのが、1番ブルーになってる原因かな。
そのうえ、藤堂君と同じクラス。それもまた、暗い原因かも。

始業式が終わり、みんな後ろを向いてぞろぞろと歩き出した。
私はドキドキしながら後ろを向いた。すぐ後ろに藤堂君がいた。
もう後ろを向いていて、後ろ姿しか見えなかったけど、こんなに近くにいたんだって思ったら、なんだか、また気分が落ち込んできた。

気が重い。朝からずっと、気が重い。そんな気持ちのまま、教室に戻ってくると、さらに気が重くなることを先生が言った。
「さて、今は勝手に好きなところに座ってると思うが、お互いの名前を覚えるまで、出席番号順に座ってもらうぞ。さ、移動だ、移動。こっち側から、番号順に座れ」

「え〜〜〜〜?」
「たるい〜〜」
そう言いながらも、みんな荷物を持って席を立った。
えっと、えっと。藤堂君とは近くになることはないと思うけど、いったいどこの席になるの?私。

私は固まっていて、しばらくその場を動かないでいた。

「穂乃香、席離れちゃうね」
「麻衣、何番だっけ？出席番号」
「私は、２１番。穂乃香は？」
「私、３６番」

「俺、２２だけど、前は誰？もしかして藤堂？」
そう言う男子がいた。
「あ、私が２１番」
麻衣がそう言って手を挙げた。
「俺は２０番だよ」
藤堂君が、麻衣のほうに来ながらそう言った。

うわわ。私は慌てて荷物を持って、麻衣の後ろから小さくなり、窓際の席に移動した。
焦った。もう少しで、すぐそばまで藤堂君が来るところだった。
「藤堂君が前？後ろが沼田君だっけ？」
「そう、よっしくね」
そんな会話が聞こえてきた。ああ、麻衣の前が藤堂君なのか。これじゃもう、麻衣の席に遊びに行くこともできなくなっちゃったな。う、さらに暗くなった。

私は窓際の席になった。窓から外を見ると、見事な桜の木がよく見えた。
あ、もしかしてさっき、藤堂君は桜の木を見ていたんだろうか。

はあ。思わずため息が漏れた。ちら…。藤堂君のほうを見た。藤堂君はただ、静かに前を向いていた。
横顔、あんなだったかな。鼻、けっこう高いんだ。
ふ…。藤堂君が視線をこっちに向けた。
わ！私は慌てて、外のほうを向いた。あ、やばい。今、思い切り

避けたみたいになっちゃったかな。
それとも、見てるのばれたかな。

ああ、明日からも、どうやってこのクラスで、私は過ごしていったらいいんだろう。
その日1日私は、気まずい気持ちでずっと過ごしていた。

第3話　「忘れて」

次の日も、暗い思いで私は学校に行った。教室の前で一回ため息が出た。入りたくないな。でも、入らなくっちゃ。

そう思いながら、また静かに私は教室に入った。

ススス…。周りを見ないで、自分の席に行きすぐに座った。他の子たちは、友達と思い思いの場所で、楽しそうに話している。

麻衣は?もう席にいて、沼田っていう男子と楽しげに話している。なんだよ〜〜。こっちに気が付いて、来てくれてもいいじゃん。と、麻衣をじいっと見ていると、その前の席に藤堂君が座った。

わわ。私はすぐに視線を外し、外を見た。

はあ。暗いかも、私。

「穂乃香。今日、一回も話してなかったよね?私ら」

昼休みになり、食堂に麻衣を連れ出した。そこでお弁当を広げた。

「だって、麻衣の前、藤堂君」

「もう、気にするのはやめなって言ったのに。多分、藤堂君のほうはもう、気にしてないと思うよ」

「知ってる」

「え?もしや、そう言われたの?」

「ううん。友達に言ってるのを聞いちゃった」

「穂乃香のこと、なんとも思ってないって?」

「っていうか、もう忘れたって」

「よかったじゃん」

これ、よかったっていうことなの?やっぱり。

「じゃ、穂乃香も気にしないで、普通にしてたら？今のままじゃ、友達もできないよ？」
「だ、だよね」
「それとも、そんなに藤堂君を意識してるってのは、何か気になることでもあるとか？」
「え？」
「もしかして、藤堂君を好きになっちゃったとか」

「まさか！ありえないよ、そんなこと」
「なんで？いいじゃん。藤堂君ってさ、今日話してみたら、けっこうかっこいいかもって思ったよ。すっきりしょうゆ顔。和男子って感じだよね。この際、付き合っちゃえば？」

「じょ、冗談でしょ。なんでそうなるの？こっちは告白されて、気が重くなってたって言うのに」
「し～！」
麻衣がいきなり、目配せをしてそう言った。

「え？」
私はまさかって、後ろを振り向いた。ああ！やっぱり。藤堂君だ。今の、聞かれてたとか？！
藤堂君は、私の真ん前に来た。そして、
「もう、俺のほうも本当に忘れたから、結城さんも忘れていいよ」
と表情を変えず、私に向かってそう言った。

「え？」
「なんか、そんなふうに重たく考えられると、こっちも重たくなるし」
「…」
え？

藤堂君は頭を掻いて、
「1年の時の話だしさ、そっちももう、忘れてると思ってたよ」
とぼそって言った。

え?どういうこと?覚えていたり、重たく感じていたら、迷惑ってこと?
「じゃあ…」
藤堂君はそう言うと、奥の席へと歩いて行った。そこには弓道部の部員がいて、一緒にお弁当を広げ、藤堂君は食べだした。

「本当に、もう藤堂君は穂乃香のこと、なんとも思ってないみたいだね」
「…うん」
「そういうことだから、穂乃香も気にしないで、とっとと他に好きな人見つけたら?」
…。む、無責任な。だいたい、麻衣が今、藤堂君と付き合っちゃえばなんて言ったから、こんなことになったんだよ?

って、こんなことって何?なんで私、また落ち込んでるの?
藤堂君が私のことをなんとも思ってないからって、それがどうしたっていうんだろう。

「今日からもしかして、穂乃香、部活?」
「うん」
「熱心だね」
「だって、絵を描くの好きだし」
「じゃ、私はデートもあるし、さっさと帰るよ?」
「うん」

午後、1時間だけ授業があり、そのあと私は部活に行った。

今年は、若葉を描こうと思っている。芽が出たばかりの、まだ黄緑色をした葉っぱ。太陽にあたって、きらきらと輝き、綺麗な木漏れ日を作っている木々。それを描こうとして、キャンパスの前に座った。

「すごく綺麗な絵を描くんだなって思って…」

藤堂君の言葉を思い出していた。ずっと私のことを見ていたって言ってたっけ。まったく気が付かなかったな。

やっぱり、今でも私はわからない。私のいったいどこがよかったんだろうか。

その日から私は、毎日部室でキャンパスに向かった。

「疲れた～～。もう、暑くなってきたよね」

４月も終わりに近づいた。部活が終わる時間になると、美術室の前を弓道部の部員が通って行くようになった。でも、そこには藤堂君の姿は見えなかった。

教室でも、麻衣は時々藤堂君と話をしていたが、私はまったく話さなかった。麻衣はたまに、私の席に来たけど、私は自分の席から離れないでいた。そして、前の席の女の子と、だんだんと仲良くなった。

後ろと横は男子だ。私には普通に話せる男友達がいない。どうも、昔から苦手。何を話していいかもわからない。

麻衣は藤堂君とも、沼田君とも、仲よさそうに話している。すごいな。

はあ。ため息をつきながら外を見る。桜はもう散ってしまっていた。でも、桜の木からも、新たな芽が出ていて、可愛い黄緑色をしていた。

その光景を思い出したり、時々窓から桜の木を眺めては絵を描いた。

「今年は新緑か？」

先生が聞いてきた。

「はい」

「ふむ…。出来上がりが楽しみだな」

顧問の先生は絶対に悪く言わない。それにあまり、アドバイスもしない。ほとんど生徒たちの描きたいように自由に描かせてくれる。

翌日、私は委員会があり、部活に出るのが遅くなった。そして美術室に行くと、なんと藤堂君が私の絵の前にいた。

「あ、きたきた」

藤堂君の横には、顧問の先生がいる。

「な、なんで藤堂君がここに？」

「ああ、彼は絵を見るのが好きなんだよ。前からね」

「…」

藤堂君が私の絵を黙って見ている。

「見ないでください」

「え？」

「先生、勝手に部外者をいれたりしないでください」

私がそう言うと、藤堂君は、

「ごめん。勝手に見て。それじゃ、僕も部活があるので、これで失礼します」

と言って、さっさと美術室を出て行った。

「…」

もう、なんで先生は勝手に藤堂君を、いれちゃうんだろう。
「いいじゃないか。見に来ても。彼は結城の絵をすごく褒めているんだぞ?とっても優しい絵だって」
「…」
「先生もお前の絵は、優しい色を出していて、素晴らしいと思う。それを彼もわかってくれてるんだ」
だって、勝手に見られるのは嫌なんだもん。私はそんなことを思っていて、先生には何も答えなかった。

5時を過ぎた。そろそろ帰ろうかと片づけをしていると、弓道部の部員が美術室の前を通って行った。
「今日の藤堂、おかしかったな」
「うん。全然的に当たってなかったし。集中力が欠けてたって感じだよな」
え?
藤堂君が?

まさか、私がさっき、あんな冷たい言い方をしたからじゃないよね。そんなこと気にしたりしないよね。
でも…。もしそうだとしたら?

私は気になり、美術室を出て、道場に行ってみた。入り口が開いていたので、そうっと中に入ってみると、藤堂君が一人で、片づけをしていた。そして私に気が付いた。
「結城さん?」
「あの…。さっきは、その…」

「絵のこと?勝手に見てごめん。いつも、結城さんがいないときに、俺、勝手に見ちゃってるよね」
「…そうじゃなくて、その…。私もきつく言ってごめんなさい」

「え？」
藤堂君が、驚いている。
「その…。先生が、藤堂君は私の絵を褒めてくれてたって。それなのに、私、あんな言い方しかできなくて、悪かったなって思って」
そう言うと、藤堂君は静かに私のほうに歩いてきた。
「謝りに来てくれたんだ」
「え？う、うん。なんだか、気になっちゃって」
「そう」
藤堂君が静かに笑った。あ、本当だ。麻衣が言ってたけど、和男子って感じだ。去年の秋はまだ、幼さが残っていたけど、今はすっかり大人っぽくなって、りりしくなった。
「なんか、まだ、俺のこと避けてるよね？」
「え？私？ううん」
「そうかな」
「私、もともと男子とあまり話さないから」
「それで？それで俺にも話しかけてこないの？」
「う、うん」
「そっか。なんだ…」
「き、気にしてた？」
「ちょっとね」
藤堂君はそう言うと、静かに微笑んでから、下を向き、
「去年、告白なんかしなかったらよかったって、思ってたよ」
とぽつりと言った。
「え？」
ど、どうして？

「俺、そんなに深い意味であんなこと言ったんじゃないんだ。もっと、友達って感じで、今みたいに話せるようになれたら、それでよかったんだよね」
「え？」
深い意味はない？

「だから、あまり構えられちゃうと困るって言うかさ」
「…」
「ほんと、あの告白は忘れて？」
「え？」
「忘れてくれてかまわないから」

「…」
「忘れてくれたら、こっちも気が楽になるし」
「う、うん。わかった」
「だから、普通にクラスメイトとして、俺のことも見てくれていいから」
「うん」

「俺もそうするし」
「う、うん…」
「…。っていう俺もさ、あまり女子と話すの得意じゃないんだ」
「え？」
「だから、まあ、話すって言っても、今くらいな感じかな？」

「う、うん」
「だからさ、あまり身構えないでくれないかな」
「わかった」
藤堂君は、私がうなづくと、

「俺、片づけあるから、これで」
と言って、道場の奥に行ってしまった。
「それじゃあ」
私も、なんとなく言葉を濁したまま、道場をあとにした。

そうか。
深い意味はなかったんだ。
じゃあ、なんで、ダンスに誘ったりしたの？
じゃあ、なんで、私のことずっと見てたとか、そんな話をしたの？

ああ、なんだか、もやもやしている。
私、そんなに身構えてた？　それが、藤堂君には重かったの？
私が気にしすぎていただけなの？藤堂君は本当に、何とも思ってなかったの？
あの告白だって、忘れていいくらいの、そんなものだったの？

美術室に戻って、キャンパスの前に座った。無性に腹が立つやら、悲しいやらで、私は思わず、絵を真っ白に塗りつぶした。
やっぱり、藤堂君がわからない。そして、なんでこんなにもやもやするのかも、自分自身もわからないよ。

第4話　スランプ

絵が描けなくなった。キャンパスの前に座っても、何も浮かんでこないし、どんな色を使っていいかもわからない。

「どうした？結城」

先生に聞かれた。

「描けなくなりました」

「スランプか」

「はい。だから、もう帰ります」

私はそう言って、美術室を出た。

今朝は、教室に入ったら、もう麻衣と藤堂君が楽しそうに話をしていた。

「おはよう」

麻衣に挨拶され、私も麻衣におはようと言うと、横にいた藤堂君もおはようと言ってくれた。

「あ、お、おはよう…」

私はきっと、思い切り引きつりながらそう言ったに違いない。ほっぺがぴくぴくしていたし。

藤堂君はそのあと、私には話しかけることもなく、麻衣と話をしていた。女の子と話すのが苦手だなんて言ってたけど、麻衣と仲良く話しているじゃないか。

「おはよう、藤堂！麻衣ちゃん！」

「おはよう、沼田君」

そこに元気にやってきたのは、麻衣の後ろの席の沼田君だ。

「あつ～～。今日、やたらと暑くね？」

沼田君はそう言いながら、席にカバンをほおると、麻衣の横に行

き、話に加わった。なんだ。私にはおはようも無しか。
私は自分の席にとぼとぼと歩いていき、席に座った。

「おはよう、結城さん」
前の席の子が声をかけてきた。
「あ、名前でいいよ。穂乃香って呼んで」
「じゃ、穂乃香ちゃん、私のことは美枝ぽんって呼んで」

「美枝ぽん?!」
「そう。中学からのあだ名なの」
「そ、そうなんだ。あ、私もちゃんづけでなくていいよ」
「わかった。穂乃ぽんってよぶね」
「ほ、穂乃ぽん?!」
「かわいいよね〜〜。穂乃ぽん」

クラ…。なんか、仲良くなったけど、果たしてこの子についていけるかな、私。
その次の休み時間も、
「穂乃ぽん、穂乃ぽん。購買部行かない?」
と美枝ぽんが言ってきた。

「何買うの?」
「お弁当持ってこなかったから、パンを買おうと思って。穂乃ぽんも一緒に行こうよ」
「い、いいけど」
「わあい」
わあいって、このテンション、ほんと、私ついていけるのかな。

チラ…。藤堂君を見た。また、沼田君と麻衣と、3人で話している。

「は～～～」
教室を出ると、ものすごいため息が出た。
「悩み事？穂乃ぴょん」
「い、今なんて？！」

「悩み事？」
美枝ぽんが、首をかしげてそう聞いてきた。
「違う、そのあと」
「え？穂乃ぴょん？」
「ほ、ほのぴょん？」
「可愛いでしょ？」

「……」
「穂乃ぴょんは、いつもお弁当？」
「う、うん」
「どこで食べてるの？」
「食堂」

「今日も？」
「あ、いつも麻衣と一緒だよ」
「麻衣って、中西さん？」
「うん」
「中西さん、小さくてかわいいよね」

「え？」
「麻衣ぽん。ってあまり似合わないか。じゃ、麻衣ちゃんがいいかな～～」
ま、麻衣ぽん。そんなこと言ったら麻衣、絶対に鳥肌立てるよ。
一見かわいく見えるけど、中身は男みたいなんだから。

「ねえ、穂乃ぴょんは彼氏いる？」
「い、いない」
「私も。クラスの男子とか、まったく興味なくて」
「そうなの？」
「私は、○○っていうアニメの主人公が好きなの」
…。アニメ好きだったか…。

「知ってる？主人公の名前は、セイっていうんだけど、漢字は聖先輩と同じ字なんだよ」
「美枝ぽんも、聖先輩のファン？」
「え？もしかして、穂乃ぴょんも？」
「うん」
「わあ、気が合うね！聖先輩だけは特別！そんじょそこらの男子とは違うじゃない？」

「うん」
「あんな綺麗な顔立ちの人って、そうそういないよね！アニメに出てきそうだもの」
アニメ？それはどうなんだろう。
「そっか～。穂乃ぴょんも、聖先輩が好きなんだ～」
「でも、彼女いるし」

「そんなの関係ないよ～」
「え？」
「もともと、付き合おうなんて思ってないし。キャ～～って言ってるのが面白いんじゃん」
面白がってたの？

「彼氏なんかできたって、面倒なだけだよ。遠くから見て、キャ～～って言ってるのが1番だって。美枝ぽんの周りの友達も、みんな

そう言ってる」
「彼氏なんていらないって？」
「そう。面倒じゃん」

「それが聖先輩でも？」
「そうだよ。聖先輩だって、完璧な人間じゃないし、きっと付き合ったら嫌な部分見えて、嫌いになっちゃうもん。だったら、遠くから見てるだけのほうがいいって」
そう言われてみたらそうかもしれない。でも、もし好きな人が自分のことを好きになってくれたらって、そういうのあこがれちゃうけどな。
もし、あの聖先輩の彼女みたいに、聖先輩にあんな素敵な笑顔を見せてもらえたら、すごく嬉しいことなんじゃないかな。

お昼休みになり、私は美枝ぽんと麻衣の席に行った。
「今日、お昼、美枝ぽんも一緒でいい？」
「美枝ぽんっ？」
あ、麻衣が驚いている。

「美枝ぽんっていうのは、私。麻衣ちゃんでしょ？」
美枝ぽんがそう言うと、
「え？うん」
と、戸惑いながら麻衣はうなづいた。
「私も麻衣ちゃんと穂乃ぴょんとお昼、一緒に食べたいなって思って」
「ほ、穂乃ぴょんって？！」
「私のことみたい」

私がそう言うと、麻衣が目を丸くして私を見た。
「ほ、穂乃ぴょん。ブハハハハ」

やっぱり、笑うと思ってたけどさ。そこまで笑わなくっても。

「あはははは！いいよ。一緒でも」

まだ麻衣は笑っている。お腹を押さえながら、麻衣は歩き出した。

「穂、穂乃ぴょんだって。芳美にも言って、大笑いしよう」

「麻衣。芳美には言わないで」

「なんで～～？笑えるのに～～」

「麻衣ちゃんも麻衣ぽんがいい？」

美枝ぽんが聞いた。

「ぞわ！いい、いい。私は麻衣で！ちゃんづけされられるだけでも、鳥肌ものなのに」

麻衣が青い顔をしてそう言った。やっぱりね。

「あ、そうだ。穂乃ぴょんが美枝ぽんとお昼食べるなら、私、あいつのところにいってもいいかな」

「え？」

「あいつ…」

「彼氏？」

「うん、ごめん。あいつと食べてくるよ」

「うん」

麻衣はそう言って、早足で彼氏の教室に向かって行った。

「麻衣ちゃん、彼氏いるんだ」

「うん」

「何組？」

「Aだったかな」

「ふうん」

私は美枝ぽんと2人で食堂に行った。美枝ぽんは、人見知りをす

るらしいけど、一回打ち解けると、すごくなつくみたいだ。まるで、犬のようにさっきから、きゃんきゃん言って、喜んでいる。
「あ、麻衣ちゃんと仲良しの男二人組」
「え？」
いきなり食堂の入り口を見て、美枝ぽんがそう言った。
振り返ってみると、藤堂君と沼田君だ。
「あの二人のどっちかが、麻衣ちゃんと付き合ってるのかと思った」
美枝ぽんが二人を見ながらそんなことを言った。
「仲いいもんね」
私もつい、そんなことを言ってしまった。
「沼田君は去年、同じクラスだったよ」
「美枝ぽんと？」
「誰とでも話す、明るい性格なんだよね」
「ふうん」
「藤堂君は中学が一緒なんだ」
「え？」
ドキ～～。そうなの？
「中学は、陸上部にいたよ。いつも、黙々と走ってた。長距離してたんだよね。マラソンにもいつも出てたっけな。女子とはほとんど話さなかった。私も中2、中3と同じクラスだったけど、会話したことあったかな～～」
「そうなの？でも、麻衣とはあんなに…」
「だから、ちょっとびっくりしちゃって。麻衣ちゃんと付き合ってるのかと思っちゃった。沼田君は誰にでもあんな感じだから、仲良く話してもわかるけどさ」
「…」

複雑。麻衣、私に藤堂君が告白してきたのも知ってるし、藤堂君だって、麻衣と私が友達なのを知ってるだろうに。

私は、またもやもやしてきた。お弁当の味もわからないくらいに。なんなんだ、これ。

「美枝ぽん、今日部活？」
「うん。穂乃ぴょんもでしょ？」
「私は…」
言葉に詰まった。

「今日は用事があって、帰るんだ」
嘘をついた。なんでかな？私。
「そうなの？ね、絵を描いてるんだよね。今度見せて」
「文化祭で見れるよ」

「それまで、おあずけってこと？」
「うん」
「なんだ～～～」
もし、絵を描くことができたらね。って言う言葉は、飲み込んだ。

放課後、私は一人でぷらぷらと校門の前まで来た。桜の木には、黄緑色したかわいい葉っぱが出てて、風に吹かれて、そよそよとなびいていた。
「可愛い、あの葉っぱたち」
そうつぶやくと、
「そうだね」
という声が後ろから聞こえた。

「え？」

驚いて後ろを向くと、藤堂君がいた。
「な、なんでここに?今日、部活」
「あ、今日はないんだ。だから、帰るところ」
うわ～～。そうだったの?うわ～～、今の独り言聞かれた!
「あれ?美術部もない日?」
「ううん。私は、用事があって」
「じゃ、一緒に帰る?」
「え?!!」
私がものすごく驚いたからか、
「あ、そっか。用事あるんだもんね。一緒には無理か」
と藤堂君が言った。
「えっと、ううん。だ、大丈夫」
は!大丈夫って言っちゃった。駅まで二人で行くってことだよね。
駅までけっこうあるよ。10分はかかるのに。
藤堂君は、私の横に並び、ゆっくりと歩き出した。
「結城さんって、穂乃ぴょんってあだ名なの?」
「え?!」
い、いきなり何?
「そう呼ばれてたでしょ?今日」
「あれは勝手に、美枝ぽんが…」
「美枝ぽん…。ああ、八代さんのことか」
「うん」
く…。
え?
くすくす…。
笑ってる?藤堂君が、ちょっと下を向いて、目を細めて笑ってる!

「ごめん。なんか穂乃ぴょんってかわいいけど、結城さんのイメージとは違うなって思って」
「そ、そうだよね。麻衣にも思い切り笑われたよ、今日」
「麻衣って、中西さん？」
「うん」

「仲いいよね。去年同じクラスだったでしょ？」
「知ってるの？」
「え？ああ、うん」
「…麻衣とは、藤堂君も…」
あ、私、何を言おうとしてるんだ。

「何？」
藤堂君が静かに聞いてきた。
「麻衣って、話しやすいから、藤堂君とも仲、いいよ…ね？」
ドキドキ。変な言い回ししたかな。

「…うん。話しやすいって言えばそうかな。でも、俺とじゃなくて、いつも沼田と楽しそうに話してるよ」
「そうなの？私には3人で仲良くしてるように見える」
「え？」
はっ！また変なこと言った？

「そう見えた？」
「えっと…」
「じゃ、穂乃ぴょんも話にくればいいのに」
「ちょ、ちょっと、その穂乃ぴょんはやめて」

くすくすくす。

藤堂君がまた、声を出さずに笑った。うわ。笑い方まで、なんていうか、和男子?ゲハゲハ笑ったりしないんだ。
でも、笑顔、かわいいんだ。

ドキン。
はれ?
何?今の…。ドキンって。

「結城さん、さっきの…」
「え?え?さっきのって?」
「葉っぱ。あれを絵に描くんでしょ?」
「う…」
どうしよう。今、スランプで、とても描く気にはなれないの…とは言えない。

「文化祭で出展する絵?」
「そのつもり」
「楽しみだな」
「…」
「去年の桜も、綺麗だったけど…」

「あ、あまり期待はしないで」
「プレッシャーになる?」
「う…うん」
「わかった。じゃ、この会話もしないほうがいいかな」

「う、うん。できれば…」
困った。じゃあ何の会話をしようかと言われても、出てこないかもしれない。
「中学から、美術部?」

藤堂君のほうが、話題を振ってくれた。とはいえまだ、部活の話だ。
「うん」
「そっか…」

「藤堂君は、中学陸上部でしょ？なんで高校は弓道なの？」
「え？」
藤堂君がすごく驚いている。
「へ、変なこと聞いた？」
「いや、なんで陸上部だったって知ってるのかなって」

「あ、美枝ぽんに聞いたの。同じ中学だったんでしょ？」
「あ、ああ、そっか」
うわ。藤堂君のこと、調べてるみたいに思われた？
「美枝ぽんと食堂でお昼を食べてたら、藤堂君、食堂に沼田君と来てたから、それで、その、なんかそういう話題になって。だから、別に私から聞いたわけじゃ…」

「うん。わかってるよ」
え？
「あ、気にしないでいいよ。そんなに俺も、鈍くないって言うか、期待もしてないって言うか」
「え？」
「だから、俺に興味を持ってるだろうなんて、そんなこと思ったりしないから安心して」

ドスン。
うわ。まただ。なんかおもりのようなものが、胃のあたりに落ちてきた。

「高校入っても、陸上するつもりだった。でも、弓道部に入ろうとしてたクラスメイトに、無理やり見学連れて行かされて、魅了された」
「魅了？」
「弓をうつまでの緊張感とか、静けさとか。なんか、俺にあってるかも、この空気って」
「…うん、あってるよね」

「結城さんもそう思う？あ、俺があれかな。スローだからかな」
「ううん。そうじゃなくて…。静かで、穏やかなところ…かな」
「…。俺って、そんなイメージ？」
「違うの？」

「…どうかな。いろんな俺がいて、自分でもわからない」
「…そうだよね。自分のことってよくわかんないよね」
「…結城さんは？自分のことどんな人だって思う？」
「私？私は…」

しばらく私は考え込んだ。
「そうだな。けっこう根暗…かもって最近思う」
「え？根暗？」
「後ろ向きだし、あんまり私、私のこと好きじゃないかな」
「…」

何て言ってくるかなって思いながら、ちらっと藤堂君を見た。でも、藤堂君はどこかよそを向いていて、なんにも言ってこなかった。
いろいろと聞いてくれたけど、私に興味がないのは、藤堂君のほうじゃないの？
なんてそんな言葉が、頭に浮かんで消えていった。

第5話　後悔

駅に着いた。
「結城さんはどっち方面？」
「私は、藤沢」
「俺、江の島なんだ。それじゃ逆方面だね」

「え？江の島なの？」
まさか、聖先輩の家の近く…とか。
「うん。海より離れたところに住んでるけどね」
「そ、そうなの」

「…中学は聖先輩の後輩だよ」
「え？あれ？じゃ、美枝ぽんも」
「あ、そうだね」
「そうなんだ」
なんだ～。美枝ぽん、教えてくれなかった。

「…聖先輩のファン？」
「私？！」
うわ。声がひっくり返った。
「去年、聖先輩のライブのさなか、声かけちゃってごめんね」
「え？」
ああ、あの時。

「ううん。アンコールには間に合ったし」
「やっぱり…」
「え？」
「ライブ、見たくてそわそわしてたんだ」

あ、気が付いてたの？

「言ってくれたらよかったのに…。ライブ見たいから、話聞けないって」

「…」

だって、腕をつかまれてたし。言えなかったよ…。

「…今度、先輩の店行ってきたら？」

「聖先輩の家のこと？」

「そう」

「勝手に行っていいの？」

「いいんじゃないの？客としてなら」

「そ、そうだよね」

ゴクン。うわ、生唾が出た。

「電車来たよ」

「あ、本当だ。じゃ」

「うん、明日またね」

「…うん。明日ね」

私はそう言って、来た電車に駆け乗った。

「ドアが閉まります」

アナウンスが流れ、ドアが閉まった。ガタン、ガタン。電車が走りだした。私はずっと窓から、ホームで立っている藤堂君を見ていた。

知らなかったな。藤堂君って、あんなふうに笑うんだ。

それから、声、いつも穏やかだよね。

それに、線が細いかと思ったら、腕とか筋肉質なんだ。あ、そうだよね。弓道ってきっと、筋肉つくよね。

それから、藤堂君の目。どうしていつもあんなに、涼しげなんだろう…。

ガタン、ガタン。ホームも見えなくなり、私は空いてるシートに座った。

ガタン、ガタン。電車の音とともに、胸がドクンドクンって言ってる。これ、私の胸の鼓動だよね。電車が揺れてるからじゃないよね。

いつの間にか、私は、さっきの会話を頭で繰り返していた。藤堂君の声や表情、仕草までも。

翌朝、教室の前で私は、しばらく佇んでいた。昨日、話をしにきたらいいじゃないかって言われた。でも、なんだか、どうやって話しかけていいかもわからない。

ゴクン。思い切って、私は教室に入った。

「おはよう！穂乃ぴょ～～ん」

「え！」

いきなり、元気にそう言ってきたのは麻衣だ。すると麻衣の横にいた沼田君が、

「なに？その穂乃ぴょんってのは」

と興味津々で聞いてきた。

「美枝ぽんがつけた、穂乃香のあだ名」

麻衣が教えてしまった。

「あははは。穂乃香だから、穂乃ぴょん？八代なら言いそう！」

思い切り、沼田君が笑った。その横で涼しげな眼をして、藤堂君がこっちを見ている。

「お、お、お、おはよう」
引きつりながら、藤堂君に言うと、
「おはよう、穂乃ぴょん」
と言われてしまった。
「うそ！藤堂も穂乃ぴょんって呼んでるの？じゃ、俺もそう呼ぼうっと！」

え～～～！！なんでそうなるの？
「穂乃ぴょ～～～ん」
沼田君がそう呼んできた。ああ、絶対にからかってるな、これ。
「麻衣ちゃんは、麻衣ぴょん？」
沼田君がそう麻衣に聞くと、
「そう呼んだら、痛い目にあうよ」
と麻衣が沼田君をにらみつけた。

「こえ！こえ～～～、麻衣ちゃん」
「ちゃんづけも、鳥肌立つんだから」
「え～～。じゃ、麻衣って呼んでいいの？彼氏に怒られない？」
「じゃあ、名字で呼べば？」
「そんな～～。他人行儀な…」
「他人でしょ？」

そんな会話を繰り広げている横で、やっぱり藤堂君は涼やかに笑っている。
「麻衣ってさ、男勝りだよね」
沼田君が言った。
「でも、穂乃ぴょんはさ、そんな感じしないよね。どっちかって言うと、女らしいし」
私がっ？？！！！！

「え？穂乃香のどこが？」
麻衣も驚いてそう聞いた。
「え？なんだか、そんな雰囲気あるじゃん。髪もロングで黒くて、手足長くて細くて。おとなしくて、絵描いてるんだろ？麻衣とは全然違うタイプじゃん。なのに仲いいんだね」

「わ～るかったわね。男勝りで。でもね、そんな私と気が合う穂乃香も、けっこう男っぽいの」
「へ？どこが？」
沼田君が聞いた。
「この子、まず、ピンクのものとか持たないし、可愛いスカートとか絶対に履かないし、キャラクターものの文具とかも、絶対に持たないんだよね」
「なんで？」
今度は私に沼田君が聞いてきた。

「それは、に、似合わないから」
私がそう言うと、
「え？なんで？なんで似合わないって思うの？」
とまた、沼田君がしつこく聞いてきた。

「似合わないよ。確かに」
そう麻衣がずばって言った。
「あれ、友達なのに、そんなこと言っちゃう？」
沼田君がそう言って、藤堂君を見た。藤堂君は、うんともすんとも、さっきから何も言わない。
う…。やっぱり、私のこと、もう興味も何もないのかな。

「あ、でもそうね。穂乃香、確かに女らしいもの似合うかも」
「え？どんな？！」

沼田君が聞いた。
「浴衣。それも、紺とかで渋い柄の…。去年の夏の花火大会、それできたよね？あれ、似合ってたな～～」
「そ、そうかな。麻衣も芳美も可愛い浴衣で、私、一人で老けてて嫌だったけどな」

「いや！私が男だったら、ぐらっときてたよ」
「まじで？え～～。見たかったな！今年も着てきてよ」
沼田君がそう叫んだ。
「だからさ、みんなで花火観に行こうぜ」

「いかな～～い。彼氏と行くもん」
「そうだった！こんな男勝りなのに、彼氏持ちだったんだ。麻衣は！」
沼田君がまたそう叫んだ。
「3人で行けば？」
麻衣が私たちを見てそう言った。

「え？え？3人って？」
この3人？
「じゃ、美枝ぽんも連れて行けば？」
私が驚いたからか、麻衣がまたそんなことを言った。
「え？じゃ、4人？」
私がもっと慌てていると、
「いいね。ダブルデート！で、どうくっつくわけ？俺と、誰？」
と、沼田君がにやにやしながら聞いてきた。

「…沼田」
藤堂君がようやく口を開いた。
「なに？」

「俺、花火大会とか、人がやたら集まるところ苦手なんだ。だから、この話はパス」
「お前行かないの？」

「行かないよ」
藤堂君が、無表情な顔でそう言った。
「じゃ、俺と穂乃ぴょんだけで行く？あれ？それじゃ、デートになっちゃう？」
「…」
沼田君の言葉に、私は固まった。

「沼っち。穂乃香って、男と2人とか苦手だから、2人は無理だよ」

ああ、ナイスフォロー。麻衣～～。
「そうなの？男子苦手なの？」
「彼氏にでもなれば、別だろうけどね」
麻衣がそう続けた。

え？か、彼氏？！！！
「それ、俺と穂乃ぴょんが付き合うってこと？」
「そうなったら、2人で花火大会でもなんでも、行けるでしょ？」
「…」
沼田君が黙り込んだ。私も何も言えず、黙った。そしてちらっと藤堂君の反応を見ようとした。だけど、藤堂君はもう自分の席に着いてしまっていて、顔も見れなかった。

とぼとぼ…。私は自分の席に着いた。
「おはよう、穂乃ぴょん。なんか、盛り上がってたね」
「おはよう」
前の席にすでに座っていた美枝ぽんが、くるっと振り向いてそう

言った。

「はあ…」

「あれ？なんでため息？何か嫌なことあったの？」

「え？ううん。別に」

本当だ。なんで私、暗いのかな。

窓から桜の木を見た。ああ、今日も黄緑色の葉っぱたち、可愛い。だけど、日に日に大きくなり、色も濃くなってきている。

ずっと、あのままの可愛い色をしていないんだね。桜の花が散るように、どんどん変化していくんだ。そんなことを感じながら、私は桜の木を見ていた。

いつか、藤堂君には好きな子ができるんだろうか。

ズキン！

え？なんで胸が痛むの？

もう、いったいなんだって言うんだ。これ…。

その日、英語の授業で藤堂君があたり、教科書を読まされていた。驚いたことに和男子の藤堂君は、すごく綺麗な発音で、とても流暢に読んでいる。

ぼけっとしながら、それを聞いていた。

それから、国語。また藤堂君があたった。藤堂君が席を立ち、いい声で教科書を読みだした。

ああ、声まで涼しいってすごいよなあ。

藤堂君って、いつも落ち着いてる。動揺したり、頭に来たりすることってないのかな。そんなことを思いながら、藤堂君をぼお～～

っと見ていた。
「よし、じゃ、続きは沼田」
先生に沼田君が当てられた。

私は何気に沼田君を見た。すると、視線を感じ、私は目線を変えた。
あ！藤堂君と目が合った。なんで？こっちを見てた？
藤堂君はすぐに目線を教科書に戻した。

「…」
私を見ていたわけじゃないよね。
ドキン。うわ。なんだ、この胸の高鳴り。

やっぱり、変だ。私は変になってる。
絶対に、変だ！

ガク…。疲れ果て、お昼休み、食堂で私はうつっぷせていた。
「穂乃ぴょん、ここいい？」
と陽気な声で聞いてきたのは、沼田君だ。
「え？ここ？」
でも、美枝ぽんも一緒だけど…。

「ども！八代さん」
「沼っち、穂乃ぴょんのこと気に入ったの？」
ヌマッチ？！美枝ぽんもそう呼んでるの？
「うん、そう、いいじゃん、このあだ名。八代さんがつけたんでしょ？」
「美枝ぽんでいいよ」

「…いいの？」

「うん、別にいいよ」
「じゃ、美枝ぽん。司っちも一緒にいい？」
「いいよ。藤堂君、同中だし」
「あれ？そうなんだ」
「うん」

え？ツカサッチって、藤堂君のこと？っていうか、藤堂君も来るの？あ、本当だ。こっちに来た。
「司っち！ここ、ここ！」
沼田君がそう言って、藤堂君を呼んだ。
「なに、その司っちって」
「いいあだ名でしょ？俺は沼っちでいいよ」

「…。沼田って呼ぶよ」
「本当に司っちってさ、硬いよね。中学からこう？」
沼田君が、美枝ぽんに聞いた。
「うん、多分、でも私も、話したことあまりないから知らない」
美枝ぽんは、ちょっと冷めた口調で言った。

「へ？そうなの」
「だって、藤堂君って、女子とほとんど話さなかったもん」
「そうなの？じゃ、何？彼女とか」
「いないよ」
藤堂君がぼそってそう言った。

「は～～、それで何？高校入ってやっと好きになった子にも、ふられちゃって、そりゃ悲しい青春だね」
「え？！ふられたの？！」
美枝ぽんが驚いて、お箸を落としている。
「そう言ってたよ」

と言った沼田君に藤堂君は、まったく表情を変えず、
「誰から聞いた？」
と低い声で聞いた。

「え？お前と同じクラスだった鈴木だよ」
「…あいつが？」
「誰にふられたかは、あいつも知らないって言ってたけど」
「…」
藤堂君は黙り込み、下を向いた。私もどうしていいかわからず、下を向いた。

「あ、あのさ。藤堂君には藤堂君の良さがあるけど、それをわかってくれなかっただけだよ。わかってくれる人、現れるって」
美枝ぽんがそう言って、藤堂君を慰めた。
「そ、そうだよな。うん。お前の青春はこれからだ」
そう沼田君も言って、藤堂君の肩をぽんとたたいた。

「…」
藤堂君は何も言わないで、まだ目を伏せている。
つん。美枝ぽんが私の腕をつついた。それに、沼田君も私を見ている。
え？なんで？！私がふったってこと、ばれたの？
「穂乃ぴょんも、何か言ってあげたら？」
「え？」

「そうだよ、慰めの言葉か何かをさ」
沼田君も小声でそう言った。でも、もちろん、今のも藤堂君に丸聞こえだ。
「…」
ふった当の本人が、どう慰めたらいいんだ。

「俺、弓道部のやつに用があった。悪い。あいつらと食べるよ」

藤堂君はそう言って、席を立って行ってしまった。

「あ～～～。沼っちのあほ」

美枝ぽんが藤堂君が去ってから、そう言って沼田君を睨んだ。

「デリカシーってものがないよね。藤堂君、まだきっと立ち直れてないんだよ。すっかり意気消沈してたじゃない」

「わりい、あとで謝る」

そうかな。立ち直れていないわけじゃないと思うな。きっと、私のことを気遣ったか、それか、その逆で、私がいるのが嫌だったからか…。

「藤堂君、私の好みではないけどさ、けっこう、イケてると思うんだけどね。ね？穂乃ぴょん」

「え？！」

「相手がきっと、藤堂君の良さをわかってあげられないような女だったんだよね」

「…うん」

美枝ぽん。その通りだよ。私はあの時、藤堂君の良さなんて、これっぽっちも知らなかった。

ズン…。また、気持ちが沈んだ。ああ、あの時、友達ならって言ってＯＫすればよかった。そうしたらきっと私、藤堂君の良さ、わかっていったのに。

「忘れてくれていいから」

藤堂君から言われた言葉は、気まずい気持ちを軽くするどころか、私を後悔でいっぱいにさせるものになっていった。

第6話　複雑な心境

その日、放課後美術室に向かったが、やっぱり何も描けず、黙ってキャンパスを見ていた。
「なんか、気分転換でもするか～？結城」
と、顧問の原先生がそう言ってきた。
「気分転換って？」
「う～ん、そうだな。校内でも回ってくるとか」

「そんなの気分転換になりますか？」
「なるぞ。先生もたまにうろうろするが、普段見落としているものとか見えてくる」
「…」
「あ、いいことがある」
「え？」

ちょうどその時、部室の前を何人かの弓道部の部員が通っていた。
「弓道部！確かお前、部長だったっけ？」
そう言いながら、先生は廊下に出て弓道部の部員に声をかけた。
「はい、そうですけど」
「頼みがある。美術部の生徒を何人か、見学させてもらえないかな」
え？

「ああ、いいですよ」
弓道部を見学？でで、でも、弓道部って言ったら、藤堂君がいる…。
「美術部で今、どうにも絵が描けないぞって手が止まってるやつがいるか？」
先生がそう言うと、私以外にも3人手を挙げた生徒がいた。

「よし。今から弓道部の練習、見学に行って来い」
「は〜い」

私とその3人は、廊下に出て弓道部の部員のあとをついて行った。
「ラッキー、さぼれる」
「弓道部だって。どんななのかな〜〜」
「かっこいい人いたりしてね」
3人のうち、2人の女生徒は喜んでいる。

「結城さんもスランプ？」
もう一人、美術部でも数少ない男子生徒の、柏木君が声をかけてきた。
「え？うん。柏木君も？」
「…そうなんだよね。なんか、描く意欲がなくってさ」
「そうなんだ…」

「描きたいって衝動に駆られないと、描けないと思わない？」
「え？ああ、うん、そうかも」
「結城さんもでしょ？去年の桜、あれ、うちの学校の桜に魅せられて描きたくなって描いたんでしょ？」
「うん」
「見事な絵だったもんね」

「そ、そんなことないよ。柏木君の絵こそ、素晴らしかったよ。あの海の絵…」
「うん。あれは家族で旅行に行った時に見た海で、最高に綺麗だったんだ」
「そうなの？」
「描きたい衝動に駆られたの。でも、今は描きたいものがないんだよね…」

「…」
「去年、1年同じ部だったのに、こんなに話したことってなかったね、結城さん」
「え?うん」
「結城さん、おとなしいもんね」
「…そ、そうでもないの」

「え?」
「ただ、あまり男子と話すのが得意じゃないだけで…」
「あ、そうなんだ。でも、他の女子ともしゃべってないよね?」
「仲のいい子いたよ。でも、美術部やめて、今、漫研に行っちゃったから…」
「あ〜、あのイラストタッチの絵を描く子?」
「そう…」

「じゃ、一人で寂しいね」
「…ちょっとね」
「…じゃあさ、男子と話すのが苦手なのを克服するためにも、俺と友達にならない?」
「え?!」
「そんなに驚かなくても…」

私はしばらくその場に立ち止り、目を丸くして柏木君を見ていた。
柏木君というのは、中学の時もコンクールで入賞するほどの、絵の才能を持っている人で、数少ない男子部員の中でも、まじめに部活に出ていた生徒だ。
いつも黙々と絵を描き、たまに話す相手と言えば、原先生だけ。
「俺も、部に友達いないしさ、すんごい創作意欲湧いてる時はいい

んだけど、今みたいに絵を描く気になれない時って、一人でいるのもきついじゃん？」
「う、うん」
「だから、ま、スランプ同士、こんなふうに話でもしようよ」
「あれ？」
「え？」

「その程度でいいの？」
「何が？」
私の質問に、柏木君が不思議そうな顔をして聞いた。
「友達って、その程度？」
「…え？そんなもんでしょ？他に何かすることあるの？」
「う、ううん」
なんだ。そうだよね。なんかちょっと深い意味でもあるのかと思った。

「そ、その程度なら」
私がそう言って、また歩き出すと、柏木君も横を歩き出し、
「あれ？なんかもっと、期待したとか？」
と聞いてきた。
「ううん。ただ、男子の友達っていないから、どうしたらいいんだろうって、身構えたって言うか」

「え～？ははは。なんか、おもしろいね、結城さんって」
「そうかな…」
そんな話をしている間に、前にいた二人の女生徒はすでに弓道部の道場に着いたようだ。
「ね、かっこいい人いる？」
と2人で、入り口で中を覗いている。

「中に入ってもいいんじゃないの？見学していいって言われたんだから」
柏木君がそう2人に言って、
「お邪魔します」
とさっさと中に入って行った。

「今日は美術部員が見学に来ています。みなさん、あまり緊張せず、普段通りに練習しましょう」
部長がそう部員に挨拶をした。私たち4人は、静かに隅っこに座らせてもらった。
あ。藤堂君だ。わ、こっちを見た。目が合った。
どうしよう、どう反応したらいい？困って思わず下を向いてしまった。
チラ…。顔をあげたら、藤堂君はもう背を向けていた。
そして、練習が始まった。

「なんか、かっこよかったね。弓道部」
1時間近く見学をしていた私たちは、美術室に戻った。その帰り道、女子二人組がそんな話をしている。
「部長もかっこよかったな」
「私は、川野辺君がなかなか、かっこいいって思っちゃった」
「クラスじゃ目立たないのにね」

「あと、藤堂君もかっこよかったね」
ドキ！！藤堂君？
「去年同じクラスだった時には、何も話したことなかったし、目立たなかったし、普通のそのへんにいる男子だったけどね～」
そうなんだ、同じクラスだったんだ。

「矢を射ぬく時、めちゃくちゃかっこよかったよね」
「うん。ドキってしちゃったもん」
「川野辺君とか、藤堂君って彼女いるのかな」
「さ～～」
…。そ、そっか。この二人も藤堂君がかっこいいって思ったんだ。

実は私も、さっきから胸の鼓動がおさまらない。藤堂君の静かな横顔、矢を射ぬく時に見せる、真剣な表情。その時の目…。
矢が的に当たった時、私のハートまで射抜かれた…なんて、あほなことを思っていたほどだ。

「お、帰ってきたか。どうだった?見学してみて」
原先生が、美術室に入ると聞いてきた。
「素敵でした」
女生徒2人組が目をハートにさせ、そう言った。

「柏木はどうだった?」
「…そうですね。なんか、静かな中に、緊張感があって、よかったですね」
「そうか。気分転換になったか?」
「…なりましたけど、でも、意欲は出なかったですよ」
柏木君は、冷めた口調でそう言い返した。

「意欲?」
原先生が聞いた。
「創作意欲」
また、柏木君が冷めた感じで答えた。

「ああ、それは期待してないさ。ただ、気分転換になったらいいだろうなって思っただけだよ。で、結城はどうだった?」

先生が私を見た。
「…はい、気分変わりました」
「そうか、良かったな」

先生はそう言うと、他の生徒のほうを見に行ってしまった。
「絵を描く気になれたの？」
柏木君が私に聞いた。
「ううん。それは、どうかな。でも、気分転換にはなったかな」
「ふうん」
柏木君はそう言って、自分の席にと戻って行った。

「はあ」
思わずため息が漏れた。藤堂君、かっこよかったし、綺麗だったな。
動作がとても、綺麗だった。藤堂君が弓を打つ瞬間は、まるで時間がそこだけ止まっているかのようだった。

「…」
あんな絵、描きたいな。無理かな。人物画なんて。それも、藤堂君を描きたいなんて言ったら、藤堂君が迷惑するかな。
ドキドキしながら私はまた、何も描かずにキャンパスの前で座っていた。

帰り支度を終え、部室を出ると、柏木君が声をかけてきた。
「結城さんって家、どこ？」
「私は藤沢のほうだけど」
「あ、なんだ。同じ方向だね。一緒に帰る？」
「え？」

わ。どうしようかな。私、男子だと緊張しちゃって、何も話せな

くなるし、本当に苦手なんだよね。
「あ、弓道部だ」
ドキ！廊下を弓道部の部員たちが歩いてきた。
「お疲れ様でした」
柏木君が弓道部の部員に声をかけた。
「見学来てたよね？どうだった？弓道部は」
「いいですね。あの緊張感」
「じゃ、弓道部に入る？」
「え？いいえ、入らないですよ」
「な～んだ。絵を描くのをやめて、弓道部に入りたいのかと思った」
部長が笑いながらそう言って、その場を去って行った。そしてその後ろから、藤堂君がやってきた。
「あ…」
なんか話しかけないと。
「藤堂君！今日、かっこよかったよ」
うわ！今、私が言いたいことを、後ろから誰かが言っちゃったよ！びっくりして振り返ると、あの例の二人組だ。
「びっくりしちゃった～。弓道してる時の藤堂君、かっこいいんだもん」
そう言われて藤堂君は、ちょっと戸惑っている。
「あ、それじゃ」
そう言っただけで、藤堂君はさっさと廊下を歩いて行ってしまった。
「あれ～。反応うす～～～！」
その二人は次にどうやら、川野辺って人をつかまえたらしく、

「今日、かっこよかった～」
と、川野辺君にも同じことを言っている。そして、川野辺君とは親しげに、何やら話し出した。

私は柏木君に、
「そろそろ帰る？」
と聞かれたが、どうしても、どうしても、藤堂君と話したくて、
「ごめん。今日、用事があって。先に帰ってくれる？」
と柏木君の誘いを断った。

「あ～～、そうなの？じゃ、また明日ね」
「うん」
柏木君をあとにして、私は廊下を小走りで走った。
ドキン。ドキン。
話すっていっても、何を話したいんだろう。私は…。

かっこよかったよ。なんて、さっきの子みたいには絶対に言えそうもない。
じゃあ、何を話したらいいんだろう。
だいたい、藤堂君をつかまえて、私から話しかけることなんてできるのだろうか。
そんなことが頭によぎりながらも、私は藤堂君のことをひたすら追った。

藤堂君はすでに、昇降口にいて、弓道部員と楽しそうに話していた。
ああ、そうだ。弓道部の人もいたんだ。それも、弓道部って仲いいみたいで、藤堂君も弓道部員とだと、やけに楽しげに話してるんだよね。
そんな中、声をかけるなんて、とても…。できないかも。

私は自分の下駄箱から靴をだし、靴に履きかえた。それから、チラッと藤堂君を見たが、こっちには気づいていないみたいだ。
「あれ？」
藤堂君の横に部長がいて、私に気が付いた。
「さっき、見学に来てた子だよね？」
うわ。声かけてきちゃったよ。
「あ、はい。さきほどは、どうも…」
あ、藤堂君もこっちを見た。
「どうだった～？弓道は」
「え？えっと、素敵でした」
「素敵って？あれ？もしかして、誰かに惚れちゃったとか？」
部長がそう笑いながら聞いてきた。この人、けっこう冗談が好きなのかな。弓道してる時と、イメージが違うぞ。
「あ、あの…」
私はなんて答えていいかもわからず、言葉に詰まってしまった。
「ああ、冗談、冗談。あはは。もしそうだとしても、そんなこと言えないよね？」
また部長が笑ってそう言った。
「…」
困った。藤堂君もこっちを見てるよ。
「結城さん」
「え？」
ドキ！藤堂君のほうから声、かけてきたよ？
「なんで、弓道部のこと見に来たの？」
「え？」

ドキン。藤堂君、なんか、顔怖くない?怒ってる?
「…先生が突然、見学に行って来いって」
「え?先生って原先生?」
「うん」
「それで、なんであの4人だったの?」

「それは、その…。4人とも絵を描く意欲が消えてたから、先生がきっと気分転換にいいと思って、見学して来いって言ったんだと思う」
「意欲消えてたの?」
「え?」
「結城さんも?」

「…」
そうだった。それ、知らなかったんだっけ、藤堂君。
「そうなんだ。実は、ちょっと今、スランプで…」
藤堂君が黙った。
「藤堂、その子と知り合い?」

部長が聞いてきた。
「え?はい」
「じゃ、2人で帰ったら?俺ら先に帰るから」
「え?」
「じゃあね、また見学いつでも来ていいからさ」
部長は私にそう言って、他の部員を引きつれ先頭を立ち、校門に向かっていってしまった。

「じゃあな、藤堂」
「その子と帰れよ」

「見学また、来てもらえよ」
「いつでも、大歓迎だから、結城さん」

部員たちが藤堂君にそう声をかけ、こっちをなんとなく見ながらぞろぞろと歩いて行った。
でも、中には振り返って私を見る人もいて、それも、こそこそとそのあと、話をしていて、あまりいい気はしないっていうか、なんていうか。

「みんなと帰っていいよ?」
思わず私がそう言うと、藤堂君は、
「え?なんで?」
と私に聞いてきた。
「だって、なんか…。変に思われたかも」

「変って?」
「気を利かすみたいな、そんな感じだったし。私のことみんな、勘違いしてないかな。クラスメイトなだけなのに」
「…」
変に思われたら、藤堂君嫌だよね?とまでは聞けないでいた。だけど、藤堂君のほうが、
「ごめん。そうだよね。俺、ちゃんとあいつらに言えばよかったよね。結城さん、嫌な思いしたよね」
と言ってきた。

「え?私は別に…」
「は〜〜あ。あいつら、変に気をまわし過ぎだよね。部長までがさ。まいっちゃうよね、本当にごめんね」
「ううん」
「なんでもないのにね、ただのクラスメイトなのに…」

そう藤堂君に言われ、グサッと傷ついてる私がいる。そうだよね、私単なるクラスメイトってだけだよね。

ズドン。さすがに藤堂君に言われると沈んでしまう。

「帰る？駅まで一緒に」

藤堂君に聞かれた。

「い、いいの？」

「え？うん、別に…。あ、結城さんは嫌？」

「ううん」

ぐるぐる首を横に振った。そして藤堂君と横に並んで歩き出した。

ドキドキするような、でも、どっかで落ち込んでるような、そんな複雑な気持ちで…。

第7話　友達から

わ。歩き出したのはいいけど沈黙だ。どうしようかな。ほら、なんか話すんでしょ?弓道してる時の、藤堂君、かっこよかったって。違う。それは言えない。でも、でも、なんか、ほら。話しかけなよ。

「結城さんじゃん」

ドキ!いきなり後ろから名前を呼ばれた。振り返ると、柏木君だ。あれ?さきに帰って行ったはずなのに、なんでいるの?

「あれ?弓道部の…」

柏木君が藤堂君を見て、何か言いかけた。

「今日、見学に来てた人?」

藤堂君も柏木君に話しかけた。

「…結城さんと知り合い?」

「クラスが一緒だけど…」

「…友達じゃないよね?」

柏木君が突然、そんなことを言った。

「え?」

藤堂君は一瞬黙って、私を見てから、

「友達じゃないって?」

と柏木君のほうを見てそう聞いた。

「だって、結城さん、男子と話すのが苦手だって言ってたし、友達いないって」

「…」

藤堂君は黙ってまた、私を見た。

「だから、俺くらいだと思ったからさ、結城さんの男友達」
柏木君がそう言うと、藤堂君は柏木君に視線をゆっくりと移した。

「男、友達？」
「うん、そう。友達になった。ね？結城さん」
ひえ。なんで私にふるかな。
「…」
藤堂君はしばらく黙り込んで、
「あ、だったら、俺とじゃなくて、こっちの友達と帰ったほうがいいのかな？結城さんは」
と下を向きそう言った。

え？なんで、そんなこと藤堂君言ってくるの？
「でも、用事があるんでしょ？結城さん。俺も、ちょっと本屋に寄っていこうと思うし、また明日にでも一緒に帰ろうよ」
柏木君はそう言うと、にこっと笑い、
「じゃあね」
と、私に手を振り行ってしまった。

「…用事、あったの？」
藤堂君が私にぽつりと聞いた。
「…ううん、もう、終わった」
「え？」
「用事は済んだから」
…って、なんかつじつまの合わないこと言ってるかな、私。

「じゃ、帰れるの？もう」
「うん」
私と藤堂君はまた、とぼとぼと歩き出した。
帰れるといっても、駅までの道だけだ。こんなふうに黙って歩い

てたら、あっという間に着いてしまう。
だから、早く何か話さないと…。

ええい！勇気を振り絞れ、私。
「矢を射ぬいてるところ、初めて見た」
私は必死にそう話し出した。
「…」
藤堂君、無言だ。ええい、頑張れ、私。

「なんか、いいよね、あの緊張感！」
あ、なんだか、変に声がでかくなったかな？
「でしょ？」
静かに藤堂君は私に笑顔を向けた。わ。笑顔向けてくれちゃうんだ。

「あれを見て、藤堂君も魅了されたんだね」
「うん。わかってくれた？結城さんも魅了された？」
「うん。…あ、でも、弓道をしたいとは思わなかったけど、ただ…」
「ん？」
藤堂君は静かに私を見て、私の言葉を待っている。

「絵、描けたらいいなって思った」
「なんの？」
「弓道…。あ、でも、難しいよね。あの緊張感とか描くのは」
「…人物画ってこと？」

「うん、そう。矢を射ぬいてる瞬間を絵にしたいなって」
「…いいかもね。でも、誰がモデル？」
「え？」
「誰でもいいの？」

ドキン！

「それは、その、誰がっていうんじゃなくって、えっと」
しどろもどろだ。本当は藤堂君を描きたいって思ってるくせに。
「部長に頼んでみる？モデルになってくれるかどうか」
「ぶ、部長？」

なんで、そこで俺がモデルになるって言ってくれないの。
「一番、モデルになったらかっこいいの、やっぱ、部長でしょ？」
「そんなこと…」
ないって言ったら、部長に失礼かな。

「いいよ、頼んでみるよ、俺から」
「…ありがと」
いいの？私、いいの？藤堂君を描きたいくせにいいの？
「で、でも、部長に迷惑だって思われないかな」
そう精一杯言ってみた。そこからどうにか、部長じゃなく、モデルは藤堂君で…と話を持っていけないものだろうか。

「喜びそうだよ、あの人。前に写真部に撮らせてくださいって言われて、めちゃ張り切ってたし。なんか、見られると張り切っちゃうみたい」
「…そ、そうなんだ」
こりゃ、無理そうだ。モデルは部長で決まっちゃうかな。

「だから、見学も大歓迎なんだよね。まあ、あまり見学に来る人なんていないけどさ」
藤堂君は、話を続けている。しょうがない。その話に合わせるしか…。
「…私も見学に来てって、他の部員さん言ってたね」

「え？ああ」
「あれ？それも、なんで私の名前知ってたのかな？あの人」

「それは…」
藤堂君が黙った。
「俺がほら、結城さんってさっき、声をかけたからじゃないかな」
「あ、そっか」
そこで、会話が途切れてしまった。とぼとぼ。また黙って、私たちは歩き出した。

「駅に着いたね」
うん、着いちゃったよ。結局私、何も言えなかった。
「結城さん」
改札を通ったところで、藤堂君が声をかけてきた。
「え？」
「部に、友達できて良かったね。男子苦手だって言ってたけど、気が合うのかな？」
え？！

「さっきの…。名前なんていったっけ？」
「柏木君」
「…彼も見学に来たってことは、今スランプ？」
「そうみたい。意欲まったくなさそうだった」
「じゃ、そういう話もお互いできるね」
「うん」

「…それじゃ、電車来たから、乗るね」
「うん」
藤堂君はさっさと、電車に乗り込んだ。そしてしばらく、どこか全然違う方向を見ていて、電車が発車するときになり、ようやくこ

っちを向いた。
目が合った。藤堂君がちょこっと微笑んだ。そしてまた、ふっと視線を外された。
私は微笑み返すことができただろうか。きっと、思い切り引きつってたと思う。

友達できてよかったね。ってどういう意味？

暗い。自分でも自分の暗さにまいるくらい、暗い。ここまで私って暗い性格だった？
友達できてよかったね。って、そう言う意味だよ。深い意味はないよ。
柏木君は友達で、藤堂君はクラスメイト。ってだけだよ。
藤堂君は…。
友達にもなれないの？あれ？友達じゃないの？

友達って何？いったい、何？
あ～～～。なんだか、何も考えたくないくらい、真っ暗だ。

駄目だ。私は帰りの電車で芳美にメールをした。
＞何が何だかわからない。相談にのって！
するとすぐに、返信が来た。
＞今どこ？
＞電車に乗ってる。

＞私、藤沢の駅にいる。ご飯でも食べる？
＞うん。もう少しで着くから、待ってて。
＞了解。麻衣と待ってるよ。
え？麻衣？麻衣もいるの？
「…」

麻衣にはなんとなく話しづらかった。なにせ、藤堂君と仲いいし。

う〜〜、でも、いいや、もう。一人で考えても、暗くなるばかりだ。あの二人に聞いてもらおう。

沈んだ気持ちを引きずったまま、私は藤沢の駅に降り立った。

「え?!!!!」

麻衣が、思い切り驚いた。その驚きように、こっちがびっくりしたくらいだ。

「そうなんだ。弓道してる姿見て、惚れちゃったか〜〜。なあんだ。だったらさ、去年コクられた時、弓道部の見学させてもらえばよかったんじゃない?そうしたら、もっと早くに惚れてたって」

芳美はそんなに驚いていない。どっちかって言うと楽しんでいるようだ。

「そ、そうだね。でも、あの時はそんなこと思ってもみなかったし」

「…穂乃ぴょんが、司っちを?」

麻衣はまだ、びっくりしたままで、運ばれてきたパスタを一回、フォークにくるっ巻きつけたのに、それをそのまま、お皿に置いてしまった。

「そうそう、聞いたよ。穂乃香、穂乃ぴょんって呼ばれてるの?笑える〜〜〜」

「それは今、どうでもいいよ、芳美。それよか、司っちのことだって」

麻衣がようやく我に返ったって顔で、そう芳美に言った。

「司っちって、藤堂君?」

「そう」

「麻衣って、藤堂君を司っちって呼ぶくらい仲いいの？」
「ううん、別に」
別に？私から見たら、仲よさそうに見えるけどな。
「席が近いから、ちょっとは話すけど、なんか、一緒にいる沼田ってのが、やけに司っちにからんでみたりしてるからかな、３人で話してるように見えてるみたいでさ」

「沼田？」
「ねえ、穂乃香。沼っちはどうなの？」
「え？どうって？」
なんで、麻衣、そんなこと聞いてくるの？
「沼っちってさ、なんだかどうも、穂乃香のこと気に入ってるみたいなんだよね」
「え？誰？沼っちって？」

芳美が目を輝かせた。
「穂乃ぴょん、穂乃ぴょんって言って、やたらと穂乃香に話しかけてる」
「そんなことないよ、美枝ぽんにも話しかけてるし、沼田君って誰にでもああだよ」
「いんや、それが違うんだな」
麻衣が声を潜めた。

私たちはよく、藤沢の駅で行くカフェでご飯を食べていた。うちの学校の生徒もたまに出入りしているので、それで声を潜めたのかもしれない。
「私にやたら、穂乃香のことを聞いてくるんだよ。沼っち、司っちがいても、関係なく、穂乃香のことを聞いてくるの」

「たとえばどんなこと？」

芳美が聞いた。
「彼氏いないよねって話から、穂乃ぴょん、好きなタイプってどんなやつ？とか、なんか、興味あることってあるのかな？とか」
「それ、かなり気にしてるってことじゃない？」
「芳美もそう思うでしょ？」

「…そうかな」
私は首をかしげた。
「藤堂君はその時、一緒にいてどうすんの？」
芳美が聞いた。あ、それ私も気になる。
「え？別に。黙って横にいるだけ」
「…だよね、やっぱり」
私はそれを聞いて、また気持ちが沈んだ。

「なんとも思われてないんだよね、もう」
私が暗くそう言うと、
「そんなことわかんないじゃん」
と、芳美が言ってきた。でも、麻衣は何も言わなかった。
「ね？麻衣、そんなのわかんないよね」
麻衣が何も言わないからか、芳美がもう一回そう言った。

「どうかな。私には何とも言えないな」
「え？」
「確かに。司っちって、穂乃香の話が出ても、無表情だしさ」
「…」
「その、私、何気に聞いちゃったんだよね。穂乃香、最初の頃司っちに顔を合わすのも嫌がってたでしょ？」
「え？うん」

「藤堂君は、今も穂乃香のこと好きなの？って」

「わ、それ、何気にじゃなく、すごくストレートだよ」
芳美がそう言った。私はその先が聞きたくなかった。
「俺がふられたこと知ってるんだって、そう聞かれて、うんってうなづいたら、司っち、ちょっと困ったっていう顔をして、もう、なんとも思ってないよって言ったんだよね」
「…」

芳美も黙った。そして私を見た。
私は、ショックよりも、ほら、やっぱりって思っていた。

「だから、変に意識してもらっても、困るんだよなって、そう言ってて…」
うわ。それもだ。それも、わかってたことだ。
私が藤堂君のことを好きになったって、もうどうしようもないことなんだ。

「穂乃香！」
いきなり、芳美が持ってたフォークをその辺に置き、私の手を握ってきた。
「な、何？」
「好きになったんだったら、頑張りなよ」
「え？！」

「応援するから！」
「…」
「私も！」
麻衣が、私の手を握った芳美の手を握りしめ、
「いくらでも、協力する。司っちだって、また、穂乃香のことを好きになってくれるかもしれないじゃん？」
と熱い目をして言ってきた。

「…う、うん」
「いきなり付き合うってのはなかなか、難しいかもしれないけど。あの司っちの性格からして」
「うん」
「まずは、友達かな」
麻衣がそう言った。

「何それ、友達なんてすぐになれるでしょう？」
芳美がそう言うと、麻衣はくるくると首を横に振り、
「そんな簡単な問題じゃないのよ。彼はね、どうやら女子が苦手なんだよね。友達になるのもなかなか」
「でも、麻衣は仲いいんでしょ？」
私がそう聞くと、
「だから、沼っちがいたら、けっこう話すけど、いないとそうでもないんだって。あっちは私のこと、友達と思ってないと思うよ」
と声をまた低くしてそう言った。

「そ、そうなの？」
「う～ん、けっこう手ごわい相手なんだ」
芳美がうなりながら言った。そして、
「でも、何？そんなに女子が苦手なやつが、なんでまたいきなりコクってきたんだろうね」
と芳美は、私の顔を覗き込むようにして聞いてきた。

「それ、藤堂君に言われた」
「え？」
「あまり、深い意味はなかったんだって」
「告白にってこと？」
2人が同時に聞いてきた。

「うん」
「なんじゃ、そりゃ」
芳美が言った。
「まさか、からかったとか?」
また芳美が言った。

「そんなキャラじゃないよ」
麻衣がそう言った。私もそれは思う。
「なんだったんだろうね」
芳美がまた、水の入ったコップを手でゆっくりと回しながらそう言った。
カラン。水の中の氷が音を立てた。

私にもわからない。でも、藤堂君が今は、なんとも思っていないんだよねって、それだけはわかってることだ。
「よし、とにかく!」
いきなり麻衣は、また私の手を握り、
「どんどん穂乃香から、話しかけなよ。司っちって、話しかけられる分には、いいみたいだよ。私が話しかけても、答えてくれてるしさ」
と言ってきた。

「でも、何を話していいかがわかんないの。だから、2人でいてもだんまりになっちゃう」
「じゃ、興味のあることでも、ふってみたら?」
「興味?何に興味があるのかもわからないのに?」
「ああ、なんだか、映画好きみたいだよ。そんな話を沼っちとよくしてる」
「映画?なんの?」

「時代劇とか？侍の出てくる映画、そんな話ばっかり。たとえば、7人の侍は渋かったよな～～とか」
「し、7人の侍？」
どんな映画？！
「よし、それを借りてきて早速観て、その話題をふってみたら？」
芳美がそう言ってきた。

「わかるかな、その映画を観て、私…」
「そうだよね～～。あ、そうだ。穂乃香が好きなものって何？それと共通点があればいいんじゃないの？」
芳美がそう言った。
「私は、食べることとか」
「あ！司っち、そば好きだって言ってた」
「え？」
そば？

「沼っちと今度、手打ちの蕎麦屋に行こうって、そんな話をしていたよ」
「手打ちのそば？」
「う、う～～～～ん。渋いね」
芳美がうなった。私も横で、うなりたい気分になった。

でも！仲良くなるには、そうだよね。相手が好きなこととか、そういう話題をふらなきゃ！向こうだって、いい加減、いつもだんまりになるんじゃ、嫌になっちゃうよね。
よし！
「わ。私頑張ってみる！」
「よっしゃ。応援するから」
「私も」

また3人で手を握り合い、目を輝かせた。
よかった。話して。一人だといつまでも、暗くじめじめとしていただろうな、私。
それから、ようやく2人は自分らの彼氏の話をし始めて、私たちは楽しくご飯の続きを食べた。

聞いていたら、めちゃくちゃ羨ましくなった。2人とも、彼とうまくいってるんだな。
よし、私も、頑張る。まずは、友達から！

藤堂君に「友達でも駄目かな」って言われて、断った。
あの時に戻って、やり直したい。
「友達、いいです。友達、なります」
今、そう言ったとしても、引いちゃうかな？

だから、自然と仲良く話せる、そんなふうになれたら、それでいいから。
いや、本当はもっと仲良くなって、毎日2人で帰れたら。
いや、本当はこれから来る夏休みとか、クリスマスとかそんなイベントも一緒にいられたら。

でも、まずは友達から。そう思いながら私は家に帰ってきた。
明日から、頑張るぞ～～～。なんて、寝る前にガッツポーズもしてみたりした。

第8話　協力者

翌日、朝、深呼吸をしてから教室に入った。そしてまっすぐに、藤堂君の席に行った。

「お、おはよう」

藤堂君が振り返って私を見た。

「あ、おはよう」

にこりと笑ってくれた。あ、本当だ。ちゃんと返してくれるんだ。

「あの、き、昨日は」

見学したことと、モデルの話をしようと思ったが、

「おっは～～。司っち！これ、持ってきたよ～」

とそこに沼田君が来て、藤堂君に話しかけてしまった。

「何？」

それでも、藤堂君は私の話を聞こうと、私のほうをむいてくれた。

「ううん、なんでもないの。あ、沼田君が持ってきたのって？」

「え？これ？映画のＤＶＤ。司っちが３はまだ観ていないっていうから、貸そうと思って」

「なんていう映画？」

あ、もしかして、侍の？

「マトリックスだよ。観たことあるでしょ？司っちったら、３だけ観てないなんて、とんでもないこと言うから」

「マトリックス？」

「え？あれ？まさか、知らないの？」

ギク。どうしよう。

「あ、あ、私も観てみたいな」

思わずそう言うと、

「じゃ、1と2も持ってるから、明日持ってきてやるよ」
と沼田君が言ってきた。

「3は、司っちが観てからね」
「うん」
「なんだよな。みんな、観てないの？この素晴らしい映画をさ」
「…」
チラ。藤堂君を見た。藤堂君は何も言わず、カバンにＤＶＤをしまった。

「どんな映画？」
「マトリックス？ＳＦもんだよ」
「ＳＦ」
そうか。藤堂君はＳＦも見るのか。
「穂乃ぴょんはどんなの観るの？」
沼田君が聞いてきた。

「私は、ジブリとか好きかな」
そう言うと、
「俺、観ないよ。ああいうのってまったく」
と沼田君が言った。ああ、私は別に沼田君が何を観てもかまわないけど、藤堂君のことが知りたいの。

「そうだ。司っち、今日の帰りにでも蕎麦屋行かない？手打ちそばの店」
「え？手打ちそば？」
私も行きたい…とは言えず言葉が続かなくなり、私は黙り込んだ。
「何？穂乃ぴょんも蕎麦好きなの？あ、もしかして家で、そば打ったりしてたりして」
「ま、まさか～～」

「一緒に食べに行く？蕎麦」
「ど、どうしようかな。でも、部活」
「部活のあとでいいよ。俺も今日、委員会で遅くなるし」
嘘。藤堂君と蕎麦食べに行けるの？
「穂乃ぴょんは、蕎麦、どうやって食べるのが好き？」

「え？どうって？」
「だから、いろいろとあるでしょ？食べ方」
「…」
何？なんだろう。ここはどうやって答えたらいいの？
「なんだよ、本当は蕎麦なんて好きじゃないんじゃないの？」
沼田君にそう言われた。ああ、もうばれたか。私は小さくうなづいた。

「じゃ、何が好きなんだよ？」
「パ、パスタ」
「じゃ、手打ちのパスタ屋があるから、そこ行かない？うまいんだよ。な？司っちもパスタでもいいよな？」
「俺、今日部活のあと、ミーティングもあるし、遅くなるから二人で行って？」
「え？」

2人でって、沼田君と？
「なんだ、そうなの？じゃ、俺と2人で行くか～。穂乃ぴょん」
「え？いいよ、私は、その…」
その時、チャイムと同時くらいに麻衣がやってきた。
「うわ、セーフ。遅刻するかと思った」

「どうしたの？寝坊？麻衣」

沼田君が聞いた。
「昨日遅くまで、しゃべりこんじゃって」
「誰と？」
「彼氏と電話で」

「仲いいね、相変わらず」
そんな話を沼田君と麻衣がしている。私はその場から離れ、自分の席に戻った。
あ、そういえば、麻衣が沼田君が私に気があるとかなんとか。今頃思い出した。
え、なのに、２人でパスタ食べに行くことになっちゃうわけ？これって、なんだか、やばくない？

「なんで、司っちじゃなくって、沼っちと行くことになってるの？」
やっぱり。昼休み、食堂だと沼田君と藤堂君がいるかもしれないからと、私は中庭に麻衣を連れ出し、そこで今朝の話をしたら、そう言われてしまった。
「穂乃ぴょん、藤堂君のこと好きなの？」
その場にいた美枝ぽんがいきなりそう言った。

「え？なんでわかったの？」
私がそう言うと、
「え？っていうか、なんとなく前からわかってたけど？」
と美枝ぽんにあっさりと言われてしまった。

「わかってたの？でも、本人も最近気が付いたみたいだよ？」
麻衣が美枝ぽんにそう言うと、
「やっぱりね。本人気が付いてないかもって、それもわかってたよ」
と美枝ぽんは言った。

「なんでわかったの？」
「だって、藤堂君を見る目も違ってたし、なんだか、妙に意識してたし」
「……」
「沼っちと2人でどこに行くの？」
「パスタ食べに」

「は～～～ん」
美枝ぽんが、流し目で私を見た。
「な、何？やっぱり、沼っちって、穂乃香が好きとか？」
「ううん、違う」
「あれ？違うの？」

「沼っちもね、気が付いてるよ」
「何を？」
「穂乃ぴょんが司っちを好きなの」
「え？！」
私と麻衣が同時に驚いた。

「で、でも、それじゃなんで」
「沼っちって、そういうの好きみたい」
「どういうの？」
「誰かが誰かを好きで、それをくっつけたりするの」
「な、何それ」

「1年の時も、そういうのよくやってた」
「ようするに、おせっかいってこと？」
麻衣がそう聞いた。
「ううん。ただ単に、人が幸せになっていくのが好きみたい」
「はあ？」

「人が好きみたい。っていうか、すぐに好きになって、助けてあげたくなるらしい。私が聖先輩好きなのも知って、協力するって言ってきたけど、私、遠くで見てるだけが幸せだから、協力はいらないって断ったんだ」
「じゃ、もしかして、穂乃香のことも、協力したくて」
「多分、うずうずしてると思う」

「な、何それ」
私は思わずのけぞった。
「なんとなくだけどね、私に穂乃ぴょんが好きなやつって知ってる？って聞いてきたんだよね」
「私にも聞いてきたよ。だから、沼っちが穂乃香に気があるのかと思っちゃったけど」
麻衣がそう言うと、
「違うんだな。穂乃ぴょんって、俺の勘からすると、司っちのこと好きじゃない？って聞いてきたから」
「え？」

「そうかもしれないけど、多分、本人は気が付いてないよって、教えてあげた」
「え？」
「今日あたり、2人になったら、沼っち、穂乃ぴょんに聞こうと思ってたんじゃないかな。司っちのことどう思ってるか」
「…」

どうしよう。そんなこと聞かれたって。
「よっしゃ、穂乃香！味方は多いほうがいいよ」
「え？何？味方って」
「沼っちだよ。沼っちにも協力してもらおうよ」

「…」
「今日パスタ食べながら、どうやって藤堂君のハートをゲットできるか、作戦練って来い！」

「ね、練って来い？」
「きゃ、麻衣ちゃん、男らしい～」
美枝ぽんが、麻衣を見てうっとりとした。
「ま、待って。ハートをゲットって、私はまず、友達からって」
「何～～？友達って」
美枝ぽんが笑った。

「友達何て言ってないで、恋人になったらいいじゃない」
「美枝ぽん、そんなの無理だよ、私」
「なんで？友達になってから、そのあとどうするの？」
「…でも、まず、せめてもうちょっと仲良く話せるようになりたいんだってば」
私がそう言うと、美枝ぽんが、
「なんだか、まどろっこしいんだね」
と苦笑いをした。

「…しょうがない。穂乃香だって、男子苦手だし、友達になるのだって、やっとだよね？」
麻衣がそう言うと、美枝ぽんが、
「そうなんだ。だから、手の届かない聖先輩とかを思ってたんだ」
とスバッとそんなことを言い当てた。

それ、ほんと、当たってるの。彼氏欲しい。美枝ぽんみたいに、彼氏は別に欲しくない。遠くから見てりゃ、それでいい、って思えちゃったらいいんだけど、私の場合、彼氏欲しいけど、男の人が苦手で、だから、手の届かないような聖先輩をただ、遠くから見てる、

って、そんなことをしているだけなんだ。

でも、本当は思いが通じ合って、デートとかして、麻衣みたいに夜中まで電話で話して…。ラブラブなメールもしあって…。そんなことも、思い切りあこがれてるの。

「友達で、本当にいいんだ」

また美枝ぽんに言われた。う。そうだよ。友達以上になりたいよ。藤堂君とメールしあったり、デートしたり、それから、電話で話したりって、そんなこともしたいよ。

午後の授業は、外から爽やかな風が吹いていた。私は窓から桜の木を見た。

新緑、どんどん濃くなっていく。

あの木を描こうと思っていたのにな。

あ、そうだ。あの爽やかな緑の中に、藤堂君が弓を射る、そんな絵はどうかな。

目を閉じた。緑とまぶしい光と、そして涼しげな藤堂君。

何気に、藤堂君のほうを向いた。あれ?藤堂君がぱっと顔を前に向けたけど、今、こっちを見てた?

ああ、そっか。外を見ていたのか。

藤堂君の涼しげな横顔を、私はしばらく眺めていた。

放課後、キャンパスの前に座り、まず緑の絵を描きだした。その中に藤堂君を描いていこう。藤堂君にはモデルになってと言ってないけど、いいよね。

今、目を閉じても鮮やかに浮かび上がる藤堂君の姿。それを思い出し、描いていこう。

「お、描きだしたのか、結城」
「先生。はい、昨日の見学で、なんだか、描きたいものが決まってきて」
「そうか、よかったな。柏木は意欲出なかったみたいだけどな」
「あれ？そういえば、今日いないですね」

「しばらく休むって言ってたよ。学校の帰りに江の島の海でも見てきますってさ」
「…気分転換に？」
「海見たらまた、意欲出るかもってさ」
「…そうですか」

ちょっとほっとした。今日も一緒に帰ろうって言われたら、どうしようかって思ってたから。
あ、でも、今日は沼田君が…。ホームルーム終わったら大声で、
「穂乃ぴょん、部活終わる頃、美術室まで行くから待っててね」
と言ってたし。

あわあわ。今のもしっかりと藤堂君に聞かれたよね、と思って藤堂君を見たら、まったく関係ないところを向いていて、さっさと教室を出て行っちゃったっけ。
寂しいな。少しは気にかけてくれてもいいのに。なんて、思ってみたり。

「穂乃ぴょん！あ、いた」
片づけをしていると、沼田君が美術室に入ってきた。
「どんな絵描いてるの？」
「木」
「木？」
「そう」

まだね。そのうち、藤堂君も描くけど。
「さ、行こうぜ、パスタ食べに」
「うん」
沼田君、行く気満々だ。断れそうもないな。

仕方なく沼田君の後ろを歩いていくと、後ろからわいわいと弓道部の部員がやってきた。
「あれ？弓道部、終わったのかな」
私がそうぼそって言うと、
「じゃ、司っちもいる？」
と沼田君が振り返った。

「あ、昨日見学に来てた子だ」
一人の弓道部の部員が私に気が付いた。
「本当だ。結城さんだ」
「き、昨日はどうも」
ぺこって私は頭を下げ、挨拶をした。

「藤堂ならまだ、部室だよ」
「え？」
「部長と話をしてる」
ドキ。まさか、モデルの件？
「じゃ、ミーティングは？」

沼田君がそう部員に聞いた。
「ミーティング？そんなのないけど」
え？でも、藤堂君、ミーティングあって、遅くなるって。
「ほんじゃね、結城さん。また絶対に見学来てね」
「はい」

藤堂君、嘘ついたの？
私はそれが気になり、ずっと黙り込んで歩いていた。
「ちょっと歩くけど、いいよね？」
「う、うん」
しばらく歩いていると、また沼田君が話しかけてきた。
「弓道部の見学行ったの？」
「うん、美術部の何人かで」
「ふうん」

「…」
また、黙り込んだ。いつも明るい沼田君でさえ、私とだとこんなにしゃべらないんだ。
「と、藤堂君、ミーティングあるって言ってたよね？」
「ああ、部長との話があるってことじゃないの？」
「そっかな。嘘つかれたかと思っちゃった」

沼田君は黙っていた。そしてまた、2人で黙って歩いた。
「あ、そこだよ。ほら、手打ちパスタの店って看板出てるでしょ？」
「うん」
小さめの家庭的なお店だ。
沼田君のほうが先にドアを開け、中に入った。

「いらっしゃいませ」
「こんにちは～～」
沼田君は愛想よくお店の人に笑いかけ、席に着いた。私も黙って、沼田君の前に座った。
「冷製パスタ、けっこう美味しいよ」
「そうなの？じゃ、それにする」

私は沼田君が勧めてくれたものを、そのまま頼むことにした。
オーダーが済むと、沼田君は、
「ね、穂乃ぴょんってさ、聖先輩のファンだよね」
といきなり聞いてきた。
「なんで知ってるの？」

「そう言ってたもん、麻衣が」
「…」
そうか、麻衣言っちゃったんだ。
「でも、彼女がいて、落ち込んでたって？」
「う、うん」

「で、遠くの人より、近くの人に目覚めちゃったって？」
「え？！なんでそれ！」
「あ、やっぱりそうなんだ～～」
「…」
今のカマかけた？とか？

「美枝ぽんが言ってた」
「な、何を？」
「どうやら、穂乃ぴょんは自分の思いに気が付いたらしいよって」
「…」
美枝ぽん、なんでばらしてるかな。

「俺も、協力してあげてもいいけど」
「え？！」
「手ごわい相手だとは思うけどさ」
「と、藤堂君？」
「…そう。藤堂君」

にやり。沼田君が思い切り、にやりと微笑んだ。
もしや、この人、人が幸せになることを望んでるわけじゃなくて、
ただ単に、楽しんでるんじゃなかろうか。
「だからさ、俺のことも協力してくれない？」
「え？！」

「俺の好きな子って知ってる？」
「知らない」
私はちょっと考えて、
「あ、まさか麻衣だったら無理だよ。彼とラブラブなんだから」
と慌てて言った。

「麻衣じゃないよ。俺、もっと前から片思いしてるんだ」
「え？」
「1年の時から。相手、まったく俺のことなんか眼中になし」
「…」
「なんでも、手に入る相手より、遠い人のほうがいいんだってさ。
付き合ってがっかりしたりするのは、嫌なんだって」

「もしかして、美枝ぽん？！」
「大当たり」
え～～～～！！！！！？？？？？

第9話　作戦を練る

沼田君は、美枝ぽんが好き？私でもなく、麻衣でもなく？
「美枝ぽんはでも、聖先輩のことが」
「知ってる。遠くで見てたらそれで、いいんだろ？」
「…それで、身近な人には興味ないって」
「うん、知ってる。１年の時それ、聞いたことある」

「なんで、聖先輩のこと、協力するって言ったりしたの？」
「それ、美枝ぽんから聞いた？」
「うん」
「なんでって、そりゃ、いい人って思われたいから、とか？」

「…でも、うまくいったらどうしようとか、思ってなかったの？」
「うん」
うんって、あっさりと？！
「聖先輩、女嫌いだったみたいだし、ことごとくふってたし、どっちかって言ったら、さっさとふられて、聖先輩のことあきらめさせようと思ってたし」

「な、何それ。ひどくない？」
「ひどいかな？でも、そうしてくれなきゃ、俺のことも見てくれないじゃん」
「…でも」
なんか、ひどくない？それ。もしかして、傷心になってるところを、つけいろうとか思ってない？
「美枝ぽんって、変わってるから」

「え？」

「真正面からいっても、駄目だろうなって思ってさ」
「う…」
それはなんとなく、わかる気がする。
「あいつも無理だよ、きっと」
「あいつ?もしかして、藤堂君?」
「そう」

「…」
「なんか、好きな子はいたみたいだけど、そんでふられたらしいけど、それもひきずってんだかなんなのか、あいつ、暗いし」
「暗い?」
「その子の話、聞こうとすると、絶対にその場を離れる。まだ、傷が癒えてないのかな。そんなやつのハートをゲットするのは、なかなか難しいとは思うけどね」

それはないと思うよ。もうすっかりその子のことは忘れてるって…。
「あの、誰にふられたかは、聞いてないんだよね?」
「ああ、だって、その話をしようと思うと、ばっくれちゃうから」
「…」
そっか。黙っているのか、藤堂君は。

「相当好きだったのかな」
「え?」
声が裏返った。何をいきなり?
「それか、ものすごくこっぴどくふられたとかかな」
「…」
こっぴどくふった覚えはないけどな。

「あいつが好きになるくらいだから、どれだけの女なんだろう。そ

んじょそこいらの子なんて、好きにならないだろうし」
「な、なんでそう思うの？」
「え？そんな気、しない？あいつ、変わってるじゃん。女、興味なさそうだし。あ、まさか、すげえ年上とか？」
…いえ。そんじょそこいらにいる、なんでもない人間です。ふったのは…。
「は～～～～」
思い切り、重いため息が出てた。
「ま、そんなに落ち込むなって。だから、俺が協力してやるから、そっちも協力してよ」
「…うん」
力なく私はうなづいた。
「あ、でも、どうやって、協力したらいいの？それに、私のことはどうやって、協力」
「だから～～、ダブルデート」
「え？」
「浴衣で花火大会。あいつ、人が多いところ嫌だって言ってただろ？だったら、人が多くないところに行ったらいいんだよな？」
「それで、ダブルデートって言ってたの？俺、誰とくっつくの？とかなんとか」
「え？ああ、そうそう。そこで、誰かが美枝ぽんとでしょって言ってくれて、司っちと穂乃ぴょんがくっついてくれたら、うまくダブルデートできたんだよ」
「…それがしたくて、私と藤堂君をくっつけたいとか？」
「…それもある」

「それもあるって、他にもあるの？」
「…いや、それだけかも」

こいつは～～～。なんとなく、たくらみが見えてきたって言うか。もしや、私の好みを聞いたり、彼氏がいるかを麻衣に確認してたのは、私と藤堂君をくっつけられるかどうかを、探ってたんじゃないの？

それに、私が何に興味があるかも、ダブルデート、どこに行くか、作戦を練るためだったかもしれないし。

「私が、藤堂君を好きで、沼田君、都合よくなったってこと？」
「…まあね。でも、穂乃ぴょんみたいに、恋が下手くそな子って見てると、ついどうにかしてあげたくなるっていうのも、俺の性分みたいだけどさ」

恋が下手くそ？

「恋に下手も上手もないでしょ？」
「あるよ」
「ないよ～～」
「あるって。麻衣は上手でしょ？恋の駆け引きとかうまそうじゃん」
「…」

「彼と一緒のところ見たことあるけど、うまく化けてるなって思うもん。あの男らしさを隠して、猫１００匹はかぶってるし」
「…見たことないからわからない、私」
「そういうのできる？」
「え？」
「穂乃ぴょん、恋の駆け引きってできそう？」

「絶対にできなさそう」

「でしょ？」
また、沼田君はにやりと笑った。
「あ、やっぱり、人の恋で楽しんでる」
「違うって。なんか、親近感がわくだけだよ」

「どういうこと？」
「俺も苦手なの」
「嘘だ～～。いろんな作戦練ってるじゃない」
「でも、駄目なんだよね、うまくいった試がない」
「そうなの？」

「だから、下手くそ同士が手を組んで、頑張ろうって言ってるんじゃんか」
「下手くそ同士が手を組んで、うまくいくもんなの？」
「…」
沼田君は黙り込んで、それから水を飲んだ。

「ない知恵も、２人がどうにか考えたら出てくるって」
いきなり、沼田君はそう言うと、一気に運ばれたパスタをたいらげた。
「ま、いいや。麻衣や芳美も応援してくれるって言ってたし」
「そうなの？」

「うん」
「じゃ、俺のことも応援してもらおう」
「…麻衣に言うの？美枝ぽんにばれちゃうかもよ？」
「じゃ、麻衣は司っちにもばらすってこと？」
「え？それは嫌だ。ううん、麻衣ならばらさないよ」

「でしょ？俺のこともばらさないでしょ？」

「そっか」
私はゆっくりと、パスタを食べた。確かに美味しいけど、そんなに今は味わえる気分じゃないな。
「沼田君でも下手なんだ。なんか、女の子とすぐに付き合えちゃいそうな感じなのにな」
「俺？」

「すぐに仲良くなれそうだもの」
「…仲良くなれても、友達以上には進展しないんだよ、なぜだか」
「と、友達になっても、それ以上にはなれないってこと？！」
「…え？」
私が大きな声を出したからか、沼田君は驚いている。

「あ、私、まず友達になろうって思っていたから」
「司っちと？」
「うん」
「友達じゃないの？今」
「うん」

「そうかなあ」
「だって、あまり話もしないし」
「どんどん話しかけたらいいじゃん」
「そうなんだけど」

「じゃあさ、どうしたら友達なわけ？」
「え？だから、こうやって、沼田君と話してるみたいに」
「司っちから、恋の相談でもされたりとか？」
「嫌だ、そんなの」
「じゃ、彼女になりたいんでしょ？結局はさ」

「そ、そんなに多くは望まないっていうか」
あの時の、友達でも駄目?っていう言葉をもう一回言ってもらって、うんって答えたいだけ。それで、友達になって、お互いを知って、それから付き合って…。

「ま、あいつの場合、女の友達もいないようだし、友達になった時点でもう、特別かもね」
沼田君がそんなことを言った。
「特別?」
「うん」
「特別…」
私の目は、きっととろんとした。特別ってなんていい響きなんだろうか。

「ま、頑張ろう。お互いさ」
「え?う、うん」
「じゃあ、まず、作戦ね。花火大会まではまだまだ日にちがあるんだから、まずその前に、ゴールデンウイークだよね」
「うん」
「そんときに、ダブルデートをどうにかしよう」
「うん」

ゴールデンウイークに、ダブルデート?!すごいかも。
「どこ行く?」
「どこでも」
「じゃ、江の島の水族館は?あの二人、江の島でしょ?住んでるの」
「うん」

「どうにか、誘ってみよう」
「うん!」

なんだか、ダブルデート、できそうな気がしてきた。ああ、なんだか、ちょっと、いやかなりテンションがあがってきちゃったよ。

家に帰り、早速麻衣に電話で話した。
「ええ?あいつ、美枝ぽんのことが好きだったの?」
「うん」
「へ〜〜〜。そこは気付けなかったわ」
「1年の時からみたいだよ」
「へ〜〜〜〜」

「それでね、ダブルデートをどうにか、実現しようって話になって」
「なんだ。そうか。沼っち、4人でダブルデートって喜んでたけど、あれ、美枝ぽんが一緒だからだったんだ」
「うん」

「そうか。よし!私もひと肌脱ごう。まず、美枝ぽんは穂乃香が司っちを好きで、その辺は協力したいと思ってるみたいだから、2人をくっつけるために、沼っちも協力することになって、だから4人でダブルデートになるよう、話をうまく合わせてって言ったら、きっと合わせてくれるし、ダブルデートもしちゃうと思うよ」
「そんな簡単にうまくいくかな」

「いくって。いかぬなら、いかせてみよう、ホトトギスだよ」
「麻衣。男らしい〜〜〜」
美枝ぽんじゃないけど、惚れたよ、麻衣。

翌日、もう藤堂君と沼田君は席にいた。
「おはよう」
声をかけると、
「穂乃ぴょん、そうだ。江の島の水族館に行きたいって言ってたじ

ゃん？あれ、４人で行かない？ね？司っち」
と突然そう言いだした。

え？いきなりすぎるでしょ？
「司っちって、江の島に住んでるじゃん？ゴールデンウィーク、俺らのこと案内してよ」
「ゴールデンウイーク？」
「そう、俺と穂乃ぴょんと美枝ぽん」
「俺、ずっと部活だよ。だから無理だな。３人で行ったら？」
「…」

ガガガ～～ン。
「それより、どうだった？パスタ、うまかった？」
「ああ、今度はお前も行けよな」
沼田君の声のトーンは低かった。そりゃそうだよね。作戦失敗だもん。

私も肩をがっくりと落として席に着いた。
「どうしたの？」
美枝ぽんが聞いてきた。
「作戦失敗した」
「作戦？」

「あのね、やっぱり沼田君は私が誰を好きか、知ってたよ」
「あ、やっぱり？」
「それで、協力してくれるってさ」
「そっか。すごいね。また協力者ができちゃったね」
「うん。でもね、ゴールデンウイーク沼っちが、藤堂君に江の島の水族館みんなで行こうって誘ってみたら、ずっと部活って言われちゃったの」

「でも、穂乃ぴょんも部活でしょ？」
「うちの部は、自主性に任せてるからどっちでも」
「じゃ、部活に来たら？毎日会えるじゃん」
そっか。
「で、ポカリとか、差し入れするとかさ」
そっか。いつでも見学来ていいって言ってたもんね！

ああ、どうにかまた、光が見えてきた。
「ありがとう、美枝ぽん」
「どういたしまして」
「あ、美枝ぽん、部活は？」
「ないよ。うちの部は」

「…そうなんだ」
なんだ。ごめん、沼田君、美枝ぽんとの協力は無理そうだ。
「だから、ゴールデンウイーク暇なんだ。誰か、暇人いない？映画とか付き合ってくれたらいいのに」
「いる」
「え？」
「沼田君、暇してるから。ほら、私の協力できなくなったし」

「映画観るっけ？」
「観る。マトリックスも好きだって」
「え？まじで～？ＳＦ好きなんだ。じゃ、誘ってみようかな」
やった！私は心の中でガッツポーズをした。

昼休みに、私と美枝ぽんが食堂で食べていると、そこに沼田君と藤堂君が来た。
「お、穂乃ぴょん、ここ空いてる？」

「空いてるよ」
「司っち、空いてるって」
そう言うと、美枝ぽんの隣に沼田君は座り、私の横に藤堂君を座らせた。

そうか。いつも、穂乃ぴょんって声をかけてきたけど、本当は美枝ぽんって声をかけたかったに違いない。それも、ちょっと恥ずかしかったのかも。でも、美枝ぽんの隣に座ったっていうのは、かなり勇気を出した、とか？

「ゴールデンウィーク、沼っち暇してる？」
突然、美枝ぽんが聞いた。
「え？俺？うん、してる、してる。俺、帰宅部だし、こいつずっと、部活出るって言うし」
沼田君はにこにこしながら、美枝ぽんに答えた。
「穂乃ぴょんもなの。部活出るんだって。私暇だから、映画でも観に行かない？」
「俺と？」

あ、沼田君、声裏返った。
「ＳＦ観る？沼っち」
「あ、大好き、俺」
「じゃ、観に行こうよ」
「お、おお。暇だしな、観に行こうかな」
そんなこと言って、本当は今、嬉しくて心で、泣いてるくせに。

そんなことを思いながら、私は顔がにやけないよう、下を向いて黙々とお弁当を食べた。
「部活、毎日出るの？」
藤堂君が聞いてきた。

「え？うん」
「じゃ、ちょうどいいかな。部長に聞いたらモデルやってもいいってさ」

「き、聞いてくれたの？」
っていうか、聞いてくれちゃったか。やっぱり。
「ただ、今度の試合で部長、引退なんだ。だから、それからは次の部長をモデルにしてって言われた」
もしかして、次の部長って、藤堂君？

「知ってる？川野辺ってやつ。あいつも上手だから、モデルにいいと思うよ」
川野辺？し、知らないよ～～。
ガク…。
「藤堂君。じゃ、私、ビデオ撮るよ」
「え？」

「そうしたら、引退してもいつでも、見れるし。美術室でも見ながら描けるし」
「あ、そうか、そうだね。そんな手もあったね」
「いいのかな、ビデオ撮っても」
「うん。あ、一応部長に聞いてみるよ」
「ありがとう」

「じゃ、ゴールデンウィークに撮りに来る？」
「うん、そうする」
藤堂君は物静かにそう言うと、ご飯を食べだした。そして食べ終わったころ、奥のほうから弓道部の部員がやってきた。

「あ、いたいた、藤堂。ここで食べてたんだ」

「うん。わりい、もしかして探してた？」
「そういうわけじゃないけどさ。あ、どうも、結城さん」
「え？はい」

「また見学来るの？」
「え？はい。ゴールデンウィークにでも、行こうかなって思ってます」
「そっか～～。そうなんだ～～」
「じゃ、待ってるよ、結城さん」
そう部員たちは言うと、藤堂君の肩をぽんぽんとたたき、行ってしまった。

「なんか、穂乃ぴょん、気に入られてるの？」
美枝ぽんが聞いた。
「え？私が？まさか」
「見学来ると、みんな、張り切るんだよ」
藤堂君がそう言って、席を立った。

「じゃ、俺、先に行ってる」
「え？司っち、待てよ」
後ろから沼田君もあとを追いかけた。
「やっぱり、どこかあっさりとしてるよね」
美枝ぽんがそう言った。

「え？あっさり？」
「藤堂君だよ。なんだか、いつも何を考えてるかわからないし。ポーカーフェイスだよね？」
「う、うん」
「ちょっと私は苦手。クールでも、聖先輩は、男友達とげらげら笑ってて。ああいうほうがいいかな」

「そういえば、美枝ぽんって、中学も聖先輩と一緒でしょ？」
「そうなんだ。でも、あの時はそんなに好きじゃなかったよ」
「え？そうなの？」
「女子にクールになってからの聖先輩が好きなの」
「じゃ、高校来てから？」
「そう。たまたまね、聖先輩と同じ高校になったけど、高校入ってから聖先輩を見て、惚れちゃったわけ」

「中学でもモテてたでしょ？」
「モテてたよ。でもさ、その頃は女子に冷たくなかったんだよね」
「彼女できて変わったのかな」
「さあね」
「…」

「だけど、彼女にはすごい笑顔で接してた」
「見たの？彼女」
「うん。かわいかった。なんだか、聖先輩、彼女のことは大事にしてるって感じだったな」
「ふうん」
「羨ましかったな」

「聖先輩にそう思われたいの？」
「…聖先輩じゃなくって、好きな人からそう思われてみたい」
「なるほど、今は、藤堂君にか」
「…は～～～。無理だよね。友達にもなれないのに」

「頑張るんじゃないの？」
「え、そう。ん、そうだった」
また後ろ向きになるところだった。

「よし、まずは、ゴールデンウィークだよね！」
私がそう言うと、美枝ぽんが、
「その意気、その意気」
とにこっと微笑んで言ってくれた。

第１０話　次の相手？

ゴールデンウィークに突入した。柏木君はそれまで部に出てこなかったが、ゴールデンウィーク初日、ひょっこりと現れた。
「おはよ。結城さん」
「おはよう」

「あれ？絵、はかどってるじゃん。意欲出てきたんだ」
「うん」
私の絵を見て、しばらく柏木君はその場に佇んだ。
「柏木君は？衝動に駆られたものあった？」
「…ない」

なかったんだ。
「じゃ、なんで部活に来たの？ゴールデンウィークは出なくてもよかったのに」
「う～～ん、結城さんに会いにかな」
「え？」
「今日、一緒に帰らない？何時ごろまで頑張るの？」
「…昼まで。それでお昼食べたら、弓道部の見学に行くから」

「なんで？」
柏木君はとうとう、そのへんの空いてる椅子を私の横に持ってきて、座ってしまった。
「弓道の絵を描こうと思って」
「でもこれ、どう見ても風景画だよね？」
「ううん。木と人物のコラボレーション？」
「…ふうん」

柏木君はしばらく黙ってしまった。
「で、誰がモデル？」
「部長」
「モデルになってくれるって？」
「うん」
「ふうん」

本当はビデオに藤堂君もおさめてくるつもり。そして、藤堂君を描こうと思ってる。
「そっか～。イメージわいちゃったのか～～。いいな」
「え？」
「俺、なんにも浮かばないんだよね」
「中学の時はどうしてたの？」

「いろいろと家族で旅に行ったりして、その風景を描いてたかな」
「じゃ、今回もゴールデンウィーク、旅行にでも行ってきたら？」
「…そうする予定だったけど、母親が入院しちゃってさ」
「え？」
「あ、安心して。たいした病気じゃないんだ。すぐに退院してくるし。ただ、旅行までは行けないよね、さすがに」

「…そうだったんだ」
「まだ結城さんもスランプだったら、誘うつもりだったんだけどね」
「え？」
「どっか、自然を満喫できるところとか」
「…旅行？！」

「え？違うよ。日帰りで…。ああ、旅行でもいいか」
よくない、よくないって。私は無言で首を横に振った。
「あはは、冗談だって。面白いよね、結城さんってさ」

「どこが？面白くないよ。逆に一緒にいても、退屈しない？」
「え～～？しないよ。面白いよ？」
「…」
私は何も返事をせず、キャンパスに向かった。
「友達でもいいけど、付き合うのもいいかもって思えるくらい、面白いけど？」
「は？！！！」
キャンパスのほうを見ていたのに、そんなことを言われ、思い切り柏木君のほうを向いた。

グギ。
「いたた。変なこと言うから、首がグギってなった」
「あははは。やっぱり面白い」
柏木君がそんな私を見て笑った。
「も、もう。からかわないでくれる？そういうのも慣れてないんだから」

「彼氏いたことある？」
「ないよ」
「やっぱり？」
何？そのやっぱりって、なんだか失礼じゃない？
「そんなイメージある。イメージ通りでよかった」

「え？」
何それ。
「好きな奴もいないとか？」
「…」

「あれ？いるの？」

「か、関係ないでしょ？」
「赤くなってる。へえ、いるんだ」
「…」
私は柏木君のことは無視して、絵を描くことにした。

「誰？」
「…」
「俺？」
「まさかっ」
また柏木君のほうを思い切り向いた。

「あはは、やっとこっちを向いた」
「…」
この人って、なんなんだ。
「ね、じゃあ誰？」
「いいでしょ、誰でも」

「言えないような相手？」
ムカ。言いたくないだけだよ。
「聖先輩」
私はそう思わず答えた。
「なんだ～～。聖先輩か」
「聖先輩だとなんなの？」

「好きな人の範囲に入らない。そんなのアイドル追っかけてるミーハーと一緒じゃん」
「なんだか、さっきからムカってくるんですけど」
「あ、いいね。怒ってる結城さんも！」
「ええ？！」
ムカムカムカ～～。

「ここで喧嘩でもしてみる？喧嘩するほど仲のいい友達になれるかな」

バカにしてるの？この人。

「絵を描きたいから、邪魔しないで」

「…そう。な～んだ。つまんないの」

柏木君はそう言うと、大きく伸びをして、美術室を出て行った。

「なんだったの、あの人」

それから、柏木君は美術室に戻ってこなかった。

私は昼になり、片づけをして美術室を出た。お弁当を持って食堂に行き、お弁当を広げていると、

「結城さんもここで、お昼？」

と購買のパンを持った藤堂君が来た。

「う、うん！」

いきなり藤堂君が現れたから、なんの心の準備もできてなくて、すごく驚いてしまった。

「一人でお昼なの？部の友達は？」

「柏木君？」

「…いや、女の子の友達」

「部には友達いないんだ」

「え？」

「やめちゃったから」

「そうなんだ」

そう藤堂君は静かに言うと、隣の席に座った。

うわ。隣りで食べるんだ。一気に緊張～～。って、そうじゃなくて、いろいろと話すチャンスじゃない。

「じゃ、その柏木ってやつは？」
「朝はいたけど、さっさと帰っちゃったみたい」
「ふうん。それは残念だったね」
「え？どうして？」
「昼までいたら、一緒に昼ごはん食べられたでしょ？」

「それはどうかなあ」
「え？」
「柏木君、友達とか言ってたけど、私は別に…」
「友達じゃないの？」
「うん。だって、あまり話したこともないし、今日だって話してて、私、からかわれてるだけのような気がしたし」

「…もしかして、交際を申し込まれたとか？」
「え？！」
なな、なんだ？その質問は。
「それで、友達としてなら、みたいな話になったの？」

「ち、違うよ～～～！そうじゃなくて、ただ単に、スランプ同士、話でもしようってくらいの、そんな軽い感じで」
「ああ、そうなんだ」
ドキドキ。もう、いきなり何を言ってくるんだ。第一、交際を申し込まれたんだったら、即断ってるよ。私は。

「そんな軽い感じだったら、友達になるんだね」
え？！
「俺、重たかったよね」
え？！
「ち、違うの。柏木君だって、男の人が苦手だからあまり話せないって言ったの」

「そうしたら？」
藤堂君が私のほうを見て、聞いてきた。うわ。目が合うだけでも、ドキドキする。
「そ、そうしたら、男子が苦手だっていうのも、克服するためにも友達になろうって、うまいこと言っちゃって…。その…」

「…苦手なの、克服したかったの？結城さん」
「え？別に」
私は黙り込んで、下を向いた。藤堂君は私をしばらく見ていたけど、パンの袋を開けて食べだした。
「…だけど、麻衣とか羨ましいとは思ってたかな」
「え？」
私が突然話し出したからか、藤堂君はちょっとびっくりしてる。
「誰とでも話せるのって、いいなって。私は女子ならそんなに構えないんだけど、どうしても男子とだと何を話していいかもわからなくなるし、話すこともなくって…。ちょっとそんな自分、好きじゃないって言うか」
「…男の友達、欲しかったとか？」

「ううん。そういうわけじゃ」
あれ、待てよ。今、そうなの。友達欲しいから、友達になってって言う絶好のチャンス？
「…俺も、女子苦手だよ。なんの話をしていいか、わかんないからあまり話さない」
「そ、そうなの？」

「…でも、いいんじゃないかな」
「え？」

「別にそれでも」
「……」
そう言われたら、もう友達になってって言えなくなっちゃうよ。
「…沼田みたいに、誰とでも仲良くなれるやつっているじゃん？」
「え？うん」
「結城さん、沼田となら話せるみたいだし、いつの間にか仲良くなって、友達になっていくんじゃないかな」
「…ぬ、沼田君とってこと？」

「うん」
ガクリ。沼田君と友達になりたいわけでもないし、仲良しになりたいわけでもないの。私は、藤堂君と友達になりたいだけで。
「で、でもね、もし、この人と友達になりたいって人がいるとしたら、どうしたらいいのかな」
そんなことを私は言っていた。言ってから、あ、変なこと聞いちゃったって後悔した。

「それ、聖先輩？」
「え？違うよ。聖先輩は雲の上の人だし。そんなの望んでないし」
「…じゃ、他にそういうやつがいるってこと？」
「…」
し、失敗だ。やっぱり変なことを聞いた。

「い、今のはたとえ話で、特に誰がってことじゃ…」
私はしどろもどろになった。
「…それ、友達になりたいんじゃなくて、付き合いたいってこと？」
「だ、だから！たとえ話だってば」
う、思わず声がでかくなってる、私。絶対に不自然だよね。

「…さあ。俺にもわかんない。なにしろ、わかんないから悩んで、で、失敗した実績もあるし」
「え？」
「……」
藤堂君は黙って、パンを食べだした。
えっと。今の私のこと、かな。

パンを食べ終わると藤堂君は、コーヒー牛乳をごくごくと飲み、そして、
「失敗した俺が言っても、説得力ないかもしれないけど、でも、あとで思ったんだ」
と静かに話し出した。
「え？」
「いきなり知らないやつに声をかけられても、そりゃ困るだけだろうなって」

やっぱり、私のこと？
「だから、自然と話せたり、だんだんと自分のことを知ってもらっていったほうが良かったんだろうなって」
「…自然、と？」
「うん。次はそうしようって思ったよ」

次？次ってもしかして、好きな子できたの？！
「だから、もし友達になりたいって思うやつがいるなら、話しかけてみたりしたらどうかな」
「…」
「ちょっと勇気いるけどね」
「…」

だ、駄目だ。気になる。次って何？次って…。

「と、藤堂君、あの…」
駄目だ。次の人が現れたの？とはさすがに聞けない。
私が黙ると藤堂君はしばらく黙って、私の話すのを待っている。
「これから、見学しに行ってもいい？」
私は次の誰かのことを聞けず、そんなことを聞いていた。

「いいよ、部長もいいって言ってた。ビデオで撮るんでしょ？」
「うん」
「じゃ、俺も着替えとかあるし、行くね」
「うん」

藤堂君は静かに席を立ち、そのまま食堂を出て行った。
次って…。私の頭はその言葉をずっと、繰り返していた。

第11話　ショックな出来事

しばらく食堂でぼ〜〜ってしてから、弓道部に行った。
「あ、結城さん、見学？」
部長がすぐに気が付き聞いてきた。
「はい。ビデオも撮りたいんですけど」
「ああ、どうぞどうぞ」
部長はにこやかにそう言ってくれた。

私は荷物をはじっこに置き、ビデオカメラだけ持って、道場の後ろのほうに座らせてもらった。
「ビデオで撮るの？わ、緊張する」
そう突然話しかけてきた人がいた。
「め、迷惑ですか？なるべくおとなしくしていますけど…」
そう言うと、その人は私をしばらく眺め、
「ふうん、やっぱりね」
と変なことを言った。

「や、やっぱり？」
「あ、こっちの話。あ、そうだ。今の部長が引退したら、僕が部長になるんです。川野辺です。よろしく」
あ、この人が川野辺君？
「で、部長の引退後、僕がモデルになるようなこと聞いてると思うんですけど」

「はい」
「それ、藤堂じゃダメかな〜〜」
「え？！」
声が裏返った。

「僕が部長になるのは、弓道がうまいからじゃなくて、ただ単に中学時代、部長の経験があるだけなんだよね」

「部長の？」

「うん。あ、剣道部だったんだけどさ」

「…」

「今の部長は、弓道の腕前もすごいんだけどね。でも、僕の学年でいったら確実に藤堂がナンバー1だよ」

「そ、そうなんですか？」

「ってことで、今日は部長と藤堂のことをビデオに撮っていってくれる？」

「はい」

私は小さくうなづいた。実は、言われる前から藤堂君をビデオにおさめようと思っていたし。だけど、藤堂君だけとなると、周りのみんなが変に思うから、こうなったら部員全員を映して帰ろうと思っていたんだよね。

「あ、よかった。これで僕は緊張しなくてすむな」

川野辺君はそう言うと、笑いながらその場を去って行った。

私は藤堂君を見た。藤堂君はこっちも気にせず、集中をしているようだ。

凛々しいな。藤堂君って、なんであんなに凛としているんだろう。

他の部員も凛々しいとは思うけど、藤堂君のかもしだす静かな空気は格別だと思う。

はあ。思わずため息が漏れる。

それから、部長と藤堂君が矢を射る姿をビデオにおさめ、私は道場をあとにした。

その日から毎日、部活の後は道場に行った。お昼ご飯を藤堂君と食べれらたのは1日だけで、翌日からは弓道部のみんなも食堂に来ていたから、私は一緒に食べられなかった。
「結城さんも一緒にこっちで食べたら？」
一回、部長にそう誘われたが、
「い、いえ、いいです」
と断った。

それにしても、見学に行っているからなのか、よく弓道部の部員は私に声をかけてくる。
「結城さん、おはよう。今日も見学来るの？」
とか、
「モデル、部長と藤堂なんでしょ？かっこよく描いてやって」
とか、
「ゴールデンウィークもずっと部活？熱心だね」
とか。

弓道部には女子がいない。前はいたらしいけど、今はいないらしい。今度の新入部員も男子ばかりだ。見学には女子も来たらしいけど、色めきだっている女子だと、場が乱れるって顧問の先生が入部を断っちゃうらしい。

「結城さんみたいな人なら、うちの顧問もＯＫかも。ね、弓道部はいらない？」
ある日、見学に行ったらいきなり、川野辺君がそう言ってきた。
「川野辺、川野辺」
他の部員が川野辺君を呼び、こそこそと何か話している。

「ま、今のは冗談だけどね」
と川野辺君が、そのあと私にわざわざそんなことを言ってきた。

「あ、はい、わかってます」
そう言うと、川野辺君は、他の部員に悪かったってと謝りながら、道場の奥へと行ってしまった。

？私を誘ったから、怒られたのかな。
もしかして、私、実は歓迎されていないとか？
いつも、みんなして、声をかけてくれたから、歓迎してもらってると思ってたんだけどな。

「あの…」
ゴールデンウィーク最終日、私は部長の所に行き、
「見学させてもらって、本当にありがとうございました」
とお礼を言った。

「え？うん。役に立てたかな？」
「はい、そ、それで」
「うん？」
「ビデオも撮れたし、これで絵もしっかりと描けると思うので、今日で見学は最後にします」
「え？」

部長が一瞬黙り込んだ。その周りにいた部員も、私をいっせいに見た。その中には藤堂君の姿はなかった。
「結城さん、もう来ないの？」
「結城さん、いつでも来ていいんだよ」
みんながいっせいに、そう言ってきた。

「え？いえ、私は」
あれ？迷惑がられていたんじゃなかったの？
「なあ、藤堂。お前モデルになったんだろ？これから腕もあがるだ

ろうし、今よりもいいとこ、見てもらいたいだろ？」
部員の一人がそう藤堂君に言った。藤堂君は、静かに片づけをしている最中だった。

「…でも、絵を描く時間があるから、そうそう見学する時間も取れないんじゃないのかな」
静かに藤堂君はみんなを見てそう言うと、また黙々と片づけを始めてしまった。
「あ、そうか。絵を描く時間、なくなっても困るもんね」
川野辺君がそう、ぼそって言った。

「じゃあ、これで私、失礼します」
「うん。でも、時間が空いたらいつでも来てくれていいから」
部長が最後にそう言ってくれた。
道場を出て、私は美術室に戻ろうとして、ビデオカメラのケースを忘れてきたことに気が付いた。
「なんだか、戻りにくいけど、もう見学行かないしな…」
私はそうつぶやきながら、道場に戻った。

「あの…」
中に入ろうとすると、道場の中がやけにさわがしく、
「いいのかよ。藤堂」
とか、
「お前、もっと声かけたり、いろいろと積極的に出たらよかったのに」
とか、そんな声が聞こえてきた。

え？
「いいんだよ。お前ら、俺に気を使い過ぎだよ」
「だってさ、俺らが葉っぱかけたから、お前ふられたじゃん？ちょ

っとは責任感じてるんだよ、俺ら」
え？
もしかして、私のこと？

「だから、もういいんだって。ふられた時点で終わってたんだから」
藤堂君が、ぶっきらぼうにそう言ってるのが聞こえた。
「でもさ、あれは俺らがまずかったって。つい調子に乗って、ダンスに誘えだの、文化祭一緒に回ろうって言ってこいだの、いろいろとお前に言ったりしたから」

「…でも、それを真に受けて行ったのは俺だし、お前らが責任感じることなんてないから」
やっぱり、私のことだ～。じゃ、なに？責任感じて部員のみんなはあんなに私に、見学に来てって誘っていたってこと？
「でも、チャンスだったろ？なんでもっと、積極的に」
川野辺君がそう言いかけた時、
「いいんだって！もう忘れたんだから。昔のことをそんなに蒸し返すようなこと言うなよ。迷惑だ」
と突然藤堂君が切れた。

私は一瞬にして頭が真っ白になった。
がくがくと足が震えたが、どうにかその場を去って、美術室に戻った。そして弓道部のみんなと会わないですむよう、さっさと帰り支度を済ませ、走りながら校舎を出た。

怒ってた。あんな藤堂君初めて見た。
私のことは何も思ってないどころか、あんなふうに言われること自体、迷惑なんだ。
もしかして、次の相手がもういるんじゃないの？
それか、私のことを知って、私のことなんか、嫌いになっちゃっ

たんじゃないの？

そのまま私は、駅まで全力疾走した。涙が出そうになるのを、必死にこらえながら。

翌日、ゴールデンウィーク明け、私は遅刻ぎりぎりの時間に教室に入った。そして静かに自分の席に着いた。

「おはよう、穂乃ぴょん。寝坊？」

「ううん」

「あれ？元気ないね。具合悪いの？」

「美枝ぽん、あとで話聞いてくれる？」

「うん、いいよ」

私は藤堂君を見ることができないでいた。そして授業中もずっと、窓の外を見ていた。ああ、今日も何て綺麗な青空なんだ。それがかえって、空しいよ。

お昼、藤堂君とは一緒になりたくなくて、そっと沼田君を廊下に呼んだ。

「ゴールデンウィーク、どうだった？」

沼田君が聞いてきた。

「ちょっと、落ち込んでる」

「え？」

「話、聞いてほしいけど、沼田君一人でお昼来れるかな」

「いいよ、藤堂は弓道部の連中と食べてもらうよ」

「うん」

私はそれだけ沼田君に言ってから、肩を落とし、美枝ぽんと食堂に向かった。

「穂乃香」

その後ろから、麻衣が声をかけてきた。

「どうだった?ゴールデンウィークって、あれ?顔沈んでるね」

「うん。落ちてる」

「お昼私も一緒に食べるよ」

麻衣も一緒に食堂についてきてくれた。

「は〜〜〜〜〜〜〜〜」

重いため息をつきながら、私は食堂に入った。そして、藤堂君とは顔を合わせたくなくて、食堂の隅の席に座った。たいてい、中庭が見えるあたりの席に、弓道部のみんなは座っている。この席なら、だいぶ離れているから、藤堂君に見られることもないし、話しを聞かれることもない。

「見学に行って、いったん道場を出て忘れ物に気が付いて、また戻ったんだ」

「うん」

私はそこで藤堂君が何を言ったか、それを美枝ぽんと麻衣に話した。

「え?じゃ、藤堂君をふったのって、穂乃ぴょんなの?」

美枝ぽんに驚かれた。

「うん…」

「そうだったの〜〜!」

相当な驚きようだ。

「だけど、藤堂君の中じゃもう、終わってるんだよね」

私が暗くそう言うと、美枝ぽんも暗い顔をして、

「そうだったんだ」

とぽつりと言った。

「お！こんな隅にいるから、わかんなかったよ」
そこに沼田君が来た。
「沼っち、司っちは？」
「もう弓道部の連中のところに、行ってるんじゃないかな」
「そっか」

麻衣が小声で聞いたからか、沼田君も声を潜めていた。
「で、なんで落ち込んでるの？ゴールデンウィーク、頑張るんじゃなかったの？穂乃ぴょん」
さっそく沼田君はそう切り出してきた。
「見学、毎日行ってたよ。最初の日なんて、一緒にお昼も食べれたし」
「進展したってこと？」

「…ううん。まったく」
「なんだよ、それ～」
「だって…」
私はしばらく黙り込んだ。

「なんだ、もうこのへんしか空いてないよ、聖」
「ああ、いいよ。そこで」
え？うわ。聖先輩だ。隣りのテーブルに来ちゃった。
「あち～。はしゃいで走り回るんじゃなかった」
「ほんと、聖も基樹も、あほだよな」

「葉一、あほって言うな！」
あ、聖先輩が友達のこと、こついてる…。それからあははははって、すんごい爽やかに笑ってる。
こんな近くで見れちゃった。…でも、私の心はブルーのままだ。

「はあ」
「重いため息だな」
沼田君に言われた。
「そうだった。まだ美枝ぴょんと麻衣にも話してなかったっけ。お昼を一緒に食べた時、藤堂君から言われたんだ」
私は藤堂君との会話を、3人に話し出した。
「藤堂君に友達になろうって言えなかった。でも、友達になりたいって思ってる人がいるとしたら、どうしたらいい？って聞いちゃったの」
「回りくどい言い方したんだな」
グサ。もう沼田君たまに、傷つくこと言う…。
「沼っち、黙って聞いてな」
麻衣がそう言ってくれた。ナイスフォローだ。いつもながら。
「それで？」
美枝ぽんが聞いてきた。
「どうしたらいいか、俺もわからないって言ってた。なにしろ、友達になろうとして、失敗した実績もあるしって…」
「コクった相手にふられたってことか。なに、あいつ、友達になってくださいなんて回りくどいこと言ったのか？」
「だから、沼っち、しばらく黙ってな！」
もう一回麻衣が沼田君に、そう言って黙らせた。
「お口チャックだよ、沼っち」
美枝ぽんにまでそう言われ、沼田君は黙り込んだ。
「でも、自然と話せるようになっていったら、自然と友達になれるんだよなって…。だから、次はそうしようって思ってるって言われた」

「へえ…」

沼田君が何かを言おうとしたけど、麻衣と美枝ぽんに睨まれ、黙り込んだ。

「…それって、もしかして、好きな人が今いるってことなのかなって、そう思っちゃって…」

「え？なんで？」

美枝ぽんが聞いてきた。

「だって、次はそうしようだなんて、次の相手がいるから思うことじゃないのかな」

「それはわからないじゃない。ただ単に、次はそうしようって思っただけかもよ」

麻衣がそう言った。

「そ、そうかな。次がもういるんじゃないかな」

「ああ！暗いな、穂乃ぴょん！なんでもっと、前向きに考えられないんだよ！」

黙っていた沼田君が、しびれを切らしたのか口を開いた。

「次の相手ってもしかして、私のことかしら、くらいに思っていたらいいだろ？」

「…私じゃないよ」

「なんで？そんなのわかんないじゃん」

「わかるよ」

「なんでだよ？！」

「だって、ふったのって私だから！」

沼田君が大きな声になったから、私までムキになってしまった。

「え、え～～～？！」

沼田君がものすごい大きな声で、驚いた。その声で一瞬、ざわつ

いてた食堂が静まり返った。

「し〜〜。声でかいって」

麻衣が沼田君の口をふさいでそう言った。

周りにいるみんながいっせいにこっちを向いたが、私たちが静かになったからか、またみんな思い思いに話を始めた。

「沼っちのあほ。せっかく司っちの席から離れたところに座ったのに、あんな大声出したら、ここにいるのばれちゃうじゃん」

麻衣がそう言った。

「え？なんでばれたら駄目なの？」

「駄目じゃないけど、話は聞かれたら困るでしょ？」

「話までは聞かれないって。こんな離れてるんだから」

麻衣の言葉に、沼田君はしれっとした顔でそう答えた。そして、私のほうをおもむろに向き、

「それってさ、簡単なことだろ？穂乃ぴょんが司っちに、好きになりました。付き合うのＯＫですって言えば済むことじゃないの？」

と、これまたしれっとした顔で言ってきた。

「は〜〜〜〜？」

麻衣と美枝ぽんが同時に呆れた顔をして、沼田君の顔を見た。

「え？なんで？簡単なことだろ？」

「話聞いてた？沼っち」

美枝ぽんが聞いた。

「司っちはね、もうなんとも思ってないって、そう弓道部の連中にも言ってたんだってよ」

「え？穂乃ぴょんの前でそんなこと言ったの？あいつ」

「ううん。私がいない時、っていうか、私偶然聞いちゃったの」

「…盗み聞き？」
「うん」

「なんとも思ってないって？いきなり言ってたわけ？」
「弓道部のみんな、私にやたら見学に来てって言ってたの、藤堂君のためだったみたいで」
「なるほど。弓道部のやつらは、司っちが穂乃ぴょんにふられたの知ってたのか」
「知ってるも何も、コクって来いってはっぱかけたの、あいつらみたいだよ」
麻衣がそう言った。

「それで、ふられちゃったから、自分らにも責任があるって思って、いろいろと協力しようとしてたみたいで」
「なるほどね。で、もしかして司っち、もうなんとも思ってないから、そういうことするな、みたいなことを言ったとか？」
「大当たり。すごいね、司っちのことわかってるじゃん」
麻衣がなぜか、沼田君を褒めた。

「迷惑だとまで、言ってたって」
美枝ぽんがそう、小さな声で付け加えた。
「あれま…」
沼田君は一瞬、同情するような目で私を見た。

「もう駄目だよね。友達にもなれないよ」
私が重くそう言うと、沼田君は私のほうに顔を近づけ、
「だから、なんでそう後ろ向きなわけ？頑張るんじゃなかったのかよ」
とちょっとキレ気味に言った。

「頑張るも何も、迷惑だって言ってたんだよ?」
「それは、弓道部の連中にたいしてだろ?」
「私のことも、そう思ってるかもしれないじゃない」
「はあ?そう言われたのかよ」
「い、言われてないけど」

「じゃ、なんでそんなこと思うわけ?」
「だって、なんにももう思ってないって」
「だったら、また好きになってもらえるよう、努力したらいいだろ?なんにもしないで、なんでそんな暗くなってるんだよ!」

「声でかいって、沼っち」
美枝ぽんが、沼田君の腕をつかんでそう言った。でも、沼田君はその手をふりほどいて、
「穂乃ぴょん、そんなだから駄目なんだよ。好かれたくないの?もし好かれたいなら、それなりの努力しろよ!自分を変えようとしてみろよ!」
と、さらに大きな声でそう言った。

その声で、周りの人がまた私たちを見た。でも、私はそんなことよりも、なんだか、沼田君に腹が立ってきていて、
「どうせ、私は根暗だよ!そんなのわかってるよ!変えたくたって、変わらないこともわかってるよ!」
とさけびながら、思い切り立ち上がった。と、その拍子に、テーブルが思い切り斜めになり、テーブルの隅に置いてあった沼田君の水が、隣のテーブル席まですっとんで行ってしまった。

ビシャ!
「うわ!つめて!」
…。うそ!聖先輩にかかった?

うわ。最悪～～～～。

もう、沼田君にはひどいこと言われるし、聖先輩に水、ひっかけちゃうし、藤堂君とは友達にもなれないし、なんでこうも最悪なことが続いていくわけ？

第12話　そのままで

「す、すみません」
私が青い顔をして、聖先輩のほうに行くと、沼田君も顔を青ざめ、
「すみません、先輩」
と謝りに駆け寄った。

「ああ、いい、いい。今日天気いいし、すぐに乾くって」
でも、右側の肩も、膝のあたりも、思い切りぬれちゃってるよ？
「すみません、タオル、タオル」
私があわてていると、
「いいって。ほんと、大丈夫だから」
と、聖先輩が笑ってそう言った。

うわわ。笑った。すごく爽やかに…。
「それより、君のほうがタオル、必要なんじゃないの？」
「え？」
「ほっぺた…」
そう言われ、頬を触ると、涙でぬれていた。あ、あれ？いつの間に私、泣いてたんだろう。興奮してたからか、気が付かなかった。

私の顔を沼田君も覗き込み、ちょっと眉をしかめた。
「…大丈夫？」
聖先輩が聞いてきた。
「は、はい」
うわ。話しかけてるよ、私に…。ああ、でも、隣のテーブルだったんだし、さっきの私たちの会話、思い切り聞いてたよね。恥ずかしい。

「先輩はどう思いますか？」
いきなり沼田君が、聖先輩にそう質問した。うわ。ちょっと。何を聞きだすの？
「何が？」
聖先輩もきょとんとして、沼田君の顔を見た。

「今の話、聞こえてましたよね。どう思いますか？変わろうとしても変わらないだなんて、そんなの言い訳でしかないですよね」
「…自分に自信ないの？」
聖先輩が私に聞いてきた。

「は、はい」
私は小さくうなづいた。
「自分がもしかして、嫌いとか？」
私は黙ってうなづいた。
「変わりたいの？」
私はまた、うなづいた。

「でも、変われなくって」
「そんなのなんの努力もしてないじゃんか。努力してから言ったら？」
沼田君がぼそっとそう言った。
「…」
う…。今の言葉でまた、涙が出そうになった。

「ふうん…」
聖先輩は私のほうにちょこっとだけ近づいた。そして、少し声を潜め、
「似てるね、君。俺の彼女に」
と優しく言った。

「え？わ、私のどこが？聖先輩の彼女のほうが、小さくて、かわいくって、女の子らしくって羨ましいくらいで」
と、あわててそう言うと、
「…だから、そういうところ？」
と、聖先輩が優しく言った。

「え？」
「名前は？」
「私ですか？結城です」
「結城さん？俺の彼女もきっと、結城さん見て、羨ましいって言うよ」
「な、な、なんで？」

「そうだな。髪がストレートで綺麗で羨ましいとか、背が高くてすらっとしてて、羨ましいとか？」
「え？」
「背が小さいのも、くせっ毛も、コンプレックスなんだってさ」
「…かわいいのに？」
「でしょ？そこがかわいいのにね」

「…」
うわ。今、思い切りのろけた？ちょっと顔、にやついたし。
「だけど、いつも自信が持てないらしくって、俺の彼女だっていう自覚もなかなか持てないらしい」
「え？」
そうなの？

「そんで、結城さんみたいに、かなり後ろ向き…」
「聖先輩の彼女が？」

その話を黙って聞いてた沼田君が、口をはさんだ。
「そ。よく落ち込んでるしね」
「そういうところ、なおしてほしいって思いますよね？」
沼田君が聞いた。

「え？俺が？」
「はい」
「別に？」
「え？なんでですか？もっと前向きに、明るくなってほしくないですか？」

「…うん」
「え？どうでもいいんですか？」
「いや…。っていうかさ、なんで変えようとするの？変える必要ないでしょ？」
「は？」
沼田君は聖先輩のことを、目を丸くして見た。私も聖先輩が何を言いたいのかわからず、じっと見てしまった。

「俺、コンプレックス持っていようがなんだろうが、それでも、彼女のこと好きだけど？」
「は？」
沼田君は目を点にした。
「かわいいじゃん、そんなところも」
「へ？」

今度は私も目を点にしてしまった。
「結城さんだっけ？結城さんも努力して自分を変える必要なんてないよ」
「え？」

「そのまんまの結城さんを、好きになってくれる人、きっと現れるから。だから、素のままでいたらいいんじゃないの？」
「…」
ボロ。あ、涙がこぼれた。私は慌てて涙をふいた。
「その、結城さんが好きになった人が、もしそのままの結城さんのことを好きになってくれないんなら、結城さんの良さをわかってくれなかった、ってだけだよ。どんな結城さんでも好きだって言ってくれるやつ、きっと現れるからさ」
「…あ、ありがとうございます」
私が涙をふきながらそう言うと、聖先輩の横で会話を聞いてた、聖先輩の友達が私に向かって話しかけてきた。
「あのね、こいつ、別に君のこと慰めてるわけじゃなくって、本当にそう思ったことを言ってるだけだからさ」
「え？」
「な？本気でそう思ってるもんな？聖。まじでこいつ、どんな桃子ちゃんでも好きなんだよ。こっちがまいるくらいにもう、メロメロで」
「うっさいよ、基樹！そこまでばらすな！」
「なんだよ。本当のことじゃん。なあ？葉一」
「そうだな。俺もそういえば、桃子ちゃんにもっと努力したらみたいなこと言ったら、聖に怒られたっけ」
「え？そうなんですか？」
沼田君が聞いた。
「そう。こいつ、桃子ちゃんは今のままでいいんだよ。そのまんまの桃子ちゃんが好きなんだからみたいなことを、言ってた気がする」
「葉一。だから、そういうことばらすなって」

聖先輩の顔が赤い。今、照れてるんだ。
「ま、そういうことだから。結城さんだっけ?大丈夫だよ。そんなに落ち込まなくてもさ」
聖先輩は、頭をぼりって掻いてそう言った。
「はい」

「…君、あれだよね」
いきなり聖先輩が私をじっと見て、
「似てるよね。うん、似てる」
と言い出した。
彼女に?

「耳が長く垂れてて、毛先が長い、すうってした犬、何て名前だっけ?葉一知ってる?」
「知らない。それより、人つかまえて、犬に似てるって言うの、やめたら?確か桃子ちゃんは、ポメラニアンだっけ?」
「え?いいじゃん、かわいいんだから。それよりあの犬、なんていったっけ?足もスラって長くて」

「いいから、食い終わったんだろ?聖、その濡れたシャツ乾かしに、ちょっくら外でひなたぼっこしようぜ」
そう言うと、聖先輩の友達は食堂を出て行った。そのあとを聖先輩も続きながら、
「なんて名前だっけな~~?あの犬」
とぶつぶつ言いながら行ってしまった。

「……」
私たちは、また席に座った。そしてしばらく誰も、話をしなかった。
「なんか、いいね、やっぱり」

ぼそってそう言ったのは、美枝ぽんだ。

「何が？」

麻衣が聞いた。

「聖先輩だよ。私、そばにいったら、聖先輩のアラとか見えちゃって、がっかりするだろうなって思ってたんだ。でも、違った面が見えて、もっと好きになったかも」

そう美枝ぽんが言うと、麻衣がうんうんって目を輝かせてうなづき、沼田君は顔を青ざめさせた。

「そのままでいいだって。先輩、いいこと言うな～。ね？穂乃ぴょん」

美枝ぽんがそう言った。

「うん」

嬉しかった。だけど、そのまんまの私って、どんな私なのかな。この後ろ向きで、思い切り根暗な私でいいってこと？

藤堂君はそんな私を好きになってくれるのだろうか。私の良さをわかってくれる人が、いるんだろうか。っていうか、私の良さってなんなんだろう。

そんなことを考えながら、午後の授業をぼ～～ってしながら受けていた。

放課後、美術室に行った。今日は、一回も藤堂君と話さなかった。本当はなんでもいいから、会話を交わしたい。でも、昨日の「迷惑だ」って言葉がひっかかっていて、顔を見ることもつらくなっていた。

「結城さん。どう？絵描けてる？」

柏木君が聞いてきた。

「うん。見学も毎日行けたし、ばっちり」
「そうなんだ。よかったね」
「柏木君は？」

「俺も描く気になってきたよ。ちょっとね、ゴールデンウィーク中に衝撃的なことがあってさ」
「え？どんな？」
「内緒」
「…」
まあ、いいけどね。

「知りたい？」
「別に」
「なんだよ、つまんねえの…」
「…」
また、ちょっとムカってきちゃった。なんなんだ、この人。

「柏木君って、友達だなんて言っていたけど、本当は私のこと」
「え？」
柏木君の顔が、いきなり変わった。さっきまでのほほんとしていたのに、一気に真剣な顔つきになった。

「私のこと、からかいたいだけなんじゃないの？」
そう私が言葉を続けたら、柏木君ははあ？って顔をしてから、すぐにいつもののほほんとした顔に戻った。

「ばれた？でも、からかっても、乗ってこないからつまんないかもな～～」
「…」
私は呆れたって顔を思い切りして、柏木君のことは無視して絵を

描くことに集中しようとした。
「聖先輩って、どこがいいの？」
「え？」

もう～～。なんでいつも、集中しようとしてるのに、邪魔をするんだろう。
「どこって、かっこいいし」
「顔？」
「だけじゃないかな。今日も違う面を見て、また好きになったかも」

「ああ、食堂で？なんか聖先輩と話してたね」
「見てたの？」
「ちらっとね。食後のアイスを食べに行った時、なんだかみんなに注目浴びてたじゃん？」
「私が？」
「うん」

うそ。周りの人たちのことなんて、どんな反応してるかを見る余裕もなかったから、知らなかった。注目浴びちゃってたの？ってことは、藤堂君も見てた？
「聖先輩に水ひっかけたの？先輩、女子のこと嫌ってるし、怒られなかった？」
「全然」
「そうなんだ」

「そういえば、柏木君、知ってるかな」
「何を？」
「耳が長く垂れてて、毛先が長くで、足がすらっと長い犬」
「アフガン・ハウンド？それが何？飼うの？」

「ううん。聖先輩が私に似てるって」
「え？」
一瞬、柏木君が黙り込んだ。そして、
「似てる。うん、すげえ似てるかも」
と笑いだした。

「そんなに似てるの？」
「聖先輩、すげえ言い当ててるよ～～」
「…」
なんだか、聖先輩に言われるのはいいけど、柏木君に言われると、ムカつく。

「アフガン！俺、これから結城さんのこと、アフガンって呼ぼうかな」
「聞かなければよかった」
「え？」
「どうせ、からかって遊ぶんだから、犬の話なんてしなかったらよかった」
私はそう言うと、席を立ち、美術室を出た。

「おい、どこに行くんだよ」
「気分転換！」
なんだか、まだムカムカしてる。ほんと、柏木君ってなんでああなんだろう。
そのまま、私は中庭のほうに出た。

中庭には綺麗な花が、いっぱい咲いている。いろんな色が混ざり合い、本当に綺麗だった。
「花…か～～」
私は花にたとえたら何かな。いや、もしかして花じゃなくて、葉

っぱだったりして？
聖先輩、花にたとえたら私はなんでしょうか。って聞いてみたいな。犬にたとえられるより嬉しいよ。いや、葉っぱか、幹に似てるって言われたら、落ち込むから聞かないほうがいいか。

彼女はポメラニアン？ああ、やっぱり。めちゃくちゃ可愛い犬じゃないの。それなのに、私はアフガンなんたらって、そんな犬？
「は～～～～～」
やっぱり、ため息が出る。

藤堂君が弓道してる姿、見たいな。でも、もう見学に行くのもつらいかも。弓道部の人に会うのすら、気が引ける。
はあ。こういうところがきっと、沼田君の言う、後ろ向きな性格なんだよね。でもさ、しょうがないじゃない。こんな性格に生まれついちゃってるんだから。

友達になるために、頑張ろうって作戦練ってたのは、ついこの前のことなのにね。沼田君も協力してくれるって言ってたのに、やっぱり、悪かったかな。
「は～～～」

「絵、描けないの？」
ドキ！この声？
私は後ろを振り返った。あ、やっぱり、藤堂君！
「藤堂君、部活は？」
「これから行くよ」

だけど、なんでここにいるの？道場に行く通り道でもないし。
「用事があったの？中庭に来るなんて、そうそうないよね？」
あ、今の、また変な言い方したかな。

「ああ。うん。職員室から見えるじゃん、ここって」
「え？」

「化学の先生に呼ばれてたんだ。レポートの駄目だしくらってた。書き直せってさ。で、職員室の窓から結城さんが見えたから」
「…」
「なんだか、落ち込んでいる感じだったから、絵、描けないのかなって思って」
私のことを気にかけてくれたの？

ドキン。うわ。いきなりまた鼓動が…！
「見学しても、駄目だった？」
「え？」
「あ、もしかして俺だからかな。モデル…」
「え？！」

「川野辺のほうが描きやすかった？だったらまた、ビデオ撮りにきても」
「違う。そういうことじゃなくって」
「…」
「それに、もう見学には行かないよ」
「…なんで？いいよ、いつでも来てくれて。部長もいいって言ってたじゃん」

「…でも、練習の邪魔になるでしょ？」
「ならないよ」
「ううん。それに、それに…」
ドキン。こんなこと言ってもいい？でも…。
「藤堂君、迷惑でしょ？私が見学しに行ったら」

「…俺？」
「うん」
「ううん、そんなことはないけど…。あ、そうだ。思い出した。今日全然話もできなかったから、言えなかったけど、結城さん、カメラのケース忘れていったでしょ？あれ、ちゃんととってあるから、今度取りに来てよ」
「…」
「結城さん？」
「今日、部活終わったら取りに行く」
「うん。待ってるよ」
え？
藤堂君はそのまま、静かに歩いて行ってしまった。
今、待ってるって言った？もしかして、藤堂君、私が忘れ物取りに行くまで、待ってるってこと？
私は部員がみんないなくなった頃、そっと取りに行こうと思ってたのにな。
「は～～」
そんなことを思ってる自分も、なんて暗いんだって思ってしまい、またため息が出た。
こんな私でもいいのかな。聖先輩。
綺麗な花を見ながら、私は聖先輩の「変える必要なんてない」って言葉を思い出していた。

第13話　魅了された

部室に戻り、絵を描きだした。ちらっと柏木君を見たら、なんだかものすごく集中していて、そこだけ空気が違っても見えた。
ゴールデンウィーク、衝撃的なことがあったって言ってたっけ。なんだったのかな。

5時半を回り、そろそろ忘れ物でも取りに行こうかと思い、片づけを始めた。柏木君はまだ描いている。美術部は一応5時までだけど、美術室が7時まで開いてるので、その時間までは居残って絵を描いてもいいことになっている。
「お先に失礼します」
小声で言って、私は美術室を出た。

5分前に弓道部の部員が通って行ったから、もう道場には藤堂君くらいしか残ってないかな。それはそれで、緊張するけど、でも他の部員がいて、また藤堂君に気を回したりしたら、かえって藤堂君が嫌な思いをするだろうし…。そう思って、わざとゆっくりと道場に向かった。

「失礼します」
そう言って中に入ると、ああ、部長が残っていた。
「藤堂！結城さん来たよ。カメラケースどこにあったっけ？」
「あ、ここです」
藤堂君が奥のほうからやってきた。

「どう？絵は描けてるの？」
部長が聞いてきた。
「はい。おかげさまで」

「そうなんだ。ま、また描けなくなったらいつでも、見学に来てよ」
「ありがとうございます」

「じゃ、藤堂、俺先に行くから、戸締りとかよろしくな」
「はい」
「じゃあね、結城さん」
「はい…」
部長は道場を出て行った。

「…あの、待っててくれたんだよね?ごめんね、遅くなって」
「え?いや、ちょうど部長とも話があったし、そんなに待ってないよ」
「…そう?」
「…」
藤堂君は黙り込んだ。

「あの…。私はこれで」
「もう部活は終わったの?」
「え?うん」
「じゃ、帰るだけ?」
「うん」

「…俺も着替えたら帰るから、5~6分待っててくれない?」
「え?!」
「昇降口のところにいてくれる?」
「う、うん」
一緒に帰れるってこと?!

う~~わ~~~。私はドキドキと嬉しいのとで、浮かれながら昇降口に行った。

待っててって言った。ドキドキ。私、嫌われてないってことかな。迷惑だったらそんなこと言わないよね。

昇降口に弓道部の人たちが来たから、さっと隠れた。今、見つかったらまたあれこれ言われるかもしれないし。あ、もう言われないかな。

「藤堂、なんか悩み事？部長とよく話してるじゃん」

一人の部員がそう言った。え？悩み？

「あれはアドバイスを受けてるんじゃなくて、これからの部のことで部長から相談されてるんだよ」

「え？どういうこと？」

「藤堂ってさ、部長になるタイプじゃないだろ？口数も少ないし、みんなを仕切っていくタイプじゃない」

「そうだな。だから、川野辺が次期部長なんだろ？な？川野辺」

「うん。でも、部長が信頼してるのは、藤堂だよ」

「え？」

「信頼っていうより、藤堂の性格をわかってるからじゃないの？縁の下の力もちって感じじゃん」

「藤堂が？」

「部長が藤堂に言ってるの、俺、ちらっと聞いたよ。川野辺のこといろいろと、サポートしてあげてくれって」

「え？」

「泣かせるよな～～。な？川野辺」

「…そっか。部長、そんなこと言ってたのか。って、やっぱ俺が頼りにならないからじゃん」

「あはは。まあ、そう言うなって。お前も藤堂がいたら安心なんじ

ゃないの？」
「まあね」
「だろう～？」

そんな会話をしながら、弓道部のみんなはその場を去って行った。
そっか。藤堂君、部長に頼られてるのか。あれ？じゃ、前に言ってたミーティングって、部長と2人でのミーティングだったとか？

「お。君、昼休み聖に水ぶっかけた…。今帰るところ？」
いきなり、後ろから声をかけられ、びっくりして振り返った。うわ。聖先輩と、そのお友達。
「す、すみませんでした。あの、服、乾きましたか？」
「うん、すぐに乾いたよ」

聖先輩がそうにこりと笑って言った。ああ、この笑顔を見れるなんて、なんてラッキーなんだ。
「結城さんだっけ？少しは元気になった？」
「はい。ありがとうございました」
「そうだ！名前分かったよ」
「え？」

「アフガン・ハウンド。柏木が教えてくれた」
「え？」
か、柏木君？！
「知り合いですか？」

「柏木？うん、よく海を見に江の島に来て、うちの店に寄って行くから」
ガ～～ン。そうなんだ。っていうか、いつ柏木君に会ったの？
「柏木君がいつ、アフガン・ハウンドのこと言ってたんですか？」

「さっき。ああ、結城さんって、美術部なんだね。美術室の前通ったら、まだあいつが描いてたから、ちょっと話してたんだ」

「…」

そうだったの？なに～～。そんな知り合いなのに、柏木君、なんにも言ってなかった。

「で、柏木も結城さんはアフガンに似てるって言ってたよ」

「……」

う。その話題はもうやめてくれないかな。なんか、落ち込む。

「聖、やめろって。そんなこと言われて困ってるじゃん」

聖君の友達、なんだっけ。葉一って呼んでたっけ。優しい人なんだな～。

「それじゃね。結城さん」

もう一人の友達がそう言った。えっと、基樹君だっけ？

「さ、さようなら」

私がぺこってお辞儀をすると、聖先輩もさよならって言って、友達とふざけあいながら、行ってしまった。

「…聖先輩と、仲いいんだね」

また後ろから声をかけられ、振り返った。うわ！いつの間に藤堂君いたの？

「あ、今日の昼、話をして…」

「ああ、食堂で？なんだか、話してるなって思ってたけど」

「水、かけちゃったの。っていうか、その水は沼田君のなんだけど、私がテーブル傾けちゃって、その反動でコップが宙に浮いちゃって」

「聖先輩にかかっちゃったの？」

「うん」

「怒られた？」
「ううん。全然」
「…聖先輩、優しいもんね」
「知ってるの？」

「中学、委員会でお世話になったことあって」
「そうなの？」
「俺が2年で先輩が3年の時、放送委員でさ。そういうの苦手なのにクジで運悪く当たっちゃって、ずっと先輩がフォローしてくれてた」

「…みんな聖先輩と、接点があるんだね。いいな」
「え？みんなって？」
「柏木君も知り合いだった」
「でも結城さんだってもう、知り合いでしょ？」
「あ、そ、そっか…」

「…よかったね。聖先輩に知ってもらえて」
「うん」
「めずらしいよ、高校に入ってから、先輩、ほんと女子と話さないし」
「…話ができたって、もしかして貴重なこと？」
「うん」

「そっか。嬉しいな」
「…」
藤堂君はゆっくりと歩幅を私に合わせ、歩いている。
「文化祭には見れるのかな。絵…」
「う、うん、それまでには仕上がると思う」
「何か月も前から描くんだね」

「私はね。すぐに描けちゃう人は、文化祭に2点くらい出したりしてるの」
「へえ、そうなんだ。結城さんは、一つの作品に時間をかけるんだね」
「…うん。きっと要領悪いんだよね」
「そうじゃないんじゃない？一つの作品をじっくり、心こめて描いてるんだよ。去年、絵を描いてる結城さん見て、俺、そう思ったし」

「…そう思ったって？」
「心こめて描いてるんだろうなって」
「…」
「あれ？違った？」

「ううん。でも、こんなこと言うと、みんな変に思うだろうなって思って、誰にも言ってないんだ」
「何を？」
「藤堂君も変に思うかも」
「思わないよ。言ってくれていいよ？」
「…」
と、藤堂君がなんだか、優しい口調になってる。

「絵に魂が宿るっていうか、生きてるみたいに思えてくるの」
「魂？」
「あ、変だよね」
「…全然変じゃない。俺もそれ、思ったし」

「藤堂君が？」
「うん。結城さんの絵を見て、桜の木が本当に命を持ってるように見えたよ」

「…」
うわ～～。すごく嬉しいことを言ってくれてる。
「そう言ってもらえると、嬉しい」

「…結城さんがそれだけ、心をこめて描いてるからでしょ？」
「心こめてっていうよりも、描いてるうちに本当に生きてるように思えてきて、命を与えてるっていうよりもね、なんていうのかな」
「うん」
「無心になって描いてると、絵の中の桜の木にこっちが命を吹き込んでもらってるような、そんな感じになるの。だから、粗末に描けなくなるし、すごく大事になってくるんだ」

「…すごいね」
「え？」
「すごいよ」
「何が？」
「何がって、結城さんが…」

「すごくないよ？変わってはいるだろうけど」
「ううん。すごい。だからあんなに結城さんの絵は魅せられるんだ」
「…え？」
「弓道の見学に行って、俺、弓道に魅せられたでしょ？」
「うん」

「その空気感とか、矢を射る時の、緊張感とか。それだけじゃない。矢が生きてるようにびゅっって飛んでいく瞬間とか、的に当たった時の感覚とか、そういうの全部、魅了された」
「…」
「その時と同じくらいに、結城さんの絵も、俺、魅了されたんだ」

「わ、私の絵が？そんなに？」
「うん。入学して校門の横の桜にも、ものすごく感動したけど、それ以上の感動だったな」
「…すごい褒め言葉だ、それ」
「え？」
「…」
私は涙が出そうになって、あわてて目をこすった。

「…そっか」
「え？」
「こういうこと、ちゃんと言えばよかったんだよね」
「…え？」
「なんでもない…」
藤堂君はしばらく、下を向いて黙り込んだ。

そして駅に着いた。
「あ、あのさ」
「うん」
「時間、もうないよね？」
「え？」

「…今日はもう、帰るよね？」
「…うん」
「そっか。じゃ、今度でもいいけど」
「？」
「俺、ほら、この前の手打ちパスタ食べ損ねたから、食べに行きたいって思ってさ」

「ああ、あの店？えっと、どこだったかな。けっこう歩くんだよね。私、方向強くないからわからないけど、沼田君なら知ってるから、

今度沼田君、誘ってみたら？」
「そうだね…」
あれ？今、一気に声のトーン、下がらなかった？藤堂君。
「ごめん。私あまり役に立てなくて」

「え？いや、いいんだ。今度沼田に場所聞いてみるから」
「うん」
「……あ、美味しかった？」
「うん、冷製パスタ、美味しかったよ。沼田君のお勧めなんだって」
「…そうなんだ」

駅に着いたのに、藤堂君はなかなか改札を通らないでいる。
「もしかして、お腹空いてるとか？」
何か食べに行きたいのかな？そう思って聞いてみた。
「え？ああ、うん。昼、うどんだったし、すげえ腹減ってるかも」
藤堂君はそう言うと、物静かに笑った。

「そうなんだ。じゃあ、えっと」
この辺でも、パスタ屋あるけど、蕎麦のほうが好きなんだよね。
蕎麦屋はどこにあるか、わからないな。
「お勧めのお店あるけど、パスタなの。藤堂君は蕎麦のほうが好きだよね？」
「いや、パスタでも、全然」

「そうなの？えっとね。この通りをまっすぐに行って、右に曲がると…」
説明を始めると、藤堂君は、
「お腹空いてる？」
と私に聞いてきた。

「え？」
「おごるから、そこ案内してくれない？」
「え？！」
「俺、方向音痴だし」
「…でも、すぐのところだから、簡単だよ？道」

「……」
藤堂君が黙り込んだ。
「……」
あ、待って。だとしたら、2人でご飯食べられるってこと？ドキドキ～～。それって、ものすごく嬉しいことだったりして。
「はあ…」

え？ため息？なんで？
「ごめん。なんつうか、沼田みたいにいかないよなって思って。真似しようとしても駄目だよね」
「え？」
「…結城さんさ」
「う、うん」

「沼田って話しやすいでしょ？」
「うん」
「柏木ってやつは？」
「柏木君はよくわかんない。からかわれてるだけかもって、そう思う時もあるし」
「からかう？」

「なんか、いつもふざけたこと言ってるし」
「そういうやつは苦手？」
「う、うん」

「…そっか」
藤堂君はしばらく黙り込んだ。

「じゃあ」
藤堂君は話し出そうとしてから、また一回黙り込み、それから私を見て、
「俺は？」
と聞いてきた。

「え？」
俺はって？
「話してて、話にくい？苦手なやつかな」
ドキ～～～。そ、そ、そんなことない。でも、なんて答えたらいいのかな。

「あの、藤堂君は」
わあ。頭真っ白だ。えっと、えっと。なんて答えたらいいのかな。
「今の質問、困ってる？」
「うん」
ハッ！私今、うなずいちゃった？

「ごめん。また、困らせてるね」
「ううん！」
どどど、どうしよう。
「じゃ、俺さ、そのお勧めの店、一人で行くから、ここで」
「え？」

「じゃあね」
「でも場所…」
「まっすぐに行って、右でしょ？」

「うん」
「大丈夫、俺、方向強いから」

え？

「でも、さっき方向音痴って」
「ああ、そう言えばついてきてくれるかなって思って、そう言っただけだから。ごめんね、嘘ついて」

え？

「じゃあ」

「ま、待って」
「…え？」

私は思わず、藤堂君を引き留めた。引き留めて何が言いたいのかもわからないのに、思わず引き留めてしまった。

第１４話　「白紙に戻して」

藤堂君は、立ち止まりじっと私を見ている。どうしよう。
「あ、えっと」
何て言おう。このまま帰りたくはない。まだ、藤堂君と話がしたい。
「お、お腹、やっぱり空いてる」

それだけ、どうにか私は口にした。
「じゃ…、一緒に食べて帰る？」
藤堂君が、少し言葉に詰まりながら聞いてきた。
「うん…」
私がうなずくと、藤堂君は私の横に来て、一緒にまた歩幅を合わせて歩き出した。

引き留めたはいいけど、私、藤堂君と2人でご飯食べれるかな。
ちゃんと話できるのかな。
ああ、なんだかいきなり緊張してきた。

お店に着くまでも、2人とも何も話さず、
「あ、ここなの」
と私が言うと、藤堂君はちょっとほっとした顔をした。
だんまりになってて、悪かったかな。ああ、私、ちゃんと話しないとだめだよね。

「あのね、いつもたらこのパスタを頼むんだけど、美味しいよ」
必死で席に着いてすぐに私はそう言った。
「そう？じゃ、それにしようかな」
藤堂君はそう言うと、注文を聞きに来た店員にたらこのパスタを

二つ注文した。

「…」

私は水をゴクンと飲んだ。ああ、目の前に藤堂君がいる。なんだか、顔を合わせるのも恥ずかしい。

チラ。ほんのちょっと藤堂君を見ると、藤堂君は店を見まわしたり、メニューを広げたりしている。

「あ、もしかして、他に食べたいパスタあった？」

私がそう聞くと、

「え？いや、別に」

と藤堂君は、ぶっきらぼうに答えた。

「……」

やばい。まただんまりだ。

「あの…」

うわ。今度は同時に話し出しちゃった。

「あ、結城さん、話していいよ」

「ううん。藤堂君こそ、なに？」

「たいしたことないから、結城さんこそ、なにか聞きたかったとか？」

「ううん。そういうわけじゃ…」

だんまり。

駄目だ。なんなんだ。この展開は…。

「ごめんね」

「え？何が？！」

藤堂君がびっくりしている。

「私、ほんと、男子と話すの苦手で…。会話も続かないし、藤堂君も困るよね」

「いや、こっちこそ。何も気の利いたこと言えないし…」
そう言うと藤堂君は小さくため息をついた。
ため息？つまらないって思ってるのか、それとも？
「沼田とは、どんな話してたの？この前」
「え？！」

沼田君？それは藤堂君のことが好きで、協力してくれるって話だけど、そんなこと言えないっ。
「なんだっけ？多分、なんでもないたわいない話…。あ、麻衣のこととか、美枝ぽんのこととか？」
「そっか…」
ゴクン。あ、生唾が出た。

そこにパスタが運ばれてきた。よかった。美味しいねとか言って、話題ができるかも。
でも、藤堂君はただ、黙々と食べてて、私は緊張でパスタがのどを通っていかなかった。
セットのサラダも食べ終わり、アイスコーヒーを藤堂君は飲むと、
「うまかったよ」
と一言言った。

「そう？よかった」
私はまだ、パスタが食べきれないでいた。困った。もう胸がいっぱいで、食べれそうもない。
「ゆっくり食べていいよ。俺、いつも食べるの早いんだよね」
「そうなの？」

「まあ、弓道部の連中がみんな早いからな…」
「みんな、仲いいよね」

「…うん。でも…」
でも？
「結城さんには、迷惑かけたよね。ごめん」

「え？私？なんで？見学もさせてもらったし、まったくそんな…迷惑なんて」
「…でもさ、あいつらやたらと見学に来てとか、結城さんに話しかけて、ちょっとうっとおしかったでしょ？」
「ううん。見学行きやすくなって、ありがたかったけど…」
「…ほんと？」

「うん」
もしかして、私が困ってるって思ったのかな。藤堂君。
「だったら、よかったけど…」
「き、気にしてくれてたの？」

「え？ああ、うん。弓道部の今の2年、みんな俺が結城さんを好きだったのも知ってたし、だからあれこれ、気を回すつもりであんなふうにやたらと声かけてたけど、それが結城さんには、うっとおしかったんじゃないかなって、ちょっと気になってたんだよね…」
「そんなことないよ。みんな声かけてくれたの、嬉しかったって言うか…」
「え？」
「本当に、うっとおしいなんて思ったことないから」

「……そっか」
藤堂君は静かにそう言うと、水を一口飲んだ。私は少しだけパスタを口にして、それからアイスティーを飲んだ。
迷惑だって部員のみんなに怒ったのは、私のことを気遣ってのことだったのかな。

もしかして、もしかすると、藤堂君はすごく優しい人なんじゃないかな。今だって、目の前にいて、確かに私は緊張してるけど、でも、藤堂君といると、沼田君や柏木君といる時とは違う、優しい穏やかな空気が流れてるのを感じる。

チラ。藤堂君を見た。ちょっと目が合って、藤堂君は視線を外した。

…。今、なんだか、すんごい優しい目で見てなかった?!

ドキドキドキドキ〜〜。わ、いきなり鼓動が…。

話なんかできなくなった。話なんかできなくてもいい。今、目の前に藤堂君がいて、胸がときめいていて、それだけで私、すごく満たされちゃってる。

ああ、時間が止まってくれたらいいのに。なんて、思っちゃってる。

「もう、お腹いっぱい?」

藤堂君が聞いてきた。

「え?う、うん」

「小食なんだね?」

「ううん、いつもはこのくらい簡単に食べてる…」

はっ!今、変なこと言ったかな。

「俺が一緒で、緊張して食べれないとか?」

「え?」

うわ。うなずくところ?これ。でも、そんなこと言ったら、私が藤堂君を好きなのばれる?

「男子と一緒にご飯食べるのは、やっぱ、緊張するのかな」

あ、そっか。そういう解釈か。いや、この前は沼田君といてもぺろりとたいらげたけど。
「そ、そうなのかも…」
一応、そういうことにしておこう。
「…部の奴が言ってた」
「え？なんて？」

「結城さん、お前が言ってた通りの子だよねって」
「言ってた通り？ってど、どんな？」
どんなこと言ってたの？藤堂君。
「今っぽくないっていうか、奥ゆかしいっていうか」
「え？！」

「きっと、貴重な存在？」
「私が？！」
「うん」
グルグル。首を横にふった。絶対に知らなすぎるよ、私のこと。
「でも、ずっと見てて、そう思ったけどな、俺」

ドキン。ずっと見てて？！
「たださ、同じクラスになったら、前の結城さんと違っちゃってたから」
「え？ど、どんなふうに？」
「笑わなくなってた」
「…」

「それも、俺が原因だったんだよね？」
ドキン。そ、そうだ。最初はそうだった。藤堂君が同じクラスで、本当に気が重くって。でも、今は違うよ。と、今言いたい、けど言えない。

「…だけど、こうやってご飯食べるの、ついてきてくれたってことはさ、もう俺のこと避けてないってことかな」

「え？」

「その…」

藤堂君の顔が…、赤い？！

藤堂君は横を向いて、しばらく黙り込んだ。それからまた、こっちを見た。

「…こんな時、どういって言いか、よくわかんないんだけど、笑顔がなくなったのが俺のせいだったとしたら、笑顔取り戻してほしいって思ってたんだ」

「え？」

「だから、その…。結城さん、沼田と話してても楽しそうにしてたし、明るくなってたし、だから、本当によかったなってそう思って…」

そんなこと思ってたの？！

「聖先輩とも話せて、喜んでたし、もとの結城さんに戻れたみたいで、俺、ちょっと今安心してるって言うか」

「まさか、すごく責任感じてたの？」

「いや、えっと。責任っていうより、ただ、笑ってほしいなって思ってた…」

「…」

「だからよかった」

「…」

「絵もスランプって言ってたから、気になってた。でも、描く気になってよかったなって…」

な、なにそれ。じゃ、ずっと私のこと気遣ってくれたり、気にし

ててくれたってこと？
ふられた相手だよ？
じゃあ、じゃあ、もしかして、もう何とも思ってないとか、重たく考えないでとか、そういうのも全部、私のことを思って言ってくれてた、とか？

か～～～。顔が一気にほてっていく。藤堂君の優しさがどんどん伝わってくる。
「…今、困ってる？俺、また変なこと言ったかな」
グルグル！思い切り首を横に振った。

ドキン。ああ、どうしよう。こんなこと今言うの変かな。でも、でも、言いたいし、もしかすると藤堂君はちゃんと、いいよって言ってくれるかも。
「あの、藤堂君」
「え？」
「あの…」
私は顔をあげ、藤堂君を見た。藤堂君はやっぱり、優しい目をしている。

「と、友達に、なれるかな」
「え？」
「藤堂君と私、友達になれるかな？」
「…うん。結城さんさえよければ、いつでも…」

う～～～わ～～～～～～～。
友達に進展だ～～～～。

嬉しい！！！！！
私は嬉しくて、もっと顔がほてった。それを隠すように、顔を思

い切り下げた。
「……」
ドキンドキン。よかった。思い切って言ってみてよかった。
「結城さん」
「え？」
ドキン。ちょっとだけ顔をあげた。藤堂君はじっと私の顔を見ていた。
「？」
「あ、よかった。表情が見えなくて、どんな顔してるのかわからなかったから」
「え？」
「もしかして、無理してるのかなとも思っちゃって」
「む、無理って？」
「友達。俺に気遣って、そう言ってくれたのかなって思ってさ」
え？
「前に、友達でも駄目かって、聞いちゃってたから。なんか、そのこと気にして、そう言ってくれたのかなって思っちゃって」
グルグル。私はまた、首を横に振った。
「…じゃ、いいのかな」
「え？」
いいって、何が？
「…こんなこと言って、困らせないかな」
え？何？
藤堂君は一回、小さく深呼吸をした。
「半年前の告白。あれ、情けないけど白紙にしてほしい」
「え？！」

ななな、なんで?!なんで?どういうこと?

やっぱり、私のことは好きでもなんでもなかったってこと?
だから、あれはなかったことにしてくれってこと?!
私は顔面蒼白になった。

友達になってくれるんだよね?
でも、告白はなかったことにしてってこと?

だめだ。思考回路ゼロだ。何も考えられない。
そのあと、二人でどんな会話をしたのかも、覚えてないくらい、
私はショックを受けている。

家に帰って、真っ白のままずっとベッドに座り込んだ。麻衣や芳美にメールをする気にすらなれなかった。
白紙?

告白をなかったことに? ってことだよね…。

私はその日の夜、ずっと頭ががんがんしていて、一睡もできないでいた。

第15話　優しさ

朝、鏡を見たら目が真っ赤。わ〜。すごいブス顔だ。
学校に着くと、ぼ〜〜っとしながら、教室に入った。
「おはよ、穂乃ぴょん」
いきなり沼田君が声をかけてきた。でも、ちょっと元気のない声だ。
「あれ？穂乃ぴょんも元気ないね」

沼田君が言ってきた。
「沼田君もなんかあったの？」
「…まあね」
美枝ぽんのことかな。って思っていたら、すぐ横に藤堂君が来ていて、私はびっくりしてしまった。
「お、おはよう」
あ、声裏返ったかも。

「おはよう」
藤堂君はすごく静かに返事をした。そして私の顔をちらっと見ると、そのまま自分の席に行ってしまった。
白紙。友達。いったい、喜んでいいのか、悲しんでいいのか。まったくわからない。

クラ。寝不足だからか、頭がクラクラしてきた。
「おはよう。穂乃ぴょん」
自分の席に行くと、もう席についてた美枝ぽんが声をかけてきた。
「おはよう」
「あれ？なんだか暗くない？それに目、真っ赤。もしかして昨日泣いた？」

「ううん。寝不足なだけ」
「寝れなかったの？悩み事？」
「…あとで話を聞いて」
「うん」
私はまたお昼に、他の誰かに聞かれないよう中庭に、美枝ぽんと麻衣を連れて行った。沼田君は麻衣が誘ったらしいが、あとから来ると言ってたらしい。

「どうした～？また司っちからなんか言われた？」
麻衣が聞いてきた。
「うん」
「なんて？」

「あの告白、白紙にしてほしいって」
「え？！」
2人が固まった。
「そっか。忘れてどころか、なかったことにしてってことか」
麻衣がそう言った。美枝ぽんは何も言わず、ただ私の背中をなぜた。

あれ？なんか、慰められてる？
「でも、友達になってくれるって」
「え？！」
また二人は大きな声で聞き返した。
「友達にはなってもいいってこと？」
麻衣が聞いてきた。

「うん」
「…ふうん」

美枝ぽんが納得いかないような顔で、そう言った。そこに息を切らして、沼田君が走ってきた。
「あ～～。穂乃ぴょん」
なんだか、私を同情するような目で見てない？

「とうとう、司っちから、告白、無いものにしてくれって言われたんだって？」
「え？なんでそれ知ってるの？」
「本人が言ってた」
「ええ？司っちが？」
私よりも麻衣のほうが驚いている。

「今日穂乃ぴょん、様子変だったよねって言ったらさ、昨日の帰り一緒にご飯食べて、その時に言った言葉で、困らせたかもって司っちが言ってて」
「で？」
美枝ぽんが沼田君ににじり寄って聞いた。
「そんで、何を言っちゃったのかって聞いたら、お前には教えられないって言われてさ」

「で？！」
今度は麻衣がにじり寄った。
「う～～ん、司っちの様子も変だし、つい言っちまったんだ。俺、司っちが穂乃ぴょんにふられたこと知ってるよって」
「なんで、そんなこと言ったの？」
麻衣が怒った。でも、その横で美枝ぽんが、
「で、なんて藤堂君は言ったわけ？」
と冷静に聞いた。

「…えっと。その…」

沼田君がいきなり、しどろもどろになった。
「ちょっと、はっきり言いなよ」
麻衣がすごんだ。
「そうしたら、昨日そのことはもう、白紙にしてくれって結城さんには言ってあるからって、そう司っちが言っててさ」
「…」
麻衣と美枝ぽんが同時に私を、暗い目で見た。
「そっか～～～」
ため息交じりにそう言ったのは、麻衣だ。
「なんか、ごめん」
「え？」
沼田君がいきなり謝った。
「頑張れとかあれこれ言ったけど、司っちとはさ、もう温度差があるんだな」
「温度差？」
「いくら穂乃ぴょんが頑張っても、駄目なものは駄目なんだって、俺も今日の司っちの話を聞いて、ようやく納得した」
「……」
「すっぱり、あきらめて、他の人好きになることを俺は勧めるよ」
「…と、藤堂君、そんなにテンション低く言ってたの？」
「うん。なんだか、暗い顔してたけど？」
「…」
ひゅ～～～～。いきなり胸にぽっかりと穴が開き、風が吹き抜けて行った。さ、寒い。
暗くなりながら、午後の授業を受けた。でも、なんにも頭に入っ

てこなかった。前を向くと藤堂君の横顔が視界に入るから、なるべく机の教科書か、窓の外を見ていた。
ああ、桜の木、あんなに葉っぱが濃い緑に変わっちゃった。

重い足取りで、美術室に放課後向かった。
キャンパスの前に座っても、私はずっとぼけっとキャンバスを眺めていた。柏木君は、今日もまた絵をものすごい集中力で描いている。ちょっと、怖いくらいの迫力がある。

5時を過ぎた。他の部員はみんな片づけをして、美術室を出て行き、ぼ〜〜っとしている私と柏木君だけが残った。
「またスランプか？」
先生が聞いてきた。
「ちょっと…」
私はなんて言っていいかわからず、言葉を濁した。

「またいつでも、気分転換していいからな。じゃ、職員会議があるから、これで行くぞ。最後のやつは鍵閉めて職員室に戻しておけよ」
「はい」
柏木君が返事をした。先生は美術室を出て行った。

柏木君は片づけを終え、私の横に来た。私も重い気持ちのまま、片づけをした。
「また、えらく沈んでる？」
「わかる？」
「なんかめちゃくちゃ暗い。どよんってしてる」
「…そう？」
「嫌なことって、絵を描く原動力にはならないの？」

「え？」

私は思わず、柏木君を見た。
「ならない？なんか思いをぶつけたいってならない？」
「柏木君、嫌なことあったの？あ、そういえば、衝撃的なことがあったって」
「うん」

「な、なに？何があったの？」
「母さんと父さんの離婚」
「え？入院してたって言ってたけど、違ったの？」
「してたよ。流産して」
「赤ちゃん？それで離婚？」

「いんや。母さんの浮気がばれて離婚。父さんとの子じゃないんだ」
……。うわ。本当だ。すごい衝撃的すぎる出来事。
「海、風が強い日にね、すごい荒れてて。俺の気持ちみたいだなって思った」
「…」
「で、それが描きたくなった。どこにもぶつけられないから、絵にぶつけようってさ」

「…柏木君って、兄弟は？」
「姉がいる」
「お姉さんと柏木君は、どっちにつくの？」
「姉は母さん。俺は父さん」
「ばらばらになるの？」

「ああ、いいんだ。俺、姉とはもともと仲悪いし」
「…」
「母さんとも仲悪かったし」
「そ、そうなの？」

「あまり、家にいない母親だったから」

「……」

「姉はもう、働いてる。だから、母さんと暮らしても、母さんも働くしどうにかやっていけるんじゃない？」

「浮気相手は？」

「逃げたってさ」

「逃げた？」

「子供できた時点で。向こうにも家族いたみたいだし」

「ひどいね。お母さんつらいね」

「そう？自業自得でしょ？浮気したんだから」

「…」

柏木君、まるで何もなかったかのように、平然とした顔してるんだ。なんで？なんでもっとつらそうな顔してないの？

「どこにもぶつけられないって、怒りを？それとも悲しみ？」

「さあ。どっちかな」

柏木君はそう言うとしばらく黙った。

「……か、柏木君って、友達は？」

「俺？別に。特に親しくしてるやつっていないな。クラスでも浮いてるし」

「それじゃ、話せる相手いないの？」

「話？別に。いなくてもいいし」

「……」

本当に？

「わ、私は友達だったよね？」

「うん」

「じゃ、私には話してもいいけど」
「だから、こうやって話してる」
「そうじゃなくて、もっと心の中って言うか、辛いとかそういうこと」

「…うそ」
「え？」
「そんなこと結城さんの前で、吐きだしてもいいの？」
「え？う、うん」
「ふ…」
柏木君が、鼻で笑った。

「な、なに？」
「無理でしょ。そんなこと結城さんにはできないよ」
「なんで？」
「男苦手でしょ？そんな結城さんに、受け止められるわけないじゃん」
「わ、わかんないよ？そんなの」

「それに、友達なんて生半可なもので、受け止めようなんてそんなの、無理に決まってるだろ？」
ムカ。今のムカついた。
「なんでそういうふうに言うの？無理だって決めつけるのよ」
「じゃ、本当に受け止められる？俺が辛すぎて、結城さんを抱いても、結城さんをめちゃくちゃにしても、それでも受け止められる？」

え？！
「できるのかよっ」
柏木君がすごんだ。そしていきなり、抱きしめてきた。
「ちょ、やめて」

「無理かどうか、やってみなけりゃわからないっていうなら、俺、ぶつけるよ」
「柏木君？」

「結城さんに、俺のつらい気持ち、ぶつけていいっていうなら、このまんまここで」
「やめて！」
私は抵抗した。でも、柏木君の腕の強さが強くて、抱きしめられてる腕を払いのけることもできない。
ようやく、柏木君が手をどけた。と思ったら、今度は顔を両手で持って、キスをしようとしてきた。

「やだ！」
両手で柏木君の胸を思い切り押した。でも、びくともしない。
「やめて！」
ドカッ！！
柏木君が私から離れ、床に思い切り転がった。え？何？何が起きたの？

「お前、何してるんだよ！」
藤堂君？
「いって～～～。思い切り殴りやがった。こいつ」
柏木君はそう言って、床から立ち上がった。
「何してるんだよ。結城さん、嫌がってただろ」

「…こいつから俺に、しかけてきたんだよ」
「違う！」
私は今にも泣きそうになりながら、震える声でそう叫んだ。
手も震えてる。ものすごく怖かった。

「今度、手出してみろよ。ただじゃおかないからな」
藤堂君がものすごい怖い声でそう言った。
「なんで？お前、結城さんの彼氏でもなんでもないんだろ？ただのクラスメイトだろ？」
「俺は、嫌がってるのに、そうやって力任せにどうにかしようとするようなやつ、許せないんだよ」
「だから、さっきから言ってるだろ？こいつのほうが、俺が辛いことあって、自分でよかったら慰めてあげるって言ったんだよ！」

違う。そんなこと言ってない。ただ、話を聞くって言っただけ。
でも、声が震えて何も言葉が出ない。
でも、違うの。藤堂君。

「結城さん、送ってくよ。もう片づけは済んだ？」
コクン。藤堂君の言葉に私はうなづいた。
「立てる？一緒に昇降口行こう」
「うん」
藤堂君は優しくそう言ってくれて、私のことを立たせてくれた。

ヘナ…。あ、腰に力が入らない。
「大丈夫？」
「う、うん」
藤堂君が背中に腕を回し、私を支えながら歩き出した。

「なんだよ。そいつにはそんなに抱きかかえられても平気なわけ？」
後ろから柏木君の声がした。
藤堂君はその言葉を無視して、私を抱えながら美術室を出た。
「なんなんだよ！思わせぶりなこと言ってきたのは、そっちだろ？
でも、結局なんにもできなかったじゃないか」
「…」

「だったら、始めから生半可なこと言うなよ！」
柏木君が吐き捨てるようにそう言った。
私はまだ、足が震えている。でも、背中に回した藤堂君の腕のぬくもりが優しくて、今にも涙がどっと溢れそうになっていた。

昇降口に着き、私は靴に履きかえた。
「大丈夫？」
「うん」
どうにか一人でも歩けそうだ。
「カバン持とうか？」
「ううん。大丈夫」

藤堂君は横にぴたりと寄り添い、歩幅を合わせ歩き出した。
「他の部員は？」
「もう帰った。俺は顧問の先生や部長と話があったから、残ってたんだ」
「そう…」
「あいつ、柏木、なんであんなに荒れてたんだ？」

「親が離婚したって」
「…それで？それであんなこと結城さんに？」
「相談にのるみたいなことを、私が言ったから」
「それであんなことしてくるのかよ。最低だな」
「…」

私は黙り込んで、またちょっと足が震えだした。
「ごめん。もう蒸し返さないよ」
「うん」
藤堂君は黙った。でも、優しさが隣から伝わってくる。

「藤堂君」
「ん？」

「さっきは助けてくれてありがとう」
「え？」
「藤堂君が来てくれなかったら、私」
「…うん。ちょうど通りかかってよかった」
藤堂君はそう言うと、はあってため息をした。

「しばらく部は休む」
私がぽつりとそう言うと、
「うん、そうしたほうがいいかもね」
と藤堂君は優しく言った。

駅に着いた。
「家まで送るよ」
「ううん、大丈夫」
「でも、まだ結城さん、震えてるよ？」
あ、本当だ。今度は手が震えている。

「だ、大丈夫。逆方面だし」
「いいよ。藤沢でしょ？そんなに遠くないよ」
「でも」
「いいから」
藤堂君はそう言って、改札を通り抜け、今入ってきた電車に私と乗った。

「ごめんね。迷惑かけて」
「迷惑じゃないよ」
「でも」

「友達になったんだよね？俺ら」
「う、うん」

「じゃ、こんなことたいしたことじゃない。家に送っていくくらいのこと、いくらでもするよ」
「…」
今、心の中がほわってした。
藤堂君。きっと他の友達のことも、いつも大事にしてるんだ。その大事な友達の中に、私も仲間入りできたんだ。

嬉しい。

ああ、なんだ。告白が白紙になろうと、今、友達としてでも、ちゃんと大事に思ってくれてる。それだけでいいじゃない、私。
ガタンガタン。電車の中で藤堂君は一言も発しなかった。でも、藤堂君の優しさやあったかさは感じ取れて、私はほっと安心することができた。

第16話　それぞれの良さ

家に帰ってから私は、麻衣に電話をした。
「どうした～？なんかあった？」
「うん」
「藤堂君と？」
「私ね、麻衣」

「うん」
「藤堂君が告白を白紙にしたって言ったの、傷ついたの」
「うん」
「でも、友達になれたんだし、もうどっちでもいいや」
「え？」

「私、藤堂君が好きで、友達になれて、そばにいられて…。それだけでもすごく今日、幸せだって思っちゃったんだ」
「…恋人じゃなくても？」
「変に付き合うよりも、友達のほうがずっとそばにいられるかもしれないでしょ？」
「いいの？それで」

「友達としてでも大事に思われたら、それだけでもいいよ」
「…そっか。穂乃香がそう思うなら、いいんじゃないかな」
「うん」
「だけど、応援はしてるからね」
「麻衣、ありがとう～～」

電話を切ってから、ベッドに寝転んだ。
そもそも、付き合うってことすらまだ、私にはよくわからない。

でも、そばにいられて、話ができて、そして藤堂君のことを知っていく。それだけでも、本当に嬉しいことかもしれない。

翌日、朝、藤堂君はもう席にいた。沼田君と話をしていたが、そこに行って元気よく、

「おはよう」

と言ってみた。

「おはよう、穂乃ぴょん、元気いいじゃん。なんかいいことあった？」

沼田君が聞いてきた。

「う、うん」

私はすぐに藤堂君のほうを向き、

「昨日はありがとう」

とお礼を言った。

「今日、元気に学校来れてよかったね」

藤堂君が優しくそう言った。

「え？」

「ちょっと心配してた」

そうなんだ。わあ、嬉しい。

「なんだよ、昨日なんかあったの？」

沼田君が聞いてきた。

「ちょっとね、でも、内緒」

私はそう言って、すぐに自分の席に行った。

「なんなんだよ、2人の秘密か～？」

沼田君が藤堂君に聞いていたが、藤堂君も笑うばかりで何も沼田君に言わなかった。

「穂乃ぴょん、今日元気いいね」

「え？わかる？」
「表情明るいもん。いいことあったの？」

「…いいことっていうか、ちょっとふっきれたっていうか」
「もしかして藤堂君のことが、あきらめついたとか？」
「ううん。その逆で…。友達になれたんだし、これからはもっと、藤堂君のことを知っていって、友達として仲良くなっちゃえって、そう思えたんだ」

「開き直り？」
「え？そうかな～」
私はあははって言って笑った。美枝ぽんは、
「うん、いいんじゃない？そんなに重くあれこれ悩むより、今の状況をいいほうに持って行っちゃうって、すごくいいことだと思うよ」
とにこにこしながらそう言った。

そうだよね。私、ほんと重たかったよ。うん。もう、重たいのはいいや。
授業が始まり、黒板を見てるふりをして、藤堂君を見てみる。じっと先生の話を聞いてる藤堂君、一生懸命にノートを取ってる藤堂君。それから、後ろから麻衣に何か話しかけられ、後ろを向いて笑う藤堂君。

ああ、笑ってる。麻衣が羨ましい。でも、笑顔が見れた。
ふと前を向く時、藤堂君がこっちを見た。わ。目が合った。いつもならそらしてるけど、そのまま藤堂君を見て、笑おうとした。あ、ほっぺ、ぴくぴくしてる。
にこ。ああ、藤堂君のほうもちょっと、笑ってくれた！嬉しいかも！

そうか。友達っていいな。こんなふうに目が合うと、笑い合えたりするんだ。
ああでも、藤堂君と目が合うだけでも、すんごいドキドキしちゃうけど。

お昼になり、美枝ぽんとお弁当を持って廊下に出ると、すぐ後ろから沼田君と藤堂君がやってきた。
「一緒に食堂行こうぜ」
「うん」
わあい。嬉しい。

「沼っちっていつも、学食かパンだよね」
「うちの母さん、夜勤も多くって、お弁当を作るの大変みたいだから」
「え？夜勤？」
私が驚いて聞くと、
「看護師してるんだよ」
と沼田君が答えた。

「そうなんだ。じゃ、いろいろと大変だよね」
美枝ぽんがそう言った。
それから食堂に着き、今まで聞いたことがなかったような、みんなの家族構成だの、家族のこととかを話すことになった。

「沼っちは一人っ子？」
美枝ぽんが聞いた。
「姉さんがいる」
「そうなの？お弁当作ってもらえないの？」
私が聞くと、
「そういうタイプじゃないんだよ。朝から厚化粧して仕事いってる

よ」
と沼田君は淡々と答えた。

「もう社会人？」
「今年からね。高校卒業して働きだした。化粧品売り場だからあんな、厚化粧なのかな～」
「じゃ、綺麗な人なんだ」
美枝ぽんが言った。
「いいや、化粧でいつも化けてるよ」
「ふうん」

「美枝ぽんは一人っ子でしょ？」
沼田君が聞いた。
「当たり。わかった？」
「なんか、そんな感じするよ。意外と親に可愛がられて育った箱入り娘」
「え～～？それは違うかな」

美枝ぽんが眉をしかめた。
「うち、親が変わってるんだ。母親、アイドルの追っかけしてるし」
「え？」
みんなが驚いた。
「一緒にコンサートとか行っちゃうの。私と母親、すごく仲いい友達みたいなんだよねえ」

「お母さんいくつ？」
私は気になり聞いてみた。
「３６歳」
「若い！」
私も沼田君も思わず叫んだ。藤堂君は表情を変えず、

「お父さんは？」
と聞いた。
「父親は４９歳」
「じゃ、年離れてるんだね」
「そうなの。だから母親にすご～～く、甘いって言うか、母のわがままも全部許しちゃうって言うか」
「へ～～～」
「うちの中で一番わがままで甘えん坊は、母なのよね」
「なるほどね。箱入り娘のまま、嫁いだパターンかな」
沼田君が、うんうんと変に納得しながらそう言った。
「藤堂君は兄弟っていたっけ？」
美枝ぽんが聞いた。
「弟がいるよ」
「へえ、いくつ？」
沼田君が聞いた。
「今、中１」
「じゃ、４歳下？」
「うん」
「生意気な弟？」
美枝ぽんが聞いた。
「いや、なんだか、なつっこい犬みたいな弟」
「可愛がってるんだね、藤堂君」
私が思わずそう言うと、藤堂君は私を見て、照れくさそうにうなづいた。あ、その表情が可愛い。
「穂乃ぴょんも一人っ子じゃないの？」

沼田君が聞いてきた。
「ううん。兄がいるよ」
「え？そうなんだ。男兄弟いるように見えないね」
「そうかな」

「年離れてるんじゃないの？」
美枝ぽんが聞いてきた。あれ？なんでそう思うのかな。
「３つしか離れてないよ」
「そうなの？でも、思い切り、かわいがられてそうだよね」
沼田君にそう言われ、私はちょっとだけ、切なくなりながら、
「そうなんだけど、大学、関西のほうなの。だから、ずっと離れてるんだ」
とぼそって言った。

「でもさ、男の人苦手じゃん？お兄さんがいたら、男が苦手になりそうもないけどな」
沼田君がそう言った。
「…お兄ちゃんは、ちょっと違うから」
「何が？あ、もしかして、限りなく女に近いお兄ちゃんだったり？」
美枝ぽんがちょっと、楽しそうに聞いてきた。

「違う、違う。なんていうのかな。今はもう大丈夫なんだけど、ちょっと体が弱かったんだ」
「え？」
「心臓、弱くって。でも手術して、元気になったからもう平気なんだけど」
「…じゃあ、あまり遊んでもらえなかったとか？」
「ううん。その逆で、外に遊びに行けない分、私、本当によく家の中でお兄ちゃんと遊んでたの。でも、お兄ちゃんが私の遊びに付き合ってくれて、おままごとや、折り紙や、そんなのばっかりだっ

たから、私、あまり男だって意識してなかったんだよね」

「なるほどね」

また沼田君が深くうなづいている。

「っていうか、私、勝手に男の人はみんなお兄ちゃんみたいなんだと思い込んでたから、小学校3年か、4年の時、公園で上級生が暴れてたり、乱暴な言葉使ってるの見て、すんごく驚いちゃって。それからかも、男子が苦手なのって」

「お兄ちゃんはじゃあさ、すごく優しかったんだ」

美枝ぽんが言った。

「う〜〜ん。優しいっていうのかな?ちょっと違うかな」

「え?」

「私と普通に遊んで、普通に話してた。ちょっと変わってて、妄想癖もあって、一緒にいろんなこと想像して遊んだり、ジブリも一緒によく観てた。お兄ちゃん、小説や漫画も描いてて、どれもファンタジックな変わってる世界だったよ」

「私、気が合うかも。今度お兄さんに会わせてよ!」

美枝ぽんが目を輝かせてそう言った。その横で沼田君が顔を引きつらせた。

「いいけど。年に一回、正月にしか帰ってこないよ?夏休みもバイトするからって、こっちに戻る気ないみたいだし」

「そうなの〜〜〜?」

「彼女もできたみたいだし」

「え?そんな変わり者なのに?」

「うん。変わり者の彼女がいるみたい。アニメ好きの…」

「私みたいな変わり者か〜〜〜」

美枝ぽんがそう言って、がっくりしていた。

「顔は？イケメン？」
まだ、がっくりしていたのに美枝ぽんは聞いてくる。
「私に似てる」
「じゃ、けっこうかっこいいじゃん！」
美枝ぽんがそう言うから、私は驚いた。

「え？ど、どうして？」
「だって、穂乃ぴょん、綺麗だもの。整った顔してるし」
「どこが？！」
「目元凛々しめ、口元凛々しめ。男にしたらかっこいいって」
……。男にしたら、か。それって、喜ぶところじゃないよね。

「着物とか、似合いそうだよね」
え？突然の藤堂君の言葉に驚いた。
「似合いそう。ちょっと色っぽそうだし」
「私？！」

「いいな～。私は似合わなそうだから、羨ましいよ」
美枝ぽんが言った。
「羨ましくない。私なんて全然…」
慌ててそう言うと、藤堂君が、
「なんで？なんで私なんて…なの？もっと自信持っていいのに」
と真剣な目で言ってきた。

えええ？！ど、どうしたの？
「結城さん、絵だって素晴らしい才能あるし、もっともっと自分のことすごいって思っていいよ。きっと結城さんのこと、羨ましいって思ってる人は多いと思うよ？」
どこが？！と、今大声で叫びたいくらいだ。でも、そんな言葉も

出ないくらい、私はびっくりしちゃってる。

「でもさ、八代さんも八代さんで、いいところいっぱいあるんだから、羨ましがらなくても大丈夫だよ」

藤堂君は今度は、美枝ぽんのほうを見て、にこっと微笑みながらそう言った。

「ええ～？そう？そう言ってもらえると、美枝ぽん、嬉しいな」

美枝ぽんは嬉しそうに、大きな声でそう答えた。

あれ？なんだ。私だけじゃなくって、美枝ぽんのことも、そうやって言ってあげるのか。

な、なんだ。私、思い切り今、期待したって言うか、なんていうか…。

それに、美枝ぽんはそんなふうに、前向きに明るく受け止めるのか。私は、そんなことない、私のどこがいいの？って後ろ向きに受け止めたのに。

この違いかな。美枝ぽんの良さはそういうところ。でも、私は？藤堂君。やっぱり、私の良さなんて見つけられないし、自信も持てないよ。

「ねえ、じゃあさ、自信がなかなか持てない穂乃ぴょんのためにも、ここでそれぞれが、みんなのいいところを言い合ってみるってのどうかな」

突然沼田君が、そんな提案をした。う。沼田君の顔、なんか裏がある。何か企んでいるでしょう。

「いいね！」

美枝ぽんがその提案にのった。ま、待って。美枝ぽんの顔も、いたずらをする前の子供みたいな顔になってるよ。

藤堂君は何も言わなかった。でも、いいんじゃないの？って顔で沼田君を見た。

「じゃ、まずさ。俺の良さから言ってもらおうか」

「ええ？！自分で言いだしておいて、いきなり俺を褒めろっていうの？ちょっと図々しくない？」

「それ、褒め言葉じゃないよね？はい、美枝ぽん、却下～～」

「何それ！」

美枝ぽんが呆れたって顔をしたけど、すぐにくすくすって笑った。

「そういう乗りのいいところとか、すぐにみんなを楽しませてくれるところとか、沼っちの良さだよね」

美枝ぽんは沼田君にそう言った。沼田君は、顔を赤らめたがすぐに、

「今のは、うん。なかなかいい褒め言葉だったかな」

と、わざと照れを隠すようにそんなことを言った。

「それに、人が幸せになるのを喜べるし、なんか単純に人が好きって言うか、誰とでも仲良くなっちゃうところも、沼っちのすごいところだよね」

美枝ぽんがそう続けた。わお。すごい高い評価じゃない？こりゃ、沼田君が喜ぶ…と思いながら沼田君を見ると、目を丸くして驚いていた。

「そんなふうに見えてたの？俺」

「え？うん」

沼田君の質問に、美枝ぽんはなんでそんなに驚いてるのって顔をしながら答えた。

「そっか、そうなんだ」

沼田君はしばらく、顔を赤くしたままうつむいていた。

「自分で知らない自分が、見えたのか？沼田」
藤堂君が聞いた。
「え？いや、そうじゃなくて。そんなにいいやつじゃないから俺、なんか、ちょっと罪悪感？」
沼田君が引きつりながら笑った。
「そうだよね。けっこう腹黒いよね」

私は思わず、そう言っていた。
「え？！」
沼田君が一気に、怒った顔になった。
「穂乃ぴょんがそんな、毒を吐くとは思ってもみなかった」
美枝ぽんが驚いている。

「あ、あ、でも。きっとみんなの中にもある、腹黒さって言うか。なんか、そういう部分が見えたらもっと、親しみわいたって言うか、仲良くなれたって言うか…」
私は慌ててそう付け加えた。
「それ、取ってつけたような感じじゃない？」
沼田君が言った。

「じゃ、今度は俺のいいところ、穂乃ぴょん、言ってみろよ」
「え？えっと」
こういうの苦手。面と向かって言うの、すごく照れる！
「なんだか、て、照れるね。こういうの」
そうぼそって言うと、
「あはは。穂乃ぴょんってやっぱり、シャイだよね。そういうところも好きだな～～」
と美枝ぽんが言った。

「う…」

好きって言われても…。
「でも、言いなさい。さっき毒を吐いた分、いいところは１０個くらいあげてもらおうかな」
沼田君がそう言った。
う…。

沼田君のいいところ？
「明るい」
「うん。それから」
「えっと～～。一緒にいて楽しい」
「それから？」

「う～～ん。物おじしないところ。人見知りしないところ。なんか、へこんでもすぐに立ち直れるタフなところ？」
「う、う～～ん。まあ、褒め言葉として受け取ろう。それから？」
「う～～ん。そうだな。あ、人のことなのに一生懸命になるところ」
「それ、私もそう思う」
美枝ぽんが口をはさんだ。

「ああ、そうかもな」
藤堂君もそう言った。
「それから、ムードメーカー。あとは、そうだな～～」
私はじっと沼田君を見てみた。沼田君は見られたまま、黙っている。
「あ、今気が付いた。けっこう、顔が可愛い。ベビーフェイスかも？」

「え？！」
いきなり沼田君が、赤くなった。
「あれ？変なこと言った？」

私まで焦ってしまった。
「そういえば、そうかも。目、まつ毛長くて可愛いし、色白くて肌綺麗だし」
美枝ぽんも沼田君をまじまじと見て、そう言うと、ますます沼田君は赤くなっていった。
「意外～～。こういうこと言うと、沼っちでも照れるんだ」
「う、うるさい。はい。俺のことはもうおしまい。次。じゃあ、えっと」
「はい！美枝ぽんのいいところ言って」
美枝ぽんが手を挙げた。
「明るい」
藤堂君がぼそってそう言った。明るい。私にはきっと誰も言わないかも…。藤堂君もそう思ってないよね。
あ、今は、美枝ぽんのことだってば。
「人見知りするみたいだけど、一回仲良くなると、すごく人懐こい」
私がそう言うと、
「え。犬みたいってこと？」
と美枝ぽんが私に聞いてきた。
「前向きで、ちょっと人と変わった視点から物事が見れる。それ、1年の時から思ってたんだよね、俺」
沼田君が言った。そうなんだ。そういうところが好きになったのかな。
「…変わり者ってことでしょ？」
美枝ぽんが聞いた。
「いや、なんていうのかな。自分ってものがちゃんとあるんだなって」

「わがままってこと?」
「そうじゃなくって。人といても、流されない強さって言うの?」
「ふう〜〜〜ん」
美枝ぽんがそう言うと、沼田君がちょっとびびりだした。あ、俺、変なこと言ったかなって顔をしている。

「それ、最高の褒め言葉かも。私、人と一緒って言うの一番嫌いなの」
そう美枝ぽんが言うと、沼田君はほっと溜息をついた。
「じゃあ、今度は穂乃ぴょんの番ね」
美枝ぽんが私のほうを向いた。

うわ。怖い。なんて言われるの?特に、藤堂君からの言葉、かなり怖いんですけど!!!

第17話　好きなところ

「私の番は、いい」
いきなり恥ずかしくなり、そう言った。
「よくない。だいたい、穂乃ぴょんにもっと自信を持ってもらうために、始めたんだからな！」
沼田君に怒られた。うう、そんなの頼んでいないってば。
「そうだな。じゃ、俺からね」
沼田君は私をじっと見た。

「う〜〜ん。う〜〜〜ん？」
もしや、出てこないとか？
「えっとね」
「出てこないならいいよ。無理しないでも」
私がうつむき加減でそう言うと、美枝ぽんが、
「今どきの女子って感じがしない古風なところ」
といきなり言った。

「え？それ、褒め言葉？」
「もちろん。それから、シャイなところでしょ。きゃっきゃしない、落ち着いたところでしょ。動きとかが女らしいところでしょ。それに手足が長くて、すらっとしてて、髪が黒々としてて、綺麗で、そういうところも全部、羨ましい〜〜」

「あ、そうそう。髪、綺麗だよね」
沼田君が慌ててそう言っているのがわかる。
「他は？」
沼田君に聞いてみた。私のためにと言うなら、なんかあるでしょう。

「え？藤堂はどう思う？」
え？なんで藤堂君にふる？沼田君に聞いたんだよって…。あ、今一瞬、沼田君が企んでる目をした。そうか。わざと藤堂君に言わせようとしているな！
「…さっき言ったよ、俺」

「絵の才能？それもあるけど、もっと外面や内面や…」
「…ああ、八代さんが全部言っちゃったかな」
あほ～～。っていう目で沼田君が美枝ぽんを見た。美枝ぽんがそれに気が付き、
「ええ？でもほら、男子から見たらまたちょっと、違う良さがあるんじゃないの？ねえ。藤堂君」
とちょっと口元を引きつらせながら、そう聞いた。

「…男子からって、よくわかんないけど」
藤堂君はそう言って、首をかしげた。そしてしばらく黙り込んだ。
ああ、そんなに悩むならいいの。
「い、いいよ。沼田君といい藤堂君といい、あの、無理やりいいところを見つけようとしなくっても」
私がそう言うと、藤堂君はちらっと私を見た。

「無理に見つけようとはしてないけど…」
藤堂君はそう言うと、こほんと咳払いをして、
「ただ、ちょっとこういうの、俺も苦手って言うか、面と向かって言うのは、照れるよね」
とそう恥ずかしそうに言った。

「だけど！言わないと穂乃ぴょん、わかんないみたいだし！穂乃ぴょんに自信を持ってもらうためにも、ひと肌脱ごうぜ。な？」

「じゃ、お前がまず言ってあげたら？」
藤堂君に沼田君はそう言われてしまった。

「う、じゃあ、そうだな。俺が思ってたことを、まじで素直に言いますとですね」
ドキ。後ろ向きとか、暗いとか言わないよね。それ、褒め言葉じゃないか。
「意外と、健気？」
「え？！」
私が？

「きっと好きなやつができたら、一途に思い続けるタイプ？」
「…」
う。当たってるかも。顔がほてってきた。
「そういうところも、なんつうか、今っぽくないって言うか、古風なところかもね」
「それ、褒め言葉？」
私が聞くと、
「もちろん！」
と沼田君はうなづいた。

「なんで、そんなことお前わかるの？」
藤堂君が聞いた。
「え？いやあ、勘ってやつ？そんな感じするじゃん」
沼田君が慌てながらそう言った。
「ふうん」
藤堂君はちょっと納得いかないって顔をした。

「じゃ、ほら、司っち、言えよ」
「……」

しばらく藤堂君は黙っている。
「そうだなあ」
ぽつりと口を開いた。
ゴク。ちょっと、いや、かなり怖い。なんて言われちゃうの？でも、私は藤堂君の目にどう映ってるかも、知りたい。

「…ちょっと、空気が違う」
「え？！」
私も美枝ぽんも沼田君も同時に聞き返した。
「どういうこと？」
もう一回沼田君が聞いた。

「だから、なんていうか、結城さんの周りだけ、空気が違ってる」
「それ、褒め言葉？」
美枝ぽんが聞いた。
「ああ、そっか。褒め言葉じゃないか。でも、そう思ってたから」
「…どんな空気？」
沼田君が聞いた。うん、私も知りたい。

「どんなって、口ではうまく説明できないけど、時間の流れとかゆっくりな感じがするし。慌ただしくない、ああ、落ち着いた感じかな？」
「私、動きがどんくさいってこと？」
「そうじゃない。そうじゃなくて」
「落ち着いてる、一緒にいるとなんか、ほっとする」

美枝ぽんが言った。
「ああ、そう。そう言う感じ」
藤堂君が、美枝ぽんに救われたって感じで、ほっとしながらうなづいた。

「わかるよ、それ。きゃっきゃしてないし、動作が綺麗で優雅だし、一緒にいて穏やか～～な気持ちになるんだよね？」

「うん。それ」

また藤堂君がうなづいた。

「ま、待って。私、そんなことないよ。それに落ち着いてて物静かで癒されるのは、藤堂君だよ」

「俺？」

「うん。隣りにいて、安心するし、気持ちが落ち着くもの」

「…そうなんだ」

藤堂君がちょっと驚いて私を見ている。

「だね。それはあるね」

沼田君がうなづいた。

「そうなの？私、藤堂君とはあまり話さないから、わかんなかった。ただ、悠々としてて、何があっても動じないんだろうな、この人ってそういうふうには思ってたけど」

「うん、あるある。そういうところ」

私は思い切りうなづいた。

「なんだか、いいおっさんみたいだね、俺」

「じゃ、なんか似てるってこと？司っちと穂乃ぴょん」

「ああ、似てるかも。２人並ぶと絵になるもの」

美枝ぽんがそんなことを言い、私はびっくりするやら、顔が赤くなるやらで、困ってしまった。

藤堂君がそんな私に気が付き、何かを言おうとしたけど、横から、

「絵にするとしたら、水彩画じゃない？それか墨絵」

と沼田君が言ってきた。

「わ、地味」
私がそうぼやくと、
「違うよ。そんだけ、落ち着いてる雰囲気ってことだよ」
と沼田君が笑って言った。

「そうだよ。地味じゃなくて、絵になるくらい素敵ってこと。もっと穂乃ぴょん、自信持ちなって」
「…う。うん」
美枝ぽんにそう言われ、私はめちゃくちゃ抵抗しながらもうなづいた。
「司っちのいいところ、他は？」
沼田君がみんなに聞いた。

「頭いい。運動神経いい。英語の発音、うまい」
美枝ぽんがそう言った。
「え？もっと他にないの？」
「真面目」
「…」
沼田君が、私を見て、ほら、言えよって顔をした。

「…お、穏やか」
私は必死にそう言った。
「それから？」
美枝ぽんが聞いた。
「え？あ！弓道、上手」
「ふうん。あとは？」
今度は沼田君が聞いた。

「なんか、先輩にも頼りにされるくらい、頼もしい感じ」
「へえ、そうなんだ」

美枝ぽんが感心している。
「えっと。あとは、お、大人な雰囲気がある」
「…」
藤堂君が目を丸くして私を見た。

「あ、老けてるとか、おっさんとかそういうことじゃないよ?」
私は慌ててそう言った。
「あとは…」
すごく凛々しい。すごく笑顔が素敵。声も涼しげで好き。意外と筋肉質。隣りにいるとほっとするけど、ドキドキする。限りなく優しい。

なんて言えない。

「なんか、弓道部のみんなと仲いいし、見てると、仲間を大事にするんだろうなって、そう思えるかな」
そう言ってみた。これは、本当にそう思ってることで。
藤堂君は私を見ると、ちょっと照れくさそうに笑って、
「うん。大事な仲間だよ。そう見えてたっていうのは、嬉しいな」
藤堂君はぽつりとそう言った。

ドキン。今の顔、可愛かった。
目の前でこんな顔が見れるなんて、嬉しい。
私はドキドキしちゃって、それ以上何も言えなくなり、しばらく黙って下を向いた。

「友達思いなのか。じゃ俺は?司っちの友達?」
「え?沼田?そうじゃないの?」
「じゃあ、私は?っていうか、女の子は友達になれないのかな、もしかして」

「…いや、八代さんも友達でしょ？」
藤堂君は、表情も変えずそう言った。

「そうなんだ。じゃ、麻衣ちゃんや穂乃ぴょんも？」
「うん」
藤堂君はただうなづいた。
私は黙って聞いていた。友達、それでよかった。うん、それでいいんだよ。麻衣も美枝ぽんも友達、私もそう。それでいいじゃないか。

心の奥では、残念がってる。私は特別でいたかった。って言ってる。
「…」
なんだか、一気に寂しくなった。

放課後、昨日のこともあって、私は部活に出ず家に帰った。
しばらくはやっぱり、柏木君と会うの、抵抗がある。

友達か。考えちゃうな。私は柏木君のこと、友達とは思えないな、もう。
「は～～あ」
なんだかため息が出た。

翌日、教室に入ると、藤堂君と沼田君が楽しそうに笑っていた。
ああ、あの笑顔も可愛いな。
「おはよう」
2人に挨拶すると、2人が同時にこっちを向いて、
「おはよう」
と言ってきた。

「穂乃ぴょん。今、部活出てないんだって？」
「え？」
なんで知ってるのかな。
「昨日ちょっと美術室に行ったら、多分しばらく出てこないんじゃないかって」
「誰が言ってた？先生？」

「いや～～、何て名前か知らないけど、同じ学年の男子」
「柏木君？」
「名前はしんない。でもなんか、愛想のない奴」
「…」
そうか。柏木君も私が部活に出にくいってわかってるんだ。そりゃ、そうか。

「今日も出ない？」
「うん、帰るよ」
「じゃ、美味しいもんでも食っていかない？」
「美味しいもんって？」
「パン。美味いところがあるんだよ。昔ながらの喫茶店で、コーヒーも美味い」
「行きたい！」
「おし、決まり！」

ハッ。美味しいコーヒーにつられて、行きたいって言っちゃったけど、藤堂君、どう思ったかな。と思い、藤堂君を見ると、藤堂君は何もなかったのようにまた、沼田君と楽しそうに話を始めている。
だよね。私が誰とどこに行こうと、気にならないよね。うん。

「おはよう」
席に着き、美枝ぽんに挨拶をした。

「沼っちと帰りに寄るの？」
「聞こえた？」
「また、あれかな。藤堂君のことで、かな？」
「多分ね」

「穂乃ぴょん、藤堂君にコクらないの？」
「え？」
いきなり何？
「昨日の話、藤堂君は、穂乃ぴょんのこと、まだ好きだと思うけどな」
「でも、違ってたら？友達の関係もなくなっちゃうよ？」

「…だけど、他の子と藤堂君が付き合うようになってもいいの？」
「え？」
「昨日、江の島の駅のあたりを、お母さんとぶらついてて、私見ちゃったんだ」
「何を？」
「藤堂君、中学の陸上部だった後輩と、一緒にいたよ」

「え？」
「うちの学校の1年生。高校でも陸上部。私、中学の頃見かけたことあるけど、結構かわいくて、男子にモテてた」
「…」
「たまたま偶然会ったのか、学校から一緒に帰ったのかは知らないけど、女の子のほうが親しげに藤堂君に話してた」

「…そ、そうなんだ」
やばいな。思い切り気持ちが沈んだ。
「知らないよ。ここで藤堂君をつかまえてないと、後悔先に立たずだよ」

「…」
「ほんと、知らないからね～」
美枝ぽん。ちょっと顔つきが意地悪だ。
は～～～～。ああ、なんで私また、重たくなってるの?!
その日、麻衣が思い切り遅刻をしてきた。それどころか、目が真っ赤に腫れている。
昼休み、麻衣を誘って話を聞こうと食堂に行こうとすると、
「食堂じゃなくて、中庭に行きたい」
と麻衣が泣きそうな顔をして言ってきた。
「わかった。そうしよう」
沼田君も心配してて、藤堂君とくっついてきた。麻衣はぞろぞろ後ろから4人もついていったが、特に気にすることもなく、ただ暗い顔をしてふらふらと歩いていた。
「どうしたの?」
私が中庭のベンチに着き、そう聞くと、わっといきなり麻衣が泣きだした。
「だ、大丈夫か?」
沼田君もびっくりして、そう聞いた。美枝ぽんと藤堂君も心配そうにして麻衣を見ている。
「ふ、ふられた～～」
「え?!」
みんな同時に驚いた。
「ふられた?でも、あんなに仲良かったのに」
「そうだよ。麻衣、昨日も一緒にお昼食べてたよね?」
私と沼田君が聞いた。

「…昨日の昼も、様子が変だったの。それで気になって、帰り、あいつが部活終わるの待って、それで聞いたんだ」

「…なんて？」

「なんだか、よそよそしくなったよねって。そうしたら、いきなり頭をさげてきて、ごめん、別れてくれって」

「なんで？いきなり？」

「…いきなりじゃなかった。もう、1週間前から、元カノとより戻ってたって」

「元カノ？！」

美枝ぽんが大きな声で聞き返した。

「一回、喧嘩して別れたけど、お互い嫌いで別れたわけじゃないし、また付き合いたいってあっちから言ってきて、あいつ断れなかったって」

「もしかして、ひきずってた、とか？」

「そうみたい」

麻衣がまた、ぽろぽろと涙を流した。

「別れるって言ったの？麻衣ちゃん。そこで、嫌だって言わなかったの？」

「言えないよ。そんな女々しいこと」

「なんで？」

「なんでって、そんなのかっこ悪いもん。あいつの前では、泣きもしないで、あっそうって言って、昨日もさっさと別れたから」

「なんで～～？泣いてもいいじゃない。別れないでって言えばよかったのに」

「できないよ、私には…」

「…」

藤堂君と沼田君は何も言わず、黙っていた。私は麻衣の背中をなぜ、
「そうだよね。私でも言えないかも」
とそうつぶやいた。

「なんで?かっこ悪いかどうかなんて、関係あるの?」
美枝ぽんが聞いた。
「かっこ悪いとか、恥ずかしいとか、それだけじゃない。もう、あっちが別れるって言ってきたんだもん。きっと、何も言えないかな」
私がそう言うと、美枝ぽんは、
「美枝ぽんだったら、そんなの許せない。怒ってひっぱたくか、じゃなきゃ別れてあげたりしないよ」
と口をとがらせてそう言った。

「…麻衣、俺、ちょっと驚いてる」
沼田君がぼそって言った。
「え?」
麻衣が顔をあげた。
「仲良かったのは知ってるけど、そんなに彼氏のこと好きだったってのは、驚きだな」

「…好きじゃなかったら、こんなに続いてない」
麻衣が泣きながらそう答えた。
「でもさ、だったらなおのこと、これだけ好きなんだって、ちゃんと相手に伝えるべきだったんじゃないの?麻衣、後悔しない?」
沼田君が聞いた。

「…できないよ」
「なんで?プライドか何か?」
「元カノのほうを選んだんだよ?ずっとひきずってたんだよ?それ

がわかったんだもん。それなのに今さら、私はこんなに好きです。別れないでなんて言える？」

「…でもさ、伝えなきゃ、あっちだってわかんないって」

「…そうだよ。わかってないよ。だって私いつも、あいつが好きかって聞いてきても、誤魔化してきたもん。好きなのにちゃんと言わないでいた。だから、こんなことになったんだってことも、わかってるの！後悔するよじゃなくって、もう後悔してる！」

麻衣はそう言うとまた、わっと泣き出した。

「素直になれない自分も、大嫌い。強がってるけど、本当は弱い。そんな私、大嫌いなの」

麻衣がそう言って、涙を手で拭いている。

「そんな～。麻衣ちゃんは自分に自信を持ってて、堂々としてるように見えたのに、なんかがっかり」

美枝ぽんが本当にがっかりした様子で、そう言った。

「私はがっかりしないよ、麻衣」

「え？」

私の言葉に、麻衣が驚いて顔をあげた。

「素直になれない麻衣のことも、強がってる麻衣のことも、今、泣いてる麻衣のことも、私は好きだし、そういうところを見せてくれて、嬉しいし、何かの力になりたいって思ってるよ」

「…穂乃香…。ありがとう。うん、そういう穂乃香のことも私は知ってる。だから、友達をしてるんだもん」

そう言うと麻衣は、私に抱きついてきて、また泣いた。

ギュ。そうなんだ。麻衣は男らしい。でも、たまにすごく弱いところを見せる。そんなところはなんだか、愛しい。

芳美もいつも笑って、明るいし、一見強そうに見える。でも、けっこう弱い。だから、どこかで肩ひじ張ってる。でも、私とだと、肩ひじ張らないでも済むって言ってたことがあった。

「…中西さんのことよく見てたら、きっと強がってるんだなとか、素直になれないんだなとか、そういうの見えるんじゃないかな」

藤堂君が静かにそう話し出した。

「…」

麻衣が泣くのをやめて、耳を傾けている。

「それで、そういうところも含めてさ、中西さんのことを好きになってくれるやつ、きっと現れるよ。だから、大丈夫だよ」

藤堂君の声は優しかった。

「あいつは、私のことをわかってくれない程度の男だったってこと？」

「そう。そんな程度の男だよ」

藤堂君がそう言うと麻衣は、

「ありがとう。うん、そうだね」

とちょっと笑って見せた。

「でも、そんな馬鹿でも、私、けっこう本気だったんだ。なんだか、まぬけなやつって思ってたけど、そこも気に入ってたんだよね」

麻衣はそう言うと、鼻をずずっとすすってから、

「ふ…。ま、いいや。今度はあいつ以上のやつが現れるってことだよね」

とまた笑った。

藤堂君は優しく微笑み返した。ああ。そうか。藤堂君はそんなふうに言ってあげちゃうんだ。いいな。そういう藤堂君も大好きだな。

私は、麻衣がちょっと元気になったのも、そして藤堂君の優しさ

にまた触れることができたのも、なんだか嬉しくてじ～～んってしていた。

第18話　地の底

帰りに、約束通り私は沼田君と喫茶店に寄った。でも、2人だけではなく、麻衣も一緒だった。帰りにドヨンとしていた麻衣を、沼田君が誘い、麻衣もこのまま帰りたくないと言って、ついてくることになったんだ。

「はあ」
なぜか3人でため息をついた。
「やだな。つられて2人まで暗くならないでいいよ」
麻衣が言った。
「つられたわけじゃなく、まじで暗いんだよ」
沼田君がぼそって言った。

「同じく」
私も暗く言った。
「なんで？ふられたとか？」
「ふられちゃいないけど、うまくもいってない」
沼田君がまた、ぼそって言った。

「沼っちって、明るいんだか暗いんだか、わかんないよね」
「麻衣もそうだろ？」
「ま、まあね。前向きなんだか、後ろ向きなんだか、自分でもわかんないや」
「はあ」
また沼田君がため息を漏らした。

「美枝ぽんとなんかあった？」
私が聞くと、沼田君はさらに暗い顔をした。

「なんか聞いてない？穂乃ぴょん」
「え？」
「聖先輩のこと」

「ううん、何も」
「美枝ぽんさ、お母さんと一緒に聖先輩の店に行ったらしいよ」
「え？」
「聖先輩は店でバイトはしてないらしいけど、でも、偶然店のカウンターで夕飯食べに来たらしく、ばったり会えたんだって」

「へえ」
麻衣は普通に聞いてるけど、私は複雑だ。私だって、聖先輩のお店、行ってみたい。
「でさ、お母さんのほうが常連らしくて、聖先輩に話しかけて、美枝ぽんも一緒に話したらしくて」
「で？」
麻衣が聞いた。

「今までは、聖先輩のいろんな面が見えたらがっかりするだろうからって、遠くで見てただけなんだって。だけど、この前先輩が穂乃ぴょんに、そのままでいいって話をしたじゃん？あれで美枝ぽん、もっと聖先輩のことを身近で見て、知りたいってなったらしくて」
「え？そんな話聞いてないよ」

「そう？でさ、さっそく店まで行ってきたらしい」
「そんな話をしたの？美枝ぽん」
「うん、俺、たまにメールしてるから」
「美枝ぽんと？」

「去年も聖先輩のことで、俺協力するって言ったじゃん？あれ、今

でも有効かってさ」
「ありゃ。どうすんの？協力するの？」
麻衣が聞いた。
「どうしようかな～。ああ、どうしたらいいと思う？」

「協力するなんて、心にもないこと言うからだよ」
麻衣がきつくそう言った。
「え？」
「好きなくせに、そんな回りくどいことしたから」
「…」
沼田君はすっかり、這い上がれないくらいまで落ち込んでしまった。

「で、穂乃香はなんで、落ち込んでるの？友達でいいって思ったところじゃないの？」
「美枝ぽんがね、藤堂君が後輩の女の子と、話してたのを目撃したらしくって」
「話してただけでしょ？」
「そうなんだけど」

「そのくらいで落ち込んでたら、きりがないって」
麻衣に言われた。
「そうかな。あいつ、あまり女子とは話さないから、けっこうそれって、やばいかもよ」
地の底まで落ちてた沼田君が、這い上がってきてそう言った。

「え～。話してただけでしょ？」
「その後輩って、陸上部じゃない？」
「うん。そう。中学も同じだって」
「ああ、わかった。たまに教室に来てるよ。知らなかった？」

「え？知らないよ」
「廊下に呼び出されて、話してる。ああ、朝早いから、穂乃ぴょんは知らないか」
「そ、そうなの？」
「麻衣も見たことあるだろ？」
「あ～～。あの子。髪がショートカットの、元気な子」
「そうそう。けっこうかわいい子」

「大丈夫なんじゃない？向こうからただ来てるだけで、司っちはどうも思ってないと思うよ」
「だけど、いつもちゃんと話を聞いてあげてるじゃん」
「…まあ、そうだけどね」
知らない。そんなに早く学校行かないし。そうなんだ。教室まで来てたんだ！

「なあ、告白してふられるのと、友達でいて、相手に彼女ができるのと、どっちを穂乃ぴょんなら選ぶ？」
沼田君が聞いてきた。
「究極の選択？」
麻衣がそう言った。私は思い切り悩んでしまった。
「ふられたら、友達でもいられない？」

「かもなあ」
沼田君がつぶやいた。
「でも、友達でいながら、その彼女と仲よさそうに見てるのもつらそう」
「だよなあ」
また沼田君がつぶやいた。

「なんで、好きな相手と付き合えるって選択がそこにないわけ？」
麻衣が聞いた。
「…それが1番だろうけどさ」
沼田君はそう言ってから、
「確実に付き合える保証は、どこにもないでしょ」
とまた、小声で暗く言った。

「暗いな～」
麻衣はそう言ったけど、
「ま、いいや。今は暗い人たちといるほうが、落ち着く」
と言って、一緒になってため息をついた。
ドヨン…。きっと3人ははたから見たら、めちゃくちゃ暗いオーラを放ってるだろうなあ。

だけど、パンとコーヒーは美味しかった。
「なんだか、美味しいものを食べると、ちょっと救われるよね」
麻衣がそう言って、笑った。
「ありがとう。私一人じゃ、今日辛かったよ。でも、2人といれて癒された」

「こんなに暗い2人でも？」
私が聞くと、
「こういう日は変に明るくて、慰められたり励まされるより、くら～～くなってたほうが、逆に救われるんだって」
「そうかもな」
沼田君がそう言った。
そんなものかあ。じゃ、暗い私でも役に立てたんだなあ。

翌日、朝、ものすごい勇気をもって、朝早くに学校に行った。怖いもの見たさってことじゃない。ただ、その子と話す藤堂君がどん

ななのかを、見てみたかったんだ。

あ、本当だ。教室の前で、女の子と藤堂君が話をしてる。どうしよう。声をかけるべき？

「先輩！だから、ちゃんと聞いてくださいってば」

その子は本当に明るい笑顔で、藤堂君に話しかけている。

「聞いたよ」

「じゃ、どの曲が気に入りましたか？」

何の話しているの？

「司っち、おはよう」

私の後ろからそう言う声がして、びっくりして振り返ると、沼田君だった。

「あ。おはよう。あれ？」

藤堂君が私を見て、ちょっと驚いてる。

「お、おはよ。藤堂君」

「早いね。今日は…」

「え？うん。なんか早くに目が覚めたから」

なんだ、この言い訳。かなり苦しいぞ。

女の子は私を見た。そしてまた、藤堂君ににこにこしながら話しかけた。

グイ！沼田君に腕をつかまれ、私は教室に連れ込まれた。

「どうだった？見てみて」

「え？」

「司っち、どんな感じだった？」

こそこそと沼田君が聞いてきた。

「わかんないよ、こっちが沼田君に聞きたいくらい」

「う〜ん、あまりいつも、司っちのほうから話してないみたいだな。あの子から話しかけられてばかりいる」
「あ、さっきもそんな感じだった」

「何、こそこそしてるの？」
そこに美枝ぽんがいきなり現れた。
「うわ〜〜〜〜」
私も沼田君も、びっくりして飛び上がった。

「美枝ぽん、脅かさないで」
「本当だよ。びくった〜」
「で、何をこそこそと仲良く話してたの？」
「廊下で見なかった？」
沼田君が聞いた。

「何を？」
「司っちだよ」
「え？藤堂君なら、もう教室にいるよ」
私たちはそれを聞き、慌てて席のほうを見た。あ、本当だ。自分の席にもういる！
「なんだか、２人、仲いいよね。昨日も帰りにお茶してたんでしょ？もう、２人で付き合っちゃえば？」

美枝ぽんがそう言った。その声がやけにでかくて、教室中に響いてしまった。
教室にはまだ、半数くらいの生徒しか来ていなかったけど、みんなが私たちを見た。藤堂君までが振り返って見ていて、私は顔が蒼くなった。
だけど、顔面蒼白なのは私だけじゃない。隣りにいる沼田君も、凍り付いていた。そりゃそうだよね。好きな相手にそんなこと言わ

れたらさ。

そこに麻衣がやってきた。意外にも明るい顔で。
「沼っち、おはよう。どうした？顔に血の気ないけど？」
「ほっといてくれ」
「どうしたの？」
私に麻衣が聞いてきた。
「はは、ちょっとね」
私も顔が引きつり、何も言えなかった。藤堂君はそんな私たちを黙って見ていたが、すぐに前を向いてしまった。

席に着いた。
「ね。廊下に誰がいたの？」
美枝ぽんが聞いてきた。
「美枝ぽんが江の島で見たっていう、後輩の子」
「陸上部の？」

「朝早くに、教室まで藤堂君に会いに来てたんだって。それを沼田君が教えてくれて、私、今日は早くに来てみたの」
「それで、こそこそとしていたわけだ」
「う、うん」
そんで、あんなことを美枝ぽんが言うから、沼田君はまた、地の底まで行っちゃったんだよ。とは言えないか。

「可愛い子でしょ？そうか、教室まで来てるんだね。で、どうするの？穂乃ぴょん」
「…何が？」
「藤堂君にコクる気になった？」
ブンブン！首を横に振った。
「なんで？あの子に取られてもいいの？」

「…」
「いいの？」
「よくないけど」
「…」
美枝ぽんはそれ以上、何も言ってこなかった。

ボケら～～。次の休み時間、私は席でぼおっとしていた。すると、
「ね、付き合ってるの？」
と突然クラスの子が２人、こっちに来て聞いてきた。
「へ？」
「沼田君と付き合ってるの？」

「私？！」
「うん」
「付き合ってないよ」
「でも、仲いいよね」
「ううん。友達ってだけで、沼田君は美枝ぽんや、麻衣とも仲いいし」
私は慌ててそう言って、前の席にいる美枝ぽんにも後ろからつっつき、同意を求めた。

「だけど、さっき、八代さんが…」
「付き合ったらいいのにって言ったけど、２人は別に付き合ってるわけじゃないから」
美枝ぽんが振り向いてそう言った。
「そうなの？な～んだ」

「え？なんで？もしかして誰か、沼っちのことを好きなの？」
美枝ぽんがものすごい好奇心たっぷりの目で、そう聞いた。

「ううん。ただ気になって。もしそうなら、面白いなって」
面白がってるだけ?!

「このクラスってまだ、誰かと誰かが付き合ってるとか、浮いた話ないじゃない?1号がとうとう出たかって思ってたんだよね」
「…」
私はちょっと呆れて、何も言えなくなった。そんなことを面白がっている子がいるなんて。

「誰と誰が付き合いそうだと思う?」
美枝ぽんがそう聞いた。あ、美枝ぽんまで面白がってる。
「そうだな。あ、中西さんと藤堂君も、仲いいみたいだし、いい線いきそうじゃない?」
え?!
「でもさ、藤堂君、彼女いるでしょ」
え?!

「誰?彼女って」
美枝ぽんがまた、興味津々にそう聞いた。
「陸上部のあの子。よく教室まで朝来てるじゃない」
「今日もいたよね。あんだけ頻繁に来てるんだから、付き合ってるよね」
え?え?え?

「一緒に帰ってるのも見たことあるよ」
「そうなんだ」
美枝ぽんはそう言ってから、私をちらっと見た。
私はといえば、さっきの沼田君状態だ。地の底まで、一気に落ちて行った。

休み時間が終わった。次の授業はなんにも、頭に入ってこなかった。
「次、体育だよ。着替えいこうよ。穂乃ぴょん」
「え？いつ授業終わった？」
「気が付いてなかったの？早く、着替えに行こうよ。休み時間なくなるよ」
「うん」

重い足を引きずって、更衣室に行き、ジャージに着替え、校庭に出た。
ああ、体育をする気もまったくない。
なのになんで、体育のテニス、班が藤堂君と一緒なのかな。

「じゃ、男子と女子がダブルス組んで、今日は試合をします」
と先生がとんでもないことを言った。ああ、どうして、藤堂君と、ダブルスで一緒になるかな。
「よろしく、結城さん」
ああ。それもなんでこんな時に、そんな爽やかな顔で、挨拶してくるのかな。思い切り、ドキンってしちゃったよ。

藤堂君はテニスも上手だ。ほんと、運動神経いいんだな。でも、実は私もテニスは得意だ。なにしろ、小学校６年間、テニススクールに通っていたし。中学は軟式だから、部活に入らなかったけどね。
「ナイスボレー。結城さん！」
藤堂君がそう笑顔で言った。うわ。その笑顔も素敵だ。
藤堂君と同じコートで、テニスをしてる。これ、なんか、素敵じゃない？！最高じゃない？！

彼女のことなんて、すっかりどっかにすっとんでいった。

「ありがとうございました！」
試合が終わり、終わってみたら、私たちの圧勝だった。
「すごいね、結城さん。テニスしてた？」
「小学校の時に」
「そうなんだ！驚いた。ボレー、すごい上手いからさ」

「そ、そんな」
褒められると、どうしていいかわかんなくなる。
「藤堂君も上手だよ」
「俺？家族がテニス好きでさ。弟もテニス部なんだ。だから、旅行行くとよくテニスしてるんだよね」
旅行でテニス。なんだか、素敵な家族だ。

「…今度、またしたいね」
「え？」
「テニスコート借りて、テニスしたいね」
「う、うん。そうだね」
ああ、そんなことを言ってもらえるなんて。嬉しい。

「……沼田や、中西さんも誘ってみんなでできたら、楽しいだろうね」
「うん」
そ、そうだね。みんなでね。
「…」
藤堂君と私はベンチに座り、汗を拭いたり水を飲んだ。

「あのさ」
藤堂君が私を見ず、足元を見ながら話だした。
「なに？」
「さっき、八代さんが言ってた」

「え？」

「あ、いや。俺もちょっと思ってたんだ」

「何を？」

「…結城さん、沼田といると楽しそうだし、なんだか、似合ってるかなって」

……。え？

「ど、どういうこと？」

「付き合ったりしないのかなってさ」

どうしてそんなことを聞くの？喉まで出かけた声を飲み込んだ。

そして私の口から出た言葉は、

「藤堂君こそ、あの陸上部の後輩と付き合ってるんじゃないの？似合ってたよ」

藤堂君は、一瞬顔をあげた。でも、すぐに視線を下げた。

どわ～～～！！！！！！

私は何を言ってるんだ。なんてどえらいことを聞いてしまったんだ！！！

ショックだったとはいえ、いや、違う。一瞬、頭に来たんだ。だから、そんなこと言っちゃったんだ。

私のこと好きで、告白までしたくせに、どうしてそんなこと言うの？って。

でも、あれは、白紙にされたんじゃん。告白はなかったことになったんじゃないの！

「…似合ってた？」

藤堂君は下を向いたまま、そう聞いた。

「…か、可愛い子だった」

私も下を向いたまま、そう言ってしまった。
「……」
藤堂君は何も言わなかった。何か言って。いや、聞きたくない。
ええい、どっちなの、私。

「私と沼田君も似合ってると思うの？」
私からつい、そんなことを聞いてしまった。
「…なんか、一緒にいて楽しそうだよ。いつも…」
そんなことないっ。昨日だって、一緒に暗くなってただけだし！
「あいつも、よく結城さんに声かけたりしてるしさ」
それは、相談にのってるだけで。

「…もし、付き合うって言ったら？」
ハ！私、なんでこんなこと聞いてるの？
「いいんじゃないかな。沼田なら楽しい奴だし」
「……」
駄目押し。しちゃった。自分で…。

ず、ず、ずど～～～～～～～～ん！！！！地の底に、到着した音だ。

「わかった」
「え？」
「よくわかった」
「え？何が？」

「本当に本当に、もうどうでもいいんだってこともわかった」
「え？」
「それじゃあね、藤堂君」
私は抜け殻になって、その場を立ち去った。魂はもうどっかに消

えてなくなったよ。

空は青空。すごく晴れた日なのに、私は暗い暗い道のりを歩いているような気持ちで、テニスコートを出て、歩いていた。

第19話　一喜一憂

バカだ。とことん私はバカだ。
体育が終わり、更衣室で着替えをしていても、涙が出そうで必死にこらえた。
藤堂君に八つ当たりしたってしょうがないのに…。

「司っちとダブルス、よかったね」
そんな私の心の内を知らないで、麻衣が声をかけてきた。
「う…」
ボロ。思わず涙が出てしまった。

「あ、あれれ？なんかあったの？」
麻衣が驚いている。
「自分がバカだなって、ほんと、どうしようもないバカで…。消えてなくなりたいよ」
「は？」
休み時間がなくなりそうで、その時はさっさと着替え、教室に帰った。麻衣がお昼は中庭で話を聞くよって言ってくれた。

教室に入ると、沼田君が元気に、
「穂乃ぴょん、すげえテニス上手なんだな」
と声をかけてきた。
「すげえ上手ってことはないけど…」
と答えると、横にいた藤堂君が、
「いや、すごく上手かったよ。ボレーもバシバシ決まってたし」
と言ってきた。

「…」

私は藤堂君の顔も見れず、黙り込んで、そのまま自分の席に行った。
「あれ？穂乃ぴょん？」
後ろから沼田君のそう言う声と、
「司っち、何したんだよ？穂乃ぴょんと喧嘩？」
と沼田君が藤堂君に聞いてる声も聞こえてきた。

「…別に、何も」
藤堂君のぼそっていう声も聞こえた。藤堂君がどんな表情をしたのか、すごく気になったが、顔を見ることはできかなった。
「はあ…」
ため息を漏らすと、
「なんか、また暗いね」
と美枝ぽんが振り返って言った。

「…ちょっとね」
それだけを言って、私はすぐに教科書だのノートだのを机の上にだし、美枝ぽんには話しかけなかった。
もとはと言えば、美枝ぽんが私と沼田君が付き合っちゃえばいいのに、なんて言ったからだよ。と心の中で文句を言ってみた。

そういえば、私が藤堂君を好きなのを知ってるのに、なんで美枝ぽん、あんなこと言ったのかな。
は～～～。暗い。また、暗い。なんでこうも、最近、一喜一憂してるんだろう、私。

「それは恋をしてるからでしょ」
麻衣と美枝ぽんと3人で中庭でお弁当を食べてる時、一喜一憂してる話をしたら、麻衣にそう言われた。
「麻衣もそうだったの？なんだかずっと、うまくいってるように見

えたのに？」
「そんなことないよ。いろいろとあったよ」
「なんだ。でも、話してくれなかったじゃない」
「ごめん。穂乃香、彼氏いないし、そういう話、しずらかたっていうか」
「そっか。じゃ、芳美に相談してたとか？」
「うん」
「そうなんだ」

「芳美もいろいろとあったしね」
「そうなの？」
「うん」
「みんな、ただ楽しく恋をしてるわけじゃないんだね」
「そうだね。一喜一憂はしてるんじゃないの？みんなさ」

「いいな～」
麻衣の言葉に、美枝ぽんがそうつぶやいた。
「え？」
「私、身近な人を好きになると、面倒くさそうだし、付き合ったりしたら相手のアラが見えたりして、がっかりするだろうしって思って、遠くから見てるだけでいいやって思ってたんだよね」

「へえ、そうだったの？」
麻衣が聞いた。
「うん。でもさ、そういうのもつまんないっていうか、いろいろと悩んだりしてても、恋してる穂乃ぴょん、羨ましくなっちゃって」
「え？」
「麻衣も、ふられてあんなに泣くのって、そういう経験もしたことないし、羨ましかったな」

「羨ましい？私が？」
麻衣も驚いている。
「いいじゃない。青春してるみたいで」
「青春ねえ」

「は～～～あ」
美枝ぽんがため息をついた。
「それで、聖先輩に近づきたくなったの？」
私がそう聞くと、
「ううん。聖先輩はやっぱり、近くに行ったとしても、遠いんだよ」
と美枝ぽんが遠い目をして言った。

「え？」
「彼女いるし、それもすご～～く大事にしてるみたいだし」
「そうなの？」
麻衣が聞いた。
「うん」

「……じゃ、聖先輩のことはもう？」
「あきらめるよ」
そうなんだ。美枝ぽん、じゃあもっと周りの人に目を向けてみるとか？じゃあ、沼田君にもチャンスが来るとか？

「それより、なんでさっき、穂乃香、泣いてたの？」
「あ、うん」
麻衣に聞かれて、私は藤堂君との会話を2人に話した。
「え？！じゃ、私があの時、沼っちと付き合っちゃえばなんて言ったから？」
美枝ぽんが顔を引きつらせた。

「美枝ぽん、なんでそんなこと言ったの」
麻衣が怖い顔をして聞いた。
「ご、ごめん。あれはつい、羨ましくなっちゃって」
「羨ましい？恋してる穂乃香が？」

「ううん。沼っちと仲がいい穂乃ぴょんが…」
「え？！」
私と麻衣が同時に、大きな声をあげた。
「な、なに？」
その声に美枝ぽんが驚いた。

「い、いや、あの。それは、穂乃香が誰かと仲良くしてるから、羨ましくなったとか？」
麻衣が目を丸くしたまま聞いた。
「ううん。沼っちと仲いいから妬けちゃったの。だって、藤堂君のことが好きなのに、なんで沼っちとこんなに仲いいのって、つい…。ごめんね」

「……」
私は頭の中を整理していた。えっと、それって？沼っちと仲がいいから妬けたってことだよね？ってことは何？
「沼っちのことが好きなの？」
麻衣は私が頭の中を整理してる間に、そう聞いていた。

「それを実は、みんなに相談したかったの」
美枝ぽんが顔を真っ赤にさせて言った。
「え？」
今度は私も麻衣も、静かに驚いた。

「今朝、穂乃ぴょんと沼っちが、ひっついてこそこそしてるのを見て、ムッとしちゃって、あんなことを口走っていたっていうのはさ、やっぱり、私が沼っちを好きだからだと思う？」
美枝ぽんの質問に、私も麻衣も思い切りうんうんとうなづいた。
「ええ？やっぱりそう思う？二人ともそう思うの？」
「そりゃ、そうでしょ。どうでもいい男になら、そんなジェラシー感じないって」
麻衣がそう言った。
「もし、ひっついてたのが司っちだったらどうした？」
麻衣がそのまま続けて、美枝ぽんに聞いた。私はそんなのありえないって、心の中で思っていたけど、何も言わず、美枝ぽんの答えを待った。
「う～～ん、多分、穂乃ぴょん、よかったねって喜んでるかな」
「ほらね～～」
麻衣が美枝ぽんの腕をつついた。
「そっか、そうなんだ」
「へ～～。美枝ぽんが沼っちを。へ～～。でも、どこがよかったの？」
麻衣がまだ腕をつっつきながら聞いている。
「ど、どこって…」
美枝ぽんの顔が、みるみる赤くなっていく。こりゃ、決定的？沼田君が好きになったの？！
「麻衣がいない時、みんなでみんなの良さを言い合った時があって」
「そうなの？」
麻衣が私に聞いた。私はうんとうなづいた。
「で、その時、私の良さをちゃんと、沼っち、見ててくれてたんだ

って嬉しかったんだよね」
「ふうん」

そういえば、嬉しそうだったな。美枝ぽん。
「沼っちって、その…」
美枝ぽんがもっと赤くなりながら、話を続けた。
「人のためにも、一生懸命になるところあるでしょ？ああいうところも、場を明るくさせちゃうところも、いいなって前から思ってたんだよね」

「いいなって思ってたけど、今朝のことが決定打になったわけだ」
麻衣がそう言った。
「え？」
「穂乃香と仲よさそうにしてるのを見て、嫉妬しちゃって、好きだってことを認識したんでしょ？」
「…うん」

美枝ぽんがうなづいた。
「あ、でも」
美枝ぽんが一気に顔を青くした。
「どうしたの？」
私が聞くと、
「沼っち、私が聖先輩を好きなの知ってるし、それだけじゃない。聖先輩とのことを応援してくれるって、言ってるんだよね」

あれ？メールで確か相談されたとか言ってたけど、応援するって言っちゃったわけ？
「それってさ、私のこと別に、どうも思ってないってことか」
美枝ぽんがそう言って、暗くなった。
「そ、それは、ほら。これからも美枝ぽんの頑張り次第でどうにで

も」
麻衣が慌ててそう言った。
ええ？頑張り次第も何もないでしょ。もう、思い切り両思いだよ？！
「そっか。そうだよね。よし、私、頑張っちゃうよ。２人とも応援してくれる？」
「もちろん」
麻衣がにっこりと笑った。私は、ものすごく複雑な心境のまま、うんってうなづいた。
「穂乃ぴょん、なんだか、あまり協力したい感じじゃないの？」
それに気が付いた美枝ぽんが聞いてきた。
「まさか、そうじゃなくって」
「もしかして、穂乃ぴょん、沼っちのことが好きとか？」
「え？なんで？私は藤堂君のことが好きなんだよ？」
「そうだよね」
あれ、やばい。美枝ぽんが変に疑ってる。
「ごめん、ごめん。美枝ぽんがなんだか前向きだから、私は逆に後ろ向きで、今日も藤堂君に八つ当たりして、さっきもつらくて無視しちゃったし、私って駄目だなって、思っちゃって」
うわ。この言い訳、苦しいかな。
「そっか。なんだ、よかった。じゃ、これからは一緒に、前向きに頑張ろうよ。ね？」
美枝ぽんがそう言って、私の手をにぎった。
「う、うん」
思い切り、私は引きつり笑いをした。

それから教室に戻った。教室に入ろうとした時、中からいきなり人が現れ、私はぶつかってしまった。
「あ。ごめん。結城さん」
うわ。藤堂君だ。私は顔も見ずに、そのまま教室に入った。
あ、今のも無視したよね、私。ごめんって藤堂君謝ったのに。

視線を感じて振り返った。すると藤堂君が私をじっと見ていた。
パッ！私は藤堂君と目が合い、また顔を思い切り背けた。
「やっぱり、なんかあったんだ」
私のすぐ横に沼田君が来て、小声で聞いてきた。
「え？」
「なんだか、穂乃ぴょん、司っちのこと避けてない？」

「わかる？」
「司っちも、気にしてたよ」
「え？」
「昼、3人でさっさとどっか行っちゃったじゃん？あれも、きっと俺のこと避けてるからだよなって。俺、嫌われるようなことしたのかなって、司っち、かなり気にしてたけど」

「そうだったの？」
「何？何があったの？」
沼田君が、しつこく聞いてきた。また視線を感じ、後ろを見た。すると今度は、美枝ぽんがじいっと私たちを見ていた。
うわ。そうだった。こうやってあまり沼田君と仲良くしてると、美枝ぽんが焼もちやくんだった。

「あ、あとで話す」
私はそれだけ言って、そそくさと自分の席に着いた。
「穂乃ぴょん」

美枝ぽんが前の席に座り、小さな声で私に話しかけてきた。
「な、なあに？」

「やっぱり、２人で仲よさそうにしてるの見ると、ちくちく胸が痛むよ」
「ごめん」
「穂乃ぴょんが謝ることないけど…」
美枝ぽんが暗くそう言ってから、
「私も、どんどん話しかけて仲良くしたらいいんだよね」
と突然明るくなった。

「う、うん。そうだよ」
「美枝ぽん、頑張る！」
さすがだ。すぐに前向きになれるところが美枝ぽんのすごいところだよね。
私は…。藤堂君も席に戻ってきた。その横顔がなんだか、暗い感じがするのは気のせいかな。それとも、私が無視しちゃったりしたからかな。

ああ。私は、やっぱり根暗です。

部活に出る気はまだないので、帰り支度をのんびりとしながら、私は教室にいた。美枝ぽんは、
「部活行ってくるね」
と教室を出て行った。

美枝ぽんはアニメ好き。だからそっち方面の同好会にでも入っているのかと思いきや、意外や意外、華道部にいる。ただ単にお花が好きなだけだと言ってたけど、小さなころはお花の妖精が見えたんだと言っていた。あれ、美枝ぽんのことだから、本当に見えていた

のかもしれないよな。

藤堂君は沼田君とまだ、話をしている。そしてちら、ちらっと沼田君と私を見ている。なんだ。私のことでも話しているのかなあ。かなり気になるんだけど。

「今日はまっすぐ帰るの？穂乃香」

麻衣が聞いてきた。

「うん、帰るよ。麻衣は？」

「私は久々に、遊んで帰るわ」

「遊ぶ？芳美と？」

「芳美はデート。昨日同中の子からメール来て、カラオケでも行こうって。私がふられたのを知ってるから、多分慰めてくれるんじゃないかな」

「そっか。仲良かった子、時々遊んでるんだよね？」

「そう、４人でいまだに、つるんでる」

「じゃ、楽しんできて」

「うん。それじゃね」

麻衣がカバンを持って、沼田君と藤堂君にもバイバイと言って教室を出て行った。

「穂乃ぴょん！」

沼田君が自分の席から声をかけてきた。

「え？」

「部活出ないの？」

「うん」

「なんかまた、うまいもんでも食って帰る？」

「…どうしようかな」

2人でってことになると、美枝ぽんに悪いな。
「それとも、30分くらい待って3人で行く？」
「3人？」

私は誰が加わるのかなって、考えた。すると、沼田君は目の前にいる藤堂君の肩をポンとたたき、
「司っち、今日ミーティングだけなんだって」
と言ってきた。
「え？」
思い切り顔が引きつった。沼田君と、藤堂君と3人？じょ、冗談でしょ。何を話したらいいの。あんなこと言われた後で。

「いいよ、俺は」
私の引きつった顔に気が付き、藤堂君がそう言った。
「二人で行って来いよ。そっちのほうがきっと、結城さんも話しやすいんじゃない？」
え？
「俺がいると、雰囲気壊すかもしれないし」
なんの？！

もしかして遠慮してる？私と沼田君をくっつけたがってる？
「え～～。そんなことないだろ？もし2人喧嘩でもしたんなら、ここいらで仲直りすりゃいいじゃん」
沼田君がそう言った。
「喧嘩なんてしてないよ」
藤堂君が言った。

「じゃ、何？司っち、穂乃ぴょんを怒らせたとか？」
「…」
沼田君の質問に、藤堂君は黙り込み私を見た。私は視線を外し、

下を向いた。
「…そうなのかな。俺もなんで怒らせたか、よくわかんないんだけど…」
そうだよね。私が沼田君と付き合ったほうがいいって言われたから怒ってるなんて、思いもしないよね。

だいたい、そんなことで怒る私が変なんだよね。
「怒ってないよ」
私がぼそってそう言うと、え?って2人で聞き返した。
「怒ってないよ。怒る理由もないし」
私はもう1度、そう言った。

「…だったら、何か傷つけたのかな。俺…」
藤堂君が、ちょっと気弱な声でそう聞いてきた。
「……」
どう答えよう。そうなんだ。傷ついたんだと正直に言う?だいたい、何もなかったら、私のこの態度は思い切り変だよね。

「…何?なんかそんなに変なことを穂乃ぴょんに言ったの?司っち」
「…えっと?う〜〜〜ん」
藤堂君が腕を組んで悩みだした。
「もしかすると、言ったのかな。考えなしに言ったかもしれないな」
「なんて言ったんだよ」

「…」
藤堂君が沼田君を見て、
「八代さんがお前と結城さん、付き合ったらいいのにって言ってたから」
といきなり言い出した。
「え?!俺と穂乃ぴょんが?」

「朝、言ってただろ？」

「い、言ってたね。そういえば」

沼田君が一気に暗い顔になった。

「それで…」

藤堂君が言葉を濁した。

「それで、何？」

沼田君が藤堂君に聞いた。でも、藤堂君はなかなか言えずにいた。

「藤堂君が、沼田君、楽しいやつだし、付き合ったらいいんじゃないかって、勧めてくれたの」

私がそこで、言葉をはさんだ。すると沼田君は目をまん丸くさせ、

「え～～～～～～？！！！」

と、ものすごく驚いた声を出した。

「お、お、お前、そ、そんなこと言っちゃったの？」

沼田君がそう藤堂君に聞くと、藤堂君は自分がとんでもないことを言ってしまったのかっていうような表情をした。

「言っとくけど！ちゃんとここではっきり言わせてもらうけど、俺、好きな子いるんだよ？それも、穂乃ぴょんにいろいろと相談にのってもらってたくらいだし！穂乃ぴょんの恋の相談だって、俺のってたし、だから俺らが付き合うなんてこと、絶対にありえないんだって！」

沼田君が、そう藤堂君に向かってかなり大きな声で言った。

「……え？」

藤堂君がびっくりしている。

「ほんと、考えなしに言ってるよな。司っち」

「わ、わりい。お前に好きな子がいるってのも、知らなかったから

…。それに、結城さんに好きな人がいるのも、知らないで…。って、あ、そうか。聖先輩か」
「ちげえよ。そうじゃなくて」

沼田君がそう言った後に、あ、やべえって顔をした。
「と、とにかく！俺らが付き合ったらいいなんてさ、美枝ぽんがそう単にからかっただけで、俺らはほんと、そんな気もなくて、そう。美枝ぽんがさ…」
ああ～～。沼田君が思い切り、沈んでいく。それ、ジェラシーで言ってただけなのに、美枝ぽん。

「は～～～～～～～～～」
沼田君が椅子に座り込み、落ち込んでしまった。
「そうだった。今、俺、司っちや、穂乃ぴょんのことで、あれこれ言ってる場合じゃなかったんだ。自分のことで精一杯だってのに、あ～～あ」

「何を落ち込んでるの？お前」
藤堂君が聞いた。
「…だから、好きな子のことで」
「え？」
「それをちょっくら、穂乃ぴょんに話を聞いてもらおうと思って誘ったんだった」

「いいよ、聞くよ？落ち込んでるんだったら、一緒に落ち込みに付き合うけど」
私がそう言うと、沼田君は私をちらっと見て、
「じゃ、うまいもんでもなんか食いながら、話すとするか」
と立ち上がった。

「…落ち込んでるって、もしかして、八代さんが原因で？」
藤堂君がぴんと来たらしい。
「そうだよ。俺が好きなのは美枝ぽんだよ。司っち、俺が穂乃ぴょんを好きだとでも思ってた？」
「…あ、うん。仲いいから」

「ちげえよ。だから、読みが浅いって言うんだよ、司っち」
「…そうだったんだ」
藤堂君が、小さくぼそって言った。
「ミーティング、行かなくていいの？」
「え？あ！行かなきゃ！」

「もし、終わって合流できるんなら、メールしろよ。いいよね？穂乃ぴょん」
「……うん」
「わかった。じゃ」
藤堂君は、カバンを持って、慌てて教室を出て行った。

「司っちの発言で、落ち込んでたのか」
藤堂君がいなくなり、沼田君がそう言った。
「うん」
「そりゃ、落ち込むよな。俺と付き合ったらなんて、好きな相手に言われりゃ」
「うん」

「俺も、美枝ぽんに言われて、果てしなく落ち込んだし…。じゃ、一緒に暗くなりに行きましょうか」
「うん」
２人でとぼとぼと校舎を出て、駅に向かった。
あれ？でも、沼田君は落ち込む必要ないじゃない？だって、両思

いなんだし。
う、でも。私からばらすわけにはいかないよねえ。
さて、どうしたらいいんだ。困ったもんだ。なんて思いながら、私はあとから藤堂君が合流するのも、美枝ぽんのことも、考えだしたらわけわかんなくなり、複雑な気持ちのまま、歩いていた。

第２０話　恋下手？

沼田君と、今日はお茶にしようかと言って、ドーナツ屋に入った。
沼田君は、さっさとドーナツ屋にいると、藤堂君にメールした。
「来れたら来いよ」
と書いて送ってたけど、来るのかな。そもそも、甘いドーナツなんて藤堂君は食べるんだろうか。

「沼田君は甘いもの好きなの？」
「俺？そんなでもないけど、落ち込むと、甘いもの食べたくなるんだよね」
「一緒だ」
そう言いながら、ドーナツを食べ、
「美味しい。ちょっと救われた」
と２人でつぶやいた。

「司っちって、穂乃ぴょんに好かれてるってこと、まったくわかってないよな」
「…だろうね」
「もうちょっとさ、アピールしたら？」
「どうやって？」
「う～ん。どうやってって言われても、わかんないけど」

「沼田君こそ、美枝ぽんが好きだってこと、藤堂君ですら気づいていなかったよ」
「司っち、そういうの鈍そうじゃん」
「私だって、気づかなかった」
「え？」
「まったく、はたから見てたらわかんないよ」

「そ、そうなんだ」
「あまり話しかけてもいないし」
「そりゃ、緊張するからさ」
「沼田君でも？」
「するよ。たまに、ズキッて突き刺さること言われちゃうし」

「美枝ぽんから？それでも、好きなんでしょ？」
「うん。あ、俺ってもしかして、M？」
「M？」
「マゾ？」
「え～～。そ、そうなのかな？」

「まあ、いいや。それよりもだ。どうアピールするかだよな」
「うん」
アイスコーヒーを沼田君は飲み、私はアイスティを飲んだ。そして同時にため息をついた。
「やっぱ、コクってみるかな」
「え？」

「そうしないと、なんにも始まらないかもしれないし」
「うん。沼田君、告白しなよ」
だって、両思いなんだもん。大丈夫だよ。っていうのは、心の中で言ったけど。
「じゃ、穂乃ぴょんもコクれよ」

「私？！」
声が裏返った。
「無理、無理。だってわかるでしょ？どうとも思われてないって」
「穂乃ぴょんが告白したら、変わってくるかもよ」

「悪い風に変わったら？」

「悪いってどんな？」
「たとえば、もう話もできなくなるとか」
「まさか」
「わ、わかんないよ。避けられたりとか」
「それはないんじゃないの？」
「…でも、今の関係は駄目になるかも」

「悪いほうばかりに目を向けないで、いいほうに目を向けようよ。もしうまくいけば、付き合えるんだよ？」
「…そ、そんなこと考えられないよ」
「なんで？」
「なんでって、やっぱり、自信ないし」
「…まあ、そういう気持ちもわからないでもないよなあ。でも、思い切ってコクってみるのもいいと思うよ？」

ドスン…。突然、沼田君の隣の席に、カバンが投げられた。
「え？」
私と沼田君が同時に顔をあげると、
「ドーナツ買ってくる」
と藤堂君がそう言って、カウンターのほうに歩いて行った。

「い、いつの間に来たのかな」
「さあ」
まったく気が付かなかった。ああ、驚いた。
あれ？もしや私たちの会話、聞いてたかな。いや、聞こえてないよね。

藤堂君はドーナツとアイスコーヒーをトレイに乗せ、席に来て、

テーブルにトレイを乗せると、カバンを今度は床に置き、沼田君の隣に座った。
「藤堂君でも、ドーナツ食べるの？」
私が聞くと、
「え？食べるけど、なんで？」
と、藤堂君が聞いてきた。

「甘いもの、苦手なイメージがあって」
「俺？いや、けっこうよく食べるよ」
そうなんだ。見かけによらないものだな。
「部の連中とも来るしさ」
「みんなで？」
「うん」

へえ…。
藤堂君はお腹が空いていたのか、黙ってもくもくと食べだした。
「一つで足りるの？」
沼田君が聞いた。
「あ～、足りそうもなかったら、あとで買ってくる」
藤堂君はぶっきらぼうにそう言った。

「そういえばさ、俺、今日あの子のこと見かけたよ」
「誰？」
「朝、教室来るじゃん。陸上部の…」
「ああ、野坂さん」
「野坂さんっていうの？６時限目、実験室に移動したじゃん。俺、先生に頼まれて、実験室の鍵を取りに行ったらさ、ちょうどいたんだよね、廊下に…」

「ふうん」

「男と一緒だった」
男？あの可愛い藤堂君の後輩の子だよね。
「彼氏だろ？」
「え？あの子、彼氏いるの？」

「さあ、でも、いるんじゃないの？」
藤堂君は、そう答えると、アイスコーヒーをゴクっと飲んで、
「やっぱ、もう一個買ってくる」
とカウンターに行ってしまった。

「…。穂乃ぴょん」
沼田君が小声で、
「司っち、あの野坂って子のことは、なんとも思ってないみたいだな」
と言ってきた。

「え？」
「あんだけ、どうでもいい感じで話してるんだから、きっとなんでもないんだよ」
ああ、それを確認するために、あの子の話を持ち出したの？
そこに藤堂君が戻ってきた。

「沼田は一つで足りるの？」
「うん。そんなに俺、甘いもの得意じゃないし」
「え？あ、そうか。結城さんがドーナツ、好きだったとか？」
「ううん、別に」
「あれ？じゃ、なんでここに入ったの？」

「なんか、甘いものでも食って、心の傷を癒したくなって」
「…そっか。八代さんに言われたことが、そんなに傷ついたのか」

藤堂君はそう言うと、ドーナツを食べだした。
「お前って、そういうこと無頓着そうだよね。司っち」
「無頓着って？」
「あまり、そういうこと言われても、傷つきそうもない」
「俺が？」
「うん。気にしないんじゃないの？」
「……」

藤堂君は黙り込んだ。今のはさすがに、藤堂君に失礼じゃないのかな。
「そうかもな。それに考えなしでものを言ってるしな」
藤堂君はぽつりとそう言うと、私のほうを見て、
「今日は、その、軽はずみなこと言ってごめん」
と謝ってきた。

「え？」
「沼田と付き合ったらいいとか、そういうこと軽く言っちゃって」
ズキ。やっぱり、軽く言ってたんだ。う。謝られても傷つく。
「…沼田が八代さんを好きだなんて、まったくわかんなかったし、それに…」

しばらく藤堂君は黙った。３人の中で変な空気が一瞬流れた。
「…それに、なんだよ、司っち」
変な空気に気が付いたのか、沼田君が聞いた。
「あ、いや。結城さんに好きな人がいるのも、気づけなくて。俺って、そういうのやっぱり、無頓着なんだろうなって思ってさ」

藤堂君はそう言うと、視線を下げた。そしてまた、黙り込んだ。
「…」

その好きな人っていうのは、藤堂君のことなんだよ。私は心の中で言ってみた。言ってみたら、なんだか空しくなった。だって、まったく私の気持ちは、藤堂君に届いていないんだもん。

「俺、水もらってくる」

アイスコーヒーが空になった沼田君がそう言って、席を立った。

すると、藤堂君はすかさず私を見て、

「告白するの？」

と突然聞いてきた。

「え？」

「あ、ごめん。さっき、聞こえちゃって」

やっぱり、聞いてたのか。

私はグルグル首を横に振った。

「なんで？」

「む、無理なの。どう見てもふられるのわかってるの」

私は下を向いたまま、そう言った。

「…聖先輩じゃないんだよね？」

「…うん」

ああ、沼田君が今日、口を滑らせたから、聖先輩じゃない人が好きなんだってばれちゃったじゃないか。

「…自信、ないの？」

「うん」

「…そっか」

藤堂君は静かにそう言った。

沼田君が、私や藤堂君の分の水まで持ってきてくれた。

「あ、ありがとう」

私は水を受け取った。藤堂君も水を受け取り、水を少し飲んだ。
「は〜あ」
沼田君は椅子に座ると、ため息をついた。
「世の中さ、両思いになってるやつって、どんくらいいるんだろうね」
「え？」
「それに、どうしたら両思いになんてなれるんだろうね」
「沼田君って、付き合ったことあるの？」
「ないよ。いつも、ふられるか、片思いのまま終わるか、のパターン」
「そうなの？一回も？」
「うん。なんで？付き合ったことあるように見える？」
「見える」
私がそう言うと、藤堂君もうなづいた。
「友達どまりなんだよ、いつも。いい人なんだけどね、で終わるんだ」
「そっか〜」
そうなのか。話しやすいし、一緒にいて楽しいだろうし、だけどそれって、友達にはなりやすいけどって、そういうことなのかな。
「穂乃ぴょんは？」
「ないよ」
「中学も？」
「うん。一回もない。やっぱり、片思いで終わるパターンが多いの」
「司っちは」
「ない」

「だろうね」
沼田君がそうきっぱりと言った。
「だろうねって、予想ついてたってこと？」
藤堂君が聞いた。

「うん。女の子と話すのも苦手だろうなって」
「まあね」
藤堂君は小さくうなづいた。
「なんだよ、ここにいる全員が、恋べたかのかよ」
「何、それ」
藤堂君が沼田君の言うことに、眉をひそめて聞き返した。

「だから、恋するのが下手ってこと」
「下手とか上手とかあるの？」
藤堂君は私が前に、質問したのと同じことを質問した。
「あるだろ？上手くやってるやつもいると思うよ？」

「たとえば？」
「恋の駆け引きがうまいとかさ」
「…」
藤堂君が黙り込んだ。
「司っちは、まったくそういうの駄目だろうね」
「駆け引きのかけかたもわからない」

「だよね。俺の場合はさ、駆け引きしてるように見えて、まったくできてないってことが多いからな」
「…駆け引きなんて必要か？」
藤堂君が聞いた。
「必要な時もあるんじゃないの？じゃなきゃどうするんだよ。真っ向勝負とか？」

「いや、勝負事とも違うんじゃないかなって思って」
「だったら、なんだよ。どうしたら思いが通じるってわけ？」
「通じる？」
「そうだよ。駆け引きもしない。真っ向勝負もしない。じゃ、どうやって思いを告げたり、相手を振り向かせるのさ」

「…振り向かせる？」
「あれ？司っち、そういうこと考えたことないわけ？」
「…」
藤堂君が考え込んだ。

「好きな子ができたら、振り向いてほしいだろ？やっぱり」
「自分のことを好きになってもらいたいってことだよな？」
「うん」
「……」
藤堂君はしばらく考え込んで、
「そうだな。そうなったら嬉しいけど」
とぽつりと言った。

「そうだろ？」
「だけど…」
「だけど？」
「まずは、相手に幸せになってほしいっていうか、そういうのも望むけどな」
え？！

私も沼田君も、同時に驚いた。
「おかしいかな、俺」
それを見て、藤堂君が聞いてきた。

「おかしくはないけど、でもさ、どうせ幸せになってもらうなら、自分で幸せにしたくないか？」
「え？」
今度は藤堂君が驚いている。
「自分といて、笑顔でいるのを見れたり、自分といて相手が幸せだって言ってくれたら、嬉しくないか？」
「そりゃあ、それが何より嬉しいよ」
「だろ？」
「…そっか。それはあまり、考えたことがなかった」
「は？」
藤堂君の言葉に、また沼田君が驚いている。私も今、びっくりして目が点になっている。
「俺が幸せにできるって、思ってないのかもな。ああ、じゃ、俺も自信がないのかな」
藤堂君はそう言うと、黙り込んだ。
「なるほどね。司っちでも、自信がないのか。俺と同じなんだ」
ドキドキ。さっきから聞いてると、藤堂君は好きな子が今いて、その子のことを言ってるように聞こえちゃう。
「自信なんてないよ。俺も」
藤堂君が苦笑いをして、静かにそう言った。
「一緒か」
沼田君はまた、ぼそっとそうつぶやいた。
「結局は、恋上手かどうかって、自分に自信があるかないかの差なのかなあ」
沼田君がそう言うと、藤堂君はしばらくしてから口を開いた。

「やっぱり、下手も上手もないだろ。それに、誰かを好きになるってことは、自信も関係ないのかもしれないし」
「え？どういうことだよ。司っち」
沼田君が聞いた。私も聞きたいよ、どういうこと？
「好きになってもらう自信は、俺もあまりないよ。だけど、好きでいる自信ならあるかな」
え？
「好きでいる自信？ってなんだよ」
沼田君が聞いた。
「そのまんまだよ。相手をどれだけ好きか。誠実に思ってるか。そういうことだよ」
「…そういう自信なら、司っちはあるわけ？」
「…うん」
「相手を誠実に好きだって言える自信ってこと？それって、相手を自分が幸せにする自信とつながらないの？相手を傷つけたりしないとか、泣かせないとかさ」
「……」
藤堂君はまた、黙り込んだ。そして、顔を下に向けたまま、
「そっか、そういうことで言ったら、俺、まったく駄目なんだな」
とつぶやいた。
駄目って？
今、好きな子に対して、傷つけたり、泣かせるようなことしたの？
っていうか、やっぱり、好きな子がいるってことだよね。
ドヨン。またきっと、この3人の周りは、暗い空気が放たれているんだろうなあ。

第２１話　保健室で

私も好きになってもらう自信はまったくない。でも、好きになる自信ならあるかもしれない。ただし、自分が相手を幸せにする自信は、やっぱりない。

でも、藤堂君も自分に自信がないんだっていうことを知れて、ちょっとほっとしているような気がする。

そんな藤堂君も、好きな人の幸せを望む藤堂君も、やっぱり好きだなあって思ってしまう。

私、重症かな。

ドーナツをぺろりと2個食べてしまうのも意外だったし、アイスコーヒーにガムシロップをいれるのも意外だった。

そんなところも知れて、喜んでいる私がいる。

それに、あの陸上部の子のことも、何とも思っていないようで、安心した。

あれ？でも待てよ。もし、相手が幸せであることを望むのなら、野坂さんに彼氏がいても、野坂さんが幸せならそれでいいってこと？

私はお風呂に入りながら、そんなことをずっと考えていて、のぼせてしまった。

翌日、あまり具合がよくないのに、無理して学校に行った。

「なんだか、顔色悪いよ？穂乃ぴょん」

美枝ぽんがそう言った。

「わ、わかる？」

「わかるよ。なんで学校に来たの？休んじゃえばよかったのに」
う。だって、やっぱりなんだかんだ言いつつも、藤堂君に会いたいんだもん。
「保健室行って、休んでいたら？」
「そ、そうする」

1時限目が終わり、私は美枝ぽんについてきてもらって、保健室に行った。
「次の休み時間に、様子見に来るからね」
美枝ぽんがそう言って、戻って行った。
「熱はないようね」
養護の先生がそう言って、
「少し横になっていなさいね」
と言ってくれた。

「はい」
私はベッドに横になった。
うん。熱はない。でもきっと、貧血だ。頭がくらくらする。

いつの間にか私は眠っていたが、話し声で目を覚ました。
「先生、いつもの薬」
「また頭痛薬？あなた薬漬けになるからもう駄目よ」
「じゃ、ここで休んでいっていい？ベッド空いてる？」

「一つふさがってるけど、もう一つ空いてるわよ」
「先生も一緒に休む？」
「何をバカなこと言ってるの」
この声、まさか柏木君？！
シャ…！カーテンがいきなり開いた。

「あれ？」
「柏木君、そっちのベッドじゃなくて、窓際のほうよ、空いてるのは。ほら、早くカーテン閉めてあげて。今、気分悪くて寝てるんだから」
「起きてるよ、先生。それに、この子、俺の知り合い」
「あら。起きたの？具合どう？」

先生が柏木君の後ろから顔を出した。
「…まだ、頭がくらくらしてます」
「じゃ、もう少し寝てなさいね」
「はい」

「頭痛くて寝てたの？」
「…」
柏木君に聞かれたが、私は答えなかった。
「ほら、柏木君。休んでるんだからもう話すのやめて、そっちのベッドにあなたはいなさいよ。ちょっと私はこれから、職員室に行かないとならないから、ちゃんと寝ていなさい」

「へ～～い」
柏木君はカーテンを閉め、隣のベッドに寝転がったようだ。
「…こんなところで会うとはね」
柏木君がそうつぶやいた。
「いつになったら、部活出てくるの？結城さん」

「…」
「出られないのって、俺のせい？」
「…」
「悪かったって反省してるよ」
嘘だ。声が全然、反省してない。

「…具合悪いの、風邪？」
「もう寝るから、黙ってて」
「…いいの？俺が隣にいるのに寝ちゃって」
「え？」
「その間に襲うかもよ」

「！！！」
し、信じられない！
「はは。嘘だよ。今、焦った？」
この人、やっぱり、何を考えてるかわかんない。
シャ…。柏木君がカーテンをまた開けた。そして、またベッドに寝転がった。

「顔が見えてるほうが話しやすいね」
柏木君からそう言われ、わざと私は背を向けた。
「…やっぱ、俺、相当嫌われたか」
私はまだ黙っていた。

「たった一人の友達も、俺、いなくなっちゃったんだな」
「友達だなんて思ってないくせに」
「…なんでそう思う？」
「友達だったら、あんなことしない」

「大当たり」
ム！やっぱり、この人、からかってるんだ。
「友達になろうなんて、最初から思ってないよ」
「…じゃあ、もう話しかけないで。友達でもなんでもないんだから」
「まだわかんない？」

「何が？」
私はずっと後ろを向いたまま、むっとしながら答えていた。
「俺が、結城さんのこと好きだってこと」
「え？」
「いい加減気が付いてたよね？」

またからかってんの？！
「その手には乗らないから」
「何？それ」
「またからかってるんでしょ？」
「からかってる？からかったことなんてないよ。一回も」

「嘘だ」
「いい加減にこっち向かない？」
「…」
私は無視して、後ろを向いたままでいた。
「好きじゃなかったら、友達になろうだなんて言わないし、あんなこともしないよ」

「す、好きだったら、あんなことしないんじゃないの？傷つけるってわかってて、なんであんなこと」
「傷ついた？」
「…」
む、ムカつく。傷つかないわけないじゃん！
「ごめん」

「心から悪いって、思ってないくせに」
「思ってるよ。それに後悔もしてる」
「嘘だ」
「本当だけど。こっち向いて顔見てくれたらわかるんだけどな」

それでも私は背を向けたままにしていた。

「…ものすごく後悔した。部活もきっと出てこなくなるだろうなって思ったけど、ほんと、出てこなくなったし」

「……」

「ごめん」

今度のごめんは、思い切り沈んだ声だ。

「参ってるよ。もう嫌われただろうってこともわかってる。そんな嫌われるようなことをした自分に、腹が立つ」

「…」

「どうしたら、許してくれるかな」

「……」

「もう無理か」

「友達とも、もう思えないかもしれない」

「…俺のこと？」

「そう。悪いけど、ご両親のことで苦しんでいたとしても、友達が誰もいないんだとしても、私も、もう柏木君とはかかわりたくない」

「そんなに嫌われた？」

「…」

「男と付き合ったことないんだっけ？」

「ないよ」

「キスは？」

「ないよ」

「……そうか」

あ、柏木君の声が、ものすごく沈んだ。

「ごめん。本当にあの時は、俺、どうかしてた」

「…頭痛いから、私もう休みたい」
「…部活は出てきなよ」
「…」
「今日、俺、部には出ないから、一週間くらい、また海でも見に行くからさ、結城さん出てきて大丈夫だから」
「…」
私は黙って、布団を頭からかぶった。

「それと、ここからも今すぐ出て行くからさ」
柏木君はそう言うと、カーテンを閉めて保健室を出て行った。
「…」
あんなの、信じられない。好きな人にあんなことする？
絶対に私を好きだなんて嘘だ。嘘に決まってる。
私は柏木君のことが気になって、眠れなくなった。

チャイムが鳴り、しばらくすると誰かがドアをガラリと開けた。
「あれ？先生いない」
あ、美枝ぽんの声？
「穂乃ぴょん？」
カーテンがあき、美枝ぽんと麻衣が顔を出した。

「どう？具合」
そう言って2人がベッドの横に来た。ホ…。なんだか、すごく安心した。
「まだちょっと、くらくらしてる感じがあって。もう1時間くらい休むね」
「わかった。先生に言っとくよ。貧血かな？」
麻衣が聞いた。
「そうみたい」

「さっきの休み時間、来れなくてごめんね」
「え？ああ。私寝ちゃってたみたいで、さっき起きたの」
「やっぱり？2時限目の数学、プリントが終わらなくて、私も麻衣ちゃんも沼っちも休み時間までかかっちゃって。さっさと終わらせた藤堂君だけ、保健室に行かせたんだよね」

「え？！」
と、藤堂君、来たの？
「で、戻ってきて、穂乃香、気分良くなってた？って聞いたら、寝てたからわかんないって」
「う、藤堂君、来たんだ。あ～～、なんだ～～。起きてたらよかった。あ！まさか、寝てるところを見られたかな？」

「先生に聞いたら、寝てると思うって言われたって。そう藤堂君言ってたから、そのまま顔も見ず、帰ってきたんじゃないかな」
「でも、ギリギリまで戻ってこなかったよね？藤堂君」
「どっか、寄ってたんじゃないの？」
「そっか。寝顔は見られずに済んだんだよね。は～～～～」
藤堂君が来てくれるなんて、思ってもみなかった。

「あ、もしかしてプリントができてないっていうのは、みんなの作戦？」
「そう言いたいところだけど、本当にできてなかったの」
「難しかった？どうしよう、私」
「あとで、藤堂君に聞いたら？藤堂君さらっとやってのけてたから」
「う、うん。でも、教えてくれるかな」

「教えてくれるでしょ。藤堂君、優しそうだし」
「……」

そうだよね。友達としてならいくらでも、なんでもしてくれそうだ。友達としてならね…。
「じゃ、そろそろ行くね。次の休み時間には、沼っちでも迎えに来させるから」
「え？」

美枝ぽんがそれを聞き、顔を引きつらせた。
「あ、駄目か。じゃ、司っちだ」
「そうだよ。もう、麻衣ちゃんってば。沼っちが迎えに来るより、藤堂君が来たほうが穂乃ぴょんだって、嬉しいんだから」
「だよね。ごめん、ごめん」

そう言いながら2人は保健室を出て行った。
「藤堂君が来たほうが、緊張するってば」
私は独り言を言っていた。
しばらくすると先生が戻ってきた。

「あれれ～？柏木君は？」
と、言いながら先生がカーテンを開けた。
「多分、教室…」
「それはないな。どっかでさては、さぼってるな」
「え？」

「ちょっとね、最近まともに、授業にも出てないのよね。学校に来るだけでもましだけど、あの子、高校卒業できるかな」
「なんでですか？」
「あ、ちょっとね。まあいろいろと、あるわけなのよ。それより結城さんはどう？そろそろ授業に戻れそう？」

「はい。午後からなら」

「お昼は食べられそう？」
「はい、なんとか」
「そう。じゃ、もう少し休んでお昼休みになったら、戻りなさいね」
「はい」

先生がカーテンを引こうとしたので、私は先生に、
「あの…。2時限目終わってから、誰か来ましたか？私寝ちゃってわかんないんですけど」
と思い切って聞いてみた。
「ああ、来たわよ。弓道部の藤堂君。彼氏？」

「く、クラスメイトです！」
「そうなの？保健委員でもないし、なんで結城さんのこと心配そうに見に来たのかって、私、勝手に彼氏なのかと思っちゃった。じゃ、悪かったかな。結城さんに」
「え？な、何がですか？」

「寝てると思うから、起こさないよう中に入って様子見てって、藤堂君のことカーテンの中に押し込んじゃったの。だって、カーテン閉まってる前で、なんだかおろおろしてたから、藤堂君」
「…え？」
「中の様子を見たそうにしてるし、彼氏なんだから、ま、いっかって」
え～～～！！！！！
「か、か、彼氏じゃないです」

「ごめん、ごめん。でも、かなり心配してたけどなあ」
「と、友達です。他のみんなが数学のプリントに追われてて、代表で見に来たみたいで。だから、別に、その…」
「そうなの？じゃ、あとで謝っておいて。勝手に彼氏と勘違いした

こと」

私から？冗談…。そんなこと言えないよ。

「あ、またあとで来るかもしれないから、先生から言ってください」

「そう？え？じゃ、迎えにも来てくれるってこと？やっぱり、彼氏なんじゃ」

「違います」

「くすくす。そんなに否定しなくたって。返って怪しいわ。そうか。結城さんのほうは藤堂君のことが…」

「い、いいですから、もう～～。私、休みますから！」

「はいはい」

先生はくすくす笑いながら、カーテンを閉めた。

それにしても！！寝顔きっと見られたんだ。恥ずかしい！よだれ垂らしてたとか、大口開けて寝てたとか、いびきをかいて寝てたとか、ないよね？！！！

それに、迎えに来るの、本当に藤堂君なのかな。ああ！寝顔を見られたとしたら、顔を合わすのも恥ずかしいのに！

チャイムが鳴った。ドキン！と、とりあえず、髪くらい整えておこう。私はベッドの横の壁にある鏡を見て、髪を手でなでつけた。

それから目やにが付いてないかとか、確認をした。

ガラ…。ドアが開いて、

「失礼します」

と藤堂君の声がした。うひゃ～～～、やっぱり藤堂君！

「結城さん、お迎え来たわよ～～」

先生が私を呼んだ。

「はい」
カーテンを開けて、私は出て行った。う。なんだか藤堂君の顔が見れないよ。
「具合もう、大丈夫なの?」
藤堂君が聞いてきた。
「う、うん。もう大丈夫だから、一人でも戻れた…」

「ああ、でも、八代さんと中西さんに、また具合悪くなったら大変だし、迎えに行ってって、すんごいすごまれて…」
そうだったんだ。自分の意思で来てくれたわけじゃないのね。
そうだ。さっき、来てくれたのだって、みんなが来れないから来てくれただけで…。麻衣や美枝ぽんが来れたら、藤堂君が来ることはなかったんだよね。

「じゃ、結城さん。もし具合が悪くなったらまた、藤堂君に連れて来てもらいなさいよ」
「え?」
「ね?藤堂君。頼んだわよ!」
「え?あ、はい」

先生!だから、彼氏でもなんでもないのに。
「あ、そうそう。結城さんに怒られちゃったの。カーテンの中に、結城さんが寝てるのに、藤堂君いれちゃったでしょ?彼氏だとてっきり、思い込んじゃったのよねえ。でも、違ってたのね。藤堂君にも悪いことしたわね」

「え?い、いいえ」
藤堂君は、顔を思い切り引きつらせ、そう言った。そして、失礼しますと言って、一緒に保健室を出た。
「…さっき、まさかと思うけど、起きてた?」

「え？」

「俺が、見に行った時。ぐっすり寝てると思ったんだけど」

ドキン！やっぱり、寝顔見られたよね。わあああ。恥ずかしい。

「ね、寝てたよ」

「あれ？じゃ、なんで俺が見に行ったこと知ってるの？あ、先生が言ってた？」

「美枝ぽんと麻衣が、さっき言ってたから」

「そうか。勝手に見に入ってごめんね。先生に押し込まれても、断って出たら良かったね、俺」

「……」

何も言えない。なんて言っていいかわかんないよ。私、変な顔で寝てなかった？なんて、聞くこともできない。

「具合よくなって、良かったね」

「うん」

「先生が貧血だろうって。もう大丈夫？」

「うん…。あ、わざわざ来てくれて、本当にありがとう」

横を並んで歩いてるのも恥ずかしい。今もまだ顔が見れない。でも、横にいるだけで、すごく嬉しい。さっきからドキドキしてて、胸の高鳴りがおさまらない。

でも、不思議なんだ。それでも、安心していられるんだ。なんなんだろうな。この空気…。

「食堂にみんないるって。結城さんのお弁当は八代さんが持って行ってくれてるよ」

「そうなの？」

「だから、食堂にこのまま行っちゃおうか。あ、ご飯は？食べられ

そう？」
「うん」
「じゃ、行こう」
「うん」

藤堂君の声も、話し方も優しい。ちらっと藤堂君を見た。すると藤堂君もこっちを見た。うわ。それも優しい目で。
か～～～。顔がいきなり熱くなる。優しい藤堂君に、私は戸惑ってる。
一喜一憂だ。優しくされただけで、こんなにも喜んでる。この廊下が永遠に続いてくれないかななんて、思っている。

しばらく2人で黙って歩いた。ゆっくりとした歩調で歩いてくれる藤堂君。きっと気遣ってくれてる…。
藤堂君が好きな人が、羨ましい。でも、今はこうやって優しくしてもらえて、それだけでも私は幸せだった。

第２２話　両想い

食堂に着くと、すぐに美枝ぽんと沼田君が気が付いてくれた。
「ここ、ここ！」
と大きく手をふってくれている。
「穂乃ぴょん、大丈夫？」
沼田君が聞いてきた。

「うん。なんとか…」
「お昼は食べれる？」
麻衣が心配そうに聞いてくれた。
「うん。食べられそうだよ」
「よかった～」

私が来るまでみんな、待っててくれてたみたいだ。
「穂乃ぴょんいなくて、寂しかったよ」
美枝ぽんがそう言った。そうしてみんな、お弁当を開けたり、パンの袋を開けたりして、食べだした。
「今の養護の先生、若いんだっけ」

突然沼田君がそう言いだした。
「俺、あまり保健室行かないから、知らないんだよね。どうだった？司っち」
「ああ。前の先生より若い」
「…噂では、かなり色っぽいとか」

「そうでもないよ。っていうか、俺、そういうのもよくわかんないから」
藤堂君はそう言って、バクバクとご飯を食べている。

「ほんと、司っちって、俗世間から離れてるっていうか、浮世離れしてるよね」
「何？それ」
藤堂君がお箸を止めて、沼田君に聞いた。

「芸能人とかで好きな子っている？」
「いいや、まったく。テレビ見ないし」
「そんな感じするよな」
沼田君もそう言うと、パンをバクバクと食べだした。

「沼っちは？好きなアイドルとかいるの？」
美枝ぽんが聞いた。あ、かなり興味津々だな。そりゃそうか。好きな人の好みって、知りたいよね。
「女優で好きな人なら、何人かいるけど」
沼田君がそう答えた。
「何人もいるの？」
「え？うん。俺の場合、演技の上手下手で、左右するんだけどさ」
「見るところが違うねえ」
麻衣が感心した。

「穂乃ぴょんは、誰か好きな俳優とかいるの？」
「私は…別に」
「穂乃香と私と芳美は、ずっと高校入ってから、聖先輩の追っかけだったからね」
麻衣がそう言うと、美枝ぽんが、
「そうだよね。あんなにかっこいい先輩がいたら、そうなるよね」
と深くうなづいた。

「は～～あ。なんで聖先輩はそんなにもてるんだろうな」
沼田君がぼやいた。

「わからなくもないよ。聖先輩は男子からも人気あるし。俺も尊敬してるしさ」
藤堂君がそう言った。
「まあな。男から見てもかっこいいもんなあ」

そうなんだ。
「だけど、あんまり遠い存在ばかり追ってるのも、さみしいよね。ね？美枝ぽん、穂乃香」
麻衣がそういきなり言うと、美枝ぽんが、
「うん。身近な人のほうがいいかもって、最近思ったよ」
とそんなことを言いだした。

「え？」
沼田君が驚いている。そりゃそうだよね、驚くよね。ついこの前まで、身近な人は嫌だって言ってた、美枝ぽんだもんね。
「それ、身近に好きな人ができたってこと？」
沼田君がそう聞いた。

「…う～ん」
美枝ぽんが意味深な唸り方をして、
「そういえば、そうなるかな？」
と、ものすごく中途半端な答え方をした。あ、横で沼田君が愕然としている。あちゃ。自分のことだとは思ってないね。

「好きな人ができると、毎日が色鮮やかになるもんだね」
「え？そうなの？美枝ぽん」
麻衣が聞いた。うわ。だから、そう言う話をすると、沼田君が落ち込む。
「でもさ、何かの拍子で暗くもなるし、恋をすると、いろいろと大変なんだね」

「…た、大変なの？」
沼田君が真っ青な顔でそう言った。

「一喜一憂の毎日だよね～」
麻衣がそう言った。
「たとえば、好きな人が優しくしてくれたり、自分のことを思ってくれてるってわかると、ものすごく嬉しくって、浮かれちゃうし。なのに、冷たくされたり、ちょっとでもほっとかれると、暗くなっていきなりブルーになるし」

「麻衣ちゃん、そうだったんだ」
そうか。付き合ってもそんなふうに、ブルーにもなるのか。片思いだけじゃないんだね。大変なのは。
「優しくされたら、浮かれる…かあ。それ、わかるなあ」
ぼそ。私がそう言うと、
「あれ？そんなことがあったんですか？」
と沼田君が、にやってしながら聞いてきた。

「え？私、今、何か言ってた？」
「言ってたよ。思い切り」
「わあ。独り言だから、気にしないで」
「あはは。でかい独り言だよな」
沼田君に笑われた。その横で藤堂君が、私を見ている。

ドキ～～。ば、ばれた？藤堂君に優しくされて、浮かれてたこと。
「好きな人に優しくされたら、勘違いするよね」
美枝ぽんがそう言った。
「勘違い？」
私が聞くと、
「自分のこと好きなのかも～～とかって、期待しない？穂乃ぴょん」

と美枝ぽんが言った。

「期待しないよ。私、全然期待してなんかいないし」

ブルブル顔を横に振った。

「…そうなんだ」

美枝ぽんがそう言うと、沼田君も麻衣も、

「期待しないんだ」

と同時に言った。

え？期待してるって思われた？

「なんで期待しないの？」

へ？それを本人が聞いてきちゃう？藤堂君～～～。

「なんでって、だって、わかってるから」

私は小声で答えた。藤堂君が私のことを、友達以上に思ってないってこと、わかってるもん。と心の中でも答えていた。

「だから～～。相手に自分が好きだってことを、もっとアピールしようって昨日も話したじゃんか」

突然沼田君が言い出した。本人のいる前で。

「そんな話してたの？」

藤堂君が聞いた。

「あ、司っちが来る前にね」

「昨日どこか行ったの？」

美枝ぽんが聞いてきた。

「ドーナツ屋でお茶してた。あとから司っちも合流してきて、３人で話してたんだ」

「いいな。私、いっつもそういうのに参加できない。なんで誘ってくれないの？」

美枝ぽんがちょっとすねた感じでそう言った。

お。おお？美枝ぽん。もしや、頑張ってる？
「ご、ごめん。でも、美枝ぽん、部活だし」
「部活休みの日もあるよ？」
「え？何曜日？」

「一応水曜は休みなの。でも、今日も特別に休み」
「そうなんだ。あ。じゃ、今日もどっかでお茶してく？みんなで」
「私、部活に出るよ」
私がそう言うと、藤堂君がびっくりして、
「え？大丈夫なの？」
と聞いてきた。

「うん。もうクラクラもしてないし、大丈夫」
「そうじゃなくて。柏木…」
「ああ、柏木君なら、部活しばらく出ないって」
「…会ったの？」
「うん。さっき、保健室に来てた」

「…」
藤堂君がすごく心配そうに私を見た。
「あ、大丈夫だから。もう、本当に」
「何？なんかあったの？」
麻衣が聞いてきた。

「うん。ちょっと部内に苦手な人がいるの」
「柏木って、柏木哲也でしょ？芳美と同じクラスの」
「知ってるの？麻衣」
「うん。最近、授業に出ないで、保健室に入り浸ってるとか、さぼってばかりいるって言ってた」

ああ、養護の先生が言ってたの、本当だったんだ。
「なんか問題ありのやつ？」
沼田君が聞いてきた。
「うん。でも、もう大丈夫だから」
私がそう言って、柏木君の話は終わらせた。

「じゃ、麻衣ちゃんは行ける？放課後」
「ん～～。ごめん。昨日カラオケでお金使い過ぎて、金欠なの。大人しく帰るわ」
あ、それ、絶対に嘘だ。気を利かしたんだ。
「じゃあ、藤堂君」
「俺？部活あるよ」

「…。２人なんだ。どうする？沼っち」
え？美枝ぽん、聞いちゃうの？いいじゃん。２人で！
「あ、あ～～～。俺はどっちでもいいけど」
あほ。沼田君のあほ。そこは２人でも行こうよと、強引に言わないと！まったくアピールしてないじゃないよ！

「じゃ、行こうよ。美枝ぽん、ケーキが食べたいな」
おお！美枝ぽん、頑張ってる！
「いいよ。じゃ、ケーキの美味しい店に行こう」
え？甘いのあまり食べないのに、沼田君も頑張ってる。

「で、好きな人にアピールするっていうのは、沼っちもこれからしていくわけ？」
「え？」
麻衣の言葉にみんなが、黙り込んだ。
「で、それは美枝ぽんも、穂乃香も、司っちもしていくわけ？」

麻衣が話をどんどん続けていく。

「お、おう。していくよ。なあ？穂乃ぴょん。していくんだろ？」

「私？！」

声が裏返った。それ、できないって言わなかったっけ？昨日。

「私、アピールの仕方がわかんないってば」

そう小声で言ったが、もちろんみんなに丸聞こえだ。っていうか、当の本人にも丸聞こえなんだから、そうとう間抜けな話をしてるよね。

「沼っちも、好きな子、いるってこと？」

美枝ぽんが暗い表情で聞いた。あ。あれ？しまった。なんだか、変な雰囲気に…。

「俺？」

沼田君の声が裏返った。

「アピールしていくんでしょ？沼っち！」

麻衣が意地悪そうに言った。沼田君は顔を引きつらせた。あ～あ。両方の思いを知ってるとはいえ、かなりこれって、意地悪くない？

「じゃあさ、どんなふうにアピールするのよ。優しくするとか、積極的に出るとか、なんならコクるとか」

「……」

麻衣の言葉に、沼田君が黙り込んだ。ひょえ～～。麻衣、どういうつもりだ。

「沼田君、好きな子いるんだ」

まだ美枝ぽんがそれを気にしてる。あ～～～。どうするの。いったい！

「いる！」

沼田君が突然、そう言った。

「え？」

いきなりどうしたの？大声を出して。美枝ぽんはもっと顔を暗くさせ、私と麻衣は驚いて目を丸くして、藤堂君は冷静に沼田君を見ている。

「いるけど、告白もしてなければ、なんにもいまだにアピールもしてない」

沼田君が、顔を真っ赤にさせてそう言った。

「そ、そうなんだ。片思いなんだ」

美枝ぽんの顔が引きつった。

頑張れ。今、ここでコクってしまえ！というような顔つきで、麻衣が沼田君を見ている。それに沼田君も気が付いている。

「……ここで？」

突然、沼田君が気弱な声をだし、麻衣に聞いた。麻衣はこっくりと思い切りうなづいた。

「う…」

沼田君がゴクンと生唾を飲んだ。と同時に私も麻衣も生唾を飲んだ。と思ったら、藤堂君もだった。

私たち3人はただ、2人を見守った。

「頑張れ、沼っち」

小声で麻衣がそう言った。私も思わず、小さくガッツポーズをして、応援した。藤堂君までが、行けっていう顔をしている。

「……みんな、何？」

美枝ぽんが、私たちの様子が変なことに気が付いた。

「男だろ。女に告白させるな～～」

麻衣がまた小声でそう言った。

「お、おう」

沼田君がそれに答えた。

「……って、え？」

一回うなづいたのに、沼田君が驚いて、麻衣のほうを見た。

「いいから行け！」

麻衣が目で訴えた。

「…」

美枝ぽんがそれに気が付き、沼田君を見た。そして、

「沼っちが好きなのって、私？！」

と声を裏返しながら聞いてきた。お～、なんて勘の鋭い子なんだ。

ってここまで回りが言ってたら、普通わかるか。

「う！」

沼田君が真っ赤になった。

「だ～～、告白、告白。今がチャンス！」

麻衣がそう沼田君に言った。

「そうなの？！」

美枝ぽんが目を丸くさせている。

「あ～～～。わかった。言う。ちゃんと言う！俺、美枝ぽんが好きだ。１年のころから、ずっと好きだったんだ」

い、い、言った～～～～～！！！！

私も麻衣もやったって手を取り合って、喜んだ。藤堂君までが、赤くなっている。もちろん、当の本人たちは、真っかっかだ。

「うそ」

美枝ぽんが驚いている。

「男だね。さすが！」
麻衣がそう言って、沼田君の背中をバチンとたたいた。
「いて」
沼田君がちょっと背中を痛がっている。それから、赤くなりながら、美枝ぽんを見た。

「えっと。美枝ぽんには好きな奴がいるって、知ってるけど、でも、俺のこともこれから意識してっていうか、その…」
あれ。しどろもどろになっちゃった。
「美枝ぽん」
麻衣が今度は美枝ぽんのほうを見た。

「あ、あ、あ、あ」
美枝ぽんはものすごく慌ててから、いきなり立ち上がり、
「沼っち。嬉しい」
と突然言った。
「へ？」
沼田君が目を点にした。

「あ、あの、あの」
美枝ぽんは真っ赤になり、
「沼っちのことだから」
とそれだけを言って、また椅子に座った。
「な、何が？」
沼田君がきょとんとした。

「あほ。好きな奴ってことだろ？」
藤堂君がそう言った。
「え？！」
沼田君は思い切り驚いて、

「俺?!」
とそう叫んだ。

食堂が騒然とした。どうやら、今の大告白大会を、周りも聞いていたらしい。
「ひゅ〜〜。いきなり、告白タイム?」
「誰と誰?」
「沼田と、誰?」
「八代さん?」
「ひゅ〜ひゅ〜」

2人は真っ赤になったまま、しばらく下を向いている。
「やれやれ」
麻衣がそう言った。
「…よかったな、沼田」
藤堂君がぼそってそう言ってから、私のほうを見た。

あれ?なんで?そしてすぐに、藤堂君は視線を2人に戻した。
「もしかして、お前らさ、俺と美枝ぽんが両思いなの知ってた…とか?」
沼田君が聞いてきた。
「…まあね」
麻衣が静かにうなづいた。

「そ、そうだったの?ひどい。なんで、ちゃんと教えてくれなかったの?」
美枝ぽんが顔を赤くして怒ってきた。いや、赤いのは怒ったからじゃないか。
「だって、人から聞くより、本人から告白されたいだろうなって思ったからさ。だから、どんどん告白しなよとか、私、言ってたでし

ょ？」
麻衣がまた、涼しげな顔でそう言った。
「…な、な、なんだよ～～～！」
沼田君も真っ赤になり、顔を思い切り背けた。あ、すんごく照れてるらしい。
「私、早めに教室戻らなくっちゃ。次の時間、当たりそうなの」
麻衣がそう言って席を立った。

「あ、私、数学のプリント、藤堂君に教えてもらいたいな」
どさくさにまぎれて、私はそう言った。
「いいよ。じゃ、今、教室でね」
藤堂君はそう言って、立ち上がった。

「じゃ、そういうことだから、あとはお二人で。ね？」
麻衣は沼田君と美枝ぽんにそう言うと、私たちと一緒に食堂を出た。
「よかったかな。２人っきりにして」
「２人っきりにしないと、駄目でしょ。私らは思い切り、お邪魔だったよ」
麻衣がそう言った。

「さて、ちょっと友達のところ寄ってくる。穂乃香と司っちは先に教室戻ってて」
麻衣はそう言うと、足早に廊下を歩いて行ってしまった。
あ。あれも、私に気を利かしたんだろうな。２人きりになれるようにって。
「…よかったな、沼田」
「え？うん」

「八代さんも沼田を好きだってのは、知らなかったけどさ」
「知らなかったの？」
「知らないよ」
「そっか」
「…そういうの、見ててもわかんないしさ」

「…誰が誰を好きだって？」
「うん」
「…じゃ、私のことも」
「え？」
「なんでもない」

今、変なこと言うところだった。
「結城さんが好きなやつ？」
ドキ！
「う、うん」
ああ、なんでうなづいちゃうんだ。私。

「わかんないな。てっきり、俺は沼田なんだと思ってたし」
「なんで？」
「仲いいじゃん？一番、結城さんの近くにいる男って、沼田だったしさ」
「…でも、違うんだ」
「…他は、わかんないな」

藤堂君はそう静かに言うと、階段を上りだした。
「と、藤堂君」
私はまた、こんな質問しなけりゃいいのに、聞きたくなって、つい口にしてしまった。
「さっき、保健室に柏木君が来たときにね」

「うん」

「…告白、された」

「え？」

「び、びっくりした」

って、なんでこんなこと、藤堂君に言ってるの？

「柏木に？」

「うん」

ああ。また、付き合ったらいいんじゃないって言う？

「結城さん、それでどうしたの？」

「ど、どうもしないよ。だいいち、からかわれたかと思ったし」

「…あいつは、あまり結城さんには似合わないかな」

「え？」

「結城さんを幸せにするとは、思えないし」

「じゃ、付き合わないほうがいいってこと？」

「結城さんは、付き合いたいって思ってないんでしょ？」

「…思ってたら？」

「……」

藤堂君が、目を丸くして私を見た。階段の途中で止まったまま、私をじっと見ている。

「まさか、好きなやつって柏木？」

「…」

まさか～。と心で言ってるけど、あまりにも藤堂君に驚いた眼で見られてて、なんにも私は言えなくなってしまった。

第２３話　怪我

「柏木なの？」
藤堂君の顔が、なんだか青ざめていない？
「ううん」
やっと私は、首を横に振った。
「本当に？違う？」

「…もっと優しい人だから」
「え？」
「私が好きな人は、もっと優しくてあったかくって、一緒にいて安心できる人だから」
「……」
藤堂君は私から視線をはずし、ふうってため息をはいた。
「ごめん。俺、取り乱した？」

「ううん。そんなことないけど」
でも、いつもとちょっと違ってたかな。
「でも、なんであんなに驚いたの？」
「なんでかな…」
藤堂君はまた、階段を上りだした。

教室に入り、
「ここ、座っちゃえば？」
と藤堂君は椅子を後ろに向けて、私を麻衣の席に座らせた。
「プリント、今日中に提出だってさ」
「え？うそ」

「あれ？知らないで、俺に教えてもらいに来たの？」

「麻衣と美枝ぽんが、あとで藤堂君に聞きなって言ってたから」
「うん。結城さんの分のプリントも、八代さんから預かってるよ。はい、これ」
「ありがとう」

「じゃ、問1からね」
「え？うん」
藤堂君は、私が問題を解くまで待って、わからないところがあると、わかりやすく説明してくれた。前に美枝ぽんが言ってたけど、ほんと、藤堂君って頭いいんだな。

「じゃあ、次」
「え？うん」
わかりやすく説明してくれるけど、さっきからドキドキしちゃってて、半分も頭に入ってこないよ。目の前の藤堂君の顔、声。それからシャープペンを持っている手にも、ドキッてしちゃってるし。

「わかった？」
最後の問題まで、藤堂君は説明をしてくれた。
「ありがとう。どうにか解けた」
って言っても、ほとんど、教えてもらったまま、答えを書いたようなものだけど。

「……」
私がプリントに名前を書いていると、藤堂君が小声で、
「好きなやつ、優しいんだ」
とぼそって言った。

「え？」
驚いて顔をあげた。わ！目の前に顔があった。

「それで？優しくされると、浮かれるってさっき、言ってたよね」
「う、うん」
今ものすごく浮かれてるかも。

「だけど、期待しないって」
「うん」
「…期待してもいいかもよ？」
「え？ど、どうして？」

「好きな人じゃなかったら、そうそう優しくしないと思うし」
「…もともと、優しい人だったら？誰に対しても」
「…そんな感じのやつなの？」
「わかんないけど、多分、みんなに優しいと思う」

「他の女にも？」
「お、女の人にはどうかな」
「じゃ、友達とかってこと？」
「うん。多分」
「…じゃ、それこそ、期待してもいいんじゃないの」

「え？なんで？」
「女の子にはあまり、接してないとか、優しくないんでしょ？でも、結城さんには優しいんでしょ？」
「そ、そうかな。あ、友達だからじゃないかな」
「…友達なの？」
「う、うん。多分」

「……そっか」
藤堂君はそう言って黙り込んだ。私は目を合わせてるのも恥ずかしくて、しばらくプリントのほうを見ていたが、ちらっと藤堂君を

見てみた。
うわ。私のことをじっと見てるよ！
「友達って、俺らみたいに？」
また藤堂君が聞いてきた。
「うん」
私は視線を下げてうなづいた。
「……誰かな。俺や沼田意外にも、いるんだね。そういうやつ」
ううん。藤堂君だもん。
「期待してもいいって言うけど」
「うん」
「告白して、うまくいくってことかな」
「…」
藤堂君は、じっとまだ私を見ている。私も一回藤堂君を見たけど、また視線を外した。
「うまくいくかもしれないし…」
藤堂君はそう言って、しばらく黙り込んだ。
「う、うまくいって付き合えたら」
どうする？って、何度、駄目押しを自分にさせたいんだ。私は。
「そいつは、結城さんを幸せにしてくれそう？」
「え？」
「優しいし、あったかいって言ってたけど、大事にしてくれそう？」
「…私を？」
「うん」
「どうだろう。でも、もう片思いでも、私、幸せな時いっぱいあるし」

「え？」
「一緒にいるだけで、幸せなんだ」
言ってから、顔が熱くなった。私、本人に向かって、何を言ってるんだろうか。
か～～～。やばい。顔が赤いのばれるよね。
「そうなんだ。今でも幸せなんだ」
今？そう、今もすごく幸せで…。って、あれ？もしや、ばれた？！
「そいつ、もうすでに結城さんのこと、幸せにしてるのか」
いえ。藤堂君ですから！
「じゃ、大丈夫かな」
「何が？」
「結城さんが苦しんだり、悲しむのは見たくないからさ」
「……」
私は黙り込んで下を向いた。
「藤堂君は誰にでもそう？」
「え？」
「美枝ぽんが苦しむのも見たくない？麻衣が泣いてるのを見て、つからった？」
「え？」
「友達だもんね。あの二人も」
「そうだね」
「……」
私はしばらく黙ってから、顔をあげた。
「私も、藤堂君が笑顔だったり、幸せなほうが嬉しいな」
「え？」

「藤堂君が苦しんだり、悲しんでるのは辛いかも」
「…そう？」
「…うん。もし、苦しんでいたら、何か私の力になれることがあればいいのにって思う」
「…ふ。優しいね。優しいのは結城さんのほうだよ」

「…」
「でもさ、それは好きな相手にしてあげたら？俺にそんなふうに優しくしたら、俺、完璧勘違いするよ？」
「え？」
「俺は多分、期待する」
「え？」
「八代さんが言ってたみたいに、思い切り期待する。だから、俺に優しいことを言ってくるのは、やめたほうがいいかもしれない」

「…期待？」
「……するよ」
ええ？なんで？私が藤堂君を好きだって？だって、私が好きでもどうでも、関係ないんじゃないの？
「俺も、けっこう浮かれやすいしさ」
「え？」

「……うまくいくといいね。その好きなやつと」
そう言うと、藤堂君は席を立った。
「俺、ちょっくらトイレ」
藤堂君はそう言って、そのまま教室を出て行ってしまった。

「期待？」
「浮かれ…やすい？」
えっと？

何が何だか。
私は午後、ボケ〜〜っとしながら授業を受けた。
まだ頭の中で「期待」と「浮かれやすい」って言葉が、繰り返している。

美枝ぽんと沼田君は、午後、教室に一緒に真っ赤になりながら戻ってきた。どうやら、今日は2人で初のデートになるそうだ。
正直、羨ましい。でも、私の頭はそれどころじゃない。

放課後、美術室に向かった。もし、柏木君がいたら嫌だなって思って、そろっと美術室をのぞくと、いなかった。
ホ…。安心して中に入った。
「結城、久しぶりだな」
「原先生」
う、なんだか、申し訳ないかも。
「すみません、勝手に休んでて」
「いや、調子が出ないときには仕方ないさ。柏木も今日からまた、海を見に行くって言ってたしな」
「そうですか」

「…あいつも、いろいろとあるみたいだな。明日から学校に来るかどうか」
「…」
そうか。私もあんなこと言っちゃったし、柏木君、本当に一人ぼっちになっちゃったのかもしれないな。
ズキ。あ、ちょっと罪悪感だ。

でも、しょうがないよね。私には何もできないし、もし、藤堂君

だったら、一生懸命に何かしてあげようって努力もするかもしれないけど、柏木君にそこまで思いを入れ込んではいないんだから。

キャンパスに向かって、久々に絵を描きだした。しばらくすると没頭して、何も考えなくなった。無我夢中になったあとっていうのは、頭の中がすっきして、靄がすべて消えてなくなってるみたいになっている。

「ふう」
「お、いい色が出たな」
原先生が私の絵を見てそう言った。
「今、無心で描いていただろう」
「はい」

「いい絵ができそうだな」
「ありがとうございます」
すごく集中していたので、疲れてしまい、伸びをしてから私は、手を洗いに廊下に出た。手を洗っていると、窓から風が入り込み、つい、ふらふらっとそのまま外に出た。

ああ、気持ちのいい風。それに緑がなんて綺麗なんだろう。
そこからは、弓道の部室や、道場へと続く渡り廊下がある。ここをいけば、藤堂君が、弓を射ているのが見れるんだ。
見たいな。見学にいつでも来ていいって部長が言ってたけど、いいのかな。

そっと道場に近づいた。でも、驚いたことに道場の前に、柏木君が立っていた。
「あ」
思わず声を出してしまい、柏木君がこっちを見た。

「なんだ。見つかっちゃった」
柏木君がそう言って、舌を出した。

「何してるの？」
「見学に来たんだけど、ちょっと入りづらくてね」
「何で見学に？」
「…気分転換だよ。先生も、たまには気分転換するといいって言ってただろ？」
「…」

「なんてね。本当は結城さんが魅せられた弓道、俺も見たら、何かインスピレーションでもわくかなって思ったんだよね」
「…」
私はその場を離れようとした。
「待てよ。一緒に見ようよ。俺一人じゃ入りづらかったんだ」

いきなり柏木君が私の腕をつかんできた。
「離して。私は見学に来たわけじゃないから」
「じゃ、何をしに来たんだよ。あ、俺がいるって知ってたとか？」
「違うよ。ちょっとぶらってしてただけだから」

ギュ。なんで柏木君は、強く私の腕をつかんでるのよ。
「離すと、逃げるよね？」
「離してよ」
「そうしたらもう、つかまえられないよね」
柏木君はものすごくつらそうな顔で、そう言った。

「離して！」
「何してるんだよ」
道場から、いきなり藤堂君がやってきた。

「え？」
「離せよ。柏木！結城さんの手を離せ！」
藤堂君は柏木君の腕を、ひっぱった。でも、なかなか柏木君は私の腕を離さないでいる。
「いい加減にしろよ、お前！」
「うるさい。お前こそなんなんだよ。結城さんの彼氏でもないくせに、なんでいつも助けに現れるわけ？」
柏木君が私の腕を離し、今度は藤堂君のむなぐらをつかんだ。
「やめてよ」
私が止めても、柏木君は藤堂君を離さないでいる。
「お前こそ、なんだよ。結城さんが嫌がってるのに、なんでしつこく構うんだよ！」
「うっせえ！」
柏木君の手がぶるぶると震え、それから思い切り藤堂君のことを突き飛ばした。
その拍子に藤堂君は、道場の入り口のドアに激突して、ドアのガラスに思い切り腕をつっこんでしまった。
バリン…！
「きゃあ！」
藤堂君の腕から、血が流れた。
「と、藤堂君！！」
道場から部員が飛び出してきて、
「藤堂！大丈夫か？」
と聞いてきた。そしてすぐに部長が、藤堂君の腕を止血して、保健室に連れて行った。

柏木君は真っ青になったまま、佇んでいる。
「藤堂君」
私はみんなのあとから、ふらふらになりながらも、ついていった。
その後ろから、柏木君も、
「俺も行く」
と言ったけど、
「来ないで。もう帰って」
と私は柏木君を追い返した。

「藤堂、大丈夫か」
「お前、こんな大事な時に怪我して！もうすぐ大会だぞ」
部長が言った。ああ、とんでもないことをしたんだ。私。

私が、柏木君ともめたりしていなかったら。
藤堂君が止めに入りさえしなかったら。
藤堂君の腕が、深い傷を負ってたらどうしよう。
弓道がもうできなくなったら？ううん。今度の大会だって、出られないかもしれないんだよ？

真っ青になりながら、私はみんなのあとを追った。

第２４話　苦しみ

保健室につくと、先生が慌てて、
「大変！すぐに病院に行かないと！」
と、電話で職員室の先生を慌てて呼び出した。するとすぐに数人の先生と、顧問の先生が飛んできた。
「今、車用意させてるからな、藤堂」
顧問の先生はそう言うと、藤堂君の背中に手を当て、
「大丈夫か？ガラスで切ったのか？」
と心配そうに聞いている。

他の先生は部長に事情を聴いたり、また他の先生は病院に電話をしたりしている。保健室は騒然としていて、私は何をしたらいいのかもわからず、入り口近くで、ただ佇んでいた。

さっきから、足が震えている。私の血の気が引いていくのがわかる。

「大丈夫？藤堂君」
養護の先生が聞いた。
「はい」
藤堂君はうなづいた。でも、あきらかにつらそうだ。顔が真っ青だ。
「柏木！」
事情を聴いた先生が、廊下に出るとそう叫んだ。

柏木君、来たの？なんで？
「すみません。こんなおお事になるとは思ってもみなくて」
「わかった。事情は後で聞く。あとで職員室に来なさい。あ、そこ

の君、結城さん?君もその場にいたんだね?話を聞きたいからあとで、柏木と来てくれないか?」

「い、いやです」

「え?」

「病院に行きます」

「病院は、先生に任せていたらいいから。さ、弓道部のみんなも、部室にいきなさい。あ、ガラスの破片が飛び散っているかもしれないから、今、用務員の人に片づけてもおう」

やだ。やだ、やだ。藤堂君のそばにいるよ。

私は保健室に入った。藤堂君のそばには寄れなかったけど、離れたところから、藤堂君を見た。

ギュ…。無言で藤堂君は唇を噛んでいる。ああ、きっとすごく辛いんだ。

「藤堂!車用意できたから、すぐに病院に行こう」

担任の田島先生が、車を用意していたようだ。

「…はい」

養護の先生と顧問の先生が付き添い、藤堂君と歩き出した。

「私も行きます」

後ろからそう言うと、藤堂君が、

「来なくていいよ」

と、低い声でそう言った。

私は他の先生に呼ばれ、柏木君と職員室に向かった。そして職員室の奥の、会議室に通された。

「話を聞こうか。柏木、なんでもめるようなことになったんだ」

先生が聞いた。この先生は確か、柏木君の担任だよね?

「言いたくありません」

柏木君がそう言った。

「もともと、お前は藤堂と仲が悪かったのか？でも、クラスも違えば、部も違うな。接点はないよな？」

「…むかついたからです」

「柏木君」

私は思わず、口をはさんだ。

「結城さんだっけ？柏木とは同じ部か？何かわけを知ってるのか？」

「…ちょっと、私と柏木君がもめてて、それを藤堂君が止めに入って、それで、柏木君が払いのけたら、そのまま、藤堂君が…」

「もめてた？二人が？」

「はい」

「俺が一方的に、結城さんにつきまとってただけです」

「…それを藤堂が止めに入ったわけか」

「…優等生ぶってて、前からあいつのことは気にいらなかった」

突然、柏木君が先生の前で毒づいた。

「それで、怪我させて、お前は満足したわけか？」

「…」

「満足か？腕に怪我をした。ガラスでどれだけ深く切ったかによっては、弓道もできなくなるかもしれん。それが、満足か」

先生が、柏木君を責めた。ものすごく威圧的に。

「…ガラスで深くって先生。そんなひどい怪我だったんですか？」

私の手が震えだした。声も震えた。

「いや。俺は怪我を直接見たわけじゃないから、わからん」

先生はそう言ってから、震えてる私に気が付いたらしい。

「大丈夫だ。そう心配するな。だいいち、結城が責任を感じることはないぞ。な？」

先生はそう言って、私を慰めた。

「…」

責任なんてものとは違う。そんなんじゃない。

「柏木、お前とはもうちょっと話がしたい。結城はもういいぞ、帰っても」

先生はそう言うと、私をドアの外に連れて行き、

「気を付けて帰れよ」

と言って、ドアをバタンと閉めた。

「……」

どうしよう。まだ足ががくがく震えている。どうしたらいいんだろう。

職員室を出て、美術室に向かった。藤堂君、学校に戻ってくるのかな。どうなんだろう。気になって絵なんて、とても描けない。

私は片づけを済ませ、弓道部の道場に行った。すると、もうすでにガラスは片づけられ、でも、入り口をガムテープでふさぎ、中に入れないようになっていた。

ドクン！血だ。道場から渡り廊下までの間に、ところどころ、藤堂君の血が落ちている。

私の腕まで、ズキズキと痛んだ。

弓道部の部員と会えたら、何か藤堂君のことがわかるかもと思ったが、誰とも会えなかった。私はそのまま、カバンを持ち、校舎を出た。

藤堂君。お願い。怪我がすぐに治りますように。神様！

ああ、私にはなんにもできない。祈ることしかできない。

ふらふらになりながら、駅に行った。改札を通ろうとしても、なかなかパスモが出てこない。手が震えてしまって、うまく手でつかめない。

ああ…。動揺がまだ、おさまらない。どうしたらいいの？

その場に私はしゃがみこんでしまった。

「穂乃ぴょん！」

いきなり声をかけられた。顔をあげると、沼田君と美枝ぽんだった。

「そこの店にいたの。中から穂乃ぴょんが見えて。また、貧血？」

美枝ぽんが聞いてきた。

「ち、違う。違うの」

私はずっと我慢していたが、一気に気が緩み、わっと泣き出してしまった。

「と、藤堂君が、藤堂君が…」

「司っちがどうした？」

「何があったの？」

しばらくわんわんと泣いた後、ようやく落ち着いて、私は2人に事情を話すことができた。

「ガラスで腕を？」

沼田君が青い顔をした。

「それで、今、病院なのね」

「…私もついていくって言ったの。でも、藤堂君が怖い顔して、来るなって」

「…司っちなりの配慮だよ、それ。心配もかけたくなかったんだろ

うし、自分も精一杯で、穂乃ぴょんのことまで、思いやる余裕もなかったんだよ」
「…つらい」
「穂乃ぴょん。今、一番つらいのは、藤堂君だよ」

「そう。だから辛い。そばにいられないのも、なんの力になれないのも、すごく辛いよ…」
「…大丈夫。力には絶対になれる。な？」
沼田君がそう言ってくれた。
「沼っち、穂乃ぴょんと方向一緒？」

「ああ、藤沢まで送っていくよ」
「うん。お願い」
美枝ぽんがそう沼田君に言った。でも、いいの？私が沼田君と2人で帰っちゃっても。
「わかった。じゃ、行こう、穂乃ぴょん。今はちゃんと帰って、ゆっくりと自分の体をいたわるんだよ。もし穂乃ぴょんの具合がまた悪くなったら、それこそ司っち、心配して、自分のことまで責めちゃうかもよ？」

「うん。そうだね」
私は、沼田君の言うとおりかもって思った。藤堂君は優しいから、私がこれで具合をまた悪くしたら、自分を責めてしまうだろう。
気になる。でも、先生や医者を信じて、明日、藤堂君に会うまで、しっかりとしていよう、私。今はそれしかできないよ。

その日の夜、11時。沼田君からメールが来た。
＞司っちにメールしたら、そんなに深い傷じゃないから安心してってさ。穂乃ぴょんにもそう伝えておいてって、返信が来たよ。
そうか。よかった！

涙がどっと出た。やっぱり、怖かった。藤堂君の怪我が、たいしたことなくて、本当によかった。

翌日、土曜日。藤堂君は弓道部に出ないかもしれない。でも、来るかもしれない。私は絵なんて描けないかもしれないが、部活に出ることにした。

弓道部に朝、立ち寄ってみると、ドアにはまだガラスも張られていなくって、渡り廊下にはところどころ、藤堂君の血の跡が残っていた。

「あの…」

中に誰かがいるようなので、声をかけた。3年生のようだ。

「あれ？君」

「…藤堂君と同じクラスで…。昨日、藤堂君、怪我してたけど、大丈夫だったかなって気になって」

私は、言葉に詰まりながら、そう聞いてみた。

「まだ、僕も様子を聞いてないから。午前中、病院に行くって言ってたから、もし来るなら午後になるかな。あ、でも、今日はこれないかもしれないし」

「そうですよね。すみませんでした」

私はぺこりと頭を下げ、後ろを向いた。

「結城さんだったよね？美術部の」

「はい」

その先輩がまた声をかけてきたので、私は振り向いた。

「藤堂が来たら、結城さんが心配してたって言っておくよ」

「は、はい」

私はまた頭を下げ、道場を出た。そして廊下を歩きながら、藤堂君の血の跡を見た。

「…」

私が心配したなんて、藤堂君、嫌がらないかな。昨日、病院についていくって言ったら、冷たく突き放されたんだっけ。

この血の跡はこのまま、ずうっとここにあるんだろうか。

ズキン。胸が痛んだ。私は早足で美術室に戻った。

「はあ」

キャンパスに向かったけど、まったく絵なんて描けない。ぼ〜〜っとながめていると、原先生がやってきた。

「どうした？描けないのか？」

「はい」

「結城、無理してくることなかったんだぞ。大丈夫か？」

「…え？」

「昨日の話を、弓道部の顧問の先生から聞いたんだ」

あ、そうだったんだ。

「なんだか、家にいても落ち着かないんで、学校来たんですけど…」

「そうか」

「柏木君は？」

「なんの連絡もない。柏木の担任は、多分部活も学校も出てこなくなるかもしれないって、そう言ってたけどな」

そうなんだ。

「あいつも、いろいろと苦しんでるんだろうな」

「柏木君？」

「絵にそれをぶつけていたが、それだけじゃおさまらないくらい、

苦しんでいるのかもしれないな」
「…」
そんなに、柏木君つらかったんだ。でも、私にはやっぱり、どうすることもできない。
それに、私の頭の中は藤堂君のことでいっぱいだ。

午前中が過ぎて、やっぱりどうにも絵を描けなくって、私はもう帰ることにした。藤堂君には会いたいけど、藤堂君は私に会いたいとも思っていないかもしれないし…。
片づけをして、美術室を出た。すると、渡り廊下から藤堂君がこっちに向かって歩いてきた。
わ。うそ。どうしよう…。このまんま、何も話さず、帰っちゃう?

美術室の前で、どうしようかと立ち往生していると、
「結城さん。これから昼?」
と藤堂君が聞いてきた。腕には包帯を巻いて、肩からつるしている。
「う、うん。藤堂君は病院に行ってたの?」
「うん。それで、みんなに心配かけたから、顔出してきた」

「そ、そう」
ああ、顔が引きつる。藤堂君の顔も見れない。
「朝、道場に来たんだって?」
「うん」
「心配かけてごめん。俺だったらもう、大丈夫だから」

「…」
藤堂君の目が優しかった。
ボロ…。
「結城さん?」
ボロボロ…。安心して涙が出た。でも、それを必死で手で拭い、

「よかったね」
と笑って言おうとしたが、顔が引きつってしまった。
「藤堂。食堂に行くんだろ？俺も行くよ」
川野辺君がやってきた。
「あれ？結城さん。部活だったの？これから昼食べに行くけど、一緒に行く？」
「ううん。私はもう帰る。じゃあね、藤堂君」
「うん。それじゃ」

藤堂君は、川野辺君と歩き出した。
同じ方向に行くので、私は後ろをとぼとぼとついて行った。
「藤堂、よかったな。怪我、深くなかったんだろ？」
川野辺君が藤堂君に聞いた。
「ああ。でも、今度の大会には出られないから、みんなに迷惑かけるな」
「まあな。お前が出られないのは痛いけど、まあ、秋の大会もあるしな。大丈夫だよ」

「…」
「大丈夫じゃないのは、お前のほうか。練習頑張ってたもんな」
ズキ。そうか。今度の大会には出られないのか。
「傷、大会までは治りそうもないか」
「…無理だって医者に言われた。深くはなかったけど、7針縫ったんだ。無理したら、また傷が開くぞって脅された」

「7針？」
「深くはないんだけど、スパってさ、かなりの長い範囲で切れたから」
グ…。聞いてるだけで、私が倒れそうだ。

「残念だったな」
「秋の大会、頑張るよ」

「しばらくは安静だな。ま、日ごろお前、練習ばかりしてて、趣味も何もないんだろ?骨休みと思って、思い切り羽伸ばせよ」
「サンキュ。でも、部に顔出すよ。弓の手入れくらいできるし」
「はは。お前らしいな。あ、わりい。俺、トイレに寄っていくから、先に食堂に行ってて」
「ああ」

藤堂君は一人で食堂に歩いて行った。私はいったん、昇降口のほうに足を向けたが、藤堂君にどうしても明日来るかを聞きたくて、食堂のほうに歩いて行った。
藤堂君はなぜか、食堂の前で立ち止まっていた。そして自分の怪我をした手を見て、
「くそっ」
と吐き出すように小さく言うと、怪我をしていないほうの手を、ギュって握りしめた。

ズキ!
ああ…。藤堂君は、出たかったんだ。大会。
そりゃそうだよ。そのために頑張って練習して。なのに、怪我して…。

あんなに辛い思いをしているのに、私には、大丈夫って言ってたんだ。
あんなに辛そうなのに…。
ズキズキ…。胸が痛む。藤堂君。私、何ができるの?私に何ができる?何の役にも立てない?

その日は、藤堂君に何も話しかけず、そのまま家に帰った。
私には何ができるというのだろう。ずっと考えていた。
何か力になりたい。私にできること、できることって？

翌日、日曜日。藤堂君が部活に出るかどうか、やっぱりわからなかったが、私は学校に行った。午前中はやっぱり、ただなんとなく絵を眺めているだけで終わった。
そして、午後になって藤堂君が美術室の前を歩いて行ったのが見えた。あ、道場に向かったんだ。
藤堂君はこっちを見ることもなく、廊下を歩いて行った。

私は、そのあとキャンパスに向かった。少しだけ色を塗り、そのあと気が散ってしまい、またぼ～～っと絵をただただ、眺めた。
今も、藤堂君は苦しんでるんだろうな。みんなの練習を見ながら、辛い思いをしてるんだろうな。
だけど、きっと部の仲間の前では、そんな姿見せないんだろうな。
そんなことがずっと頭の中をかけめぐり、絵なんてまったく描けなかった。

５時になり、私は早めに片づけを終え、美術室を出た。そして、弓道の道場に向かった。ちょうど部員がぞろぞろと道場から出てきたところだった。
「あ、結城さん」
部員の一人が私に気が付いた。

「あの、藤堂君は？」
「中だよ。弓の手入れをしてる。結城さん、中に入って、藤堂のこと慰めてあげてくれる？俺らの前じゃ、あいつ無理して笑ってるからさ」
そう一人の部員が私に言うと、いきなり、

「よせよ」
と、川野辺君が、私の前に立った。

「結城さん。単なる慰めだったら、あいつにはいらない。同情はあいつ、嫌いなんだ。男のプライドもあるしね。あいつのためにならないから、ここで帰ってくれないかな」
単なる慰め？同情？
「違う。そんなんじゃない」

私は川野辺君をしっかりと見てそう言うと、川野辺君は、
「結城さん、もしかして、あいつのこと本気で…」
と言いかけて、やめた。私はずっと川野辺君を、真剣な目で見た。
「結城さん。藤堂のこと、頼むよ…。ほら、みんな部室に行くぞ」
川野辺君はそう言って、みんなを引きつれ、道場を去って行った。

ドアにはもう、ガラスが入っていて、渡り廊下の藤堂君の血の跡も、綺麗に上から塗られていた。
「失礼します」
私はそっと中に入った。すると、部長が私に気が付いた。
「結城さん」
部長はにこりと笑って、
「藤堂のことなら、心配ないよ。結城さんが責任感じることじゃないからね」
といきなり言い出した。

「え？」
責任？そんなんじゃない。
「藤堂、弓の手入れありがとうな。そのくらいにして、片づけてもう帰れよ。じゃ、結城さん、あとのことはよろしく」
部長はそう言うと、道場から出て行った。

藤堂君は片手だけで、弓を片づけていた。

「私、手伝おうか？」

そう言って近づくと、

「部外者に弓を触ってほしくない」

と突然、きっぱりと突き放すように言われてしまった。

藤堂君？なんだか、いつもと違う？

「結城さん、俺なら大丈夫だから、もう帰っていいよ」

「でも…。カバンとか持つの大変でしょ？帰り、持って行くよ」

「いいよ。片手で持てる」

「…」

なんでそんなに、突き放すように言うんだろう。

「ごめんなさい」

「え？」

「私のせいで、大会に出られなくなって」

怒ってるよね。

「結城さんのせいじゃない。だから、責任を感じることはない。部長も言ってたよね」

「だけど」

「やめてくれないかな。そういう恩着せがましいの…」

恩着せがましい？

「俺が勝手にしたことだ。結城さんのせいじゃないんだ。だから、謝ったりしないでくれないかな」

「…ごめんなさい」

「謝りに来たんならもういいから、帰ってくれないかな」

藤堂君、さっきから弓を片づけたりするので、ずっと後ろを向い

たまま、こっちも見てくれない。

「迷惑だった？」

「え？」

「私…」

「迷惑とか、そんなんじゃない」

「私にできることってないの？藤堂君、大会に出られなくなって、今、辛い思いしてるんだよね？」

「…誰かに聞いた？慰めてくれって頼まれた？」

藤堂君は後ろを向いたまま、聞いてきた。

「ううん。頼まれて来たんじゃない。でも、きっと辛いだろうなって思って」

「で？何か私にできることはないかって、言いにきたの？」

「うん」

「…」

藤堂君はようやく私のほうを向いた。

「俺、しばらく一人になりたいんだ。もう、帰ってくれないかな」

藤堂君の目、いつもの優しい目じゃない。なんだか、怖いくらいにクールな目だ。

そりゃそうだよね。こんな状況で、優しくいられるわけないよね。

藤堂君はまた後ろを向いて、的のほうを向き、正座をした。

「…」

私は話しかけるのも悪い気がして、そのまま静かに道場を出た。

「はあ…」

道場を出てため息をついた。結局私は、藤堂君のお荷物でしかないのかな。そばにいても、かえって邪魔するだけで、なんの役にも

立てない…。
やりきれない思いをどうすることもできないまま、私は家に帰った。

第25話　強さ

夜、夕飯もあまり食べる気になれず、さっさと私は自分の部屋に行き、ぼんやりとしていた。すると、麻衣が電話をくれた。
「穂乃香、大丈夫？」
私の心配をしてくれているのか。
「…麻衣。私、どうしていいかわかんないよ」
「司っちのことだよね？」

「帰りに道場に寄ったの。私、何かできることはないかって思って。でも、冷たく突き放された」
「今度の大会、出られないの？」
「うん」
「落ち込んでるのかな、今…」
「きっと…」

「しょうがないよ。そっとしておいたほうがいいのかもよ？」
「…私には何もできないの？」
「そっとしておくのも、大事なことだよ」
「おせっかいだったのかな。藤堂君にも恩着せがましいって言われた」
「それはひどい。だいたい、怪我したのだって、穂乃香のせいじゃなくて、柏木のせいなんでしょ？」

「…私が柏木君ともめてたから」
「柏木君ってさ、穂乃香が好きなんじゃないの？」
「わかんない。どこまで本気かも…」
「…ね、穂乃香。確かに今はそっとしておいたほうがいいかもしれないけど、でも、ちゃんと司っちのことは、思ってるんだよ？」

「え？」

「こんなことで、離れたら駄目だよ。好きならちゃんと、司っちが苦しんでるのも受け止めないと」

「…麻衣、そうだよね。うん。私が落ち込んでる場合じゃないよね」

「…穂乃香なら、大丈夫か」

「え？」

「穂乃香、本気で好きなんだもんね」

「うん」

「私はいつでも、応援してるから」

「麻衣、ありがとう」

「…で、私も、さっさと次の恋をしようって思ってるし。その時には応援してね」

「うん、もちろん」

麻衣が電話を切った。

お風呂に入り私は、藤堂君の後姿を思い出した。正座をした藤堂君は、何を考えていたんだろう。

今度の大会のこと？それとも…。

藤堂君ならきっと、大丈夫だってふと思った。今は辛くても、その辛さも乗り越えて力にしてしまいそうだ。

だったら、私にできることって何かな。やっぱり、見守っていくことしかできないのかな。藤堂君の強さを信じて、ただ見守ることしか…。

翌日、月曜日。朝早くに私は家を出た。そして職員室に行き、美術室の鍵を持って美術室に行った。

ふう…。深呼吸をして、キャンパスに向かった。

文化祭が近づくと、絵を完成させていない人は、朝から来て絵を描くことがある。今の時期は誰もこないけど、朝でも美術室は使用することができる。

「なんにもできないけど、藤堂君の絵なら描ける」

藤堂君が矢を射るその瞬間の絵。目を閉じると、藤堂君がすぐに浮かぶ。

この絵が藤堂君のことを、力づけられるかどうかはわからない。でも、私にできることっていったら、このくらいしかない。

無心になって私は絵を描いていた。時間がどれくらい過ぎたかもわからないほどに。すると、絵の中の藤堂君が、息をし始めた。呼吸をしている。深い呼吸だ。絵の藤堂君に、命が吹き込まれた。その藤堂君が、私に力をそそぎだす。絵の藤堂君が、私を勇気づける。

「…」

ボロ…。なんでだろう。涙が出ていた。

「それ、藤堂？」

突然後ろから声をかけられ、ものすごくびっくりして振り向いた。

「か、柏木君？なんでここに？」

「朝、絵を描くことにしたんだ。そうしたら結城さんに会わずに済むと思って。でも、朝も来てたんだ」

「…この時間から？すぐに授業始まっちゃうよ」

「いいよ。確か1時限目は、ここ使われないはずだし」

「授業は？」

「…さぼる」

柏木君はそう言うと、絵を描く準備を始めた。

「それ、藤堂でしょ？」
また柏木君に聞かれた。
「…うん」
「あいつ、今度の大会出られないんだって？」
「誰に聞いたの？」

「さっき保健室に行ったら、養護の桂子ちゃんがそう言ってた」
「…」
「弓道は続けられるんだろ？」
「うん」
「そっか」

柏木君は無表情だ。自分で怪我させたことを、なんとも感じていないんだろうか…。そういえば、柏木君の担任の先生が言っていたっけ。満足か？って。それを思い出した。藤堂君を嫌っていたのなら、藤堂君が怪我して本当に満足したんだろうか。

「ねえ、藤堂君が腕を怪我して、満足したの？」
「俺？」
「藤堂君のこと嫌ってるでしょ？」
「…別に」
「え？」

「まあ、いつも俺と結城さんのこと邪魔しに来るから、嫌なやつだって思ってたけど…」
「…」
「確かにムカつく野郎だけどな」
「…なんで？」
「だから、結城さんのナイトきどりしてるから」

「ナイトじゃないよ。ただの友達だし」
「でも、結城さんはあいつに惚れてんのか」
「え？」
なんで、それ？
「その絵を見たら、一目瞭然」

「…この絵で？」
「すげえじゃん。あの桜の時とおんなじ」
「え？」
「絵の中の藤堂、生きてるよ。そんだけ思い入れが強いんだろ？」
「……」

「満足とか、そういうんじゃないよ。怪我させる気なんて本当になかったし」
「…じゃあ…」
「弓道ができなくならなくて、ほっとしてるってのが本心。あいつが矢を射る姿は、悔しいけどかっこよかったしな」
「え？」
「あいつ、弓道好きだろ？」

「うん。魅せられたって言ってた」
「それを奪わないですんで、まじでほっとしてるよ」
「…大会には出られないよ？」
「そうだな。でも、秋にもあるんだろ？」
「うん」

「怪我させた俺が言うのもなんだけどさ、秋の大会は頑張ってほしいよな」
「…それも本心？」
「嘘でこんなこと言ってどうすんの」

「…」
それもそうだよね。ちょっと安心した。柏木君が心底冷たい人間じゃなくて。

私はそろそろ授業が始まるので、片づけをして美術室を出ようとした。でも、どうしても気になることがあり、
「柏木君」
と、美術室を出る前に、私は柏木君に声をかけた。柏木君はもう、キャンパスに向かっていた。
「なんで絵を描きにきたの？」

柏木君は私を見た。そして、
「結城さんは？」
と、私に聞いてきた。
「なんでこんな朝っぱらから絵を描きにきたの？」
「…そのくらいしか私にはできないから」

「藤堂のため？」
「うん」
「じゃ、俺は俺のためかな」
「自分のため？」
柏木君は私からキャンパスに視線をうつし、
「俺も、絵を描くことしかできないんだ」
と、まっすぐに自分の絵を見つめてそう言った。

私は美術室を出た。柏木君が何を感じ、なんで絵を描きに戻ってきたのかわからないけど、絵を描いてる時って何も考えないし、無心になれるのって、いろんな苦しみや辛さも忘れさせてくれるからかもしれないな。
そんな時の絵は、自分でも信じられないくらいの絵になっている

ことが多い。それはどう描いていこうかと思って絵を描く時とは、まったく違っている。

柏木君の絵も、きっとすごい絵になるんだろうな。そんな気がする。

教室に向かっていると、ホームルームぎりぎりの時間になり、先生が廊下の向こうからすでに教室に向かって歩いてきていて、私は慌てて教室に入った。

「あ。来た。穂乃ぴょん」

私を見つけて沼田君が私を呼んだ。

「休みかと思ったよ」

沼田君の言葉に私は、にこっと微笑み、自分の席にすぐに行った。

麻衣も私を見て、ほっとした顔をしていた。藤堂君はいなかった。病院に行ってるんだろうか。

すぐに先生が入ってきて、ホームルームを始めた。前の席にいた美枝ぽんは何か私に話しかけようとしたが、先生が来たのですぐに前を向いた。

1時限目が始まった。ぼけっと教科書を開き眺めていると、私の机の上に小さな手紙がぽんと置かれた。美枝ぽんからだ。

そっと膝の上で開いてみると、

「遅かったね。何かあったの？」

と書いてあった。

「美術室で絵を描いてたの」

私はその手紙に、そう返事を書いて美枝ぽんの背中をつつき、美枝ぽんに渡した。

美枝ぽんもそっと手紙を開いて、読んでいる。それからは、手紙

をよこすこともなく、美枝ぽんは前を向いて授業を受けていた。

休み時間になると、藤堂君が来た。藤堂君が腕に包帯を巻いて教室の中に入ってきたので、教室のみんながざわついた。

「藤堂、怪我したのか？」

「大丈夫？藤堂君」

藤堂君はみんなに、大丈夫だよと静かにほほえんだ。

「おはよう、司っち！」

沼田君が元気に藤堂君に声をかけた。

「病院行ってたのか？」

「うん。しばらくは朝、病院通いになりそうだ」

「そっか～～。大変だな」

「来たね、藤堂君。元気そうだしよかったね」

美枝ぽんが私にそっと話しかけてきた。

「うん」

「朝、穂乃ぴょん休むのかって、沼っちと心配してたんだ」

「ごめんね。メールすればよかったね」

「朝から絵を描きにって、どうしたの？そんなに絵を描く意欲わいちゃったの？」

「ううん。今、藤堂君を描いてるんだけど、そのくらいしか私にはできないから」

「…昨日の帰り、藤堂君と何かあったとか？」

「…ちょっとね」

それ以上は言えなかった。というのも、藤堂君が私のほうにやってきていたからだ。

「結城さん、ちょっといい？」

ドキン。な、なに？
私は藤堂君に呼ばれ、廊下に出た。その間、クラスの子たちは、ひそひそと私たちを見て何かを言っていた。

ドキドキ、なんだろう。また迷惑だから近づくなとか、そういうことを言われちゃうのかな。
こわごわ藤堂君の前に立ち、下を向いて藤堂君の話を待った。
「昨日はわざわざ、道場まで来てくれたのに、あんな追い返し方してごめん」
藤堂君が私に頭を下げた。

え？な、なんで？
「い、いいよ。私も、その…、おせっかいなことしたかなって、あとで反省したし」
そう言うと、藤堂君は頭をあげ、私の顔をちらっと見て、すぐに視線を外した。
「一つだけ、言っておきたいことがあって」
藤堂君は、静かにそう話し出した。

ドキ。な、なんだろう。ああ、私の頭の中にはどうしても、悪いことが浮かんでしまう。たとえば、友達もやめようとか。

「俺の怪我、結城さんのせいじゃないから、だから、責任を感じることだけはしないでくれないかな」
「…え？」
「柏木のせいでもない。誰のせいでもない。だから、結城さんもそんなに、辛そうにしなくてもいいからさ」
「わ、私が？辛そう？」

「うん…」

辛いのはだって、藤堂君でしょ?!
「俺なら大丈夫だ。弓道だって続けられる」
「でも、大会…」
「大会は秋にもある」

「だ、だけど…」
「それ…」
「え?」
「俺のことを心配してなんだろうけど、でも、そんなふうに辛そうな顔されられるのが、一番こたえるからさ…」

私の顔?!
「せっかく最近、笑顔になってきたって思ってたのにさ、俺のせいでまた、沈んだ顔してほしくないんだ。あ、勝手なこと言ってるって思ってるけど、でも、まじでそれが一番、こたえるんだよね」
「ご、ごめん。私、そんなに暗い顔してた?!」
「…俺の怪我だったら、ほんと、心配しなくてもいいからさ」

「…わ、わかった」
「それだけ。あ、あと変な噂が流れてるみたいだけど、あれも気にしないで。きっとそのうち、みんな飽きて何も言わなくなるよ」
「噂?」
「沼田がメールで教えてくれた。柏木と俺が結城さんを取り合って、それで俺があんな怪我をしたんだっていう噂、どっかから広まってるみたいだ」

そんな噂が広まってるの?!
「ごめん。藤堂君に迷惑かけてるよね?そんな変な噂流れたりして…」
「俺?いや、俺は別に…。ああ、でも、そっか。逆に結城さんには

この噂、あまりよくないよね」
「え？なんで？」
「結城さんの好きな人が、勘違いしたら困るよね？」

「……そ、それだったら、大丈夫」
「なんで？」
「……あ、あのね」
「うん」
「私、本当に好きな人と付き合いたいとかも思ってないし…」

「え？」
「す、好きな人が元気で、笑顔でいてくれたら、それだけでいいかな、なんて」
「…自分のことはどう思われてもいいってこと？」
「うん。あ、もともとどうも思われてないと思うし」
あれ？違うかな。いや、でも、今はきっとどうも思われてないかな。友達だとは思ってくれてると思うけど。

ど、どうなんだろう。友達でいるんだよね？今…。いきなり不安になってきた。
「藤堂君…」
「え？」
「私って、藤堂君の友達？」
「…え？」
「まだ、友達だって、思ってくれてるかな」
「…もちろん」
ホ…。ああ、安心した。それに、藤堂君の目が、また優しい目になってる。

チャイムが鳴った。2時限目が始まるので教室に戻った。

2人で教室に入ると、またみんながざわついた。
「やっぱり、付き合ってるのかな」
「藤堂が柏木から、結城さんを奪っちゃったのか～？」
そんな声が聞こえてくる。
うわ。何、それ。なんでそんな勝手なこと言ってるの～？

あ、でも、噂は気にしないんだった。そのうちに消えるって、藤堂君も言ってた…。
「あのさ！」
え？いきなり藤堂君が噂話をしている連中の前に行って、声をかけたよ？なんで？
「勝手にあれこれ言ってるようだけど、俺は別に結城さんと付き合ってるわけでもないし、柏木と取り合ってもいないから」
と、藤堂君？なんで？噂は、ほっておくんじゃないの？

クラスのみんながいっせいに話すのをやめて、藤堂君を見た。
「俺と柏木は前から、仲悪かったっていうだけだから、勝手なこと言わないでくれるかな。迷惑だから」
藤堂君はきっぱりとそう言うと、自分の席に着いた。
ざわ…。クラスのみんなが、な～～んだ、付き合ってないじゃん。
と、また勝手に話し出した。

私も自分の席に着いた。
藤堂君？なんで、噂は気にしないでって言ってたのに、あんなこと言ったの？
迷惑？
ううん。あれ、もしかして私のために言ってくれた？

藤堂君の顔を見た。麻衣が藤堂君の背中をつついて、藤堂君に何かを言っている。それを藤堂君は、静かに笑いながら、答えていた。

なんだろう。麻衣は最初怒っていたようだが、藤堂君の話を聞いて、ほっとした顔になっている。

「穂乃ぴょん、落ち込むな！」

美枝ぽんが後ろを向いてそう言った。

「え？」

「今のは、絶対に藤堂君、穂乃ぴょんのために言ってくれたんだよ」

「美枝ぽん、そう思う？」

「藤堂君、優しいもん。特に穂乃ぴょんには」

「え？」

「だから、迷惑だってのは、穂乃ぴょんに迷惑がかかるから、やめてくれってことだよ。絶対にそう」

「…」

「落ち込むことないからね？」

「ありがとう」

麻衣を見た。麻衣も私のほうを見て、ニコって笑った。あ、もしかして、そういう話を藤堂君としてたのかな。

私は藤堂君のほうも見てみた。藤堂君はまっすぐに前を向いていた。でも、横顔が穏やかだった。

藤堂君の優しさも信じてみようかな。こうなったら、とことん、藤堂君を信じてみようかな。もう、一喜一憂することもやめて、藤堂君が私を好きかどうかなんて、そんなのも気にしないで、友達でいいから大事に思って、藤堂君の強さや優しさを信じてみようかな。

ふわ…。窓の外から、気持ちのいい風が吹いた。桜の木を見た。緑の葉が気持ちよさそうに、揺れている。

怪我をしても、大会に出られなくても、きっと藤堂君なら大丈夫

だ。

うん。もう沈んだ顔をするのはやめよう。この授業が終わったら、笑顔で藤堂君に話しかけよう。

第26話　ポーカーフェイス？

お昼休み、食堂にみんなで向かった。廊下を出て歩いていると、何気なく藤堂君が私の横にすっと寄ってきた。

「結城さん…」

ちょっと話しにくそうにしている。

「な、なに？」

「さっきの、クラスのやつらに言った迷惑ってのは、その、結城さんが迷惑ってわけじゃないから」

「あ…」

あのことか。

「うん、大丈夫。わかってるし」

「え？」

藤堂君はさっきまでうつむき加減だったのに、隣にいる私の顔を見た。

「藤堂君って、人が傷つくことを言ったりしたりしないんだって、わかってるから大丈夫」

「…」

藤堂君は黙り込んだ。そしてちょっと照れたようにまたうつむいた。

「俺、結城さんのことを知らない間に傷つけてないかな。昨日も、道場で、俺傷つけるようなこと言っちゃったと思うんだけどな」

「…ううん。大丈夫」

「俺さ、気が利かないし、言葉で説明したりするの苦手っていうか、言葉が足りなかったり、逆に言わないでいいこと言ってたりするから、傷ついたならその都度言ってくれて構わないからさ」

「え？」
「…そのたび、ちゃんと謝るから」
キュン…。あれ？今の言葉でなんだか、胸が締め付けられちゃった。
「だ、大丈夫。藤堂君、本当に優しいもん」
か～～～。顔がほてる。藤堂君がこっちを見たのがわかったけど、私は藤堂君の顔が見れなくなった。

「先輩！」
もうすぐ食堂というところで、野坂さんが元気に藤堂君に駆け寄ってきた。
「あ～～。本当に怪我してる！」
「よう。どうしたの？こんなところで」
藤堂君が聞いた。

「どうしたじゃないです！今朝、先輩の教室に行ったら、先輩が怪我して多分病院に寄ってるんじゃないかって聞いて、私、びっくりしちゃって！大丈夫なんですか？」
「うん。大丈夫だよ。たいしたことないからさ」
「私、何も知りませんでしたよ」

「…え？」
藤堂君はきょとんとした顔をした。でも、野坂さんはふくれっ面をしている。きっと、どうして教えてくれなかったんだって、そう言いたいのかもしれない。
「お昼食べるのも大変じゃないですか？もう～～。言ってください。私、いろいろと手伝いますから！」
「いいよ。大丈夫だから、家でも一人でなんでもしてるし」

「だ、だけど！片手じゃ大変なことだってありますよね？私、こういう時に先輩の役に立てるよう、先輩の高校に来てるんですから」
え？な、何それ。
「私が大変だったとき、いっぱい先輩に助けてもらったから、恩返しに来てるんですからね。それ、先輩も知ってますよね！」

「…野坂さん。そのことだけど、そんなに恩を感じなくてもいいからさ」
「駄目です。私、本当に先輩がいなかったら、今こうして元気に陸上も続けていられなかったと思うし」
「…う～～ん。でも、あれはなんていうか…」
藤堂君が困っている。いったい、何があったのかな。

野坂さんが私をちらっと見た。
「クラスメイトですか？」
「ああ。他の連中はもう、とっとと食堂に入ってるかな」
「他って？」
「いつも何人かで食べてるんだ。あ、その中に気のいいやつがいて、そいつに何か困ったことがあったら言うからさ、大丈夫だよ。野坂さんはクラスに戻って」

「……」
野坂さんが納得いかないって顔で、藤堂君を見た。
「彼氏も待ってるんじゃないの？一緒に食べるんだろ？」
「彼氏なんていませんよ。私」
野坂さんが怒りながらそう言った。

「あれ？」
藤堂君は不思議そうな顔をして、
「じゃ、クラスメイトだったのかな？」

と独り言のように言った。

「藤堂先輩は、彼女いませんよね」
「うん」
「まだ、彼女できてないですよね？」
「…うん」
それを聞くと、野坂さんはほっとした顔になり、
「それじゃ、もし何か私の手伝えることがあったら、メールしてくださいね」
と言い、廊下を足早に歩いて行った。

「メール…」
いいな。藤堂君のメアド知ってるんだ。
「あ、メールって言っても、ほとんど連絡事項くらいで」
藤堂君が私の独り言を聞いて、いきなり慌てたようにそう言った。
「連絡事項って？なんの？」

「時々中学校の、陸上部に顔を出してるんだ。野坂さんもだけど、他にも数人で。後輩たちと一緒に走ったりしてて、それで、いつ行くかとか、何時に集合かとか、そういう連絡事項」
「今でも中学の陸上部に行ってるの？」
「うん。あ、たまにだよ」

なんだ。そうか。それで今でも野坂さんと、ああやって話したりしてるのか。ちょっとほっとしたりして。って、でも、あの子が藤堂君を好きなのは、確実だなって今日わかっちゃったな。彼氏もいないみたいだし。

「司っち、穂乃ぴょん、ここ！」
食堂に入って、みんなを探してると、沼田君が手をあげてそう叫

んでるのが聞こえた。
「遅かったじゃん」
沼田君が言った。あれ?みんなまだ、食べないで待っててくれたんだ。

「ちょっと後輩につかまってて」
「野坂さんって子?」
「うん」
「朝も来てたっけ。怪我して病院にいってると思うって言ったら、真っ青になって涙目になって」
「あ。それ伝えたの、沼田だったんだ」

「うん。で、たいした怪我じゃないからとか、慌てて言おうとしたんだけどさ、私、何も知りませんでした。酷いって言って、駆けて行っちゃったから、俺、ちゃんと説明もできなくって」
「酷い?」
それを横で聞いてた美枝ぽんが、不思議そうな顔で聞いた。
「う〜〜ん。あの子、いったい何?単なる後輩じゃないの?司っち」
沼田君が聞いた。

「後輩だよ」
「あ、でも、恩返しにこの高校に来たって…。それってどういう意味?」
私はさっきのことを思い出し、藤堂君に聞いてみた。
「恩返し〜?なんか司っち、あの子を助けたかなんかしたの?」
麻衣が目を丸くして聞いた。

もうみんなは、お弁当を広げ食べだしていた。藤堂君はちょっと、片手でお弁当をいれた袋を開けるのに、苦戦している。それ、手伝ってもいいのかな。私は自分のお弁当も広げないで、じっと藤堂君

の手元を見ていた。

それに藤堂君が気がつき、

「あ、開けてもらってもいいかな」

と聞いてきた。

「え？うん。もちろん」

私は藤堂君のお弁当の袋を開け、お弁当を出した。それから、箸箱からお箸も出して、お弁当の上に乗せた。

「ありがとう」

藤堂君が静かにそう私に言った。

うわ。ありがとうって言われた。それに、開けてって私に頼んできた。嬉しい！

私は真っ赤になり、自分のお弁当を広げだした。その時、視線を感じて顔をあげると、前に並んで座ってる美枝ぽんも沼田君も麻衣も、私のことを見ながら、にんまりとしていた。

今の、見られてたんだ。それもきっと、私が赤くなって喜んでるのも。

藤堂君をちらっと見た。藤堂君はみんなの表情も私の顔が赤いのも気が付いていないようで、お弁当のふたを片手で開け、ご飯を食べだしていた。

「あ、そ、それで、恩返しって？」

私はみんながまだ、にんまりとして私を見ているので、藤堂君にそう話を振った。

「ああ、そうそう。話の途中だったっけ。で、何があったの？司っち」

麻衣が藤堂君に聞いた。

「中学の時ね、あの子陸上部に1年で入ってきて、はじめはみんなとも仲良くやってて良かったんだけど、中3の先輩に気に入られちゃってから、いじめにあっちゃったんだよね」
「え？なんで？」
沼田君が聞いた。
「その先輩ってのが、わりと人気のあった人でさ」

「それだけでいじめ？」
麻衣が聞いた。
「ああ、その先輩、聖先輩ともつるんでたんだ。その先輩に廊下で会っても、野坂さんは話しかけられてて、そんときに聖先輩も一緒にいて、仲良く話したりしてたから、やっかむ子が多かったんだよ」

そうなんだ。聖先輩と仲良く話しただけで、いじめられちゃうんだ。怖いな。
「部が終わってから、一人で泣いてたことがあって、そこにたまたま居合わせちゃって。なんかほおって帰れなくなったっていうか」
「優しくしてあげちゃったんだ。藤堂君」
美枝ぽんがそうぽつりと言った。

「優しくっていうか、ただ、陸上部、続けんの？って聞いただけだよ。野坂さん、涙をふいて、やめないって言ったから、どうやって走ったら速く走れるかとか、アドバイスをしただけなんだけど」
「…優しいじゃん」
麻衣が藤堂君のことをひやかす感じで、そう言った。

「いや、ほんと、アドバイスだけ。そのあとも、みんなが帰った後で、ちょっと練習に付き合ったりしてただけで」
「いじめは？なくなったの？」
私は気になり聞いてみた。

「先輩が部を引退したらね。みんながみんな、野坂さんをいじめてたわけじゃなくて、一部の連中がやってただけなんだけど、それを止めもせず、傍観してただけの1年がいてさ。まあ、いじめをしてた連中も、先輩が引退したら、部を辞めたり、出てこなくなったりして、いじめる人もいなくなったら、野坂さんも残った1年とうまくやっていけるようになって…」

「先輩目当てで入ったってわけか」

美枝ぽんがそう言った。沼田君が、

「じゃ、そのことで、野坂さんは恩返しがしたいって言ってるんだ」

と藤堂君に聞いた。

「うん。俺、特に何かをしたわけでもないんだけどね」

「…優しくされたから、自分は特別だとか、藤堂君に好かれてるって思ってたり」

「え？」

美枝ぽんが言った言葉に、ちょっと藤堂君が驚いている。

「優しくって言っても、ほんと、そんな優しい言葉なんて俺、かけてないけど？」

「だけど、本人からしてみたら、十分優しくされたって思ったんじゃないの？」

麻衣までがそう言いだした。

「…」

藤堂君は黙り込んだ。あ、もしかすると、部の仲間だからっていう、そういう意識でしただけなんじゃないのかな。藤堂君は。

「難しいな」

藤堂君はぽつりと言った。

「何が？」
沼田君がパンにかじりつきながら聞いた。
「沼田はさ、言ってたよね？いつもいい人で終わるとか、友達どまりなんだって」
「う、うん」
沼田君はそれを美枝ぽんが聞いてるのが、ちょっと気になっているようだ。美枝ぽんの顔色をうかがっている。

「俺は、女子の友達も少ない。あまり女子とは話さないし。どう接していいかもわかんないし。だけど、たまに気が合ったり、話しやすかったり、野坂さんみたいに慕ってくれる後輩もいて」
「うん」
「優しくなんてした覚えもないし、普通に接してるつもりなのに、期待させることが多いみたいで」

「期待？」
ドキン。思わず私は聞いてしまった。
「コクられて断って、泣かれたこともあったし」
え！コクられたこと、あるの？！！
「回りが勝手に付き合ってるって、噂になった時もあったし」
「今の穂乃ぴょんとみたいな噂？」

沼田君がそう言うと、麻衣が、
「沼っち。そのことはもう言わないの！」
ときつく沼田君を怒った。
「あ、ごめん」
沼田君が私のほうをちらっと見て、謝った。

「…その時はどうしたの？やっぱり、さっきみたいに、みんなに噂するのはやめてくれって言ったの？」

美枝ぽんが聞いた。
「いや、別に何も。でも、相手に好きな奴がいたみたいで、その子の友達が噂を一生懸命に否定してて、俺、あとで責められたっていうか」

「その相手の子に？」
「いや、その友達に」
「それで、さっき、あんなふうにみんなに言ったの？」
美枝ぽんが聞いた。

「…うん。結城さん、好きな人がいるのに、俺と噂があったりしたら、困るでしょ？」
藤堂君がそう言うと、みんながいっせいに、目を丸くして私を見た。好きな人ってのは、藤堂君のことじゃんって、そうみんなの目が訴えている。いや、訴えられても困るんだけど…。

「藤堂君の場合は、あまり女子と話さないから、たまに話したり仲良くしてると、目立っちゃうんだよ」
美枝ぽんがいきなりそう言った。
「え？」
藤堂君が聞き返した。
「それに、いつもポーカーフェイスで、そっけない感じがするから、ちょっと優しくされただけでも、ギャップっていうのかな。あれ？優しいところもあるんだ、なんて思っちゃうんじゃないの？」

「ああ、それ、あるかもな。女ってギャップに弱いんでしょ？」
沼田君が誰にともなく、そう聞いた。
「沼っちの場合はいつも明るくて優しいから、それが誰に対してもそうだから、みんな安心もしてるし、自分にだけって思わないから、噂も立たないし、好かれてるっていうのもわかんないのかもねえ」

麻衣が、ご飯を食べながら冷静にそんなことを言っている。

「じゃ、俺もポーカーフェイスでいたらよかったのかな」

沼田君がそう言って、ちょっと顔をむすっとしてみた。

「あはは、似合わない」

美枝ぽんが笑った。沼田君はそれを見て、ちょっと顔を引きつらせた。

「沼っちは沼っちの良さがあるんだもん。それをわかってくれる人がいたら、それでいいじゃん」

美枝ぽんがそう言ってから、

「私みたいに？」

とにこっとして、沼田君に顔を近づけた。

「え？あ、ああ。うん」

沼田君が真っ赤になって、顔を下げた。

「うわ。沼っち、照れてる、照れてる」

麻衣がそれを見てからかった。

「う、うっせ～～～」

沼田君はまだ、下を向いたまま、そう恥ずかしそうに言った。

「沼っちって、意外とシャイなんだよね？私、最近それを知ったの」

美枝ぽんがそう言ってから、また沼田君に顔を近づけ、

「そういうのって、あまり他の子知らないよね？」

とそう聞いた。

「し、知らないも何も、俺、特に照れるような場面に遭遇してなかったっていうか」

「美枝ぽんの前だから、照れちゃうんでしょ？」

麻衣がそうつっこんだ。

「う…」
沼田君が何にも言えなくなっている。
「そっか、美枝ぽんの前でだけなんだ。じゃ、そういう照れてる沼っちを見れるのって、私だけの特典なんだね」
と美枝ぽんはにこにこしながら、沼田君に言った。沼田君はますます顔を赤くして、うつむいてしまった。
あれれ。本当だ。こんな沼田君はなかなかお目にかかれないかも。
「…沼田は、素直だよな」
いきなり藤堂君がそう言った。
「え?」
沼田君は赤くなったまま、藤堂君を見た。
「なんか、そういうのも羨ましいな」
「え?俺が?」
藤堂君の言葉に沼田君は驚いている。
「俺は別に、好きでこんな仏頂面してるわけじゃなくって、意識しないでもこんなになっちゃうからさ。嬉しくても、どんな顔をしていいかもわかんないから、いつもムッとしてるとか、怒ってるって思われることもあるしさ」
「ええ?!」
私が驚いて、声をあげてしまった。
「な、何?結城さん」
その声と驚いた私の顔を見て、藤堂君が私を見て聞いてきた。
「だって、藤堂君、怒ってるように見えないし、仏頂面なんてしてないよ」
「え?」
「いつも優しい顔してるもん」

「……」
藤堂君が、一瞬フリーズしたが、私から視線を外し、下を向いて耳を赤くした。
「あ、藤堂君も照れるんだ」
それを見て、美枝ぽんがぽつりとそう言った。

「初めて見る。司っちの照れてるところ」
沼田君もそう言った。
「へえ。司っちでも、顔赤くなるんだ」
麻衣までがそう言った。藤堂君は一回咳払いをすると、顔をあげて、
「別に。照れてるんじゃなくて、驚いただけだから」
と、ものすごい無表情な顔でそう言った。

「あ。いつものポーカーフェイスに戻った」
沼田君がそれを見て、ぽつりと言った。
本当だ。もう、顔も赤くない。
でも、私、何度も見たことあるよ。藤堂君の照れた表情。赤くなったり、照れくさそうに笑ったりして、可愛いなって思ってたもの。
あれ？それ、みんな気づいてなかったの？

それから藤堂君は、無心にご飯を食べだした。前に並んでいる3人は、わいわいと話しながら食べている。
私は黙々と、ご飯を食べていた。すると視線を感じた。あ、藤堂君が私を見てた？ちらっと藤堂君を見ると、目が合ってしまい、藤堂君はぱっと視線を外した。その時にもわかってしまった。藤堂君、耳が赤くなってる。

あれれ？なんで？
いつも、ポーカーフェイスで、何を考えてるかもわからない藤堂

君。そんなイメージだったのに、今では、照れてる藤堂君も、すごく優しい藤堂君も知ってしまっていて、私はもっともっと藤堂君が好きになってるっていうことも、自覚していた。

そして、もっと知りたいなって、そう思ってる。藤堂君の横に座りながらそんなことを思って、ドキドキしていた。

第27話　もう一回

放課後、美術室で絵を描いていると、缶ジュースを2本持って沼田君がやってきた。
「おっす。今いい？」
「原先生もいないし、いいけど、どうしたの？」
「美枝ぽんと一緒に帰る約束してて」
「部活終わるの待っててあげてるの？」
「うん」

沼田君は私に缶ジュースをくれて、自分のもプシュって開けた。
それから私の後ろに立つと、
「これ、司っちだろ？」
と私の絵を見て聞いてきた。
「うん」
私も缶ジュースを開けた。

ゴクン。あ、美味しい。ちょうど喉乾いてたんだよね。
「ここで、ちょっくら時間つぶしててもいい？」
「いいよ～～」
私は缶ジュースを机に置き、また絵を描きだした。

「お、いい風入ってくるじゃん」
沼田君は窓まで行って、外を眺めた。
「二人でいる時って、何話してるの？」
「え？俺と美枝ぽん？」
「うん」

沼田君はまだ窓際にいる。でも、こっちを向いて話し出した。

「う〜ん。映画の話、好きなアニメや漫画の話。あとは、なんだろう？ま、適当に」
「美枝ぽんって、沼田君と2人だと変わる？」
「ううん、あのまんま」
「ふうん」
しばらく黙って私は絵に集中した。

「それ、司っちに見せるんだろ？」
「え？」
「呼んでこようか？俺」
「いい、いい。そんな恥ずかしいから」
「なんで？司っちのために描いてるんだろ？見せなかったら意味ないじゃん」

「それ、なんで知ってるの？」
「美枝ぽんから聞いた」
う〜。そうか〜。
「司っち、絶対に感動すると思うなあ。表面、何でもないように見せてるけど、やっぱ、大会出られないこと、本当は落ち込んでると思うし」

「…本当に、この絵、藤堂君のこと勇気づけるかな？」
「そのために描いてるんだろ？」
「うん」
「よっしゃ。待ってな。呼んでくるから」
「え？」

沼田君は飲み終わった缶ジュースの缶を置いて、さっさと美術室を出て行ってしまった。
「う、うそ」

どうしよう。力づけるつもりで描いたのに、いきなり動揺してきた…。

ドキドキドキドキ。どうしよう。

こうなったら絵を隠しちゃおうか、なんてバカなことを考えていると、

「本当にいいのか？」

と、藤堂君の声が廊下からした。あ！連れてきちゃったんだ。

「いいから、来いよ！ほら」

沼田君の声もした。そして、美術室に2人で入ってきた。

「よ。連れてきたぞ」

沼田君がそう言った。その後ろから藤堂君が、ちょっと戸惑いながら顔をのぞかせた。

「い、いいのかな？絵、見せてもらって…」

藤堂君が、遠慮がちにそう言った。あ、そうか。前に私、部外者は勝手に入ってこないでって、言っちゃったっけな。

「完成してないの。でも…」

沼田君が私を見て、小さくガッツポーズをした。

「わ、私、何もできないから」

「え？」

藤堂君がきょとんとした顔をした。

「絵で表現することしかできないから」

「…」

私は立ち上がり、ちょっと絵から離れた。沼田君は藤堂君の怪我をしていない腕をつかみ、私の絵の前まで藤堂君をひっぱった。

「……」

藤堂君は私の絵を見て、黙り込んだ。
ドキ…。ドキ…。何か言って！
緊張する。沼田君も藤堂君も黙っていて、他の部員も黙って絵を描いているから、やたらとその場が静かだった。

「あ…」
藤堂君は私を見て、
「これ、俺だよね？」
と聞いた。
「うん」
変かな。藤堂君に見えなかったかな。

「すげ…。あの桜みたいだ」
藤堂君がそう言って、また絵を見た。
「桜って？」
沼田君が聞いた。
「文化祭で見なかった？結城さんの絵」
「うん。美術室見に来てないし」

「なんだ。沼田にも見せたかったな。桜の絵。すごかったんだ」
藤堂君は絵から目を離さずにそう言った。
「桜が生きてた…。本物の桜よりももっと、生き生きしてた。この絵もそうだ」
「う、ううん！本物の藤堂君のほうがずっと、生き生きしてるよ」
私は慌ててそう言った。

「そんなことないよ。大会出られなくなって、俺、半分死んでたし」
「え？」
藤堂君は静かにこっちを見た。
「これは、結城さんから見た、俺なのかな」

「うん」
私は思い切りうなづいた。

「桜の時言ってたよね？絵の中の桜が、命をそそいでくれたって」
「うん」
「絵の中の俺も、結城さんに命、そそいでる？」
「…うん」
沼田君は黙って、窓際に行って私たちの会話を聞いている。

「……」
藤堂君は絵の真ん前に立って、しばらく黙って絵を見つめていた。
「サンキュ」
藤堂君は、小さな声でそうつぶやいた。
「え？」
私が聞き返すと、藤堂君は私に背を向けたまま、
「ありがとう。力出たよ」
と今度は大きな声でそう言った。

沼田君は藤堂君に近づき、背中を軽くぽんとたたいた。
「秋にまた大会あるんだろ？」
「うん」
「頑張れよ」
「…ああ」
沼田君の言葉に、藤堂君は静かに笑ってうなづいた。

「じゃあ、俺、道場に戻るよ。みんなの練習見てくるから」
「おお」
藤堂君は、スタスタと歩いて、美術室を出た。
「よかったじゃん。穂乃ぴょん」
沼田君が私にそう言ってから、

「あれ？泣いてんの？」
と私の顔を見て驚いた。

「よかった。私、役に立てたよね？」
「そりゃもう、しっかりと」
「よかった…」
「…ほんとに、穂乃ぴょんは健気だよねえ」
沼田君はそう言うと、ふって笑った。

5時近くになると、沼田君は、
「そろそろ教室に戻ってるよ」
と言って、美術室を出て行った。私は、なんだか胸がいっぱいで、なかなかその場を離れられなかった。
他の部員が美術室を出て行き、先生も一回美術室に来たが、
「結城、まだ先生用事があるから、片づけ終わったら鍵を職員室に返しに来てくれるか」
とそう言って、さっさと職員室に戻って行った。

「本当に、よかった」
私は自分の絵を見ながら、ぼそってつぶやいた。
美術室の前を、弓道部員がわやわやと歩いて行った。藤堂君もいるのかなと思って、ドキドキしながら見ていたが、藤堂君の姿はなかった。

「…まだ道場かな。それとも、違う道から帰って行ったのかな」
椅子から立ち上がり、窓から外を見た。
「わあ。夕焼け…」
綺麗な夕焼けが広がっている。

ガタン…。その時、誰かが美術室に入ってきた音がして、私は振

り返った。
「藤堂君？」
「あ。まだ、絵を描いてたの？」
「ううん。もうそろそろ帰るところ」
「…他のみんなは？」
「もう帰ったよ。私が最後」

「…そっか」
藤堂君は静かにそう言うと、また私の絵を見た。
「絵を描く時は、無心だって言ってたよね？」
「うん」
「この絵を描く時もそうだったの？」
「うん」

「…俺も、矢を射る時、無心だとずばって真ん中にあたる」
「…そうなの？」
「何かを考えてると、駄目なんだ」
「やっぱり、そういうものなんだね」
「…今日も少し残って、的を見ながら座禅組んでた」

「え？」
「静かにね、的だけを見て何も考えないようにするんだ」
「うん」
「…我がなくなっていく感じかな」
「我？」

「…俺さ」
藤堂君は私のほうを見た。
「あの時、すごい我があったんだ」
「え？」

「結城さんを守ろうとか、そんなんじゃないんだ」
「あの時って、もしかして」
「うん。怪我した時」
「…」
藤堂君は少しだけ視線を下げた。
「あの時、嫉妬したんだよね」
「え？」

「美術室でもそうだ。柏木が結城さんにキスをしようとしてるのを見て、かっとなった。この前も、腕をつかんでて、かっとなったんだ」
し、嫉妬？！
「あれが柏木じゃなくても、俺、きっと嫉妬してるかな」
「ぬ、沼田君でも？」

「うん」
「でも、付き合ったらって、勧めてたよね？」
「…沼田といると結城さん、楽しそうだから、付き合ってもきっと、沼田なら、結城さんを傷つけたりしないだろうなってそう思った。俺といてもさ、結城さんは辛そうにしてる時多いし、俺といるよりもずっと、幸せでいるんだろうなって、そう思ったからさ」

「…！」
そんなことないのに。でも、私って、そんなに藤堂君といると、辛そうなの？
「だけど、ちっとも心の奥じゃそんなこと思ってなかった。って、さっきも、座禅してて感じてた」
「え？」
「エゴの塊。俺ってさ」

「…？」
「結城さん、すごいね。好きな人が元気で笑顔でいてくれたら、それでいいって言ってたよね？」
「う、うん」
「そんなふうに、俺も思ってたんだけど、やっぱ、なかなかそう思えないもんだよね」
「わ、私だって、好きな人が他の子と仲よさそうにしてたら、嫉妬しちゃうよ？」

「そうなの？」
「だから、一喜一憂もしてるんだもん」
「ああ、そっか…。好きな人ができたら、そういう嫉妬もしちゃって、それで一喜一憂するのか」
「うん」
「俺もだな…」

藤堂君は私のことを見ると、
「俺も、結城さんが他のやつと仲良くしてると、嫉妬しちゃうな」
とそう言った。
「……」
え？今、なんて？

「でも、笑顔でいてほしいっていうのは、本当だよ」
そう言うと、また私の描いた絵のほうを向いた。
「この絵、まじで嬉しかったな」
「…ほ、ほんとに？」

「うん。俺を描いてくれて嬉しかったよ。あ、川野辺がそう言ったんだろ？俺じゃなくて藤堂を描いてって」

「うん」
「川野辺に感謝だな」
「……」

駄目だ。さっきから、頭、真っ白。藤堂君。もう一回言って。嫉妬って？誰に？私に？
「結城さんは、やっぱり、迷惑するかな」
「な、何を？」
「俺が思ってると…。前に告白されて気が重いって言ってたよね？」
私？言った？そんなこと…。
…。ああ、4月の最初の頃。言ったかも～～～。

「だけど、友達になれたんだよね？」
「え？」
「友達のまんまでいいよ。ただ、やっぱり俺、自分の気持ちを誤魔化したり、隠してるの、違うって思えてきて」

「え？」
「気持ちにこたえてくれとか、そういうことは言わない。だけど、好きなものは好きだし、その気持にはもう、嘘はつきたくないなってそう思ってさ」
「え？え？で、でも、白紙って」
「…うん。言った。告白、白紙にしてって」

そうだよ、言ったよ！？
「だから、もう一回してもいいかな」
「え？！」
「いや、あれはもう、まじで白紙にして、もう一回じゃなくって、初めて告白するってことにしてもいいかな」

「……」

う、うそ。

「白紙にして、何もかもなくした状態で、ただ、結城さんが好きだって、言いたかったんだ」

「……」

うそ！い、今、なんて？今なんて言った？さっきから、藤堂君、何を言ってるの～～～？？！！！

第２８話　恋人に進展？

「結城さんに好きなやつがいてもいいよ。それを知ってて、告白するなんて、ちょっとずるい気もするけど。でも、ただ、知っておいてもらいたかっただけだし」

知っておいてもらいたいだけって、そ、そんなこと言われても。あれ？そこじゃない。そうじゃなくって、もっと大事なこと言われてるってば。

あ、駄目だ。今、頭、ぱにくってる。

好き？私が？って言ってるの？え？え～～？

「…今、困惑してる？」

コクコク。私はうなずいた。

「あ、頭の中が、思考回路が…」

私の口からそんな言葉が勝手に出てる。

「だよね、やっぱり」

藤堂君はそう言って、うつむいた。

「……。え？じゃあ、藤堂君の次って」

「次？」

「次はそうするって前」

「なんのこと？」

「す、好きな子、他にできたんじゃ？」

「…まさか。ずっと結城さんのことしか見えてないのに、他に好きな子なんてできないよ」

「え？」

「あ…。ごめん。こういうこと言っちゃうから、重いんだろうな。俺…」

「……」

ま、ま、待って。これが夢だってこともありえるよね。ものすごく都合のいい夢。だって、なんとも思ってないってさんざん言ってたんだよ?それなのに、ずっと好きでいたなんて、そんなの私の勝手な都合のいい夢としか思えない。

「ごめん。結城さんのこと、やっぱり困らせてるよね?」

「…え?」

なんか今、言った?

「結城さんが、好きな奴と付き合うつもりはないって、そんなふうに言ったから、俺、どっかで安心もしたし、そんなこと言ってたから、俺が好きだって言っても、いいかななんてムシのいいこと考えたんだよね」

「え?」

どういう意味?

「あ、やっぱり、気持にこたえてくれなくていいって言いつつ、俺、好きになってもらいたいって思ってるかも」

「え?」

「エゴの塊だ。やっぱ…」

「……」

俺を好きになってもらいたいって今、言った?

「好きな奴って、一緒にいるだけで、幸せになれるんだっけ?」

「……うん」

ちょっと待って。今、頭の中で藤堂君が言ってたことを整理したいんだから。

「…どうしてそいつ、結城さんを幸せにできるのかな」

うわ。だから、あまり質問されたら、考えがまとまらない。でも、

答えなきゃ。

「…わ、わかんない。でも、一緒にいるとあったかいし、優しいし」
「そうなんだ。結城さんを俺みたいに困らせたりはしないんだよね？」
「こ、困ってない」
考えたいだけ。
「え？」

「ううん。困惑してる」
頭の中、ぐるぐる。
「だよね？」
「さっきから、何を言ってるのか、なかなか理解できない」
「…え？」
「だって、ずっと私のことを、なんともう思ってないって言ってたし」

「ごめん。それは、その…。告白して結城さん、すごく困ってたから、なんとも思ってないって言えば、気が楽になるだろうなって思ってさ」
「……」
「でもまた、困らせてるね？」
「……」

え？まだ、頭、働かない。
「ついでに質問していいかな？」
「え？」
また質問？
「その、好きなやつって、優しいところが好きになったの？」
「わかんない。いつの間にか、惹かれてたから」

「そっか…」

藤堂君はまた、絵を見た。そして、

「そいつが羨ましいな。そんだけ、思われてるの…。だけど、結城さん、俺にこんな絵を描いてくれたんだし、俺もこれ以上、望んだりしたら贅沢っていうもんだよね」

「…贅沢？」

今度は何を言い出したの？まだ、頭の中がついていってないんだってば。贅沢って何？

「この絵は、俺のことを思って、俺が元気になるように描いてくれたんでしょ？」

「うん」

「じゃ、この絵を描いてる時だけは、俺、そいつよりも結城さんに思われてたってことかな」

「…」

え？

私が何も答えないでいると、藤堂君も黙り込んだ。その間にやっとこ、頭の中がすっきりしてきた。

「と、藤堂君」

「なに？」

藤堂君がこっちを向いた。

「なんとなく、今やっとこ、思考回路が動き出したんだけど」

「うん」

「藤堂君が好きなのは、えっと」

「結城さん」

「じゃ、じゃあ、私が好きな人は誰だかっていうのは」

「知らないよ」

「…」

「あ、でも、いいよ、教えてくれないでも。柏木みたいに、そいつのことも嫉妬しちゃうだろうから、聞かないでおくよ」

「う、ううん。聞いて」

「…いいよ。ごめん、聞く勇気もないし」

藤堂君はまた、背中を向けてしまった。

私は、なんでだか知らないけど、藤堂君のシャツの背中の部分を、ちょこっと手でつまんでひっぱった。

「…え?」

藤堂君はびっくりして、振り返って私を見た。

「……と、藤堂君は、自分のこともあまり知らないし、それに、私のこともし、知らないよね?」

「知らないって?」

「私、いつも、藤堂君といる時、ドキドキしてたり、顔を赤くしてたり、浮かれてたり、落ち込んだりしてる」

「……」

藤堂君は目を丸くして、私を見た。

「一喜一憂してるの、きっと、誰が見てもわかると思うけど、藤堂君はわからないでいたよね?」

「え?う、うん」

藤堂君はまだ、私をじっと見ている。

「え?俺といると、一喜一憂?」

「と、藤堂君があの、野坂さんと仲良く話してるのを見ても、落ち込んでたし」

「え?」

「藤堂君が優しくしてくれると、浮かれてたし」

「…」
「藤堂君が、私のことなんとも思ってないって言うたび、地の底まで行ってた」
「ええ?!」
藤堂君が、もっと目を丸くした。私はまだ、シャツをつまんだままでいた。
「と、藤堂君が、隣にいてくれるだけで、すごく幸せだって、何度も思ってたし…」
「……」
「それに、藤堂君を励ましたいとか、力になりたいって思ったのだって、藤堂君が大好きだからだし…」
ハ!今、なんかものすごいことを、私はずらずらと言ってた?うわ。我に返った。思考回路がはちゃめちゃになり、そのうえ、自分の口から、とんでもない告白をべらべらとしてただなんて。
か〜〜〜!顔がほてりまくり、藤堂君のシャツをつまんでいることにもようやく気が付き、パッと手を離して、少し藤堂君から離れた。そして、ちらっと藤堂君を見た。
「……」
藤堂君、真っ赤だ。
「お、俺?」
「…」
コクン。うなづいた。
「俺?え?俺なの?」
「う、うん」
「……」

藤堂君は、口に手を当て、しばらく黙り込んだ。
「嘘だろ」
藤堂君はまた、絵を見て、
「嘘」
とつぶやいた。

本当だもん。私は心の中でつぶやいた。
「え？なんで？俺？」
なんでって言われても。
「じゃ、俺、俺に嫉妬してたのか？」
藤堂君、自問自答してるの？

しばらく沈黙が続いた。どうしよう。何か言ったほうがいいのかな。ずっと藤堂君は背を向けてるし。すると、いきなり藤堂君は私のほうを向いた。そして、
「結城さん」
と背筋を伸ばしてそう言った。
「は、はい？」
私もつられて、背筋を伸ばした。

「俺と、付き合ってくれませんか？」
え？何？突然。
「結城さんがずっと、ずっと好きでした。付き合ってくれませんか？」
「…はい」
いきなりで驚いて、はいって思わず言ってた。でも、
「はあ…」
って、藤堂君が嬉しそうに笑って、それから私を優しく見つめてきて、私はやっと藤堂君に交際を申し込まれたことを理解した。

じわ〜〜。いきなり、涙が出てきた。
「ゆ、結城さん？」
藤堂君がそれを見て、慌てている。
「う、う、う」
「え？」
「嬉しい」
そう言うと、もっと涙があふれ出た。

「え？嬉し泣き？」
「うん」
私はうなづいて、下を向いて涙をふいた。
「…うそ」
藤堂君がつぶやいた。

「？」
藤堂君を見ると、真っ赤になって私を見ている。
「ごめん。ちょっといまだに、俺、信じられないっていうか」
「え？」
「結城さんも俺のことを好きっていうのが、なんか、その…」
藤堂君の目も赤いけど？え？泣いてる？

「やばい。俺も、嬉しいや…」
藤堂君はそう言うと、もっと赤くなった。
「駄目だ。俺、結城さんの前だと、ポーカーフェイスが崩れる」
え？
「ちょ、見ないで。俺今、かなり顔、しまりないから」

嘘。本当に照れまくってる。うわあ。可愛い〜〜。
私は見ないでと言われたのに、じっと見てしまった。
「ゆ、結城さん。見ないでって」

藤堂君はそう言うと、後ろを向いてしまった。

「か、可愛い」

そう言葉に出ていて、藤堂君は驚いて、私を見た。

「だ、誰が？」

「え？」

「誰が可愛いって？」

「と、藤堂君」

「俺？！」

私はコクンと小さくうなづいた。

「ちょ、やめてって。俺、別に、その…」

藤堂君は、照れまくりだ。

「でも、そういうところもひっくるめて、私…」

好きなんだけど。と最後までは言えなかった。だけど、どうやら藤堂君は理解したらしく、

「え？こんなでもいいの？」

と焦って聞いてきた。

「うん」

私はうるんだ目でうなづいた。

「……」

藤堂君はまた、ぐるって後ろを向いた。そして、

「可愛いのはそっちだって」

と聞こえるか聞こえないかくらいの小声で、そうつぶやいた。

いつの間にか、外は日が落ちて暗くなっていた。藤堂君はものすごく照れた顔をして、

「あ、今日、一緒に帰る？」
と聞いてきた。
「え？うん」
私も顔を赤くして、うなづいたと思う。顔がすごく熱かった。

片づけを終わらせ、美術室に鍵をした。藤堂君も道場の鍵を持って行くからと、一緒に職員室に行った。
「あれ？ずいぶん遅くまで、頑張っていたんだな。結城」
原先生に言われ、私は焦りまくり、
「ははは、はい」
と言って、鍵を渡してさっさと職員室を出た。

あ～～。きっと真っ赤になってたの、先生にばれたよね。
藤堂君も鍵を返して、廊下で待っていた。私は小走りに藤堂君の横に行き、それから廊下を2人で歩き出した。

もう6時を過ぎていて、どの教室も電気が消え、廊下は静かだった。
「あれ？」
いきなり藤堂君は、ポケットに手をつっこみ、
「やばい。教室だ」
と言った。

「忘れ物？」
「携帯忘れた。ごめん。昇降口で待っててくれる？」
「…い、一緒に行く」
「え？でも」
「暗い学校って、ちょっと苦手で…」

「あ、そうか。うん。じゃあ、悪いけど、教室まで付き合ってくれ

る？」
「うん」
本当はそばにいたいっていうのが、一番の理由。だけど、暗いのが苦手っていうのも本当だ。どうも、このくらいの時間の校内は一人で歩きたくない。

グランドでは、まだ野球部が練習もしているし、音楽室からは、軽音部の音が聞こえてくる。
だけど、2階、3階に昇っていくと、そこには誰も残っていないようで、静まり返っている。
うわ。いつも、部活が終わるとさっさと昇降口に行き、帰ってしまうから、放課後の教室がこんなに静かだって知らなかったな。

それもそうか。部活は各々の場所でやってて、部室で着替えたりして、みんなそのまま教室に寄らず、帰ってしまうんだもん。
5時を過ぎると、部活動で残っている生徒以外は、先生が各教室を回って、帰らせているんだっけ。で、たまに、そんな教室に戻ってくるカップルがいるとかなんとか、そんな噂を聞いたことがある。

ガタン…。
3階の廊下を歩いていると、教室から物音がした。
「え？」
私はびっくりして、藤堂君の背中にしがみついた。
「し…。先生かも」
と言う声が、教室から聞こえた。

なんだ。人だ。生徒だ。ああ、びっくりした。
藤堂君はなぜか、
「まだ残ってる生徒がいるんだろ？それより、早く忘れ物取りに行かないとな」

と、そんなことをちょっと大きめの声で言った。
「なんだ。先生じゃないよ」
と言う声がまた、教室から聞こえた。あ、そうか、先生じゃないってことを、藤堂君、知らせてあげたのか。

藤堂君はクラスの教室に入ると、机の引き出しから携帯を出した。
「よかったね、あって」
私がそう言うと、藤堂君はうんって、にっこりとうなづいた。
なんだか、ポーカーフェイスって言うのが信じられないくらい、藤堂君、よく笑うんだけど?

「あ、メール入ってた」
藤堂君はそう言って、携帯を開いた。
そういえば、私、藤堂君のメアド、知らないんだよな。教えてほしいな。
「ああ、そっか。返事してなかったっけ」
藤堂君はぼそって独り言を言った。誰にかな?ちょっと気になる。

藤堂君はポチポチと、慣れない手つきでメールをしている。もしかすると、あまりメールは得意なほうじゃないのかもしれない。
「と、友達?」
思い切って聞いてみた。
「野坂さん」
え?!
「いろいろと怪我してたら、大変じゃないですかっていうメール来てたの、忘れてた」

「…」
なんて返したのかな。ドキドキ。
「別に、片手でも大変じゃないしなあ。そんなに恩を感じてくれな

くてもいいんだけど」
藤堂君はそう言った。
「恩だけじゃない気もする」
私は思わず、そう言ってしまった。

「え？」
「藤堂君のことを、きっと…」
「ストップ」
「え？」
「それ以上はいいよ。もし、そうだとしても俺、何もしてあげられないし。だから、後輩と先輩以上にはならないようにしているし」

そうか。わかってたんだ。
「期待させたら、悪いって思って、メールもあまり返してないんだ」
そうなんだ。
「…あ」
藤堂君が私を見た。
「え？」

「メアド交換してないね？そういえば」
「うん」
気が付いてくれたか！
「えっと、今、いいかな？」
「うん」

私は携帯を出した。そして、メアドを交換した。
う、嬉しいかも。でも、どんなメールをしあったらいいんだろう。
そもそも、彼氏ができたこともないし、付き合うのだって初めてだ。
いったい、これからどうしていったらいいんだろう…。

第29話　ドキドキ

ドキドキドキドキ。

今だって、2人っきりでいて、心臓がずっと高鳴ってる。さっき、隣の教室から聞こえた声は、男女の声だった。教室暗かったし、カップルでいるんだよね？な、何をしてるんだろうか、なんて、さっきから頭の中で私は、ぐるぐるしちゃってるし。

でも、そんなことを藤堂君にさとられないよう、わざと平気な顔をして、ふるまっちゃってる。

藤堂君は携帯をポケットにつっこむと、教室を出て行こうと、ドアの近くまで歩いて行った。私はちょっと離れて、ついていこうとした。すると、

「結城さん」

と、藤堂君が声を潜めて振り返った。

ドキ～～～～！名前呼ばれただけなのに、心臓が飛び出るかと思った！それもなんで、声を潜めたの？

「な、なに？」

それでも、必死で冷静に返事をした。つもりだ。でも、声が震えてしまった。

「その…」

藤堂君、なんか言いにくそうだ。ドキ。な、何かな。

「そっちのドアから出ない？」

「え？」

「で、遠回りになるけど、向こうの階段から下りよう」

「？」

私がきょとんとすると、藤堂君は、

「その…。あまり隣の教室の前は、通らないほうがいいっていうか」
と口ごもりながらそう言った。

もしかして、さっきの…。
「え？誰かが隣の教室にいた…」
「うん」
「え？あれって、まさか」
「うん」

「…人じゃないとか？」
「は？」
「生徒だと思ったけど、違うの？」
「生徒だよ。多分、隣のクラスの誰かだろ？」
なんだ。幽霊かと思った。藤堂君がそんなこと言い出すから。

「ただ…その…。そっか。そこじゃわかんないか」
「？」
「こっち…」
藤堂君がドアの近くに私を呼んだ。すると、かなり色っぽい声や、息が漏れる音が聞こえた。
う、うそ。これ？
私は思わず、藤堂君を見た。藤堂君も私を見た。それから私は、なぜだか藤堂君から、すすすって遠ざかった。

「そういうわけだから」
藤堂君はまた声を潜めてそう言うと、教室の中を歩きだし、反対側のドアから廊下に出た。
私はかなり後ろのほうから、ついていった。
い、今の…。今の…。隣りのクラスの人だとしたら、同じ年だよね？そ、それで、え。え～～？！

廊下に出ても、藤堂君からだいぶ離れて私は歩いた。
「結城さん」
「え?!」
ビクン!私は思わず、飛び上がった。
「俺は何もしないから、安心して?」

「え?」
「ちょっとショックだった?もしかして」
コクン。私はうなづいた。まさか、だって、教室で、同じ学年の子が…。
「俺も、ショックだった」

「え?」
藤堂君も?
「この時間に教室行くのは、もうやめようね。結城さん」
「う、うん」
ドキドキ。本当だよ。安心してって言われても、やっぱり藤堂君を意識しちゃって、近寄れないよ。

藤堂君は先に階段を下りていた。私はかなり後ろから歩いていて、階段を下りようと、トイレの前を通ったら、トイレのドアが自然とぎいって開いた。
「う、うひゃ〜〜」
声にもならない声をあげ、私は一気に階段を下りて、踊り場にいた藤堂君にひっついた。

「な、何?」
「今、勝手にトイレのドアが開いた」
「ああ、男子トイレでしょ?あのドア、立てつけが悪いんだ。たま

に開くんだよね」
「……」
なんだ～～～～～。もう～～～～。

カァ…。外からカラスの鳴き声がした。そのあと、水道の水がピチョンと落ちる音。そして窓ガラスに当たる風の音。
うわ。どの音も不気味に聞こえてくる。

「と、藤堂君」
「ん？」
「け、怪我してない腕だし、校舎出るまでいいよね？」
「？何が？」
「くっついてて」
「手、つなぐ？」
藤堂君が手を差し出して聞いてきた。私は首を横に振った。

「…え？」
藤堂君がちょっと暗い顔をして、手をひっこめた。あれ？なんで？
「と、藤堂君。手じゃなくって、腕にしがみついてたら迷惑？」
私がそう聞くと、藤堂君は、
「え？いや、別にいいよ」
と言ってくれた。

ありがたい。手をつなぐくらいじゃ、この怖さは消えないよ～～。
私、お化け屋敷も、怖い話も、そういう映画も全く駄目なんだから。
私は藤堂君の腕にしがみつき、階段を下りた。
藤堂君は、しばらく黙っていた。

やっとこ、昇降口に着くと、藤堂君から私は離れ、靴を出して履いた。藤堂君も片手で下駄箱を開けたり、靴を履いたりしている。

「何か手伝うことある？」
そう聞いてみると、
「うん。大丈夫」
と藤堂君が言った。

でも、すぐに、
「あ、靴履く時、バランス崩すから、ちょこっと肩かしてもらえるかな」
と聞いてきた。
「うん」
私は藤堂君の横に行った。藤堂君は私の肩につかまった。

うわ。ドキドキする。
「あ。あれ、もしかして幽霊？」
藤堂君が突然、低い声でそう言った。
「ええ？！」
私は藤堂君の指差してるほうを見ないようにして、慌てて藤堂君の胸にしがみついた。

「…あ、ごめん。違った。ごみ袋が木につる下がってた。風で飛んできたのかな」
藤堂君がそう言った。私は恐る恐る振り返ってみた。すると、木に透明のごみ袋がつる下がって、風でなびいていたが、どっからどう見ても、ごみ袋だっていうのがわかる。

そこではたと気が付いた。藤堂君の胸にしがみつき、藤堂君は怪我していないほうの手で、私の肩を抱いていたことに。
「あわわ」
私は慌てて、藤堂君から離れた。

「…くす」
え？笑われた？
それから藤堂君は下を向いた。そしてまた私を見ると、
「お化けとか苦手？」
と聞いてきた。

「うん」
「…じゃ、よく今まで部活の帰り、一人で帰れたね？」
「平気じゃないよ。なるべくさっさと歩いて昇降口に来て、さっさと駅に歩いて行ってたし。あ、でも外は、街燈もあるし、お店もこの辺あるから、怖くないし」
「じゃ、学校の中が怖かった？」
「うん」

「ごめん。やっぱり、教室まで付き合わせなかったらよかったね」
「昇降口で一人でいるのも嫌だもん」
「…だけど、俺といるのも結城さん、怖がってたよ？」
「…あ、あれは」

う～～～。だって、やたらと意識しちゃっただけで、怖がってたわけじゃないし。
「怖がったりしないよ」
「え？」
「藤堂君は怖くないし」
「…ほんと？」

「ゆ、幽霊のほうが怖いし」
「幽霊のほうが何にもしないと思うけど」
「藤堂君は何かするの？」
「い、いや、えっと…」

藤堂君は、頭を掻いて下を向いてしまった。

私は藤堂君と歩き出した。当たりは暗くなっていたけど、校舎を出ると、道には自販機、少し行くとコンビニもあって、そんなに暗くない道だ。

藤堂君は私の質問に、まだ戸惑っているのか、頭を掻いたり赤くなったりしている。

いつも冷静で、穏やかな藤堂君のイメージがどんどん変わっていくなあ。こんなふうに困っちゃう藤堂君もいるんだ。それも、顔を赤くして…。

「さっきの、どっからどう見ても、ごみ袋だった」

私がそう言うと、藤堂君は、

「ごめん」

と謝ってきた。

「わざと？」

私が聞くと、

「う、ごめん」

とまた謝った。

「ちょっと、怖がってる結城さん、可愛いなって思っちゃって、その…」

「可愛い？」

ええ？私が？

「それに、腕にしがみついてきてくれたの、ちょっと、いや、かなり舞いあがちゃって」

「え？」

喜んでたとか？

「あ～～～。ごめん」

藤堂君は、すごく反省してる。
「……と、藤堂君」
「え？」
「私、男の人と付き合ったことないし、男の人苦手だし」
「う、うん、そうだよね？」
「だから、これからもどうしていいかわからないことだらけで」
「うん」
「どうしたら、藤堂君が困るとか、喜ぶとかもわかんないし」
「え？」
「でも、その…。よ、よろしくお願いします」
「…は？」
「あまり、呆れたりしないでほしいっていうか」
「え？」
「さ、最初に言っておくね？私が変なこと言ったり、とんちんかんでも、呆れないでね」
「……うん」
ホ…。良かった。
「って、え？」
藤堂君は私の顔を見た。
「？」
「俺のこと怒ってたんじゃないの？」
「怒ってないけど？なんで？」
「幽霊がいるってだましたり」
「ああ、あれ？別に怒ってない」
胸にしがみついたりして、ドキドキしたけど、怒ることじゃないもん。

「男の人が苦手だから、やっぱりお付き合いはしませんって言われるのかと思った」
「え？」
「ちょっと、びびった。今…」
え？そんなことを私が言うと思ったの？

「あ、俺も、付き合うのって初めてだし、気も利かないし、結城さん、呆れることばかりだと思うけど、その…、これからよろしくお願いします」
藤堂君が立ち止まりそう言ってきた。
「う、うん」
私は藤堂君を見てうなづいた。あ、藤堂君、照れてるかも。

「……駄目だ」
「え？」
「俺、ちょっと浮かれすぎだ」
「え？」
そうは見えないけど？

「ごめん。なんかこれからも、しでかすかも」
「し、しでかすって？」
「いや、なんでもない」
「？？？」
藤堂君はそう言ってから、駅までずうっと黙っていた。

黙ってはいるけど、私を見たり、そっぽ向いたり、咳払いをしたり、また私を見たり、忙しそうだった。
改札を抜けた。ホームに立って電車を待っていると、
「結城さん」

と藤堂君が話しかけてきた。

「え？」

「…ありがとう」

「？何が？」

「ＯＫしてくれて」

「……」

「去年の秋はもう、地の底まで落ち込んで、立ち直るのにまじで、すごく時間がかかったんだ。立ち直れたと思ったら、同じクラスになっちゃったし」

そうだったの？

「だけど、近くで結城さんを毎日見れて、ラッキーって思ったりもしてた」

え？

「それに、知れば知るほど、好きになったし」

え？

「…友達になれただけでも、去年から比べたら、すごい進展だって、大喜びしてて」

うそ～。それ、私だってば。

「だから、今日のことは、まだ信じられないんだけど」

「…」

うそ。それも私だってば。

「でも、夢じゃないんだよね？これ」

夢？まさか。明日起きたら、夢でした、なんてことはないよね？

「ありがとう。ほんとに…」

「う、ううん。こ、こっちこそ。すごく嬉しい」

藤沢方面の電車が入ってきた。私はその電車に乗り込んだ。
ドアの所に立ち、ホームを見た。藤堂君はずっと私を見ている。
そして電車が走りだしても、私を見ていた。
私も藤堂君を見ていた。そして小さく手をふった。藤堂君も手をふり、にこって笑ってくれた。

は～～～～～～。あの笑顔が、素敵だ。
付き合う。交際。彼女。彼氏。
ああ!!ああ!!信じられないけど、恋人に進展だ～～～～!!!!!!!

家に帰って、美枝ぽん、麻衣、沼田君にメールした。
＞お付き合いを申し込まれ、ＯＫしました!
すると、みんなから、
＞誰から?!
とすぐに返信がきた。

あ、そっか。相手の名前書き忘れた。でも、わかるでしょ。私が好きなのは藤堂君しかいないんだから。
＞藤堂君に決まってる!
そう送ると、みんなから、やったね、おめでとうというメールが来た。

そして夜、１１時。ものすごく悩みに悩んで、ドキドキしながら、藤堂君にメールを打ち出した。初メールだ。
＞おやすみなさい。
お休みメールなんて変?他にも何か書く?
＞怪我大丈夫?
いや、変でしょ。それも。
＞片手で不自由してない?

いや、それも変。絶対変。

そして結局、
＞おやすみなさい。
それだけを書いて、メールした。すると、3分後、
＞おやすみなさい。
と、返信が来た。
うわ～～～～。返信だ。藤堂君から初メールが来た！嬉しすぎる。

私はその晩、携帯を抱いたまま眠りについた。
神様。どうか夢ではありませんように。今日のことは、現実でありますように。と祈りながら。

第３０話　照れ隠し

翌朝、目が覚めて、私は携帯を開いた。
「昨日の、夢じゃないよね？」
ドキドキしながら見てみると、ちゃんと藤堂君からのお休みメールが残っていた。
「ゆ、夢じゃない～～～～！！！」

ベッドから飛び起きて、顔を洗った。それから念入りに髪をとかし、しっかりと顔を洗ったり歯を磨き、早めに家を出た。
は…。そうか。藤堂君は今日も病院に行ってから来るのか。じゃあ、早目に行ったからといっても、早くに会えるわけじゃないのか。
は～～～～。ドキドキ。今日顔を合わすのが、嬉しいような、恥ずかしいような、緊張するような…。
電車に乗って、私は物思いにふけっていた。
私はいつか、下の名前で呼ぶようになるかな。司君とか、司っちとか。で、藤堂君はなんて呼んでくれるんだろう。穂乃香…。ああ！呼び捨てがいいな～～～。穂乃ぴょんだけは、やめてほしい。

穂乃香？呼び捨て？藤堂君が？きゃ～～～～～。
ブルル。携帯が鳴った。ハッ！まさか、藤堂君？
開いてみたら、麻衣だった。
＞おはよう。今日、いきなりの進展の詳しい話を聞かせろよ！
うわ。男前のメールだなあ。

はあ。話したいような、話したくないような。そっと心の中に、藤堂君からの告白をしまっておきたいような、そんな感じ？
って、思いながら昨日のことを、再現フィルムのように思い出し

ていた。
藤堂君、照れた顔可愛かった。真っ赤だった。

それに、腕や胸にしがみついちゃった。あ～～～！得したかも！
はれ？私ったら、得したなんて思ってんの？昨日は、ちょっと藤堂君のこと、意識して近寄れなくもなってたのに…。
ああ。もう、自分のことすら、わけわかんない。

あ～～～。早く会いたい。でも、ちょっと会いたくないような、そんな感じ？

「何それ」
麻衣と美枝ぽんにそれを言ったら、鼻で笑われた。…なんで？
「わかる。わかるよ、それ」
と、共感したのは沼田君だった。

「いいから。なんで告白されることになったかを、教えなさいって」
麻衣がそう言った。
「そうだよ。藤堂君、なんて言ってきたの？」
美枝ぽんもそう聞いてきた。

「…やっぱり、内緒」
「か～～～～。なんだんだろうね、この子は！」
麻衣がぱちんと背中をたたいてきた。
「いたたた」
「わかる。わかるよ、その気持ち」
と、共感してるのは、やっぱり沼田君だ。

「沼っち。それ、美枝ぽんとのことででしょ？なんだか、ムカつく」
麻衣がそう言った。

「え?沼っち。沼っちも、付き合うことになった翌日、私に会いたいような、会いたくないような、そんな感じだったの?」
「え?」
美枝ぽんの質問に、沼田君は赤くなり、
「いや。会いたかったよ。俺は」
と照れくさそうにそう言った。
「美枝ぽんも!」
美枝ぽんがそう言って、沼田君の腕にしがみついた。
「おおっと」
それを見て、麻衣がのけぞった。
「いつの間に、こんなに仲良くなってるの?っていうか、美枝ぽん、積極的」
麻衣がそう言うと、美枝ぽんは、
「だって沼っちってシャイだし、こっちからどんどんいかないと、な〜んにも進展しそうにないんだもん」
と口をとがらせて言ってから、沼田君に向かって、ね?と同意を求めた。
「え?」
沼田君は、びっくりして真赤になった。
私もびっくりだ。こんなこと私には、ぜ〜ったいにできない。
待てよ?腕にはもうしがみついたか。それも、自分からしがみついていったっけ。
でもあれは、怖かったから。だ、だけど、しがみついたことは事実…。
わ。顔あつ…。
あ。大変。今、私、きっと真っ赤…。

だけど、麻衣も美枝ぽんも沼田君も、私が真っ赤なのなんて、な〜んにも反応を示さず、3人であれこれ言い合って、笑っている。
ま、いっか。それよりも、早く、藤堂君来ないかな〜〜〜！

ドキドキ。1時限目が終わった。ドキドキしっぱなしだった。
そして、休み時間、藤堂君がやってきた。
きゃ〜〜〜。いつにもまして、凛々しく見えるのは、なぜ？
でも、沼田君におはようと微笑みかけたあの笑顔が、やたらと可愛くて胸がきゅんってするのは、なぜ？！

「司っち。ダブルデート今度しようぜ」
沼田君がそう言ってるのが聞こえた。
「なんで？」
藤堂君のきょとんとした声も聞こえた。
なんでって、今、言った？

「え？だから、俺と美枝ぽんと、司っちと穂乃ぴょんで花火大会」
「人ごみ、苦手なんだって、前言わなかったっけ？」
「…」
沼田君が黙り込んだ。そして、私のほうを見て、何かを訴えている。どうやら、本当に付き合ってるの？と聞きたいらしい。

藤堂君はこっちを見ないで、席に着いた。すると今度は、麻衣が藤堂君の背中をつっつき、
「聞いたよ〜〜」
とひやかしてるのがわかった。でも、藤堂君が、
「え？何が？」
と表情も変えずそう言ってるのも、こっちから見ててわかってしまった。

「どういうこと？」
麻衣もこっちを見て、クチパクでそう聞いてきた。
「え？」
こっちが聞きたい。どういうこと？やっぱり、夢だった？それとも、もう嫌われたとか？

「交際、申し込まれたって言ってたよね？穂乃ぴょん」
後ろを向いて、美枝ぽんが聞いてきた。今のをどうやら美枝ぽんも、見ていたらしい。
「うん」
「何て言ってきたの？藤堂君」
えっと、確か、付き合って下さいとそうはっきり。
他にも、ちゃんと好きだって言ってたような、そんな気もする。

あれ？聞き間違いだった？
え？まさか、私の勘違い？
あっれ～？私の幻覚？まぼろし？

休み時間が終わり、先生が入ってきた。そして授業が始まったが、私の魂はどっかに抜けていた。
あれは、なんだったの…？
ぼけ～～～～。

チャイムがなり、机にうつっぷせた。すると、つんつんと誰かに頭をつつかれた。
誰？
私が顔をあげて振り向くと、うわ！藤堂君だ！
「と、藤堂君？」
一気に顔がほてっていく。

「ばらした？」
「え？」
「３人にもうばらしたの？」
ギク。え？
「い、いけなかったかな」

「そっか。もう知ってたんだ。沼田も中西さんも」
「…」
ばれてないと思って、あんな態度を取ったとか？
「あれ？沼田君と麻衣は？」
「なんだか、よそよそしい感じで笑いながら、八代さんと３人で教室を出て行ったよ」
「え？」

あれ？そういえば、美枝ぽんもいない。
「…と、藤堂君。ごめん。ばらしたら駄目だったかな？」
「そういうわけじゃないけど、まだ知らないのかなって思ってさっき、思い切りしらをきっちゃって…」
そうか。やっぱりそうだったんだ。よ、よかった。夢だったわけでも、まぼろしだったわけでも、もう嫌われたわけでもないんだね。

「やべ」
「え？」
「どんな態度とっていいか、わかんないや」
「え？」

「あの３人の前で」
ああ、そういうことか。私の前でかと思った。っていうか、私は、藤堂君の前でどんな態度でいたらいいか、わかんないよ。
「ふ、普通でいいんじゃないかな」

私はそう言ってみた。でも、私が藤堂君の前で、普通でいられるかどうか。今だって、顔がひきつってるし、ドキドキしっぱなしだし、顔もまともに見れないし。

「そうだよね。変に態度を変えるのも変だよね」

そうだよね。藤堂君の前で、変に意識してるのも変だよね。

「ちょっと、ああやって言われるの、苦手で…」

「え?」

「ひやかされたりすると、俺、ますます顔が、無表情になるんだよね」

「え?そうなの?」

「だから、怒ってるように見えちゃうかもしれないけど、そうじゃないから。一応、結城さんにはそれ、前もって言ったほうがいいかなって思って」

「え?」

「傷ついたりしないでもいいからね?俺がそっけなく見えたり、ムッとしてるように見えても、多分、照れ隠しだから、気にしないでね」

や、優しい。それを言いに来てくれたの?!

だ、駄目だ。今、すごく優しい目で見てるし…。私、きっと目が今、ハートになってる。藤堂君が優しすぎて、へろへろだ~~~。腰砕けた~~~。

「じゃあ」

藤堂君は、ニコって笑って、自分の席に戻った。私は多分、ニコって笑ったつもりだけど、にへらってなっていただろうな。

あ、やばい。よだれ垂れてないよね。

そこに、美枝ぽんが戻ってきた。

「へラ〜〜〜…」
て、そんな顔を見られないように、私はまた、机にうつっぷせた。
「ね、穂乃ぴょん」
「え？」
うつぶせたまま、私は聞いた。
「お昼にちゃんと、私たちから、司っちに聞いてあげるからね」
「な、何を？」

慌てて私は顔をあげた。
「穂乃ぴょんのことを、ちゃんと思ってるかどうか」
「い、いい、いい。そんなこと聞かなくていい」
「え？どうして？穂乃ぴょんも知りたくない？」
「う、うん。大丈夫。そんなことしたら、藤堂君、絶対に困っちゃうから、しないでいい。っていうか、してほしくない」

「なんで？」
「お願い」
私は美枝ぽんの手を握りしめ、そうお願いした。
「わかったよ。そこまで言うならやめるけど。でも、いいの？知りたくないの？」
「いい。私から直接、あとで聞くからいい」

「へえ。穂乃ぴょんってば、たくましくなったんだね」
違う。ちゃんともう、聞いてるの。ただ、そういうのを周りの人から聞かれたり、みんなに言うのは藤堂君、きっと苦手だと思うから。
あ、危なかった。ひやかすのも、あれこれ言って来るのも、絶対にやめさせなくっちゃ。

お昼にみんなで、食堂に行った。藤堂君は沼田君と話をしていて、まったく私のほうに来ないし、顔も見てくれない。もう3人にはばらしたって、そう言ったのにな。

ちょっと寂しいかも。

「せ～～んぱい！」

食堂に入ろうとすると、野坂さんが近寄ってきた。

「これ、昨日作ったんです。みんなで食べてください」

「何？」

「チョコクッキーです。藤堂先輩、甘いの好きですよね？」

「あ、ああ。ありがとう。じゃあ、みんなでいただくよ」

「はい。それじゃ！」

野坂さんはにこりと微笑むと、また爽やかに駆けて行った。

「え？司っち、甘いの好きなの？見かけによらず」

「やっぱり？俺、そういうの苦手だって、勝手にみんな思うみたいだよね」

「バレンタインにチョコはもらった？」

「陸上部の女子からくらい。他にはもらったことないよ」

藤堂君はそう言って、食堂の空いてる席に座った。

藤堂君の前に沼田君。その横に美枝ぽん。そして、麻衣が藤堂君の真横に座った。

え？となると、私が座れる席は、麻衣の横だけ？なんで？！麻衣っ！！

「藤堂君って、本チョコもらったことないんだ。あ、でも、意外と陸上部の女の子からのチョコが、本チョコだったりしてね」

美枝ぽんがそう言いながら、お弁当を広げた。

「どうしたの？穂乃香も早く座りなよ」
麻衣？意地悪してるの？これ。う…。泣きそうになってきた。
でも仕方なく私は、麻衣の隣におとなしく座った。

「…」
藤堂君をちらっと見てみた。藤堂君は麻衣のほうを見たけど、何も言わない。
「…」
何か言ってくれても！
私はうつむき、どよよんとした。やばい、地の底行っちゃうよ。

「あ、司っち。お弁当、袋から出してあげるよ」
麻衣がそう言って、藤堂君のお弁当を袋から出し、箸箱から箸を出し、そのうえ、お弁当のふたまで開けてあげた。
な、なんで？それ、私がしたかった。
「片手で食べられる？食べさせてあげようか」
麻衣が言った。これはもう、私に対する嫌がらせとしか思えない！

「中西さん」
藤堂君が無表情で麻衣の名前を言った。
「なあに？」
麻衣が機嫌よく返事をした。
「あのさ。わざとしてるよね？」
「え？私が何？」
麻衣、なんでとぼけてるの？

「今、結城さん、泣きそうになってるんだけど」
藤堂君がそう言った。うわ。私が泣きそうなの、わかってたんだ。
「え？」
麻衣が私を見た。私はうるうるしてきていて、麻衣がぼやけて見

えた。

「ごめん！穂乃香。穂乃香を泣かせようとしたんじゃないの。ちょっと司っちの反応を見たかっただけで」

ガタン。麻衣が椅子から立ち上がり、

「はい。交代、交代」

と言って、私を藤堂君の隣に座らせた。

「…」

う…。なんだか、一回地の底まで行ったからか、なかなか這い上がって来れない。お弁当を広げたけど、食べる気にもなれない。

「そうだ。沼っち、昨日のドラマ見た？」

「ああ、見た見た」

「え？何のドラマ？」

美枝ぽんと沼田君と麻衣が、明るく話し出した。藤堂君は黙々とご飯を食べ、私はその横で、なかなか箸がすすまないでいた。

「やっぱり、あの女優、演技うまいよな」

「え～～？そうかなあ」

「私は、主人公のお父さんがいいなあ」

「え？あんな親父がいいの？麻衣ちゃん」

「渋いじゃない！」

3人はすご～～く、楽しそうに盛り上がっている。それに比べて、私はとっても暗い。ああ、駄目だ。明るくしよう。会話に入らないと…。

「あの…」

私が話そうとしたら、いきなりみんなが黙り込み、私に注目してきた。

「えっと」

うわ。なんで、いきなり黙っちゃうわけ？

「何？穂乃香」

なんだか、みんながじいっと私を見ている。

「な、なんでもない」

私はそう言って、またお弁当を食べだした。

「……」

藤堂君がお箸を置いた。

「なんか、言いたいことあるなら、はっきり言えば？」

藤堂君がそう言った。すると、

「そっちこそ、よそよそしくしないでもいいよ。司っち」

と沼田君だ言った。

「俺がなに？」

「付き合いだしたんなら、仲良くしてもいいんだよ？」

美枝ぽんもそう言ってきた。

「え？」

藤堂君の顔が、固まった。

「本当は横に、穂乃香に座ってほしかったくせに」

麻衣がそう言って、ご飯をばくっと食べた。

「…」

藤堂君は少し、麻衣を睨んでいる。

「それに、あれこれ、世話してもらいたいのは、穂乃香にしてもらいたいんでしょ？そう言えばいいのに」

麻衣はまたそう言って、今度は卵焼きをばくって食べた。

「勝手に横に座って、勝手にお弁当出したりしたくせに。俺、頼ん

でないよ」
藤堂君が下を向きながら、不機嫌そうに言った。
「じゃあ、穂乃香にしてもらうから、いいって断ったらよかったのに。それに、私が横に座った時に、そこは穂乃香が座るんだって言ったらいいじゃない？」

「……」
藤堂君が黙り込んだ。
「っていうかさ、付き合ってるってことも、どうどうと言ってくれちゃってもいいのに、司っち」
今度は沼田君が、にやってしながらそう言った。
「なんか、お前ら、企んでた？」
藤堂君がそう聞くと、
「べ～～つに～～」
と沼田君は、憎らしい感じでそう答えた。

「……」
藤堂君はまた、むすっとして、お弁当を食べだした。
「隣に彼女がいるって顔じゃないよな。司っち」
沼田君がまだ、藤堂君にからむつもりらしい。
ちら。藤堂君を見た。あ、もっとむすってしちゃった。

は！そうか。これ、照れ隠し？さっき言ってたのって、このこと？
もしかしてもしかすると、すんごく今、照れてるの？

「こういう顔なんだよ、もともと。だから前にも言ったじゃん。俺、よく怒ってるとか、むすっとしてるって言われるって」
「…ふうん。でもさ、そんな怖い顔してたら、穂乃ぴょんが泣いちゃうよ？」
沼田君がそう言ったが、私を見て、

「あれれ？泣きそうな顔じゃないな。穂乃ぴょん。なんで、そんなに赤くなって、嬉しそうなの？」
と沼田君が聞いた。

「え？私、嬉しそう？」
「うん」
わ～～。顔に出てたか！
「もしかして、藤堂君の隣に座れただけで、喜んでる～～？」
美枝ぽんがそうからかってきた。

「…」
何か言い返そうとしたけど、何も言えず、私の顔はもっとほてってしまった。それを真横で藤堂君が見ていた。そして、いきなり、耳まで赤くなった。

「あ、司っち、顔赤い」
「あれ？本当だ」
沼田君と美枝ぽんが、藤堂君を見てそう言った。
「う、うるさい」
藤堂君はそう言うと、下を向いてしまった。

「あ、司っちが照れた」
「ほんとだ」
また、2人がそう言って、からかった。
「あはは。司っちは、穂乃香の前だと、ポーカーフェイスが崩れるんだ」
麻衣がそう笑いながら言った。

「う…」
藤堂君は一回顔を上げた。でも、みんなが藤堂君の顔をじっと見

ていたからか、また下を向いてしまった。
「しょ、しょうがないじゃん。結城さん、見たこともないような表情するし…」
藤堂君がぽつりと小さくつぶやいた。

「え?」
みんながいっせいに耳を傾けた。
「独り言だよ、なんでもないよ」
藤堂君はそう言うと、
「俺、水もらってくる」
と言って、席を立ち行ってしまった。

「な〜んだ。司っち、照れ隠しだったんだ」
麻衣がそう言った。
「なんにもなかったように、ふるまっちゃってたけど、照れを隠していたんだな」
沼田君もそう言った。そして、
「よかったね!穂乃ぴょん。気持が通じてさ」
と私を見てそう言ってくれた。

「う、うん」
じわ〜〜。私はまた涙が出てきて、慌てて涙をふいた。
「あ」
藤堂君がコップを持って席に来て、
「結城さんのこと、またからかって泣かせた?」
とみんなに聞いた。

「泣かせてないよ。それに、穂乃ぴょん、嬉し泣きだもんね?」
美枝ぽんが私に向かって、ウインクをした。
「え?嬉し泣き?」

藤堂君は私の顔をのぞきこんだ。

「司っちと両思いになったから、感動してるんじゃん。なあ?穂乃ぴょん」

今度は沼田君が私に、ウインクした。

「…か、感動?」

藤堂君がびっくりしている。

「そりゃもう、ずっと司っちのこと健気に思ってたし、俺、相談にのってて、どんだけ胸を痛ませていたことか」

「え?」

「健気で、一途だよな~~、穂乃ぴょんってって、ずっと思って聞いてたんだよ」

「……」

藤堂君は耳まで赤くなった。

「あ、藤堂君がまた赤くなった」

それを見て、美枝ぽんがすかさずそう言った。

「だ…。だから、そうやってひやかすから、ばらしたくなかったんだよ」

藤堂君はそう言うと、一気に顔をむすっとさせて、水をぐびぐび飲んだ。

「あはは。おもしろ~~い。これから2人を見てるの楽しみかも」

麻衣が笑いながらそう言うと、

「俺らで遊ぶな」

と藤堂君はもっとむすっとして、麻衣を怒った。

第３１話　胸キュン

放課後、今日は沼田君は、１年の時の仲良かった仲間と遊びに行くと言って、さっさと帰っていき、美枝ぽんも部の友達と部の帰りにご飯食べて行くんだ～と言って、ウキウキしながら部活に行った。
麻衣は久々に芳美とお茶をして帰るらしい。

藤堂君は私と、美術室に行き、
「今日も一緒に帰ろう」
と言って、私がうんってうなずくと、ニコって笑って、そのまま道場に向かった。

一緒に帰れる。これこそが、私の待ってた、あこがれてた彼氏のいる高校生活じゃない？
メールもしあって、それから、休みの日にはデートもして。
で、デート！２人で出かける！わ～～。そんな日がいつか来るんだ～～！

そんなことを思っていたら、なかなか絵が描けなかった。
いけない。いけない。絵を描くことに集中しよう。

私は黙って、絵を描きだした。絵の中の藤堂君が、私にどんどん力をそそいでくる。
きゅ～～～ん。って、絵の中の藤堂君にまで、私は胸キュンしてるのか。やっぱり、重症だ。
今日も、何度もキュンってなった。あくびをした藤堂君の横顔にも、黙ってる凛々しい藤堂君にも、ちょっと照れくさそうに笑った藤堂君にも、さっきの一緒に帰ろうって言ってくれた藤堂君にも。

何回も何回も、キュンキュンってしちゃって、そのたび私の顔がほてっていた。きっと藤堂君といると私は、真っ赤になっちゃってるんじゃないかなあ。

それにきっと、目がハートになってるよね。

藤堂君。ああ、早く5時にならないかなあ。

って、絵だよ。絵！絵に集中だよ。

っていうのをずっと繰り返している間に、窓の外が赤く染まっていき、藤堂君が美術室にやってきた。

わ。来ちゃった。あ、なんだか、照れくさそうにしている。

「まだ、絵、描いてたの？」

「うん。あ、でももう終わるよ」

5時はとうに過ぎていて、他のみんなは片づけをして帰って行った。

「また、結城さん、最後？あ、まさか俺のこと待ってて、この時間まで描いてた？」

「ううん。時間に気づかないでいただけで」

なにしろ、藤堂君を思ってみたり、絵に集中してみたりっていうのを、繰り返しちゃってたからなあ。

「あ、じゃあ、邪魔しちゃったかな？」

「ううん。本当にもう、終わらせようと思ってたから」

っていうか、邪魔するどころか、藤堂君が来てくれて、今、すんごく嬉しいんだもん。でも、そんなことは言えないよ。

「…夕焼け、綺麗だね。昨日も思ったんだけどさ」

そう言いながら、藤堂君は窓際まで歩いて行った。

「うん」

藤堂君は窓から外を眺めた。私はその後ろ姿に、つい見惚れてし

まったが、藤堂君がこっちを向いたので、慌てて、片づけているふりをした。

「ゆっくり片づけていいよ」
「う、うん」
ドキドキ。なんだか、見られてて、手が震えちゃいそうだ。
「お腹空いてない？結城さん」
「え？うん。あ、藤堂君も？」

「うん。なんか食べてく？」
「うん」
うわ～～～。一緒にお茶もできるの？嬉しいかも。嬉しすぎるかも！
「……」
藤堂君が何やら、じいっと私を見ているようだ。ものすごい視線を感じる。

「な、なあに？」
私の顔に何かついてる？あ、もしかして絵の具？
「今、すごく嬉しそうにしてたから」
「え？」
「…もしかして、嬉しいのかなって思って」

え？
「……」
嬉しいに決まってるよ～。なんで、そんなこと聞くのかな。私はきょとんとして藤堂君を見てしまった。
「あ、俺の見間違い？」
「まさか。嬉しいって思ってたよ？」

「俺と、帰れるから、とか？」
「うん」
「それに、どっかに一緒に寄っていくから、とか？」
「うん」
「…沼田が言ってたのって、本当？」

「え？」
藤堂君が耳を赤くして聞いてきた。
「言ってたことって？」
「結城さんが、健気で一途」
「…」
か～～。私の耳も熱くなった。

「お、重い？」
「え？」
「健気で一途って、重い？」
グルグル。藤堂君は顔を横に振って、
「う、嬉しいよ」
とそう言うと、くるっと後ろを向いてしまった。

もしかして、今、すごく照れてる？
「中西さんも言ってたけど、俺さ、多分、結城さんの前ではポーカーフェイスでいられないみたいだ」
「え？」
「多分、結城さんもがっかりしちゃうかも」

「がっかり？」
「しまりのない顔とか、今も俺、していそうだ」
「……」
私は藤堂君の横まで行って、ちょこっと顔を覗き込んだ。

「うわ。なんで見に来てるの？」
藤堂君が驚いている。その驚いた顔が、すごく可愛い。
キュン～～！か、可愛い。ぱっと顔を私に見られないよう、藤堂君はまた後ろを向いた。後ろからでもわかる。耳が真っ赤だ。
可愛い。
キュン！今日は何万回も、胸キュンしてる気がする。
「と、藤堂君」
「え？」
藤堂君は後ろを向いたまま、返事をした。
「がっかりしないよ」
「え？」
藤堂君がちょっとこっちを見た。
「そ、その逆で、嬉しいかも」
「え？」
藤堂君は目を丸くして私を見た。うわ。その顔にも胸キュンだ。
どうしたらいいんだ。どんな藤堂君にも胸がときめいてしまう。
「お、藤堂、また絵を見に来たのか」
原先生が入ってきた。
「え？あ、はい」
藤堂君は焦ったように返事をした。
「結城の絵を見てどうだ？これは、藤堂がモデルだろ？」
原先生が聞いた。藤堂君はまた、赤くなるのかなと思って見ていると、
「やっぱり、結城さんの絵はすごいですね」
と静かな、いつもの藤堂君の穏やかな表情に戻っていた。

「藤堂もこの絵の藤堂に負けないくらい、頑張れよ」
「え？」
「秋の大会。怪我もその頃には治ってるんだろう？」
「はい。もっと前に治ってると思います」
「そうか。今は練習もできないと思うがな。だけど、怪我をしたことも無意味なことじゃないと思うぞ」
「…」
「いろんなことが見えて来たり、考えることのできる時間ができたんじゃないのか？」
「はい」
藤堂君は真面目な顔になって、うなづいた。
「…柏木も、今日も朝早くに来て絵を描いていた。絵に向かっていると、自分とも向き合えるって、そんなことを言っていた」
柏木君が？
「…藤堂に怪我をさせたことは、反省していたようだが、まあ、それがきっかけで、また絵を描きだしたようだしな」
「僕に怪我をさせたのがきっかけって？」
藤堂君が不思議そうに聞いた。
「絵を前にして、柏木が言ってた。俺の心の中はどろどろです。そんな自分をしっかりと、見てみますってな」
どろどろ？
「すごい絵を描いているよ。柏木も」
「そうなんですか」
藤堂君は静かにそう言った。
「戸締りは俺がしていくから、もう二人とも帰りなさい。片づけも

終わったんだろ？」
「はい。それじゃ、お先に失礼します」
私は先生にお辞儀をして、藤堂君と美術室を出た。

藤堂君はしばらく黙って、廊下を歩いていた。
「柏木、相当辛かったんだな…」
藤堂君がぽつりと話し出した。独り言のように。
「自分の中の暗闇って、見たくないもんな。それに今、向き合ってるんだな」

「藤堂君の中にも、そんな暗闇があるの？」
「あるよ。俺だって。だから、昨日も言ったじゃん」
「え？」
「嫉妬。俺、エゴの塊だよ？」
「それだったら、私も…」

藤堂君は私を見た。そして少し目を細めて、微笑んだ。
ああ、それ。その表情も好き。
「結城さんも、俺が他の子と仲良くしてたら、やきもちやいちゃうんだね」
「う、うん」
「…」
藤堂君は黙った。黙って私よりもちょっと先を歩き出した。

「俺、まだまだ結城さんのこと、知らないんだな」
「え？」
「やきもちとか、そんなに妬かないのかなって思ってたし」
「…」
え？

「もっと、何があっても穏やかでいるんだろうな、とか…。勝手に思い込んでいたかも」
ズキン。こんな私でもしかして、がっかりしてるの？
「…結城さんって」
な、何？その先、聞きたくないんだけど。
「思っていたよりも、もっと可愛いんだね」

……えっ？！
か、可愛い？！

藤堂君はこっちを見てくれない。暗い廊下で、耳が赤いのかどうかもわからない。
「って、俺、何言ってるんだろう…」
藤堂君は一回立ち止まったのに、また歩き出した。
ドクン。ドクン。む、胸が…。苦しいくらいドキドキしちゃってるんだけど。

てくてくてくてく。私は黙って、ドキドキしながら、藤堂君のあとを歩いていた。
「結城さん？」
昇降口まで来ると、藤堂君が私を見て、声をかけた。
「え？！」
ドキン。なに？

「怒った？」
「う、ううん」
首を思い切り横に振った。
「…顔赤いけど、もしかしてずっと照れてた？」
コクン。私はうなづいた。

「……」
藤堂君が目を細めて私を見た。それから、
「やっぱり」
とぼそっとつぶやいて、すぐに自分の下駄箱まで行って靴を出した。
私も靴を出して、履きながら、
「あ、何か手伝うこと…」
と聞こうとした。だけど、藤堂君はもうすでに靴を履き終え、私のことを待っていた。

あれ？昨日はバランスが崩れるから肩貸してって言ってたよね？大丈夫なの？さっさと靴履いちゃったよ？
「結城さん」
「え？」
「どこに食べに行く？」

あ、そうか。
「藤堂君、甘いもの好きなんだよね？ドーナツにする？」
「え？あ！」
いきなり藤堂君が、何かを思い出した。
「野坂さんにもらったクッキー、みんなで分けるの忘れてた。っていうか、あれ、どうしたっけ？」

「…食堂に忘れてきた、とか？」
「…そうかも」
「野坂さん、それ、知ったら傷つく」
「だよね？ごめん。ちょっと食堂行ってくる。まだあるかもしれないし」
「つ、着いてく！」
「え？」

「ここで一人は嫌だよ」
「あ、そっか。結城さん、怖がりだっけ」
「…」
怖がりって言われるのも、ちょっと子ども扱いされたみたいで嫌だけど、待たされるよりずっといい。
また上履きに履き替え、食堂に向かった。食堂はもしかするとまだ、開いてるかもしれない。閉まっていても、中にきっと、食堂のおばさんか、おじさんがいるはず。
あ、明かりついてる。誰かいるんだ。
ガラ…。
藤堂君が先に入った。そのあと、私が入ると、
「せ、先輩」
と野坂さんがそこにいた。
「あ…」
藤堂君はやばいって顔をして、すぐにまたポーカーフェイスに戻った。
「ごめん。それ、忘れたことに気が付いて、今、取りに来たんだ。」
野坂さんは自分が作ったクッキーの袋を、手に持っていた。その横には2人女の子がいて、こっちを睨んでいた。
「忘れて行ったんですか?」
「うん」
「みんなで食べてくださいって言ったのに」
「ごめん」
藤堂君は謝って、野坂さんのそばに行った。
「これ、本当はいらなかったんじゃないですか?」
「え?」

「だったら、はっきりと言ってくれたらよかったのに」
「…」
野坂さん、泣きそうだ。それから私のほうを見た。
「同じクラスの人ですよね？」
「はい」

思わず、はいって返事をした。
「何で一緒にいるんですか？」
「一緒に帰ろうと思って…」
藤堂君が無表情な顔でそう答えた。そして何気に私の前に立って、私を守ろうとしてるみたいだ。

「…私も帰るから、江の島まで一緒に帰りましょう。先輩」
野坂さんがそう言うと、藤堂君は、
「ごめん。結城さんと寄っていくから、一緒に帰れない」
と野坂さんをまっすぐに見て答えた。

「寄っていくってどこに？」
「どこかな。多分、ドーナツ屋とか」
「二人で？」
「うん」
野坂さんも他の子も、なぜか驚いている。

「と、藤堂先輩、女子苦手だからって、2人でどっかに寄ったりしないじゃないですか。私が誘ったっていつも、断っちゃうのに」
野坂さんがまた、泣きそうになりながらそう言った。
え？そうだったの？でも、前にも2人でパスタ食べたりしたよ。
…って、あ、そうか。あの時も私のことを好きでいてくれたから

か。なんて思ってたら、顔がほてりだした。
駄目だって。今、照れてる場合じゃないってば。

「結城さんは、特別だから」
「え？」
藤堂君の言葉に、野坂さんが驚いている。私はさらに顔がほてった。
「まさか、先輩が好きだった人って」
「うん。そう。結城さんなんだ」
え？好きだったって、藤堂君に好きな人がいること、知ってたの？

「でも、ふられたって、言ってませんでしたか？」
「ああ、うん。そう…」
藤堂君は少し、ポーカーフェイスが崩れた。
「ふったくせに、先輩にくっついてるの？なんで？」
野坂さんの隣にいた子が、ぼそってそう言った。

「あ、でも今は、ちゃんと付き合ってるんだ」
藤堂君はその言葉を聞き、慌ててそう言った。
「付き合ってる？」
野坂さんが、顔を思い切り引きつらせた。
「うん。結城さん、交際申し込んだら、引き受けてくれたから」

「なんで？一回、ふったのに」
野坂さんが顔を真っ青にして、私に向かってそう言った。でもまた、藤堂君が私を隠すように前に立ち、
「一回ふられたけど、リベンジしたら、ＯＫをくれたんだ」
とそんなことを言った。

へ？リベンジ？

ちょっとニュアンス、違うんじゃないかな。私が勝手に藤堂君を好きになっただけで、まだ藤堂君が私を思っててくれて、それで、付き合うことになったっていうのが、真実じゃないのかな？

「…同じクラスになって、先輩、頑張ったんですか？」

野坂さんが声を震わせそう言った。

「…うん」

へ？

「振り向いてもらえるようにですか？」

「うん。それで、やっと思いが通じたっていうわけ」

藤堂君はそう言うと、ちょっと照れくさそうに下を向いた。

「え～～。そうだったんだ」

野坂さんの隣にいた子がそう言うと、

「敦子～～。もうあきらめたら？先輩、ずっとその人のことあきらめず、思い続けたってことでしょう？」

と野坂さんの肩を抱きながらそう言った。

ボロ。野坂さんの目から涙が出た。そして、鼻をずずってすると、野坂さんは、

「じゃ、じゃあ、ちゃんと幸せになってくださいよね」

とそう言って、チョコクッキーを藤堂君の手に持たせた。

「え？」

「ずっと私がいくらアプローチしても、振り向いてくれないのは、まだその人のことをあきらめられないからなんだろうなって、気が付いてました。思い、通じてよかったですね。これ、２人であとで食べてください」

「あ、ありがとう」

藤堂君はちょっと戸惑いながら、クッキーを受け取った。
「結城さん。先輩のことをよろしくお願いします」
「え？はい」
「それじゃあ」
ペコって野坂さんはお辞儀をして、お友達と一緒に食堂を出て行った。

「…」
藤堂君はクッキーの袋を、ちゃんとカバンにしまいこんだ。
「行こうか」
藤堂君はにこりと微笑んで私に言うと、歩き出した。
「と、藤堂君」

「え？」
「リベンジって？」
「あ、ああ。ごめん。変な言い方をして。でも、そう言ったほうが、野坂さんも納得するかなって思ったんだ」
「え？」

「それに、思いが通じて振り向いてもらったっていうのは、本当のことだし」
「…」
そうなの？私の思いが通じて、やっと振り向いてもらえたような気もするんだけど。それにリベンジっていうより、一回白紙にして、告白してくれたんだよね？
ああ、でも。ずっと思っててくれたってことなのか。嬉しいな。
ああ、また胸がきゅ～～んってしてる。

藤堂君は私のちょっと前を歩いている。廊下が暗い。また、手をつなぐ？とか言ってくれないかな。とても、私からそんなこと言え

ないな。
昨日は怖くて腕にしがみついたけど、それもできそうもない。
ズボンのポケットに手をつっこんでいる藤堂君の腕を見ながら、私はとぼとぼと藤堂君のあとを歩いていた。
手をつないで歩いたりって、いったいいつできるようになるものなのかなあ。なんて思いながら。

第32話　これもデート？

藤堂君はちょっと後ろを歩いてる私を、ちらっと振り返ってこっちを見た。
「ドーナツでいいの？結城さん、甘いもの苦手じゃなかったっけ？」
「あ。大丈夫。甘くないのもおいてあるし」
「そう？他のところでもいいよ？」
「ううん。大丈夫」

いつの間にかすぐ横に、藤堂君は来ていて、ゆっくりと歩いている。
「あ、あの…」
何か話さないとと思い、とりあえず話しかけた。
「え？」
「えっと…。あの」
「うん」

何も浮かんでこない。
「ごめんね。私、緊張してるみたいで」
「…うん。大丈夫」
藤堂君はそう言って、前を向き歩いている。何が、大丈夫なんだろうか。
「結城さんは、誕生日はいつ？」
「え？」

話題をふってくれたのかな、もしかして。
「私、1月だよ」
「そうなんだ。まだまだ先だね」
「藤堂君は？」

「俺は、４月」
「え?!」

誕生日、終わってるの?
「４月何日?」
「２３日」
そうだったんだ。かなり、ショック。プレゼントあげたかったな。今からじゃだめかな。駄目だよね。ああ、彼女になったら、彼の誕生日って大きなイベントごとじゃない?プレゼントをあげて、２人で祝って…。

しん。話題もなくなっちゃったし…。ちょっとだんまり歩いていると、ドーナツ屋に着いた。
「あ…、やばい」
「え?」
藤堂君が入り口の前で立ち止まった。
「あ～、見つかった」
「?」

ドーナツ屋のドアが開き、
「藤堂じゃん!」
と川野辺君が出てきた。お店の奥のほうを見たら、弓道部の2年生がみんないて、こっちを見ている。
「なんだよ。用事があるって言うから何かと思ったら、結城さんとデート?」

で、デート?違う、違うと、私は顔を横に振ったが、藤堂君は下を向いて、
「お前たちがいるんだったら、別の所に行くよ」
とぼそって言った。

「え？いいよ、邪魔はしないから。なんなら、俺ら、もう出て行こうか？」
「いいって…。結城さん、あそこのコーヒーショップでもいい？」
「うん。全然いいよ」

「え？ちょっと、藤堂」
「お前ら、絶対にひやかすだろ。じゃあな、川野辺」
藤堂君はそう言うと、さっさと歩き出した。私は川野辺君にちょこっとお辞儀をして、藤堂君のあとをついて行った。
「あ～あ、寄るなら寄るって言ってくれよなあ…」
藤堂君がぼそってそう言った。

コーヒーショップに着いた。席にカバンを置いてから、カウンターに行き、コーヒーやパンを買った。
あれ？そういえば、川野辺君、デートだなんて言ってたのに、藤堂君、否定しなかったな。
なんで？

藤堂君は、パンをパクパク食べだした。
「明日、みんなにひやかされない？」
「え？」
「弓道部の…」
「ひやかされるかもなあ」

「…デートなんかじゃないって、はっきり言ってみるとか…」
「え？」
あれ？藤堂君の目が丸くなった。なんでびっくりしてるの？
「…そ、そうか」
藤堂君は下を向いた。

「こういうのは、デートって言わないんだ…」
え!?
あれれ?
これ、デート?

藤堂君はもくもくと、パンを食べている。
「…こ、こういうのも、デート?」
私は思い切って聞いてみた。
「…」
藤堂君はちらっと私を見た。

「あ…。私、男の人と付き合ったこともないし、あまりよくわかんなくて。ごめんね」
「謝らなくていいよ、俺だって付き合うの初めてだし」
そう言って藤堂君はアイスコーヒーを一口飲むと、
「結城さんが思うデートって、どういうの?」
と聞いてきた。

「えっと。休みの日にどっかで待ち合わせをして、2人でどこかに出かけたり…」
「…」
藤堂君はまた下を向いた。そして、少しすると、
「じゃあ、今度、弓道部が休みの時に…」
とぼそってそう言った。

え?それって、デートのこと?
「あ、どっか、行きたいところある?」
「私?」
あ、声が裏返った。藤堂君がその声を聞いて顔をあげた。

「あの…。そうだな。えっと」
「そういえば、前に沼田が、江の島水族館に結城さんが行きたがってるって言ってたっけ。そこにする？」
「うん」
私はコクンとうなずいた。

「じゃあ、そうだな。来週の日曜が確か、弓道部が休みだったはず」
うわ～～い。デートだ。
「でも、美術部はあるのかな」
「ううん。あっても出ない」
「え？いいの？」
「うん、全然大丈夫」

嬉しい。江の島水族館に2人で行けるんだ。デートだ。あ、顔が熱い。今、赤いかも…。
「もしかして、結城さん、喜んでる？」
「え？」
ドキ。
「か、顔、赤い？」
「うん。それに、嬉しそうだ」

か～～。ますます顔が熱くなった。
「…コホン」
藤堂君が下を向き、咳ばらいをした。
「？」
「へ、変なことを聞いてもいいかな」

「え？」
「緊張してるってさっき、言ってたよね」
「うん」

「でも、今ももしかして、喜んでいたりする？」
「え？」
藤堂君は私の目をじっと見てきた。うわ～～。もっと顔が熱くなっていくよ。
「う、うん。緊張してるけど、う、嬉しい」
私は消えそうな声でそう答えた。
「…そっか」
藤堂君もぼそってそう言うと、アイスコーヒーをゴクゴクと飲んだ。
私もアイスティをゴクンと飲んだ。そしてまた、しばらく2人して下を向き、黙っていた。
照れる。なんだかよくわかんないけど、照れちゃう。
そもそも、私は付き合うっていうのがよくわかっていないかもな…。
「ああ、腹減った」
と、隣のテーブルにカップルがやってきた。うちの学校の生徒だ。
でも知らない顔だから学年は違うのかな。
そして、パンを食べながら、仲よさそうに話し出した。たまに、男のほうが、女の子のおでこをつつく。そうすると女の子が、もう～～って言いながら嬉しそうに笑う。
うひゃあ。これがもしや、「付き合っている」という状態なのか？でも、とてもじゃないけど、こんな仲よさそうにできないよ。
あ。うそ。テーブルの上で手をつないじゃった。うひゃあ。周りの人がいるのに、平気なんだ～～。
ドキドキ。それを見て意識しないようにしようとしても、なんだ

か意識してしまって、ドキドキしてる。
「あ、そうだ。結城さん、野坂さんが作ったクッキー食べる？」
「ううん」

「あ、甘いの苦手なんだっけ」
「そうじゃなくて、野坂さんに悪いから」
「え？」
「藤堂君のために作ったクッキーでしょ？」
「…」
藤堂君はまた、私の顔をじっと見た。あれ？変なことを言ったかな。

「こういうの、もらわないほうが良かったかな」
「え？ううん」
「そう…」
藤堂君がまた、下を向いた。あれ？もらわないでと言ったほうがよかったのかな。

「なんだよ～～」
隣の男が今度は、女の子の頭をくしゃくしゃってしている。女の子は赤くなって、
「子ども扱いしないで」
とちょっと口をとがらせた。でも、なんだか嬉しそうだ。男のほうも、かなり鼻の下のびてるし。

しん…。それに比べて、こっちはまた、し～～んってなっている。
ゴク。アイスティを飲んだ。飲み込む音がやたらと響く。
私のまん前に藤堂君がいる。嬉しいけど、緊張する。緊張でパンが喉を通らなくて、さっきから私は、パンをアイスティで流し込んでいる。

はあ…。なんでこうも、緊張しちゃうんだろう。なんで隣の女の子は、あんなに彼氏と仲よさそうにできるのかな。

そもそも、男子が苦手なんだからしょうがないのかな。でも、これが沼田君だったら、そんなに緊張もしないよな。やっぱり、藤堂君だからだよね。

ちら。藤堂君を見てみた。あれ？外を見てる。

私も窓の外を見てみた。すると弓道部のみんなが、店の中をのぞいていて、藤堂君と私のほうを見て、何か言っている。

藤堂君は、すぐに窓から目線をテーブルのほうに移した。何か言われていたのにもかかわらず、思い切りシカトするつもりのようだ。

すると弓道部のみんなは、ぞろぞろと駅に向かって歩き出した。

「今日、ついばらしちゃって」

藤堂君が下を向いたまま、ぼそって言った。

「え？」

「結城さんがＯＫしてくれたっていうのを」

「え？」

みんなもう、付き合ってるの、知ってるのか。

「昨日、ちょっと遅くまで残ってた部のやつがいたみたいで、結城さんが俺にしがみついてるところを、目撃したみたいでさ。今日、部室に行ったら、いきなりとっつかまって聞かれちゃったから…、ついばらしちゃった」

「ごめん。私が怖がってしがみついたりしなかったら…」

ばれなかったのに～～。

「いいよ。いつかばれることだったし。っていうか、隠しておくつもりもなかったんだけどさ」

「え？」
「ただ、しばらくはひやかされるかも…。今日もさんざん言われたし」
「なんて？」
「…いや、うまくいってよかったなって…」
そうなんだ。あ、藤堂君、照れてる？耳赤い。

私も下を向いた。ああ、また二人して照れあってる。こんなで、付き合ってるって言えるのかなあ。
お店を出た。駅はすぐ目の前で、改札を通るとすぐに、藤堂君の電車が来て、藤堂君は電車に乗った。
「じゃあ…」
それだけ藤堂君は言うと、ドアが閉まった。

う。なんか、あっけなくない？
電車の中の藤堂君は、私のほうを見ていたけど、手をふるわけでもなく、笑うわけでもなく。私もただただ、電車を見送った。

夕飯を食べ終え、お風呂から出て、宿題をするために机に向かった。
ブルル…。携帯が振動して、藤堂君かと思ってすぐに開くと、麻衣だった。
＞司っちと初デート、どうだった？
え？やっぱり、今日のもデートなの？

＞パン食べて、おしまい。
そう返事をした。
＞何それ？
麻衣から、拍子抜けをしたっていう感じのメールと絵文字がやってきた。

「だって、本当にそれだけだし…」
私はぼそっと、独り言を言った。
藤堂君から、メールだって来ない。
じ～～。私は携帯をじっと見つめた。メールしてみる？してみない？
でも、なんてメールする？今何してるの？とか？そんなの、うざったいメールだよね？

今日は、ありがとうとか？楽しかった、とか？緊張で結局あんまり話せなくって、それなのに楽しかったなんて、変なメールだよね。
じゃあ、今日は緊張したってメールする？って、変だよね？なんだ、そりゃってメールだよね。

「は～～～」
結局、なんてメールしていいかもわかんない。
ああ、もしかして藤堂君もなんてメールしていいかわかんなくって、悩んでてくれないとか？
っていうのは、かなり自分勝手な空想だよね。藤堂君は、別に私にメールなんてしたいとも思ってないのかもしれないんだし。
あ～～。ほんと、今、何してるの？

私は宿題をしようとして、ペンを手にした。だけど、藤堂君のことが気になって、まったく勉強が進まない。
宿題終わった？実験のレポート、なかなかできないよ。
な～～んて、送ってみる？それも、うざいかなあ。でも、でも、藤堂君からメールがほしいよ～～。

えい！思い切って送ってみた。なんて返事が来るだろう。
５分経過。１０分経過。

ああ！送らなきゃよかった。返事が来なかったら、私相当へこむかも。

レポート用紙と教科書、ノートを目の前にして、なんにもできないでいる。時間ばかりが気になり、時間がたつとともに、気持ちがどんどんめり込んでいく。

ブルル…。

「うわあ」

携帯が振動して、思わず飛び上がりそうになった。

ドキドキ。藤堂君からかな？

携帯を開くと藤堂君からで、

＞終わったよ。結城さんはどのへんで、苦戦してるの？

と返事が書いてあった。

く、くれた！メール！それも質問してくれた！って、苦戦も何も、まだほとんど書けてないの。どうしよう。

＞最初の出だしだけ書いたけど、そのあとどう書いていいんだか。こんなメールしたら、相当なあほだと思われるかな。だけど、本当に書けてないし…。

えい！送信した。

＞電話今、大丈夫？

ええ？！

＞うん。平気。

待って。電話してくれるの？

ブルル…。藤堂君が電話をくれた。

「も、もしもし」

「結城さん？メールよりも電話のほうが説明しやすいと思ってさ。

で、書きだして、どの辺まで書けたの？」
ひゃ～。ひゃ～。藤堂君から電話！
私はドキドキしながら、レポートの書けたところを伝えた。すると、藤堂君は、そのあとどんなことに注意して書いたらいいかとか、要点とかを説明してくれた。

「ありがとう。ごめんね遅くにメールしちゃって」
「ううん。全然。たいてい俺、１２時ころまで起きてるし、またわかんなくなったら、電話くれてもかまわないから」
「ありがとう」
「じゃ、続き頑張ってね」
「うん」

電話を切った。藤堂君、優しい！思い切ってメールしてよかった。なんか、恋人同士の会話なんて、どこにもなかったけど、でも、嬉しい。
藤堂君なら、もしかしてもしかすると、うざいなんて思わず、メールを返してくれるのかな。

レポートを書き終え、時計を見たら１１時を回っていた。だけど、まだ起きてるんだよね？
＞レポート終わったよ。本当にありがとう。助かった。
そうメールを送った。５分して、
＞どういたしまして。
と、それだけの返信が来た。

ああ、返信をしてくれるのはすごく嬉しい。だけど、一言なんだな。いつも…。
＞おやすみなさい。
もう一回返事が欲しくてメールした。するとすぐに、

＞おやすみなさい。
と返信が来た。

やっぱり、それだけかあ。
私はなんとなく、風に当たりたくなって、ベランダに出た。するとすごく綺麗な満月が、夜空に浮かんでいた。
＞藤堂君、満月だよ。すごく綺麗。
思わず、そう送ってしまってから、あ、こんなことでメールして、あほだったかな。さっき、おやすみなさいってメールしちゃったのに、と後悔した。

ドキドキ。返信来るかな。すると、
＞本当だ。満月だね。
という返信が来た。よ、良かった。返してくれた。
夜空をまた見上げた。藤堂君も見てるんだよね。
また明日ね、藤堂君。夜空を見上げながら私は、心の中でそうつぶやいた。

第３３話　彼氏、彼女

翌日、藤堂君は今日も病院に行ってから来るようだ。
１時限目が終わり、私は自分の席から、空いている藤堂君の席を見ていた。まだ来ないのかな。と、ドキドキしながら。すると、
「藤堂と結城さんって、付き合ってるの？」
と、隣の男子がいきなり聞いてきた。

「え？」
いきなりですごくびっくりしていると、
「沼田と八代さんも付き合ってるんだろ？なんか、みんなで仲良くしてるなって思ったら、カップルになっちゃったんだなあ」
と話を続けた。

「…」
困った。美枝ぽんは、廊下で部の先輩と話し込んでいるし、沼田君はさっきから麻衣と話しているし、こういう時には、どう返したらいいんだろう。こ、困った。
「いいよなあ。俺も彼女欲しい」

「俺も～～。藤堂なんて、あんな無愛想なの、どこがよかったわけ？結城さん」
今度は後ろの席の男子が言ってきた。
「え？」
これまた、なんて返事をしたらいいの？

「藤堂ってさ、１年の時、誰かにコクってふられたって聞いたことあるよ」
ほえ？今度は斜め後ろの男子が、話に加わってきた。

「ああ、その噂知ってる。でも相手って誰？」
「おいおい、そういうの結城さんが知らなかったら、結城さん、気になっちゃうじゃん。なあ？」
「あ、わりい、わりい。でも、ふられたってことだし、もう何とも思ってないっていうのも、聞いたことあるしさ、昔の話だから結城さんも、気にしないでもいいよ」

どひゃ。なんか私の席の周り、４～５人男子生徒が集まって来てて、囲まれちゃってるんですけど？
「結城さん、あいつのどこがよかったわけ？」
「そういえば、柏木と取り合ったって本当？」
「柏木から藤堂が奪ったんだろ？それで怪我させられたって聞いたよ、俺」
どひゃあ。また増えた。

「おい」
のぶとい、低い声がいきなりして、男子生徒が振り返った。
「あ、藤堂」
「そこ、どいてくれない？結城さんに話があるんだけど」
「悪い。どくよ」
そう言うと、周りにいた男子がわらわらと自分の席に戻って行った。

「と、藤堂君」
私は半べそをかきそうになっていた。
「なんで取り囲まれてたの？」
藤堂君は小声で聞いてきた。
「わかんないけど、藤堂君と付き合ってるのかとか、いろいろと聞かれて」
私も小声でそう答えた。

「ひやかされてたの？からかわれてたとか？」
「ううん。ただ、いろいろと質問攻めに」
「なんて？」
「噂のこととか、本当なのかって」
「ああ、そういうことか」

藤堂君は、いきなり後ろを向くと、さっきまで私の周りにいた男子に向かって、
「聞きたいことがあるんだったら、結城さんじゃなくて俺に聞けよ」
とそう言った。
「え？」
みんながいっせいに藤堂君に注目した。

「結城さん、困らせるなよな！」
藤堂君がまた、低い声でみんなに言った。
「そんなに怒るなよ。こえ～なあ」
隣の男子が笑いながらそう言うと、藤堂君はその男子をきっと睨んだ。
「なんだよ。いきなり彼氏気取りかよ」

その男子がそう言うと、そのまた隣に座っている女子が、
「ブ！彼氏気取りじゃなくて付き合ってるんだから、彼氏なんじゃん？」
とふきだしながらそう言った。
「え？」
隣の男子がムッとして、その子に聞き返した。

「結城さんのことを気に入ってたのに、藤堂君に先をこされて、悔しいだけでしょ？なんにもできなかったくせに、人のものになって

からあたふたしたって、遅いんだよ。なんかかっこわる～～」
「なんだよ、文句あるのかよ」
「もう二人は付き合ってるんだから、いいじゃん。彼氏気取りじゃなくって、彼氏なんだからさ」
「そんなのわかってるよ！」

わあ。2人が火花を散らしてる。喧嘩？喧嘩になっちゃうの？
「沢村君、やめなよ。そんなにカッカしないで。それに朋子も沢村君のこと、いじるのやめなって」
麻衣が二人の間に入り、そう言ってなだめた。
「ふん。男子ってすぐ熱くなって、バカみたい」
「朋子。やめなって」

麻衣の言葉にようやく2人は黙って、おとなしくなった。
びっくりした。朋子っていう子、話したこともないし、髪も茶色で化粧もしてて、ちょっと気も合わなさそうな子だけど、男子と喧嘩もできちゃうくらい、気が強いんだ。
それに、沢村君が私のことを気に入ってたって言った？冗談でしょ。

藤堂君は、席に着いた。席に着いてから、何やら麻衣に話しかけ、それから私のほうを見た。それもじいっと見ている。
な、何かな。目が合ったけど、どうしたらいいのかな。
ふ…。藤堂君は視線を前に向けた。

隣の沢村君の横顔が視界に入った。下を向いて、むすっとしているのがわかった。
はっきり言って、このクラスになって、最初から藤堂君のことしか意識していなかったから、隣の男子すら目に入っていなかったし、名前も今日初めて知った。

まあ、私のことを気に入ってたっていうのは、絶対にないことだろうけど、でも、そんなことより、藤堂君が私の「彼氏」という言葉のほうが、ずっと私の頭を占めていた。
彼氏。そうか。彼氏。彼氏なんだ。
そして私は、彼女。

きゃわ～～～。
彼氏気取りじゃなく、彼氏。
で、私も彼女気取りでなく、彼女だから、彼女なんだよ。

か～～～。顔が熱くなってきた。でも、彼女って、何？
いったいどんな態度でいたら、いいのかな。わ、わかんない。

次の休み時間に、なんとなく美枝ぽんにそのことをこっそりと聞いてみた。
「え～～。そりゃ、恋人ってことだよ」
「恋人って…？」
真っ赤になりながら、美枝ぽんに聞いた。
「恋人は恋人でしょ？友達とも違う」

「友達との境目って？」
「友達だったら、キスとかしないでしょ？」
キス？！！！！
「そ、それは今だってしない」

「今はね。でもこれから先はわかんないじゃん」
そ、そうだ。そうだよね。付き合うって、そういうこともあるってことで。
え、ええ？ええ～？ちょっとなんだか、そういうのは考えられな

い。
「穂乃ぴょんって、面白いよね」
「え？」
「すんごい奥手。やっぱり、国宝もんだよね」
国宝？！
「藤堂君も奥手そうだし、こりゃ、なかなか進展しそうにないね」
「…」
進展しなくてもいいかも。藤堂君が奥手だとしたら、ちょっとほっとしてるかも。
「手をつないでデートとかしたくない？」
「え？」
「そういうの、藤堂君としたくない？」
したいです。
「ね？やっぱり、あんまり藤堂君が奥手でも困るでしょ？」

ドキ～～。美枝ぽん。私、何も言ってないのになんでわかるの。
あれ？まさか私の口から出てた？それとも、美枝ぽん、エスパー？
「だからね、ちょっと穂乃ぴょんのほうからも、手をつないでって言ってみたりしてごらんよ」
「私から？」
「うん」

とんでもない。そんなこと言えないよ。
「頑張って！」
頑張ってって言われても。

お昼は、みんなで食堂に行った。藤堂君はパンを買いに行っていて、あとから席に来た。そして私の横に座った。

パン、袋から出すの、片手じゃ大変だよね。手伝うよって言ったほうがいいよね。っていうか、してあげたいし。
と思って、手伝うよと喉まで出た言葉を、次の瞬間飲み込んだ。藤堂君はパンの袋を口にくわえ、器用に片手で開けてしまったのだ。

あ、あれ…。私の出番は？
がっくり。もっと早くに手伝うと言えばよかった。

美枝ぽん、麻衣、沼田君は楽しそうに話をしている。藤堂君はそれを聞き、たまに笑っている。そして私は、もくもくと食べていた。
私って、彼女だよね。でも、彼女らしいところ、まったくないよね？

「そう言えば穂乃ぴょん。男子にからまれてたね」
「え？」
沼田君がいきなり言い出した。
「気づいてたんならお前、助けろよ」
藤堂君がぼそって言った。

「うん。なんか言いに行こうとしたら、司っちが教室に入ってきて、すげえ怖い顔して穂乃ぴょんのほうに行ったから、俺が出ていく必要もないかなって思ってさ」
「…」
藤堂君が黙った。それからしばらくして、
「あいつ、沢村って」
とぼそってまた口を開いた。

「あ～～。穂乃ぴょんに惚れてたみたいだよね。知らなかったの？司っち」
「沼田君。そんなわけないじゃん」

私は慌てて、沼田君の言ったことを否定した。藤堂君だって、誤解しちゃうよ。

「うん。穂乃香の隣の席、あれ、本当は他の男子だったんだよ。でも、そいつと席を交換したみたいだよ」

今度は麻衣までが、そんなことを言いだした。

「私も知ってる。沢村君って、穂乃ぴょんがいない時、わざと穂乃ぴょんの席に座って後ろの男子と話してたりしてたし」

え?!それ、知らないんですけど。

「…そうだったんだ」

藤堂君が何やら、青ざめている。

「司っち、うかうかしてたら、沢村に穂乃ぴょんを取られたところだったね」

「まさか。そんなことありえないから、変なこと言わないで、沼田君!」

私は慌てて、そう言った。みんなが私のほうを向き、

「穂乃ぴょん、一途だもんなあ」

「穂乃香は司っちのことしか、目に入ってなかったみたいだしねえ」

「うん。心配ないね。穂乃ぴょん、古風な女だし」

と言い出した。

ええ?なんだ、その古風な女っていうのは、美枝ぽん!

「……」

「あ、藤堂君、真っ赤だ」

「本当だ。司っち、照れてる~~」

美枝ぽんと沼田君が、藤堂君をからかっている。

「う、うっさい」

藤堂君は、うつむいたまま、ぼそってそう言った。

「なんだか、初々しいカップル」
麻衣がそう言って、
「あ〜〜あ、私も彼氏、欲しいよ〜」
と嘆きだした。

「そうそう。それでね、彼氏を作るために私、バイトをすることにしたんだ」
ちょっと落ち込んだと思ったら、いきなり麻衣は復活した。
「え？バイト？」
「うん。面接はこの前行ったの。明日あたり返事が来るはず。藤沢のファーストフード。もしバイトすることになったら、お店に食べに来てね」

「うん。絶対行く」
美枝ぽんと沼田君が、目を輝かせた。藤堂君はまだ、耳を赤くしたまま下を向いていた。
あれ。いつもなら、もうとっくにポーカーフェイスの藤堂君に戻っている頃なのに、どうしたのかな？

お昼を食べ終わり、藤堂君は席を立つと、
「俺、購買に行ってくるから、みんな先に戻っててていいよ」
と言い出した。
「うん。わかった〜〜」
麻衣がそう言いながら、お弁当を片づけた。私もお弁当を片づけていると、隣で席を立ったまま、藤堂君が動かないでいた。
あれ？まだ、行かないのかな。

そして、私が片づけ終わると、
「結城さんも、付き合ってくれる？」

と藤堂君は聞いてきた。
「え?うん」
私も?何かな。あ、お財布からお金を出すのを手伝ったりとか、何か藤堂君一人じゃ、困るから私も来てってことかな?
役に立てるのかな。彼女だから、私に頼みたかったのかな。か、彼女だから?うきゃっ!
私は嬉しい気持ちを抑えつつ、藤堂君の後ろから浮き足立ってついていった。
すると、藤堂君はノートを1冊さっさと持って、小銭をポケットからジャラっと出し、あっさりと買ってしまっていた。
あれ?私、用無し?いなくてもよかった?
「ごめん。付き合わせて」
そう言いながら、藤堂君は私の横に来た。
「う、ううん」
なんで、私も来てって言ったのかな?
「ちょっと、中庭行かない?まだ、時間あるよね」
「うん」
中庭?!2人で?!
藤堂君は先に歩き出した。中庭には、何個かベンチがある。そこでお弁当を食べている生徒もいるんだけど、たいてい、一個くらいのベンチが空いているものだ。
今日も空いていた。多分、一番日が当たるから、誰も座らなかったんだろうな。
藤堂君はそこに黙って腰かけた。私もちょっと間を開けて、ちょこんと座った。

「あのさ…」
藤堂君は下を向き、私のほうも見ないで話しだした。
「沢村のことなんだけど」
「え？」
「あいつが、結城さんのことを好きだって、そういうの結城さん、わかってた？」
へ？
「う、ううん。まったく」
私は首を横に振った。
「俺も、誰が誰を好きだとかそういうの、まったく疎くって、わかんなかった」
「…あの」
「え？」
「でも、わかってても、どうにもなってないと思うし」
「どうにもって？」
「私、沢村君の名前も、今日初めて知ったの」
「そうなの？でも、隣だよね」
「う、うん。だけど、まったく興味がなかったし」
「…」
「女子の名前ならもう、全員覚えた。あ、名字だけ」
「うん」
「男子はあまり話さないし、名前も覚えようともしなくって、私」
「…そっか」
藤堂君はちょっと、安心したようにほってため息をついた。
そんなに心配しなくてもいいのになあ。

「2年になってから、私、藤堂君のことしか多分見てないよ」
思わず、藤堂君を安心させたくて、私はそんなことを言ってしまった。
「え?!」
藤堂君が思い切り驚いている。

「あ、あの。最初の頃は、藤堂君と同じクラスでどうしようかなって思ってたけど」
「あ、ああ、そうだよね」
「でも、そうやって意識してるうちに、いつの間にか藤堂君に惹かれちゃって…。それからもずっと、私、藤堂君のことしか目に入ってないし」

ボワ!藤堂君の顔が一気に赤くなった。
はっ!私、もしかしてすごい告白をしてしまった?!私の顔も一気に熱くなった。

照れ…。また二人して下を向き、赤くなって黙り込んでしまった。
「そろそろ行く?」
藤堂君がそう言って、ベンチから立ち上がった。
「うん」

そして、二人でとぼとぼと校舎に向かって歩き出した。
「結城さん」
ちょっと前を歩いていた藤堂君が、振り返りもせず声をかけた。
「俺も、ずっと結城さんのことしか、目に入ってなかったから」

え?!
それだけ言うと、藤堂君はさっきよりも歩く速度を速めた。藤堂君の耳が真っ赤になっているのが、後ろから見てもわかった。

ボワ！でも、私もきっと真っかっかだ。今、藤堂君がこっちを見ていなくって、良かった。

うわ～～。照れくさいやら、嬉しいやらで、心臓もドクンドクンしちゃってるし、大変だよ～。

ちょっと間を開けて、私は藤堂君の後ろをてくてく黙って歩いた。さっきから、全然顔のほてりがおさまらない。

ちら。藤堂君の後姿を見た。あれ？藤堂君の耳も、まだ赤くなってる。

きっと二人で、赤くなりながら今、歩いてるんだ。

手なんてつなげそうもないし、まだまだ「恋人」って感じじゃない。だけど、やっぱり友達とは違う。

こうやって、藤堂君のちょっと後ろを歩くのも、耳の赤いのを見ているのも、なんだか幸せかも、それだけで、胸がいっぱいかも、なんて私は思いながら歩いていた。

第３４話　藤堂君

生まれて初めて彼氏ができた。まだ、母親にも言っていない。でも、兄には報告した。

＞今度写メ撮って、送れ！

と兄から返事が来た。

＞じゃ、お兄ちゃんの彼女の写真も送って。

と返したら、

＞どうせ、あれこれ言って来るんだろう？送らないよ。

と返ってきた。

だったら私も送らないよ。と思っていたが、最近は送りたくてしょうがない。

彼女から見た欲目なのかな。でも、藤堂君はかっこいいと思うんだ。

身長は１７８センチあるって言ってた。高い！それにまだ、伸びてるらしい。

髪は黒髪で短くさっぱりと。それがまた凛々しくて、とても似合っている。目は一重かと思っていたら、奥二重だった。ちょっと下を向いた時に、気がついちゃった。

だけど目元涼しげで、鼻はすって通ってて、口元も涼しく、しょうゆ顔ってやつだ。麻衣が最初に言い出したんだっけ。和男子の顔をしてるって。本当にそうだよね。凛々しい和男子だ。

沼田君は、ベビーフェイス。色が白く髪も栗色でくせっ毛。ハーフとまで言わないけど、クオーターって言ってもいいかもしれないような、ちょっと外国の血が混ざってるかのような顔つきだ。

だから、藤堂君とは、正反対かもしれない。

ベビーフェイスの沼田君は、いつも明るく笑っているから、親しみやすい。話しかけやすいらしく、クラスの女子もよく話しかけてくる。

最近、それを美枝ぽんが気にしている。あんなに仲よさそうに話さなくても！と、時々怒っている。

嫉妬しちゃうのもわかるけど、とっつきやすい容姿だし性格もそうだから、しょうがないよね。それに、どの女の子からも友達どまりっていうのも、見てるとうなづける。

話しかけている女子は、沼田君を話しやすい男子、なんでも話せそうな友達…、程度にしか見ていないっていうのが、まるわかりなんだもん。美枝ぽんが心配することは全くないと思う。なんて、美枝ポンにとっては、それでもやきもきしちゃうんだろうね。

私はと言うと、藤堂君は私、美枝ぽん、麻衣としか話さないので、安心していられる。クラスの他の女子はまったく、藤堂君に近寄らないのだ。

藤堂君は、沼田君と話している時、良く笑っている。私といる時も、微笑んでいたり、優しい目でいることが多く、私はドキドキしながらも安心していられる。

でも、他の人の前だと、特に女子だと、笑うことも少なく、口数もぐんと減るのだ。だから、とっつきにくい存在のようだ。

「ねえねえ、藤堂君って、怖くないの？」

とクラスの女子に聞かれたことがある。

今日も体育の時間のあと、更衣室で着替えをしていた時に言われた。

「さっき、バレーボールが藤堂君の足元に転がっていっちゃって、

藤堂君、取ってって頼んだら、なんにも言わずにボールをこっちにパスしてきて、ありがとうって言っても、なんにも言わずに、そのまんま行っちゃったんだよね。ちょっと怖かったよ」

へ～～～。なんでかな。なんて受け答えていいか、わからなかったとか？それとも、それなりの意思表示はしていたのかもしれないな。

たとえば、目で、うんって言ってたとか。そういう時、たまにあるもん。目が合うと、何かを目で言ってるの。わからなくって、あとで聞きに行くと、

「ああ、なんだ。通じなかったんだ。ごめん」

って謝られる。まあ、たいていが、さほどの用じゃなくって、元気？とか、おはよう、とか、挨拶らしいんだけどさ。

「藤堂君から、コクってきたんでしょ？なんでＯＫしたの？」

「え？」

「私だったら、考えちゃうなあ。何考えてるか、わからなさそうだし、デートとかしてくれなさそうだし、メールもくれなさそう。無愛想なところがあるし、怖いもん」

そんなイメージなのね。藤堂君って。

私はただ、おとなしい感じに見えたけどな。いつも穏やかで、涼しげで。でも、みんなには怖いっていう印象だったんだ。

そうか。だったら、安心か…。あれ？でも、いいの？本当の藤堂君はすごく優しいし、シャイで可愛いんだけど。

あ、でも、そういうのを私だけが知っているっていうのも、彼女の特典かも？

あれ？そういうこと、前に美枝ぽんが言ってたっけ。

体育の時間のあとはお昼休み。いったん更衣室から教室に戻る時、そんな話を美枝ぽんと麻衣にしていた。
「沼っちも、他の女子の前だと、ただ明るかったりふざけてるだけだけど、2人でいると赤くなったり、照れたりしてて、可愛いんだ。そういうのって、私しか見れないから、彼女の特典だよ」
やっぱり。

「私も時々、司っちの照れたところや笑った顔見るけど、それって絶対に穂乃香といる時だもんなあ」
「え?そう?麻衣ともよく笑って話してるって思うけど」
「笑い方が違うんだって。穂乃香とだと、目じりは垂れてるし、鼻の下は伸びてるし」
「誰が?誰が?あ、もしかして、司っち?」
いきなり、後ろから沼田君が顔を突っ込んでそう言ってきた。

「そうそう。司っち」
と麻衣がさほど驚かず、沼田君に返事をした。
「俺?」
ギョ!!!
藤堂君もいたの?!思い切り振り返ると、沼田君の横に藤堂君がいた。

さすがに藤堂君がいたことには、私も麻衣もびっくりしてしまった。
「い、今の聞いてた?」
麻衣が引きつりながら、藤堂君に聞いた。
「聞こえた」
藤堂君は思いっきりぶすっとして、そう答えた。

「ごめん、司っち」

麻衣が謝った。あれ？なんで謝ってるの？多分、藤堂君、怒ってないよ。あれ、照れ隠しだよ。

「…」

藤堂君はまだむすっとしている。それからみんなで食堂に移動した。

廊下を歩いている間、麻衣と沼田君、美枝ぽんは3人で話をしながらどんどん食堂に向かって行っていた。それからかなり間を開けて、藤堂君と私は特に話もせず、ゆっくりと歩いていた。そして小さな声で、

「俺、そんななのかな」

と藤堂君はぽつりと言った。なんのことかなって藤堂君を見たら、赤くなっていてそっぽを向かれてしまった。

食堂に入ると、すでに沼田君と美枝ぽんは席に座っていた。藤堂君は沼田君の前に、さっさと腰掛けた。私はその横に座った。

麻衣はパンを買いに行っているようだ。戻ってくると、私の横に麻衣は静かに座った。そして、

「司っちのこと、怒らせちゃった。あ～～、怖いなあ」

と、麻衣が私の耳元で、誰にも聞こえないくらいの小声で言った。

「なんで怖がってるの？」

私も小声でそう聞いた。

「司っち、怒ると怖いじゃん。ずっとむすってしているし」

へ？そんな時あったっけ？

「今朝も、穂乃香とのこと、ちょっとからかっただけなのに、ずうっとむすってして、返事もしてくれなくなったんだ」

麻衣がまた、ぼそぼそとそう言った。

「え？そうなの？」

つい、私は普通の声で言ってしまった。

「何？」

藤堂君がこっちを見た。自分のことを話されているのに、気が付いていたようだ。

「…でも、それ、照れ隠しだよね？」

私は今度、藤堂君のほうを向いてそう聞いてみた。

「…それ、内緒」

藤堂君はすごく声を潜めて、そう言った。

え？内緒だったの？！これ。

「照れ隠し？それでむすっとしてたの？じゃ、ずっと照れてたってこと？」

麻衣が藤堂君の顔を覗き込みながら、そう聞いた。

「あ～、ばれた」

藤堂君がうつむきながら、そうつぶやいた。

「ごめん」

内緒だったとは知らなかった。あ、もしかして、２人だけの内緒だったの？二人だけの。２人だけの？

か～～～。心の中で言ってて、顔が赤くなった。そして、ばらしちゃったことを後悔した。ああ、もったいないことをした。せっかくの二人だけの内緒が！

「な～～んだ。怒らせたってびくびくして損した」

麻衣がそう言った。

「麻衣ちゃんが、びくびくしたりするの？」

美枝ぽんが驚いている。

「…だって、司っち、本当に醸し出す空気が怖かったんだもん」

え…。そうなの？
いつも横にいて、なんでこんなにあったかくって優しい空気を醸し出すんだろうって、私は思っていたのに。

その日も、藤堂君と一緒に帰った。だんだんと日が伸びていて、学校を出る6時くらいでも外は明るい。
「結城さん、ちょっとこの公園の中を通って行かない？」
学校から駅までの道は、歩道を歩いていけば着くんだけど、途中に小さめの公園がある。ベンチとブランコ、お砂場があるくらいの公園で、その奥にはグランドがあり、休みの日にはリトルリーグの子供たちが野球の練習をしている。

その公園に藤堂君はどんどん入って行った。さすがに6時ともなると、子供の遊んでいる姿はない。犬を散歩している主婦がいるだけだ。
「ベンチに座らない？」
藤堂君が聞いてきた。

「うん」
なんとなく照れくさいな。なんか学校帰りに公園って、いかにも彼氏、彼女って感じじゃない？
「日、のびてきたね」
藤堂君が空を見上げながらそう言った。
「うん」
ドキドキ。緊張してさっきから、私はうんしか言ってないよ。

「今度の休みだけど、時間とかはメールで決めたらいいかな？」
藤堂君がこっちを向いて聞いてきた。
ドキ！デートのことか。
「うん」

ああ、また「うん」だけになっちゃった。

そういえば、メール、あまり頻繁にしたりすると迷惑かもって思って、全然してないんだよね。そうしたら、藤堂君もまったくメールをくれないんだもん。

「あの…」

思い切って聞いてみる？メール、時々してもいい？って。

でも、なんで？って聞かれても困るし。でも、でもさ。でも…。

「メールって、どういう時、したらいいのかな」

はれ？変な質問になっちゃったよ。

「え？」

ほら。藤堂君困った顔になっちゃった。

「この前、満月ってだけでメールしちゃって、悪かったかなってあとで反省したの」

「ああ、なんで？満月、結城さんのおかげで俺も見れて嬉しかったよ？」

「本当に？」

「うん。夜、空を見上げることなんかしないからさ」

「…」

そっか。よかった。

「気にしてたの？」

「え？」

ドキ。

「俺が、なんか変な返事しちゃったかな」

「ううん。そんなことない。ただ、あまり男の人とメールってしないから、どんなメールをしていいかわかんなくって」

「…それは俺も。俺なんて、男友達ともあまりメールしないからなあ」
「そうなの？沼田君は？」
「しないよ。ほとんどしない」
「部の友達は？」
「部活の用でもなかったら、メールなんて来ないよ」

そうなの？
「あ、じゃあ、野坂さんは？」
「連絡事項の時だけだよ」
「そっか…」
「結城さんは、友達とけっこうメールし合うの？」

「うん。麻衣とはよくしてる方かも」
「ふうん」
藤堂君はそう言ってから、下を向き黙り込んだ。
なんか、メールしてって催促してるみたいかな。こういうのって、面倒くさいのかな。
ドキドキ。う～、心臓に悪い。

「じゃあさ…」
ドキン。
「え？」
何？
「俺、どういうことをメールしていいかもわからないから、結城さんからしてくれるかな」
「え？」

「そうしたら、返すようにする」
え？え？メールしてもいいってこと？

「えっと、連絡事項とかを？」
「二人の間で連絡事項何てないでしょ？」
「じゃ、じゃあ、なんでもないようなことでもいいの？」

「うん。いいけど…」
本当に？！
「でもさ、なんでもないようなことって、どんなこと？」
藤堂君が不思議そうな顔をして聞いてきた。
え？そっか。理由がないとメールしたら変なのか。

「あの、ごめん。なんでもないことは、メールしないようにするね」
私はうつむいてそう答えた。
「あ、違うよ。嫌がってるわけじゃなくって。本当にどんなことなのかなって、俺、そういうの疎いから教えてほしいなって思って…」
藤堂君はちょっと慌てて、私にそう言ってきた。

「…えっと。だから…。この前みたいな満月が綺麗だとか」
「うん」
「それから、えっと…。何かな？」
今、何してるの？とか。おはようとか、おやすみとか。本当は、もっといろいろと恋人っぽいメールもしてみたい。
けど、そんなこととてもじゃないけど、言えないっ。

「それから？」
藤堂君がまだこっちを見て、聞いてくる。
だから、早く明日になって、藤堂君の顔が見たいよとか、今日の藤堂君もかっこよかったよとか、ハートマークつけたりしちゃったり。そんなメール…。
とてもじゃないけど、送れるわけがないな…。

「ごめん。やっぱり私にもわかんないや。その状況になってみないと」
「ああ、そうだよね…」
藤堂君はまた下を向いた。
「……」
藤堂君は、私からのメール、面倒？なんとも思わない？
やっぱり、どんなことを書いていいかわからなかったから、送れなかった…。ってわけじゃなくって、送る気もなかったんだよね。

ちょっと、がっくり。
「もし、俺が友達だったら、そんなにメールしたりしない？」
藤堂君が下を向いたまま聞いてきた。
「え？うん。あまりしないかな」
「沼田は？メアド知ってたよね」
藤堂君がこっちを見て質問してきた。

「でも、あまりしないよ」
「そっか」
藤堂君はまた、下を向いた。
「じゃ、俺にメールくれるのも、俺と付き合ってるからだよね？」

「え？うん。もちろん」
「……そっか」
藤堂君が耳を赤くした。え？なんで？
「なんか、結城さんからメールが来るってことが、まだ信じられないっていうか」
「え？！」

あ。藤堂君、もっと赤くなった。
「いまだにまだ、付き合ってるっていうのも、信じられないってい

うか…」
「……」
は？
「俺のどこがよかったのかが、いまだに疑問」
「……」
「前に、みんなでそれぞれの良さを言い合ったよね？」
「うん」
「結城さん、俺が部の仲間を大事にしてるって言ってたけど、そういうところなのかな」
「え？」
「そういうところを見て、俺と付き合ってもいいって思ったのかな」
「……」
あれ？私、他にもちゃんと言ってなかったっけ？
「私、好きな人のこと話してたと思うんだけど」
「一緒にいるだけで幸せってやつ？」
「うん。それとか、優しいとか…」
「それって本当に俺？聖先輩じゃなくて」
「うん。藤堂君だよ」
なんで聖先輩がそこで出てくるの。
「俺さ、女子にいつも怖がられてるよ？今のクラスの女子だって、怖がって話しかけてこないし」
あ、知ってたんだ。怖がられてるの。
「なのに、俺のどこが優しいんだろうって、ちょっと悩んでて」
「え？」
「好きな奴といるだけで、幸せだって言ってたよね？でも、俺といてもいつも、苦しそうな顔してたし。だから俺が幸せにしてるなん

て、ちょっと信じられないんだよね」
「そんなに私、いつも暗い顔してた？」
「…うん」

そっか。確かによく、地の底まで行ってたけど、それを藤堂君は見て、気にしてたんだな。う。悪いことをしたな…。
「そういう時は多分、藤堂君に私はなんとも思われてないなって、そう感じてた時かな」
「え？俺に？」
「それで、落ち込んでた」

「…そ、そうなんだ」
「うん」
「そっか…」
藤堂君は黙って、また下を向いた。
「だけど、優しいってのは？やっぱりそれも、わかんないな」
藤堂君は下を向いたまま、ぽつりと言った。

「優しいよ。今だって隣にいて、あったかいし」
「俺が？！」
藤堂君がびっくりして顔をあげた。
「う、うん。いつも、穏やかで、表情もやわらかくて、時々はにかんだように笑うのも、くすって声を出さずに笑うのも、可愛いなって」

「か、可愛い？俺が？」
藤堂君が顔を思い切りしかめた。
「ごめん。怒った？」
可愛いって言ったから？
「お、怒ってないけど」

か～～。あ、藤堂君の顔が一気に赤くなっていく。なんだ、照れてたのか。

「藤堂君は、本当に人を傷つけようとしないし、限りなく優しいって、そう感じてるもん」

「そ、それは多分、結城さんの勝手な思い込み…」

藤堂君はまだ、顔が真っ赤だ。

「そうかな。そんなことないと思うけどな」

「…」

まだ赤い。

「それから弓道してる時の藤堂君、凛々しいし」

「え？」

ああ。言っててこっちが恥ずかしくなってきた。駄目だ。きっと私も真っ赤だ。

でも、藤堂君も真っかっかだ。

藤堂君は、私と逆のほうを向いた。それから、しばらくすると、すくって立ち上がった。ブランコのほうに行き、ブランコを勝手に一人で押してみたり、そのあとブランコから離れ、ちょっとその場を歩いてみたりしている。

そして、立ち止まると、

「やっぱ、信じられない」

とぼそって言った。

藤堂君の顔はまだ、赤かった。

第35話　二人の距離

信じられないって言う、藤堂君が信じられない。クラスの女子も、弓道している藤堂君や照れて笑った藤堂君を見たら、きっと胸キュンしちゃうはずだ。

それより何より、私を好きだっていう方が信じられない。

「私も、信じられないんだけど」

「俺を好きだってことを？」

藤堂君は、ちょっと顔を引きつらせながら聞いてきた。

「違う、違う。藤堂君が私のことを思っててくれたことが…」

「え？」

藤堂君は目を丸くした。

「同じクラスになって、私ずっと暗くなかった？そんな私のことを見てて、がっかりしなかった？」

「全然…」

「で、でも、いろいろとアラが見えて、嫌になったりしたんじゃない？」

「…えっと…。どこも…」

藤堂君はちょっと照れているようだ。

「だけど、私、根暗だし…」

「そんなことないよ」

藤堂君はそう言うと、ベンチのすぐ横に来た。そして、下を向きしばらく黙っている。

何を言おうか、悩んでいるのか、困っているのか。

「俺、同じクラスになって、もっと結城さんのこと知って、それでも好きでいたし」

え？

「今も、いろんな表情見せる結城さん見てて、もっと惹かれていってるし…」

「ほ、本当に？」

「うん」

うわ～～。バクバクバクバク！心臓壊れそうだ。嬉しいけど、その言葉も信じられないよ。

か～～～。顔が熱い。藤堂君をちらっと見た。え？なんでこっちを見てるの？

「今、困ってるんじゃないよね？」

「うん」

困った顔してた？私…。

「その…、結城さんの顔が赤いのは、その…」

「顔、赤い？」

「うん」

「藤堂君が、信じられないような嬉しいことを言ってくるから」

「嬉しい？」

コクン。私は藤堂君のことを見ずにうなづいた。

「……。やばいな。俺、まじで浮かれてる」

「え？」

「あ、こっち見ないで。締まりのない顔になってるから」

またそんなことを言ってる。でも、そんな照れくさそうな顔も、大好きなんだけどな。

藤堂君はしばらくまた、そっぽを向いた。後ろから見ると、耳が真っ赤だ。

ぼけら〜〜〜。私はしばらく、藤堂君の後姿を見ていた。
浮かれてる藤堂君。浮かれてるって言っても、顔が赤くなるくらいで、そんなに浮かれているようには見えないけど、でも、そんなことを言う藤堂君が可愛い。

ああ…。彼氏と、彼女なんだよね。たとえ、ベンチに藤堂君が座ってこなくって、私と藤堂君の距離があろうとも、会話がまったく二人の間になくって、2人して照れあっていようとも、彼氏と彼女なんだよね？

藤堂君は、
「帰ろうか」
とぽつりと言って、先にゆっくりと歩き出した。私もベンチから立ち上がり、藤堂君の横に並んだ。
「目じり下がってて、鼻の下伸びちゃうのか…。知らなかったな。気を付けないと」
藤堂君が恥ずかしそうにそう言った。
「え？」

「中西さんが今日、言ってたでしょ？」
「ああ、あれ。あれは冗談で言ったんだよ。藤堂君、そんな顔してないよ？」
「じゃあ、どんな顔になってる？」
「優しい目をして穏やかに笑ってたり、時々照れくさそうにしたり…」
「…照れくさそうに？」

あ、変なことを言ったかな。
「そっか。そういうの顔に出てるのか…」
「…」

いつもは、ポーカーフェイスなのにね。と言おうとしてやめた。わざと照れる顔を隠すようになったら嫌だもん。照れた顔、本当に好きだし。

って言ってみる？そうしたら藤堂君、どうするかな。

「あ、あの…」

「え？」

「藤堂君、その照れた顔、私の前では隠さないでほしいな」

「なんで？締まりのない顔してるでしょ？」

「ううん。私、藤堂君の照れた顔とかも、すごく好きで…」

って、言っちゃった！すごく好きだなんて、言っちゃったよ！私ったら。

か～～～～～！！！！と私の顔も赤くなったけど、横にいる藤堂君の顔のほうが、思いっきり赤い。火がついたように真っ赤だ。

それから藤堂君は、顔を真っ赤にしたまま、黙り込んで歩いていた。隠さないでと言ったからか、そっぽを向くのはやめたようだけど、それでも、なんとなく下を向き、私のほうは見ないようにしているようだ。

真っ赤になって照れてる藤堂君は、隣にいるだけで可愛い。駅までの道、なんにも会話がなかったけど、私はすごく幸せだった。

ホームにはもう、藤沢方面の電車が来ていた。私はベルが鳴るまで、藤堂君の横にいた。

「乗らないの？」

藤堂君が聞いてきた。

「う、うん…」

だって、少しでも藤堂君のそばにいたいって、思っちゃうんだも

ん。

ベルが鳴りだし、私は電車に乗った。

「じゃあ、また明日」

藤堂君がにっこりと笑った。

「うん」

私はなんて言っていいかわからず、ただうなづいた。

ドアが閉まり、電車が走りだした。藤堂君を見ると、ずっとこっちを見ていた。私もホームにいる藤堂君を、見えなくなるまでずっと見ていた。

キュン。空いているシートに座ってからも、ずっと胸がキュンってしている。

明日も会えるんだね。嬉しいな。

夜、お風呂から出て、ベランダに出た。雲がかかっていて、星も月もまったく見えなかった。

「なんだ。月が綺麗ってメール、送れないじゃん」

そのまま私は携帯を握ったまま、ベランダにいた。なんでもないメールっていうのは、どんなのを言うのかな。

送りたいことを送れば、いいんだよね。たとえば…。たとえば？今何してる？それ、聞いてみたいな。お風呂からはもう出たかな。手の傷はまだ痛むときがあるのかな。

夜、寝るまでの間、私のことを思い出す時ってあるのかな。なんて、そこまではさすがに聞けないな…。

私は、ずうっと、ずうっと藤堂君のことばかりを考えている。ご飯食べていたって、お風呂に入っていたって、ずっとだ。あまりにもぼけっとしてるから、さっきも母に怒られたところだ。

藤堂君の照れた顔が、ずっと頭から離れない。可愛かったな…。

「は～～～～」

メールがしたい。でも、なんて送っていいかがわからない。それよりも電話もしたい。直接声も聴きたい。でも、なんの用事もないから電話もできない。

今日は宿題も出ていないしなあ。

「そうだ。もうすぐテストがあるなあ。藤堂君、テスト勉強一緒にしてくれないかな」

ってメールしてみる？でも、そんなの明日でも話せることか。

あ～～～～～。なんてメールする？！

結局１１時に、

＞おやすみなさい。

とだけ、メールをした。またきっと、藤堂君もおやすみなさいっていうメールをくれるだけだよね。

ブルル。携帯がすぐに振動した。わ。もう返事をくれたんだ。

＞まだ、寝ないよ。

え？！藤堂君からのメールが、予想外だ！ど、どうしよう。なんて返したらいい？えっと、えっと。

＞今、何してたの？

いいよね。こんなメールしても…。えい！送信！

＞本、読んでた。

本？なんのかな。聞いてもいいよね。

＞なんの本？あ、弓道の？

＞小説。

藤堂君、なんてシンプルな返事なんだ。返事くれるんだから、そ

れでもいいか～。

＞どんな小説を読んでいるの？

＞推理小説。

そうか。推理小説か…。私、読まないから突っ込んだ質問ができないなあ。作者は誰？とか、題名は？なんて聞いても、わかんないもんなあ。

あれ。会話がこれで終わっちゃう？

ブルル…。しばらくメールを送らないでいると、携帯が振動した。藤堂君からメールをくれたんだ！

＞結城さんは何をしてるの？

うわ～～。聞いてきてくれた！嬉しい！でも、なんにもしてなかった。藤堂君になんてメールしようか悩んでただけだもん。

まさか、ずうっと藤堂君のことを思ってたよ、なんてそんなことも書けないよ。そんなの絶対にうっとおしいよね。

さて、どうしようかな。

＞あ、寝るところだった？

またしばらくメールをしないでいると、そんなメールが来た。

＞ううん。藤堂君になんてメールしようかなって、ずっと悩んでいた。

と書いてみた。いや、これはやっぱり、いくらなんでも…。

＞音楽聞きながら、雑誌を見てた。

そう書き直して送った。実は本当に音楽をかけて、雑誌をめくってたけど、まったく頭に入ってなかったんだよね。

＞雑誌？雑誌なんて見るの？

＞興味がある特集だと買ってきちゃうの。

＞どんな特集だと買って来るの？
＞京都、奈良の特集。鎌倉散策。あと雑貨の特集とかも好き。

＞鎌倉、好き？今度一緒に行く？
え。え～～～！！！！本当に？わあ、言ってみるもんだあああああ。
＞うん。行きたい。
私はすぐに返信した。ああ、最後にハートマークでもつけたいくらいだ。それにしても、藤堂君と鎌倉、似合いすぎる！

＞今度の部の休みは江の島だから、次の休みかな。
＞でももうすぐ、中間テストだよ？
＞あ、忘れてた。一緒にテスト勉強する？
わ～～～～。言ってみるもんだあああああ。
＞うん。テスト勉強一緒にする！

嬉しすぎる。ああ、どんどん彼氏と彼女のメールって感じになってきている。
しばらく携帯を握って、私は喜びに打ちひしがれていた。
＞それじゃ、本当におやすみ。
藤堂君からメールが来た。え？本当にって？時計を見たら、１２時近かった。
あれ？いつの間に…。

ああ、メールのやり取りでこんな時間になってたんだ。
＞おやすみなさい。
藤堂君からのメールのおやすみなさいが、おやすみに変わってた。
なんだか、それだけでぐっと近づいたって感じがしちゃう。

もし、目の前で優しく「おやすみ」なんて言われたら、なんて想像しただけでくらくらしてくる。

あほだなあ。そんなこと言われるわけがないのになあ。
「は～～」
もう一回、メールのやり取りを見直した。鎌倉にも行けるし、テスト勉強も一緒にできるんだね。
それに、今度の休みの日には江の島だよ。デートだよ。

そうだ！何を着て行こう。
私はベッドから起き上がり、クローゼットを開けた。どれもぱっとしない地味な服ばかりだ。
いったい、どんな格好をしていったらいいだろう。でももう、買いに行ってる暇もない。
明日、麻衣に相談してみようかな…。

翌朝、ちょっと早めに家を出た。学校に着く前に、
＞ちょっと相談があるの。
と書いて麻衣に送った。
＞教室行く前に、中庭においで。
と麻衣から、返信があった。

私は校舎内に入らず、カバンを持ったまま中庭に行った。麻衣は、もうすでにベンチに座っていた。
「おはよう。なあに？相談って」
麻衣は明るく聞いてきた。
「実は…」
私はちょっと声のトーンを落として、麻衣にデートの着ていく服がないと、そう言ってみた。

「え？デート？」
「し～～～」
周りには、少しだけだが人がいた。園芸部だか、美化委員だかわ

からないが、２人の女生徒が花壇の世話をしているし、カップルがベンチに座っていちゃついているし。
「いつ、どこに行くの？」
「週末、江の島水族館に」
「二人で？」
「うん」
「ダブルデートじゃなくって？」
「うん」

「ふう～～ん」
麻衣が思い切り、にやついた眼で私を見た。
「それはもう、スカートだよ。それも、膝丈よりも短いやつ」
「そんなの持ってないもん」
「え？そうだっけ？」
「うん」

「あ、あれは？スカートじゃないけど、ショートパンツ買ってたよね？」
「春に？うん。その下にスパッツ履いて着てた」
「それそれ。生足で履いてみたら？」
「え？無理だよ。あれ、すごく短いんだよ」
「いいじゃ～ん。着ちゃいなよ～。最近暑いくらいだし、ショートパンツ生足でも大丈夫だって」

「絶対に無理」
「なんで～？藤堂君が見惚れちゃうよ。穂乃香、足すごく綺麗だし」
「そんなことない。絶対に無理」
「じゃ、膝丈より短いスカート買いに行く？」
「……。そんなスカートも履けないよ～」

「なんで～～？」
「わかった。ショートパンツにスパッツ履いていくことにした」
「生足は？」
「出さないよ」
冗談でしょ。あれ、かなり短いんだよ？

それから教室に戻ると、もう藤堂君がいた。え？なんで？
「おはよう」
藤堂君が微笑みながら、声をかけてきた。
「病院は？」
「毎日行かなくてもよくなったんだ」
そうなんだ。良かった。どんどん回復に向かってるんだよね？

ああ、それにしても今日もなんて凛々しいんだ。
「藤堂君、おはよう」
クラスの子が藤堂君にめずらしく、声をかけた。
「え？おはよう」
藤堂君はなんで声をかけられたんだろうって顔をしながら、無愛想に答えた。

その女の子はさっさと自分の席に行き、横にいる友達に声をかけている。そしてひそひそと話している。なんか感じ悪いかも。
2時限目は選択科目。藤堂君は音楽を、私は美術を選択していた。
あ～あ。私も部活が美術なんだし、授業くらい音楽にしたら良かったな。

麻衣と沼田君は音楽で、私は美枝ぽんと美術室に向かった。
すると後ろから、朝、藤堂君に声をかけた子がやってきた。
「結城さん」
「え？」

「藤堂君と付き合ってるんだよね。藤堂君って、いつもあんなに無愛想なの？」
「へ？」

「結城さんと付き合ってるんだし、もうちょっと愛想もいいのかと思って声をかけたら、無愛想だからびっくりしちゃった」
えっと。なんで私と付き合ってると愛想がいいと思うわけ？っていうか、なんで私と付き合ってるからって、声をかけるわけ？

「藤堂君ってさ、私一回、弓道してるところを見たんだよね」
「え？」
「私、1年の時放送委員で、いろんな部に潜入してレポートするみたいなことをしてたんだ」
「あ、知ってる～～～。昼休みの放送で、そのレポートの様子を流してたよね」
美枝ぽんが言った。そうなのか。私、昼休みにまともに放送も聞いてないからなあ。

「それで藤堂君が弓道してるところを見たんだけど、やたらとかっこよくって」
え？ドキ～～。まさか、それで惚れちゃったとか？
「でもさあ、インタビューしたらぶすっとして、あんまり答えてくれなくって、すごく怖かったの」
そうだったんだ。
「同じクラスになっても、話したこと一回もなくって。怖いなってずっと思ってたの。だけど、彼女もできたんだし、そんなに怖くもないのかなって思って、今朝声をかけてみたんだ」

ああ、それで？
「でもやっぱり、怖かった～～」

「うん。よく香苗ってば、声をかけてるなって、私は驚いたよ。私なんて絶対に声かけられない」
香苗っていう子の友達がそう言った。
「そんなに怖いの？」
私は聞いてみた。すると二人とも、同時にうなづいた。

そこまで怖がっているってどうよ？
「柏木君とも喧嘩したんでしょ？」
「怖い～～。殴り合いかなんか？」
「違うよ。そんなじゃないよ。喧嘩もしていないし」
私は慌てて否定した。

「でも、私面白い噂を聞いたことがある」
香苗っていう子が話し出した。
「なになに？」
美枝ぽんが興味津々って顔で、その子に耳を近づけた。
「藤堂君、１年の時に女の子にコクってふられたって」

うわ。私のことだ。
「それも、ずっとひきずってたとか、すごく落ち込んでたとか」
「わ～～。その女の子、よく恨まれなかったよね」
え？
「でもさあ、あの無愛想な顔でコクられても、そりゃ断っちゃうよね」

ギク。
「ほんと、よく結城さん、付き合う気になったよね。あ、弓道してるとことを見たの？もしかして」
香苗って子が聞いてきた。
「うん。見学に行ったことあるけど」

「それでかっこよかったから、付き合うようになったの？」
えっと。確かに弓道してる藤堂君にも惚れたけど、それだけじゃないなあ。困った。

「もしかして脅された？」
「あ、藤堂君が怪我して責任感じてとか？」
「違う、違う」
慌てて私は顔を横に振った。その時、チャイムが鳴り、私たちは慌てて美術室に入った。すると、柏木君が片づけを終え、ちょうど美術室から出るところだった。

「あ、朝から今まで描いてたの？」
「うん。1時限目はここ、使う生徒がいなかったからさ」
「…そっか」
「結城さん、藤堂と付き合ってるの？」
「え？」
なんでそれ？

「今、話しがなんとなく聞こえた」
「あ…」
聞いてたんだ！
「付き合ってるの？」
「う、うん」

私は小さくうなづいた。
「ふうん、そうなんだ」
柏木君はそう言うと、私のすぐ横に来て小声で、
「よかったじゃん。でも俺は、複雑な心境だな」
とそう言って、それから廊下を早足で歩いて行った。

何？今の…。複雑？

なんだか、わけがわからない。でも、もう柏木君に関わるのはよそうって思っているし、ほっておこうかな。

美術室に入り、何気に準備室のほうに行ってみた。美術部員の絵は、そこにみんなしまうようにしてある。

柏木君の絵は一番手前の所に置いてあった。まだ絵の具も乾いていないので、他のとは別に置いてあり、すぐに柏木君のものだとわかった。

うわ！海は海でも、すごい荒れ狂ってる海だ。色もすさまじい。本当に怒りや苦しみをぶつけちゃってる。

こんな絵を描いていたんだ。見ているだけで私は、胸をぎゅうって握られたような苦しさを感じた。

表面では、何もなかったかのようにふるまっている柏木君。でも、原先生が言うように、本当に苦しんでいるんだ。そしてその苦しみやドロドロしたものを今、ちゃんと見て、絵で表現してるんだね。

もう関係ない、ほっておこうと思っていたのに、その絵を見た瞬間から私は柏木君のことが、いきなり気になりだしてしまっていた。

第３６話　水族館へ

いよいよ、デートの日がやってきた。前の日に、メールで時間を決めた。待ち合わせは江の島の駅の改札だ。

ドキドキ。緊張して早くに出て、１０分も早くに着いてしまった。

「あ～あ、やめたらよかった」

今日は、ショートパンツにスパッツをはいた。電車に乗っている時に私は、思い切り後悔した。前に座っている女の子が私と同じ格好をしていたのだが、すごくスタイルが良くて、つい自分と比べてしまったのだ。

改札口の前に立って、藤堂君を待った。駅前には、私と私の隣に数人の女の子たちがいる。

ちら。隣りにいる女の子たちを見た。みんな化粧をして、可愛い髪型をしている。おおよそ、私とは無縁だろうなという服装と髪型。

どうやらまだ誰かが来るらしく、その子たちは私のすぐ横で、なかなかその場を離れようとしない。う、なんだか、嫌だな。この子たちの隣にいるの…。

私はほんの少し離れて立った。それでも、その子たちがやたらと目立っている。

あ～あ。何やってるんだろう。だいたい、デートなんだから、もっとうきうきわくわくしながら、待っていてもいいのに。

電車がまた入ってきた。ぞろぞろと人が降りてきて、また駅前は人ごみになった。でも、その人ごみもすぐに消え、改札口の前には、さっきの女の子グループと私だけが残り…。と思っていたらもう一人、色白の可愛い子がぽつんと立っていた。

その子はあたりを見回し、時計を見て、ふうってため息をついた。
それから顔を手で、なぜかあおぎだした。

女の子のグループは、まだきゃあきゃあさわいでいる。色白の女の子がその子たちを見て、なぜか、その子たちから離れ、奥のほうへと行ってしまった。
あ、やっぱりあの女の子のグループの隣にいるのが、嫌だったのかなあ。

それにしても、あの子、どこかで見たことがあるような気がするんだけど？小さくて、髪がポニーテール。どこでだっけ？

「きゃあ。あれ、聖先輩だよ！」
え？！
女の子たちがいきなり、きゃあってさわぎだした。その子たちが見ている方を私も見てみると、聖先輩が急ぎ足でこっちに向かってきていた。
うわ～～！嬉しい。私服の聖先輩、初めて見た。なんでもない洗いざらしのシャツにジーンズ。白のスニーカー。それだけなのに、めちゃくちゃかっこいい。

「あれ？いない…」
聖先輩が、私のすぐ横に来て、あたりを見回しぽつりと言った。
あ、目が合った。あ、私に気が付いた。
「あれ？君…」

私は慌ててお辞儀をした。すると、あの女の子グループがやって来て、
「聖先輩。私たち、同じ中学の1年後輩なんです」
と話しかけた。聖先輩はその子たちを見て、軽くぺこりとすると、

その子たちの後ろにいた女の子を見つけ、
「桃子ちゃん！」
と、大きな声で呼んだ。

そして先輩は、あの色白のポニーテールの子のそばに駆けより、笑顔で話しかけた。
「ごめん、待った？」
「ううん。今来たところ」
「んじゃ、行こうか？」
うわ～～。聖先輩、見たこともないような、すっごい笑顔！そうか。どこかで見たことある女の子だなって思ったけど、聖先輩の彼女だったか！

聖先輩と彼女は、私や女の子のグループの前を通り抜け、仲睦ましく歩いて行った。
「あれ誰？」
「まさか、先輩の彼女～～？」
女の子たちはがっくりときていた。

「ねえ、あれ藤堂君じゃん」
一人の女の子がぽつりと言った。ドキ～～～。え？どこどこ？っていうか、藤堂君のこと知ってるの？あ、そうか！聖先輩と同じ中学で、一個下っていったら、藤堂君と同級生か！

うわあ。この可愛い子集団は、藤堂君と同じ中学出身だったんだ。
「藤堂君、久しぶり！どっか行くの～～？」
一人の子が声をかけた。
「あ…」
藤堂君は、その子たちの影に私がいるのを見つけた。

「ど、ども…」
私は小声で挨拶をした。
「え？まさか、藤堂君の彼女？」
その子たちが、いっせいに私を見た。
「うっそ～～」
みんなで目が点になっている。

藤堂君は、私の横に来ると、
「行こう。あっちなんだ」
と歩き出した。
「うん」
私は藤堂君のあとをてくてくとついて行った。藤堂君、歩くの速い…。

「同級生？」
「え？うん。３年の時、同じクラス」
え～～～！
「あ、じゃあ、美枝ぽんとも同じなんだ」
「八代さんとは、仲良くないよ。あいつら…」

「え？」
「どっちかっていうと、仲悪かったかな」
そ、そうなんだ。
それにしても、藤堂君、歩くの速い。あ！信号変わる！なのに渡って行っちゃった。私も慌てて、駆け足で横断歩道を渡った。

「はあ…」
思わず息を切らす。するとようやく藤堂君がこっちを向いた。
「あ、ごめん。俺、速かった？」
「うん」

藤堂君はようやく、歩く速度を落とした。いつもなら、私と速度を一緒にして歩いてくれるのにな。

「ごめん。俺もあいつら苦手で、つい早足になってた」

「そうなんだ」

私は駅のほうを向いてみた。でももう、あの子たちの姿も見えないくらい、駅から離れたところにいた。

「…なんか、ちょっと」

藤堂君が私を見て、ぼそって言いかけてやめた。

なに？気になる。私の格好が変？

「と、藤堂君、なに？」

「いや、なんでもない」

「き、気になるんだけど。私、どっか変かな？」

「え？ううん。そうじゃなくて、いつもと雰囲気変わるなって思っただけで」

そう言うと、藤堂君はくるっと前を向き、黙って歩き出した。

「藤堂君も、いつもと違うね」

「俺？変？」

藤堂君は私のほうを見て、聞いてきた。

「ううん。変じゃない。似合っているし、かっこいい」

と、そう言ってから藤堂君がみるみるうちに赤くなったから、あ、変なこと言っちゃったって後悔した。

でも、本当にかっこいいんだもん。さっきの聖先輩もかっこよかったけど、藤堂君も、ラフなかっこうをしているんだけど、それがとても似合っている。

Tシャツに半袖のシャツをはおい、カーキーのカーゴパンツ。そ

れにサンダル。もうすでに、夏って感じの海が似合ってますっていう格好だ。いつもの和男子のイメージと、ちょっと違う。

「さっき、聖先輩がいたの」
「会ったよ。俺も。駅にくるまでの間にすれ違った。彼女連れでしょ？」
「うん。会った？可愛いよね、彼女」
「ああ…。うん。聖先輩、鼻の下伸びてたな」

「え？」
「どうもって、一応挨拶したんだ。そうしたら、クールな顔して俺には挨拶してきたんだけど、次の瞬間にはもう、顔がくずれてた」
「く、くずれてたって？」
「彼女のほうを見て、にやついてた。彼女の前では先輩、あんなに変わるんだな。女の前だと特に、クールなのにな」

「がっかりした？」
「え？」
「聖先輩のこと」
「いや、別に。ただちょっと、意外だっただけで…」
「ふうん」

「あ、でもきっと、俺もあんななのかな」
「え？」
あんなって？
「結城さんといると、鼻の下伸びてるって、中西さんが言ってたけど、ああいう感じになってるのかな」
え？私といると？
ドキ。いきなり意識しちゃった。ちょっとだけ距離を置いてる藤堂君。さっきから、あまりこっちを見ないでしゃべってる。

時々、ちらっと私を見る。ちょっと藤堂君の耳が、赤い気がするのは気のせいかな。
「昨日、大会だったんだ」
「え？あ、弓道？」
「うん。みんなけっこういい線までいったんだよね」
「見に行ったの？」

「もちろん。応援しに行ったよ」
「出たかったでしょ？」
あ、当たり前のことを聞いてしまった。私ったらまたやった。
「うん。出たかったよ」
藤堂君は悔しそうな顔もせず、穏やかにそう言った。

水族館に着き、チケットを買って中に入った。休日のせいか、けっこう混んでいる。
「迷子にならないようにしないとね」
藤堂君がこっちを見て、優しくそう言った。
「うん」
私はちょっとだけ、藤堂君に近づいた。それでも、ほんのちょっと二人の間には距離があった。

ちら。隣りのカップルを見た。ああ、手、つないでる。逆側にもカップルがいた。ああ、腕組んでるよ…。あんなふうになれるのは、いったい何か月先なんだろう。1年先とかになったりして…。
美枝ぽんだったら、絶対に自分から腕とか組んじゃうんだろうな。
藤堂君からは、手、つないでくれないよね。

「ここに来るの、初めて？」
「ううん。遠足で来たことあるよ。小学生の時にね」

「ああ、そっか」
藤堂君はちょっとだけ、私を見て、また水槽に視線を戻す。

「藤堂君はよく来るの？」
「いや、そんなに来ない。小学生以来かな」
「あ、そんなものなの？」
「だって、来る用事ないでしょ？」
「デートじゃなきゃ、そうそう来ないか」

「そうだよ。家族でだって、そんなに来ないよ」
そんなものなのかな。
じ～～。水槽を見ていたら、隣に藤堂君が映って見えた。ドキン。
今、すごく近くにいない？顔がすぐ横だけど？

「この魚、綺麗だよね」
藤堂君がぽつりと言った。
「え？う、うん」
魚見てたのか。そりゃそうだよ。
藤堂君は水槽から離れ、ゆっくりと歩き出した。私は慌てて、藤堂君の横に行った。

「イルカのショー、見る？」
「え？うん。見たい」
私たちはイルカのショーをする会場へと足を向けた。席を取ってから藤堂君は、
「なんか飲み物買ってくるよ。何がいい？」
と聞いてきた。

「私が行く。藤堂君座ってて。片手じゃ、二つ持てないでしょ？」
そう言うと藤堂君は、じゃあコーラと言って、席に座った。

売店は列ができていた。やっとこ、コーラとジュースを買って席に戻った。すると、席はいつの間にか満員になっていて、藤堂君の隣の私の席も、ほんの隙間しか空いていないくらいになっていた。

「はい」

藤堂君に紙コップを渡した。

「ありがとう」

藤堂君がそれを受け取り、ほんの少しだけ横にずれた。でも、それでもやっぱり、藤堂君の横の隙間は狭い。

だけど、ここに座れってことだよね？だから、ちょっとずれてくれたんだよね？

ジュースがこぼれないように注意しながら、私はその空いている隙間に座った。

あ、どうにか座れるもんだ。と思いつつ、藤堂君のほうに寄るのも恥ずかしくて、何気に私は逆側の人のほうに体が寄ってしまった。

だけど、隣の人は彼女連れの男。その隣にいる彼女らしき女性が、私をにらんできた。

うわ。怖い。それに、隣の男性も、なんでこっちに寄ってくるの？って感じでこっちを見る。

スス…。さすがにそんな目で見られたら、藤堂君のほうに寄らないわけにはいかないじゃないか…。

あ！藤堂君のももと私のふとももも、くっついちゃったよ。あ～～。こんなスパッツ履いてくるんじゃなった。ふとももが目立つ！！！

「混んでるね」

藤堂君は真ん前を見たまま、こっちも見ずにそう言った。

「う、うん」

私はそれ以上何も言えず、ゴクンとジュースを飲んだ。
藤堂君もコーラを飲んだ。そして今度は、腕と腕が当たってしまった。
うわ。これって、かなりの接近をしていない？藤堂君の肌のぬくもり、直に感じちゃったよ。
わ～～。ドキドキしてる。きっと私は真っ赤だ。

それから、イルカのショーが始まった。会場は拍手がわいたり、歓声が起こったり。でも、私はずっとイルカよりも、藤堂君のことばかりを意識してしまっていた。
ショーが終わり、私も慌てて拍手をしようとして、コップを膝の上で思い切り、ひっくり返した。
「わ！」

まだ、ジュースは半分も残っていて、その全部を足の上でひっくりかえした。幸い、ショートパンツは濡れなかったものの、スパッツはずぶ濡れだ。
「ごめん。藤堂君にもかからなかった？」
「俺は平気。でも、結城さん、それだと冷たくない？」

「う、うん。きっとすぐに乾く」
と言いながら立ち上がったが、とても、そんな簡単に乾きそうもないくらい濡れてしまっていた。
「大丈夫ですか？」
と係員の人がタオルを持ってきてくれた。

「すみません」
タオルを受け取り拭いてみた。
「よかったら、スタッフが着替える更衣室があるんですけど、そこ

で着替えませんか？スパッツだけ濡れているようだから、それ脱いじゃったらいいと思うんですけど」

私とあまり年が変わらないんじゃないかっていう、童顔の可愛い女のスタッフさんが、簡単にスパッツを脱げばって言ってきた。

ちょ、ちょっと。そんな簡単に言わないでくれる？とは言い返せず、私はしばらく黙っていた。

「そうさせてもらったら？結城さん」

藤堂君？言ってる意味わかってるの？！生足がにょきって出ちゃうんだよ？

だけど、その申し出を断るのも悪い気がして、私は仕方なく、その童顔の人についていき、スパッツを脱いだ。

ああ。色っぽくもなけりゃ、綺麗でもない。こんなの、藤堂君に見せたくない。

「すみませんでした」

私はお礼を言い、更衣室を出た。

藤堂君は、そこから少し行ったベンチに座って、私を待っていた。

「ごめんね、待たせちゃって」

私はもじもじしながら、藤堂君のそばに行った。それがいけなかったのか、藤堂君は私を見てすぐに、そっぽを向いた。

「じゃ、行こうか。お腹空いてない？どっかで食べる？」

「え？うん」

変？変なの？それとも、なんで顔をそむけたの？私がはずかしがったから？なんで～～～？！気になる。

藤堂君と一回、水族館を出た。そしてすぐ横のレストランに入った。そこからは海が良く見えて、気持ちよかった。

だが、私の心はちょっと、曇っていた。藤堂君はさっきから、まったくこっちを見ない。私の顔すら見ない。

席についてもすぐにメニューを広げ、食べるものが決まるとすぐに店員を呼んだ。若い綺麗な店員が来て、藤堂君はその店員を見ながらオーダーをした。

店員は、かなり胸があいているタンクトップに、チェックのシャツを着ていて、そのうえ、デニムのスカートはかなりのミニだ。胸もぱつんぱつんに大きく、ヒップも大きく、すごくスタイルがいい。

オーダーを聞くと、その店員は去って行ったが、しばらく藤堂君はそっちを眺めていた。

店員が気になるの？胸でかいから？お尻の形がいいから？なんて聞けるわけもなく、私は藤堂君に何も声をかけられず、下を向いた。

さっきの店員に比べたら、私のふとももって貧弱かも。ヒップもないし、胸もないし。色気がまったくない体をしてるんだな、私って。

藤堂君はようやくこっちを見たと思ったら、

「海、綺麗だね」

と今度は窓ガラスの外を眺め出した。

「うん」

「今日天気良くて良かったね。浜辺でもあとで散歩する？」

「うん」

「…あ、あれ？何か、沈んでる？」

藤堂君が私をようやく見た。

「え？ううん」

「ほんと？具合が悪くなったとかじゃない？」

「うん。大丈夫。あ、あれ、とんびだよね？」
「え？うん」
私は窓から空を見た。そして飛んでいるとんびを指差した。

「…」
藤堂君に視線を戻した。でも、藤堂君はまだ、外を見ていた。
そしてまた、さっきの店員がやってきて、飲み物だの、サラダだのを置いて行った。
ちょっと前をかがむだけでも、胸の谷間が見えた。ああいうのって、男の人、ドキッてするの？
と思いながら、藤堂君を見ると、
「サラダ、お皿に取る？」
と聞いてきた。

「私がするからいいよ」
私は慌てて、サラダを取り皿に分けた。
「ありがとう。ごめん。俺できなくて。片手がこうだから」
藤堂君が申し訳なさそうに謝った。

「え？そんな、謝らなくてもいいよ。それよりも、もっと何か片手で不自由なことがあったら言って。手伝うから」
「…ありがとう。だけど、そんなにもう痛みもないし、不自由してないから大丈夫だよ」
「そ、そう？」
遠慮してない？

藤堂君の顔を見た。藤堂君も私を見た。でも、すぐに視線を下に向け、サラダを藤堂君は食べだした。
「あ、うまい」
藤堂君はそう言うと、また黙々と食べている。

「…」

私も食べだした。でも、さっきからどうしても気になる。

どうして？目も合わさない。こっちも見ようとしない。なんだか、ずうっと、よそよそしい。

私といても嬉しくないとか。今日、楽しくないとか。それとも、何か気まずいとか。それとも、なに？！

すごく気になる。だけど、聞けない。聞くのもなんだか怖いよ…。

第37話　浜辺

さっきの店員がパスタを二つ持ってきて、テーブルに置いた。
「ご注文の品は揃いましたか？」
「ああ、はい」
藤堂君は店員を見ながら、うなづいた。店員はにっこりと笑い、戻って行った。

店員は見るのに、なんで私は見ないの？ちょっと腹が立った。そのあと、今度は悲しくなった。
照れてなのかな。そう思いたい。でも、私の癖でつい、悪い方に考えが及んでしまう。
「あの…」
藤堂君に聞いてみる？でも、なんて？

「ん？」
藤堂君はパスタを食べ、ゴクンと飲み込んでから返事をした。
「なに？」
「今日の、藤堂君、ちょっと…」
藤堂君は、え？って驚いたように私の目を見た。

「……」
あ、目が合った。藤堂君がそのままずっと私を見ている。
「俺が、なに？」
かなり不安げな目だ。
「ちょっと、いつもと違うかなって」

「…俺？違うって、どう？」
「…ううん、私の気のせいかも」

「……」
私は黙って、パスタを食べだした。藤堂君も食べていたが、半分食べたところで、フォークを置いた。
「気のせいって、何か俺、変だった?」
藤堂君が聞いてきた。藤堂君は、まっすぐ私を見ていた。
「私、なんか避けられてるかなって」
「え?!」
藤堂君は目を丸くした。
「なんだか、よそよそしいっていうか、その…」
ああ、こんなこと言ったら、藤堂君、困っちゃうかな。
「俺が?」
「う、うん」
「……」
藤堂君は黙り込んだ。
「えっと、なんでそう思ったの?」
しばらく黙っていた藤堂君が、話し出した。
「…あまり、こっちを見ないっていうか」
「え?」
藤堂君の顔がちょっと引きつった。なんで?
「顔、ずっとそむけてるっていうか、避けてるっていうか」
「…俺、そうだった?」
「うん」
ドクン。やばい、言わなきゃよかった。なんか落ち込むようなことを言われたらどうしよう。
「俺…」

ドクン。
「ごめん。その…」
なんでごめんなの？
「なんだか、意識しちゃって」
「え？」
何を？
「…結城さんのこと見ると、どうしても足に目が行く」
「え？！」
足？
「あ、やっぱり、引いたよね？こんなこと言って」
「……」
足？あ！この生足？！
「私の足が変だから？」
「へ、変？いや、そんなこと…」
藤堂君は真っ赤だ。
「じゃ、なんで？あ、私の足が貧弱だから、とか？」
「は？」
「だって、さっきは店員さんのことをじっと見てた」
「誰が？」
「藤堂君が」
「見てないよ？」
「見てた。目で追ってたし」
「……」
藤堂君の目が点になった。
「そ、それ、まじで、見てない。っていうか、俺、多分、目に入っ

てもいない。店員がどんな人だったかも覚えてないし」
「え？」
「…だから、ずっと着替えから戻ってきた結城さんの姿が、目に焼き付いてて、他のことなんかまったく」
「……え」
藤堂君はしまったっていう顔をして、うつむいた。でも、真っ赤なのが丸わかりだ。
「まいったな。なんで俺、こんなこと言ってんの」
「……」
うわ。真っ赤だ、藤堂君。
「…」
「ポーカーフェイス、まじでよそおえないんだ。どんな顔になっているのか、自分でもわからない。ごめん。だから、あまり顔を見られないようにしてた」
うつむきながら、藤堂君がそう言った。
「もしかして、俺がそっぽむいてたから、ずっと気にしてた？」
藤堂君は、ちらっと私を見た。
「…」
私は、黙ってこくんとうなづいた。
「なんか、暗いこと考えてた？」
「私って、やっぱり、根暗だよね？」
「え？」
「こういう時に、明るいほうに考えられない」
「い、いや。ごめん、俺のせいだよね？」
「ううん」

し〜〜〜ん。しばらく静かになってしまった。ああ、また私、場を暗くしてるんだな。

「まいったな」

藤堂君がまた、下を向いてぽつりと言った。

ああ。私が暗いから?場がこんなに暗いから?

「今日の結城さん、直視できないや」

「…へ?」

「あ、なんでもない。こっちの話…」

…え?な、なに?なにが、まいってる、なの?

「はあ…」

藤堂君はため息をして、また下を向いた。

「どんだけ、俺、惚れてんだろう」

ぽつっとそう藤堂君がつぶやいた。

「え?」

今、なんて?

「うわ。俺、口に出てた?」

「う、うん」

「ああ、気にしないで。独り言だから」

……。気にしないでと言われても、気になる!

えっと?どんだけ、俺、惚れてるんだろうって言った?

え?

え〜〜〜〜?!!!

それ、私に?!!!!

「まいったな」

藤堂君は、今度は横を向き、真っ赤になった。それから、しばら

く黙り込んでいたが、またフォークを持ってパスタを無心に食べだした。

私はしばらく頭が真っ白。ほ、惚れてる？直視できない？目に焼きついた？

私が～～～？！！！！

ドキドキドキドキ。いきなり、胸が高鳴った。私も藤堂君が見れなくなった。

それからはよく覚えていない。とにかく2人で、赤くなりながら、黙々と食べていたように思う。

そして、その店を出てから、浜辺を歩き出した。今日は本当に天気が良くて、汗ばむくらいだ。

「気持ちいいね」

私が風を受けながらそう言うと、藤堂君はなんにも言ってくれなかった。

なんで？と藤堂君のほうを振り向くと、藤堂君はぱっと視線を外し、耳を赤くした。

な、なんで？！

「コホン」

藤堂君が咳ばらいをした。そして私のほうは見ないで、歩き出した。

「本当だ。気持のいい風だね」

今頃さっきの会話の続き？やっぱり、かなり変だよ。藤堂君。

「…結城さんって」

「え？」

「今までも、誰かに告白されたりしていない？」

「い、今まで？」
「俺の前に、誰か…」

「いないよ。全然！」
「そうなんだ。中学も？」
「うん。まったく。男子ともあまり話さなかったし」
「そっか」
藤堂君はちらっと私を見て、また違う方を向いた。

「なんでかな。モテそうなのにな」
「誰が？」
「結城さん」
「ままま、まさか～～！」
どこのどの辺を見て、そんなことを言ってるの？本当に変だよ。

「だったら、藤堂君だって、モテそうだよ？」
「俺？まさか」
「でも、陸上部の後輩とか」
「全然だよ。女子とは部が一緒でも、そんなに話さなかったし。クラスの女子もまったく話していないから、ほら、八代さんとだって、高校2年になってようやく話をしたしさ」

「遠くから、藤堂君をひそかに思ってた子もいないの？」
「いない、いない。俺、怖がられていたし」
「なんでかなあ。なんで怖いんだろう」
私と藤堂君は、ゆっくりと石段に腰かけた。そしてそこから、海を眺めた。
藤堂君と私の間はまた、ずいぶんと隙間が空いている。どっちがこんなに空けたのかわからないけど、なぜか距離ができていた。

「結城さんは怖くないの？俺のこと」
「うん」
「最初は？クラス同じになってすぐ」
「怖くなかったよ。話すようになっても、藤堂君は穏やかで優しいんだって、そう思ってたし」
「俺が？」

藤堂君はかなり驚いている。
「うん」
なんでそんなに驚くのかな。
「…そっか。結城さんだからかな」
「え？」

「いや、こっちの話」
独り言？また。
「私は？」
「え？」
「根暗の女の子だったでしょ？」

「それ、よく言ってるよね？自分で…。でも、そんなことないからさ」
「だけど…」
「結城さんも、落ち着いてるよ。はしゃがないし、一緒にいて、疲れないっていうか、安心していられる」
「本当に？」
「うん」

そっか。よかった…。
「だけど、ちょっと今日は印象が違う」
「え？」

「服装のせいだと思うけど」
生足だから？まさか…。

「スタイルいいね」
「へ？」
「髪も長くて、さらさらだし、男がほっておかないんじゃないかって、ちょっと俺、心配だな」
はあ？！
「……っていう俺も、さっきから動揺してるんだけど」
「なんで？」

「だから、いつもと雰囲気が違ってるから」
「…」
だからって、なんで動揺？
じい…。あれ？藤堂君にじっと見られてる？私が藤堂君を見ると、しばらく見つめあってしまった。でも、ぱっと藤堂君のほうが視線を外した。

「なんか…」
「え？」
「デートだよね、今日って」
「う、うん」
ドキン。改めてそう言われると、ドキッてする。

「変な感じだ」
「え？」
「不思議だ。結城さんとこうやって、海を見ているなんて」
「？」
「一人でたまに、見に来ることはあるんだ。カップルもけっこういて、そういうの見ても、あまり気にしなかった。だけど、最近、ち

ょっとね、結城さんと付き合うようになって、気になってきたっていうか」

え?え?何が?ドキドキ。

「俺も、あんなふうに結城さんと、海を見たりするのかなあって」

へ?

「…それが現実になっているから、なんか変な感じだ」

「そうなの?」

変な感じって、どう変なんだろう。

「……。やば…」

「え?」

「ちょっとにやけてない?俺」

「うん。大丈夫。ちょっと耳は赤いけど」

「あ、ああ。やっぱり?」

藤堂君は耳を触った。それから目を伏せた。

もしかして、照れてる?もしかして、もしかすると、私と海を見ていることを喜んでくれてる?とか?

「……何時間でも、こうしていたいね」

「え?うん」

うそ。そんなこと思ってたの?う、嬉しすぎる。

風がまたふいた。私の髪が風でなびいた。なびいた髪を手でまとめる。そこでまた、藤堂君と目が合った。そしてまた、藤堂君は赤くなった。

な、なんで?!

「なんか、絵になる」

「絵って?」

「結城さん、髪、綺麗だし」
え？
「風に髪がなびいてるだけでも、絵になるなって、さっきも思ってたんだ」
どひゃあ。もしかして、それで耳を赤くしてたの？
きゃ～～。こっちまで、顔が熱くなってきた。

藤堂君、変！そんなこと言うキャラじゃないよ。真っ赤になりながら、そんなこと言っちゃうなんて！
変だよ、変。絶対に変だよ。もう、さっきから私の心臓がバクバクしっぱなしだよ。

藤堂君の視線を感じた。私はちらっと藤堂君を見た。藤堂君はもう、目をそらさなかった。ずっとこっちを見ているから、私が恥ずかしくて、目をそらした。
か～～。顔、熱いよ…。

ちら。もう一回藤堂君を見た。うわ。まだこっちを見ている。バクバクバク。うわ。心臓が…。
「と、藤堂君」
「え？」
「あまり見ないで」
「え？」

「ドキドキが大変なことになる」
「ドキドキ？」
「今、ドキドキして大変なの」
「……結城さんが？」
「うん」

私はこくりとうなづいた。そして下を向いた。
藤堂君の視線を感じなくなり、ちらっと隣を見た。すると、藤堂君は赤くなって下を向いていた。
「結城さんって、あのさ」
「え？」
ドキン、何？
「いや、なんでもない」

「そ、そういうの、すごく気になるんだけど」
「…じゃあ、聞くけど…」
「うん」
ドキン、何～～？
「お、俺のこと…」

「え？」
ドキ。藤堂君のこと？
「ほ、本気で好き？」
どひぇ。なんて質問？
ドキドキドキドキ。
「う、うん」

とりあえず、私はうんってうなづいた。
「今日も、２人で会えたの、う、嬉しいとか？」
「うん」
「……そっか」
藤堂君は黙り込んで、下を向いた。

「よかった」
それからしばらくして、ぽつりと言った。
「え？」

「俺ばっかりが好きなのかなって、ちょっと思っちゃったから。でも、結城さん、さっきすごく赤くなって、照れてたし…。もしかして、結城さんも俺のこと、ちゃんと好きでいてくれてるのかなって」

「…?!」

俺ばっかり好き?え?

「わ、わ、私も、藤堂君のことは…」

すごく好きなんだけど!?伝わってない?

「ん?」

藤堂君はまた、私をじっと見た。うわ。胸がまたときめきだした。か〜〜〜。顔が熱い。

「ちゃ、ちゃんと、私も…、藤堂君のことは…」

しどろもどろになって、結局私はそのあとの言葉を、ずっと言えないでいた。

第３８話　初めて手をつなぐ

なんで、私が藤堂君をすごく好きだっていうことが伝わっていないのかな。

そんな思いを抱えながらも、何も言えずに浜辺を２人で歩き出した。すると、向こうから彼女と歩いてくる聖先輩の姿が目に入ってきた。

「あ…」

藤堂君も気が付いたらしい。聖先輩は彼女と手をつなぎ、笑いながらやってくる。

聖先輩、彼女と手なんてつないじゃうんだ。ああ、けっこう長い付き合いだもんね。昨年の文化祭の時も付き合っていたんだから。

なんとなく藤堂君と聖先輩たちを眺めていた。聖先輩は、彼女に笑顔で話しかけ、彼女のほうは赤くなったり、恥ずかしそうにうつむいたり…。

だんだんと私たちと、聖先輩との距離が近づいてきた。

「あはははは！桃子ちゃん、笑わせないで」

聖先輩が思い切り笑っている。っていうか、笑い転げている。うそ。こんなに聖先輩って、大笑いをするんだ。

「犬じゃないよ～～。もう～～」

「だって、似てる！」

そんなことを言い合って、笑っている。彼女のほうは顔を赤くしながら、ちょっと口をとがらせている。

聖先輩が私たちの横を通り過ぎた。まったく、こっちのことなんて目に入っていないようで、私たちのことも気が付いていない。

藤堂君も私も黙って、そのまま浜辺をただ歩いた。聖先輩の笑い声がどんどん後ろへと、遠ざかっていった。

「びっくりだな」

私がぽつりとそう言うと、藤堂君は、

「聖先輩でしょ？彼女といて嬉しそうだったね」

と、私が何に驚いていたのかわかったようだ。

「あんなに思い切り、笑うんだね」

後ろを振り返ってみた。あ、まだ笑ってるみたいだ。

「…」

藤堂君も黙って、聖先輩たちのほうを見ている。

手、いいな。つないでて…。なんていう思いが、一瞬私の頭を横切った。私は藤堂君と私の間にある空間を見た。私と藤堂君の距離は、しっかりと空いている。

「ショック？」

「え？」

「今、ちょっと顔が沈んでたけど、聖先輩と彼女を見て、ショック受けてるの？」

藤堂君が私の顔を見て、聞いてきた。

「ううん。全然」

「でも、聖先輩のこと、好きだったんだよね？」

「…」

そういえば、そうだ。なのにまったく、彼女がいることにはショックを受けない。

「藤堂君と付き合ってるからかな？そんなにショックじゃないな…、私」

私がそう言って、ちらっと藤堂君のほうを見ると、藤堂君はしっかりと視線を外し、海のほうを眺めていた。
えっと、今の聞いてました？
「それ、俺のことを気遣って言ってくれてる？」
藤堂君が私のほうを向いて、そんなことを聞いてきた。
「は？」
「沈んだ顔してたよ？本当に…」
違うよ～～。手、つないでるのを見て、羨ましいなあって思っただけだもん。別に沈んでないよ～～。
「仲良くて、いいなって思っていただけ…」
遠まわしにそう言ってみた。
「え？やっぱり、彼女と仲いいのを見て、ショックだったんじゃ…」
「違うよ。仲のいいカップルで羨ましかっただけで…」
「……」
藤堂君の顔が、一瞬引きつった。
「ごめん。そっか。俺と一緒にいても、楽しくないとか？」
「へ？」
藤堂君が暗い顔をした。
ち～～が～～う～～。そういうわけじゃなくって。
「ごめん。そうだよね。俺、さっきから気が利かないっていうか、話もろくすっぽしてないし…」
「……」
私はほんの少し、藤堂君のそばに寄った。でも、あまりそのことに藤堂君は気が付いていない。
まだ、藤堂君は暗い表情で、下を向いている。

もう少し、藤堂君の横に近づいた。あと一歩近づいたら、手と手がくっつくくらいの距離まで寄ってみた。すると、ようやく私が近づいたことを藤堂君が気が付いた。

「…？」

ちょっと顔が驚いている。

「藤堂君のすぐ横、ドキドキするけど、安心するの」

「え？」

「藤堂君と一緒にいて、楽しくないわけないよ。隣りにいられるだけで、本当に私、ドキドキしているし、嬉しいから」

かなり、すごいことを自分でも言ってるんだろうなって思った。でも、このくらい言わないときっと、わかってくれないよね？

「え？」

藤堂君がまた、驚いている。

「えっと。あれだよね？きっと聖先輩たちは、私たちよりも付き合いが長い分、２人の距離も縮まってるんだよね…」

「あ、ああ。もしかして、それを羨ましがってた？」

「い、いいんだ。本当に。きっと私と藤堂君は、ちょっと二人の間に隙間があるくらいで、今はちょうどいいんだよね？」

「……」

藤堂君が私を見て、すぐに視線を下げた。そしてコホンと咳ばらいをした。

「あんまり近づくのも、結城さん、変に思うかもなって、そんなふうには思っていたけど」

「え？」

「それに、俺もまだ緊張してるからさ」

え？

「……」

藤堂君、めちゃくちゃ真っ赤だ。もしや、すご～～く照れてる？

藤堂君はまた咳ばらいをした。そして、ちらっと私を見ると、そのあと私の手に視線を移した。

「手、つなぐ？」

わ！藤堂君から言ってきてくれるんなんて！ドキドキドキドキ！

「う、うん」

私はコクンとうなづいた。

そして、藤堂君は怪我をしていないほうの手を、私に差し出した。

私はその手にドキドキしながら、私の手をそわせてみた。

ひゃ～～。藤堂君の手だ。あったかい。

か～～～～～～。私の顔が熱い。藤堂君も真っ赤だ。そしてそっぽを向いた。だけど、耳が赤いのがわかる。

それから藤堂君は、私の手を取って歩き出した。ちょっと先を歩いているから、またちょっと藤堂君との距離が空いた。でも、しっかりと手はつないでいる。

わ～～～。藤堂君と手をつないで、歩いちゃったよ～～～～～～。嬉しすぎる！

って、この前、腕にしがみついたくせに、今さら何言ってるんだって、自分で突っ込みを入れた。だけど、あの時は嬉しいよりも、怖さが優先になっていて、違うドキドキでいっぱいだったんだもん。

だけど、今日は違う。藤堂君のぬくもりを、手からじかに感じている。あったかい。でも、藤堂君の手はちょっとごつごつしている感じだ。ああ、もしかして、弓道をしているせいかな。マメみたいな固いものが掌にある。

だけど、そんな固いまめまで、なんだかドキドキしてしまう。

ちょっと前を歩いている藤堂君は、まったく私を見なかった。だけど、すごく照れているのが、後ろ姿でもわかった。

やばいな～～～。私。そんな藤堂君がものすごく好きって、思ってるよ。

もう、このまんま地球の裏側まで一緒に歩いて行きたいくらいだ。

ううん。地球を一周して、もう一回江の島の浜辺に戻ってきてもいいくらいだ。

いや、こうなったら、何周してもいいかも…。グルグルずうっと、ずうっと。

日が傾き、私と藤堂君はカフェに入ってお茶をした。海が見えるカフェで、私たちはまた海を眺めた。

「結城さん」

「え？」

「…また、江の島に来る？」

「え？」

「あ、そっか。今度は鎌倉だったっけ」

「…」

藤堂君はそう言ってから、アイスコーヒーを飲んだ。

「藤堂君が江の島のほうがいいなら、江の島に来るよ」

「ううん。いいんだ。鎌倉に行こう。そのあと、また江の島に来て…」

「うん」

わあ。そうだよね。これからも、何回でもこうやって、デートできるんだもんね。だって、私たちは付き合ってるんだもん。

花火大会だって、あ、そっか。人ごみが嫌いなのか。

じゃあ、ただ、今日みたいに浜辺を散歩するだけでもいい。

あ、映画とかも観に行ったりして。それから、買い物や、それから、それから？

「テスト勉強もしないとね？」

藤堂君がぽつりと言った。

「うん」

「放課後にする？来週の火曜日から部活もないし」

「うん」

「結城さんは何が得意？」

「科目？国語かな」

「そうなんだ」

「藤堂君は？数学？」

「うん。理数系なら大丈夫だよ」

「よかった。私数学が駄目で…。あ、でも、英語も得意でしょ？読むの上手だよね」

「うん。小学校3年間、向こう行ってたし」

「向こう？」

「アメリカ。父さんの仕事の都合でさ」

「え？藤堂君って、帰国子女？！」

「う、うん。あまり帰国子女って言い方、好きじゃないんだけどね」

どへ～～～。だから、あんなに英語が流ちょうなわけ。すごいなあ。

和男子なのに、アメリカにいたんだ。

「あ、じゃあ、その頃、女の子にもてて…」

「いないって。まあ、あっちでは女子とも話してたけど」

金髪のギャルと？
「日本人とはやっぱり、違う？」

「うん。ものをはっきり言うから、わかりやすいよね」
「…ものをはっきり言わない人は、苦手ってこと？」
「いや…。そんなことないよ。俺、きゃっきゃ騒がしい人とか、ずばって言う人、苦手だし」
そうなの？

「きっと、向こうでの生活してて、感じてたんだと思う」
「何を？」
「女の子は日本人が一番だって」
「え？」
「だから、結城さんがいいんだよ」

「私が？なんで？」
「日本人の女性って感じあるじゃん」
「な、ないよ」
「あるよ…」
藤堂君は私を見てそう言って、視線を下に向けた。

「花火大会、やっぱり行く？」
いきなり藤堂君がそう言ってきた。え？え？人ごみ嫌いなんじゃ…。
「結城さん、浴衣着てくる？」
「う、うん」
「じゃあ、やっぱり行こう」

え？浴衣着るから？！
「じゃあ、藤堂君も着て来て」

「何を？」
「浴衣」
「え？俺、持ってないよ」

「そうなの？でも、絶対に似合うと思う！」
「う、う～ん。それは親にも言われたことあるけど」
「そうなの？」
「わかった。ちょっと親に言ってみる。もしかしたら、祖母に頼んで作ってもらえるかもしれない」
「え？おばあちゃん？」

「うん。和裁とかしている人だから」
「ふ、ふうん」
藤堂家ってなんだか、すごい。海外に行ってたり、家族で旅行してテニスしたり。もしかしておぼっちゃん？

「お父さんって何をしている人？」
「うちの？何って、普通にサラリーマン」
「海外勤務だったの？」
「うん。支店があって、そこに3年ね」
「ふうん。じゃあ、お母さんは？」

「家で子供に英語教えてる。なんていうの？ホームティーチャーっていうやつ？」
「海外勤務だったから、お母さんまで英語ができるの？」
ちょっと驚き！
「いや、違うよ。結婚前にアメリカに留学してたんだって」
すごい。やっぱりすごい。

「父さんも留学してた。そこで出会ったらしい」

アメリカでの出会いなの？すごい～～。
「じゃあ、藤堂君もいつか、留学？」
「俺？いいや。興味ないけど」
「そうなの？」

「俺、弓道してから日本が好きになって。どっちかっていうと、日本の各地を回ってみたいかな」
「…そうなんだ」
和男子なんだね。根っこから。
「結城さんは？やっぱり美大とか受けるの？」
「ううん。受けないよ。ただ、デザインとか、そういうのはしてみたいかも」

「そっか。じゃ、そっち方面に進学するの？」
「うん。多分。藤堂君は？」
「…俺は、大学行くとは思うけど…。何がやりたいかはまだ、はっきりとしいない。できたら、大学行っても、弓道はしていたいかな」
「ふうん…」

あまり遠くは行かないで…。と言おうとした。でも、言葉にできなかった。高校卒業したら、別れたりするのかな。それとも、ずっと続くかな。
なんて思ってたら、高校卒業する前に、破局が来たりして。
うわ。考えると、恐ろしくなってきた。バクバク。心臓に悪い。
もう、考えるのやめよう。

「…」
藤堂君が黙り込んだ。でも、思い切り視線を感じる。ずっともしかして私を見てる？私は藤堂君を、ちらっと見た。藤堂君はすぐに窓の外に視線を移し、

「あ、綺麗だね。夕焼け」
と目を細めてそう言った。

「うん」
しばらく黙って、夕焼けを見ていた。そして日が落ちてきて、私たちは江の島の駅に向かった。
「じゃあね、また明日、学校で」
「うん。藤堂君、今日はありがとう。あと、いろいろとごちそうさま」

「…うん」
藤堂君は顔を赤くして、ちょっと下を向いた。あれ、なんだか、また照れているようだ。
「それじゃあ」
私は藤堂君にちょっと手をふって、それから改札を抜けた。藤堂君はただ、私を見ていた。

ホームに向かって歩き出した。でも、ちらっと改札口のほうを見た。するとまだ、藤堂君がこっちを見ていた。私は藤堂君にもう一回、小さく手をふった。藤堂君も軽く手をふり、微笑んでくれた。

ああ、なんだか、別れるのは寂しいけど、手をふって見送ってくれるのは嬉しいかも。
止まっている電車に乗り込み、空いてる席に座った。そこからはもう、改札口は見えなかった。

電車が発車した。ガタン、ガタン。
私は自分の手を見た。今日、藤堂君と手をつないだ手だ。思わず、顔がにやけそうになり、慌てて、下を向き寝ているふりをした。

帰ったら、日記でも書こうかな。可愛いまだ何も書いていないノートが一冊あったっけ。

そして、今日は藤堂君と初めて手をつないだ記念日って、そう記しておこう。

第３９話　噂

翌朝、昨日なかなか寝れなかったにもかかわらず、早くに目が覚めた。
私は昨日の藤堂君とのデートを思い出し、携帯を取って開けてみた。昨日の夜、初めて藤堂君のほうからメールをくれた。それを読み返した。

＞今日は楽しかった。ありがとう。
メールが来たとき、思わず飛び上がって喜んじゃったっけ。
＞私も楽しかった。ありがとう。
そう返信すると、しばらくして、
＞本当に楽しかった？
というメールが来た。

え？なんで、こんなメール？と疑問に思ったが、すぐに、
＞本当に楽しかったし、嬉しかった。
と返信を送った。藤堂君からは、
＞良かった。じゃあ、また明日ね。おやすみ。
という返事。

もしかして、私が本当に楽しんでいたか、気になっていたのかなあ。なんて思いながら、ずっと藤堂君のことを思い浮かべて寝れなくなってたんだよね。

早くに目が覚めたので、早くに家を出てみた。早い時間だと電車もすいていて、助かってしまう。
教室に行っても、まだほんの２～３人しか来ていない。ちょっと暇になったので、私は美術室に行ってみた。

柏木君、来てるのかな。あ、中から絵の具の匂いがした。来てるのかもしれない。

ドアからちょこっと、美術室の中を見てみた。柏木君がキャンパスに向かって、すごく真剣な顔をしているのが見えた。

本当に真剣だ。絵に向っている時の柏木君は、本当にいつもの柏木君とがらりと変わってしまう。

ガタン。あ、ドアが音を立ててしまった。

「あれ?結城さん?絵を描きにきたの?」

「ううん。なんとなく早くに来たから寄ってみた」

「ああ、俺に会いに来たのか」

「ち、違うよ」

そう言いつつも、あれ?もしかして柏木君に会いに来たのかなあと、自分の心の中を私は見てみた。確かに、あの絵を見てからというもの、柏木君のことは気になっている。

「こっちに来たら?」

柏木君に言われ中に入り、柏木君の絵を見に行った。

「すごいね」

「俺の絵?」

「うん」

「そう?」

柏木君はまた、しれっとした顔をして椅子から立ち上がると、窓際に行き窓のさんに置いてあった缶コーヒーを飲んだ。

「結城さんはもう、朝、絵を描きに来ないの?」

「うん」

「俺がいるから?」

「そういうわけじゃないけど…」
「くす」

柏木君が私を見て、何やら含み笑いをしている。
「何？」
「いや、結城さんってさ、結局俺のこと気にしてるんだなって思ってさ」
「え？」
「構わないって言っておきながら、こうやって会いに来てるし」

ぐ…。それ、何も言い返せない。
「そういえば、俺、面白い話を聞いたんだ」
「え？」
「藤堂の話。聞きたい？」
何？どうせまた、私をからかうようなことなんだろうな。

私が黙って柏木君を見ていると、柏木君はまた含み笑いをして、
「あいつ、すげえ好きな奴がいるよ」
と突然言い出した。
「え？」
「俺と柏木が、結城さんを取り合ったっていう噂があるの知ってる？」

「…うん。誰が言い出したかは知らないけど」
「で、その噂を聞いたクラスのやつが、ご丁寧に教えてくれたんだ。藤堂は1年の時、好きな子からふられて、ものすごく落ち込んで大変だったって」
「え？」

「そいつ、藤堂と1年の時、同じクラスだったんだって。相手が誰

だかは知らないけど、どうやら髪が長くてちょっと結城さんに似てる人だってことだけは、遠目で見て知っているらしい」

私に藤堂君が告白してるところを見てたの？

「1年の時、藤堂と同じクラスだった奴はほとんど知ってるってさ。まじで、藤堂、めちゃくちゃ落ち込んでたらしいからさ」

「え？」

「でね、そいつが言うには、結城さんはその子と似てるから、だから藤堂も付き合おうって気になったんじゃないかってさ。そんなだから、長続きはしないだろうし、俺が結城さんをあきらめる必要もないってそう教えてくれたわけ」

な、何それ～～。なんなの、それ～～～。

「だから、あきらめるのはやめにする」

「え？！」

「なんてね。そいつに言われたからじゃないけど。だってさ、結城さん、俺のこと気にかけてるじゃん。それって、俺に気があるからでしょ？」

「違うよ！」

「あ、ムキになった」

くす。柏木君はまた、こっちを見ながら嫌な感じで笑っている。本当にこの人、絵を描いている時とまったく変わっちゃうんだよね。どっちが本当の柏木君なの？

「私はただ…」

柏木君の絵をもう一度見た。

「この絵を見て、苦しくなって」

そう言うと、柏木君は私の真横に並び、

「俺の苦しみがわかるって、そう言いたいわけ？」

と、クールな声で聞いてきた。

「そういうわけじゃなくって、ただ」

「じゃ、何？」

柏木君が私を見た。その目はいつもの、冗談めいた目じゃなかった。もっと真剣で、もっと怖い…。

「あ…。私、もう教室に戻る」

「待てよ」

柏木君が腕を掴んできた。この前と同じパターンだな。今日は藤堂君は、いくらなんでも現れないと思うけど…。

「なに？」

私は腕を掴まれたまま、柏木君に聞き返した。

「あんたさ、本気で藤堂のことが好きなわけ？」

「え？」

「違うだろ」

「なんで？なんでそんなこと言うの？」

「だって、さっきの話…。全然気にしてないみたいじゃないか」

「？」

「藤堂の好きな子のこと、気にならない？」

ああ、それ。だって、それって、私だし。そりゃ、そんなに落ち込んでいたっていうのは知らなかったけど…。

「藤堂は結城さんに、その子の面影だけを見ているとしたら、結城さん、きついんじゃないの？そのうち、藤堂はそのことに気が付いて、結城さんから離れていくかもよ？」

「何が言いたいの？」

「そうなる前に、別れたら？ってこと」

「…」
何よ、それ。
「ま、いいけどさ。傷心の時に俺にすがってきても」
「はあ？」
「その頃、俺がまだ結城さんに興味があるなら、俺の胸も貸してあげるけどさ」
「な、何それ。そんなことにはならないから、おあいにく様」
「…そうかな。あ、なんなら今すぐに、俺の胸に抱かれちゃってもいいけど？」
そう言うと、柏木君は私を自分の腕に引き寄せた。
「ちょ、冗談やめてよ」
私は柏木君の腕を払いのけた。
「ははは…」
なんで笑ってるの？ああ、なんだか本当にこの人って、むかつく。
「やっぱ、結城さん、面白い」
「なんで面白がってるのよ」
「俺さ、藤堂と付き合ったんだから、とっとと結城さんのことあきらめようと思ったんだ。でも、他の奴のものになったらもっと、欲しくなっちゃった」
「え？」
「奪ってみるってのも、面白そうだよね？」
むっか～～～！！！！
「柏木君って、なんでいつもそうやって、本心を隠すの？なんでいつも冗談にしちゃうの？」
「え？」
「絵を描いている時には、あんなに真剣なのに！」

「ああ、絵を描いてる俺に、惚れたのか」
「違うわよ！」
私は、頭に来てそのままズカズカと美術室を出た。
なんなんだ。あの人。どうしていつも、私をからかうことばかり言って来るんだろう。
だったら私も相手にしないで、本当にほっておけばいいのに、なんで会いに行っちゃったんだろう。

教室に戻ると、まだ藤堂君は来ていなかった。
「おはよう、早かったんだね、穂乃香」
麻衣が声をかけてきた。
「おはよう」

「昨日のデートはどうだった？ミニのスカート履いて行ったの？」
「履かないよ。あのスパッツ履いて行ったもん」
「ああ、生足で？」
「…う」
私は麻衣に、ジュースをこぼして結局生足を見せる羽目になったことを話して聞かせた。

「あははは。司っち、穂乃香のこと見れなくなったんだ。可愛い～～」
麻衣が思い切り笑った。そこに沼田君と美枝ぽんもやってきて、
「何？どうした？」
と話に加わった。麻衣が早速、私の生足事件を2人にばらしてくれた。

「へ～～。やるじゃん、穂乃ぴょん。生足を披露するなんて」
美枝ぽんが、なぜか私を褒めた。いや、披露したかったわけじゃ

ないんだってば。沼田君はというと、黙って聞いているだけだった。
あ、これって、ガールズトーク満開で、沼田君が聞くような話じゃなかったかな。

「そういえば、沼っちと美枝ぽん、もしかして一緒に登校してきた？」
麻衣が突然そう聞いた。
「うん。駅で待ち合わせして。ね？沼っち」
え？そうなの？わ～～。そうか。そんなことも恋人ならしてもいいよね？！

「なんで穂乃ぴょんは、藤堂君と一緒に来ないの？」
私が藤堂君との朝の登校の妄想をしていると、美枝ぽんが聞いてきた。
「え？それは、今の今まで、朝一緒に来るというアイデアが思いつかなかっただけで…」
私はとっさにそう言ったが、でも、待てよ。それって、藤堂君は嫌がったりしないのかな、といきなり不安にもなった。

「おはよう」
藤堂君が来た。席にカバンを置いた途端、すごい大あくびをした。
「あれ？寝不足？」
沼田君が聞いた。
「うん。なんか寝れなかった」
え？そうなの？なんで？

「ああ、もしや穂乃香の生足を思い出してて、寝れなくなったとか」
麻衣が突然、そんなとんでもないことを藤堂君に言った。
「え？！なんでそれ！？」
藤堂君が真っ赤になって慌てたが、麻衣と美枝ぽんがにやにやし

たのを見て、すぐに顔をいつもの無表情に戻した。そして私のほうを向くと、
「ばらした？」
と口だけ動かし聞いてきた。

「ごめん」
私も口だけ動かして、藤堂君に謝った。
「ま、いいじゃん、いいじゃん。そんなこともあるよな」
沼田君がそう言って、藤堂君の肩をぽんとたたいた。なんなんだ。そんなこともあるっていうのは…。

「そうだ。藤堂君。なんで朝、穂乃ぴょんと別々に登校しているの？」
美枝ぽんがこれまた、いきなりそんな質問を藤堂君に投げかけた。
「え？別々にって、え？」
藤堂君がいきなりの質問に、驚いている。

「付き合っているんだから、一緒に来てもいいじゃん」
「でも、電車逆方面だし」
「私と沼っちもそうだよ。でも、ちゃんと駅で待ち合わせをして来てるんだよ？」
「そうなんだ」
藤堂君はそうぽつりと言うと、ちらっと私を見た。

「あ、ああ。でもな」
藤堂君はどうやら、私の反応を見ているようだ。
「穂乃ぴょんだって、一緒に来たいよね？」
うん。と思い切り首を縦に振りたい。でも、藤堂君は？気になって、藤堂君の反応を見た。

「でもなあ。時間帯も違うしなあ」
え？もしかして、一緒に藤堂君は来たくないの？あまり乗り気じゃない藤堂君を見て、私は落ち込んでしまった。

ああ、結局私は、片思いをしていた時と変わらない。藤堂君の顔を見て、一喜一憂している。
席に着き、それからも藤堂君のほうを見ていた。藤堂君は麻衣に後ろからつつかれ、何かを話している。なんだろう、気になる。

「ねえ、結城さん」
突然隣りから、沢村君が声をかけてきた。
「え？」
何？突然でびっくりしていると、
「藤堂の噂、聞いたことある？」
とすごく声を潜め、沢村君がそう言った。

「う、噂って？」
何？柏木君とのこと？
「1年の時、ふられたって話は聞いたことあるよね」
「え？うん」
だって、私がその張本人だし。

「じゃあさ、その子のことをまだ、思い続けてるって話は？」
え？
「聞いたことある？」
「……」
聞いたことあるも何も、えっと、本人から直で聞いてますけど？
なんてとても、言えないしなあ。困って固まっていると、
「知らなかったんだ。やっぱりね。そりゃ、ショックだよね」
と沢村君が言ってきた。

待てよ。そんな噂が流れているってことだよね？それって出どころは？相手は誰かっていうのは、みんなに知られてないの？それに、どうして藤堂君がいまだにその子を好きだって、知ってるわけ？

「1年の子から聞いたんだよね。藤堂先輩は好きな子がいて、一回ふられたにもかかわらず、思い続けていたって。それも本気で思い続けていたから、私もあきらめたとかなんとか、そんなことを言ってた女子がいたんだってさ」

まさか、野坂さんが言ってたとか？

「藤堂と中学同じだった子が言っていたらしいから、かなり信頼ある情報だと思うよ？」

「…」

やっぱり、野坂さんだ～～～。

バクバク。なんでそんな噂が、たちどころにして沢村君の耳に入るようなことになってるわけ？そういえば、柏木君もそんなようなこと言ってたっけ。

でも、その相手っていうのが誰なんだかは、なんでだかシークレットのままだよね？！

第４０話　縮まる距離？

昼、隣でお弁当を食べていた藤堂君が、ぼそっと小声で私に聞いてきた。
「沢村と、なんか話してたけど…なに？」
あ、気が付いてた？
「えっと…」
どうしよう。言ってもいいのかな。

「そういえば、仲よさそうに近づいて小声で話してたよね？」
沼田君にまでそう言われた。
「仲良くじゃないよ。ただ、あっちが小声で内緒話するみたいに話していただけで」
「内緒話？！」
藤堂君は、顔を引きつらせた。

「あ、違う。違うの。えっと…」
そこにうちのクラスの女子が入ってきた。
「暑い～～。ねえ、アイス食べようよ」
すでにお弁当は食べ終わったのか、そう言いながら食堂に入ってきてアイスを買うと、私たちのいるテーブルの斜め後ろのテーブルに座り、あれこれ大きな声で話し出した。

「ねえ、あの噂知ってる？」
「何？」
「藤堂君の噂」
「ああ、知ってる～～。ちょっと驚きだよね？恋に縁のなさそうな顔をしているのにね」
どうやら私たちがここにいるのに、気が付いてないらしい。そり

ゃそうか。知っていたらそんな話を大声でしないよね。

私たちはその会話を耳にして、みんな黙り込んだ。当の本人も、何の噂だって顔で気にしているようだ。

「それにしてもさあ、結城さん、藤堂君のどこがいいんだろうね」

え?!

「私だったら、沢村君のほうが付き合うならいいかな。そりゃ、藤堂君、顔はイケてるけど、付き合うとなったら別だよね」

ええ?

美枝ぽん、麻衣、沼田君がいっせいに藤堂君を見た。私も横目でちらっと見たが、藤堂君は怖い顔をしていた。

「沢村君のほうが話しやすいし、いろいろと遊びも知っていそうだしね」

「それに、あんな噂聞いちゃったら、私、付き合っているのも嫌かも」

「うん。この噂、結城さんって知ってるの?」

「これだけ噂になってるんだから、耳に入るのも時間の問題じゃない?」

「そうしたらどうするかな」

「別れるいい口実ができたってことだよ」

「ああ、そっか~~」

あははは って、他人事だと思い、勝手にその子たちは笑っている。

「噂?」

藤堂君が引きつった。美枝ぽんや麻衣、沼田君も暗い顔になり、私と藤堂君の顔を交互に見ている。

「噂、知ってる?美枝ぽん」

麻衣が聞いた。

「ううん。麻衣は？」

「知らない。沼っちは？そういうの一番早く情報入りそうだよね」

「俺？いや。柏木と取り合ったって噂じゃないよな？」

「そんなので、付き合うのやめたりしないでしょ」

「だよな。司っち、思い当たることないの？」

藤堂君は無言で、首を横に振った。それからじっと一点を見つめ、暗くなっている。きっとどんな噂なんだって、考え込んでいるんだろうな。

「私、知ってる」

ほえ？！なんで私の口から、そんな言葉が出ちゃったんだ。でも、藤堂君があまりにも暗く、まっさおになっているものだから。

「え？」

みんながいっせいに私を見た。藤堂君も顔を引きつらせ、私を見た。

「多分、出どころは野坂さんだと思う。あ、噂を流したかったわけじゃなくって、きっと話を聞いた子が、誰かに話しちゃったんだろうな」

「え？」

藤堂君はもっと、顔を引きつらせた。

「どんな噂が、野坂さんから流れちゃうの？」

麻衣が聞いた。

「えっと、私はさっき、沢村君から聞いたんだけど」

「え？それをこそこそと沢村君が話してきたわけ？」

「うん」

「あいつ、せこい。なんの噂だか知らないけど、そうやって、別れ

させようとしたってことでしょ？」
麻衣が眉をしかめてそう言った。

「それ聞いて、穂乃ぴょん、平気だった？傷つかなかった？」
美枝ぽんが心配そうに聞いてきた。沼田君も心配しているって表情に変わり、藤堂君までが、目を細め、私のことを気にかけ始めた。

「あ、全然平気。私が傷つくことでもなんでもなかったし」
「え？」
私がそう言うと、みんながいっせいに目を丸くした。
「どういうこと？傷つくことじゃなかったら、なんであんな噂になっているの？ちょっと聞かせてもらってもいい？」
麻衣が聞いてきた。

「う、うん。でも、いいのかな？」
私は藤堂君をちらっと見た。
「…俺に遠慮してる？いいよ。言ってくれて。俺もどんな噂が流れているか知りたいし」
藤堂君は真面目な顔つきでそう言った。

いいのかな。こんな話をみんなにしても。かなり私も恥ずかしいけど、もっと藤堂君は恥ずかしいよね？
「えっとね」
みんながゴクンとつばを飲み込む音がした。

「と、藤堂君は1年の時に、ふられてるって」
「え？それ、穂乃ぴょんにでしょ？」
沼田君がそう言った。
「沢村君は誰にふられたか、知らないみたい」
「そうなんだ～」

美枝ぽんが相槌を打った。

「それで？」

麻衣が私をせかした。藤堂君は、眉をしかめて聞いている。

「それで…、藤堂君はね、ずっとその子のことを好きでいるみたいだって…、そういう噂だった」

「は～～～？！！」

あ、一気にみんなが呆れたって顔をしてしまった。

藤堂君は、ああ、やっぱり。真っ赤になって下を向いている。

「何それ。そりゃ、穂乃香、傷つかないわ」

「逆に嬉しい噂だよな？」

麻衣と沼田君がそう言った。

「でも、あれ？相手が穂乃ぴょんだってことだけは、みんなにばれてないってことか」

「だよな。じゃなきゃ、バカみたい、勝手に仲良くやってたら？って話だもんなあ」

沼田君は美枝ぽんにそう言うと、食べ残していたハンバーグのかけらをばくっと口に入れた。どうやら噂話が気になって、最後の一口を食べられなかったようだ。

麻衣も拍子抜けをしたって顔をして水を飲み、美枝ぽんなんて、

「私、ジュース買ってこようっと」

と言って、売店に行ってしまった。

「それ、野坂さんが言ったんだ」

藤堂君がぽつりとそう言った。

「沢村君が言うには、ずっと好きでいるみたいだから、私はあきらめたっていうようなことを、誰かに野坂さんが言っていたって」

「ああ、そういうことか」

藤堂君はまだ、耳が赤い。

「なんなんだ。でも、なんでそんな噂が流れてるんだ」

藤堂君が下を向き、ぽつりとそう言うと、

「そんだけ、もしかして穂乃ぴょんファンが多いとか？」

と沼田君が言った。

「え？」

「じゃなきゃ、そんな噂流れる？結城さんが藤堂と付き合いだした。でも、どうやら藤堂には他に好きな子がいるみたいだ。だったら、俺らにもまだチャンスがある。みたいな？」

ちょ、ちょっと。また沼田君は変なことを言いだしている！

「そ、そういうことか」

ちょっと？なんで藤堂君まで、納得しているの？

「その逆もあり得るよね」

麻衣が話に加わった。

「藤堂君を影から見ている子が、どうやら、藤堂君は結城さんと付き合っているけど、他にも好きな子がいるようだって、そんな噂をしだしてるとか？」

「ただ単に暇なだけじゃない～～？」

ジュースを買ってきた美枝ぽんが、そう言いながら席に着いた。

ああ、そうだよ。きっとそういうことだよ。

「そうかなあ。俺、何気にいろんなやつから耳にするんだけどなあ」

沼田君がぼそって言った。

「何を？」

藤堂君が気になっているのか、かなり顔を沼田君に近づけ聞き返

した。
「う〜〜ん。穂乃ぴょんと俺が仲いいとか、付き合っているのかとか、いっときそんな噂が流れた時があって、そんときに何人もの男子から、まじで付き合ってるの？って聞かれたんだよね」
「え？」
「付き合ってないって言ったら、じゃあまだ結城さん、フリーだよねって安心したやつがこのクラスにも数名…」
「え？」
「他のクラスにも数名いた」
「……」
藤堂君は顔を引きつらせ、
「そういうの、初めて聞いた。なんでお前、教えてくれなかったわけ？」
と沼田君をちょっと睨んだ。
「だって、司っちが穂乃ぴょんを好きだなんて、俺、知らなかったしさ」
沼田君のほうも顔を引きつらせ、そう答えた。藤堂君の睨んだ顔が怖かったのかな。
「よかったじゃん。司っち。他の誰かに穂乃香を取られないで」
麻衣がそんなことを藤堂君に言うと、
「……まじでそうだよな」
と藤堂君は独り言のようにそうつぶやいた。
私はさっきから、自分事の話じゃなかった。まったく他人の話を聞いているかのようだ。それに、私を誰が好きだとしても、まったく興味もないって感じだし、私はただただ、隣にいる藤堂君の表情が気になり、それを見ていた。

ふられて、すごく落ち込んでいたって、柏木君が言ってたな。1年の同じクラスだった奴は、みんな知っているって言ってたけど、そんなに藤堂君は落ち込んじゃったんだろうか。

それに、ずっと私を好きだったって。

ああ、相手の子が誰だかを知らず、噂になってるとはいえ、その噂は私を落ち込ませるどころか、喜ばせる噂になっていることは、間違いがない。そして、その噂は私たちを別れさせるどころか、ますます結びつけちゃう噂になっちゃったんだ。

藤堂君は私がじっと見ているのに気が付いたのか、私をちらっと見ると、一気に顔を赤くした。あれ？なんで照れたの？

わかんないけど、私もそんな藤堂君を見て、思わず顔が熱くなってしまった。ああ、またきっと、2人で照れあってるんだなあ。私たち…。

その日、ホームルームが終わり、私は掃除当番なので教室に残っていると、

「結城さん、あのさあ」

とまた別の男子が声をかけてきた。藤堂君はすでに、弓道部の道場に行ってしまっていなかった。

「な、なに？」

つい、沼田君や藤堂君以外の男子だと、身構えてしまう。

「結城さんって、藤堂に怪我させた責任から付き合いだしたって、本当？」

は？私が目を点にしていると、もう一人男子がやってきた。

「いや、俺は藤堂から脅されて付き合いだしたって聞いたけど？」

ちょっと待って。何よ、それ！

「違うよ。そんなことあるわけないじゃん」
と、その二人の間にずずずいって顔を突っ込んで、否定してくれたのは美枝ぽんと麻衣だ。
「まったく、どこでそんな噂が流れちゃってるわけ？」
麻衣が呆れている。

「言っとくけど、穂乃ぴょんはまじで、藤堂君に惚れ込んじゃってるから、他の誰が言い寄っても藤堂君と別れたりしないよ。とっとみんな、あきらめた方がいいよ」
み、美枝ぽん。それ、ありがたいような、恥ずかしいような…。

「でもさ、あいつのことを好きでも、結城さんが傷つくことになるんじゃねえの？だったら今のうちに別れたほうが、結城さんのためでもあるじゃん」
どこからか沢村君が現れてそう言ってきた。
「なんで、穂乃香が傷つくのよ？」

麻衣が沢村君の顔を睨みながらそう聞いた。
「噂知らないの？あいつ、1年の時にふられて…」
「知ってるわよ。それも噂どころか、ふった張本人も知ってるし」
麻衣が、沢村君の顔を睨みながらそう言った。ゲ。何を言い出すつもり？！

「え？知ってるんだ。でも、藤堂はその子のことをあきらめてもいないし、まだ思ってるんだぜ？なのに結城さんと付き合いだして」
「そう。司っちはあきらめてもいなきゃ、忘れてもいなかった。ずうっと思い続けてようやく、その思いが届いたってわけ。で、ハッピーエンド。だから、穂乃香は、傷ついたりしないわけ。わかる？言ってる意味」

麻衣が仁王立ちになって、沢村君にそう言った。隣りで美枝ぽんが、うんうんとうなづいている。
「？」
沢村君は首をひねった。麻衣が言っている意味がわからないらしい。
「え？じゃあ何？ふったのって、結城さん？」
その横にいた男子が先に気が付き、驚いた顔で私に聞いてきた。

私は黙ってうなづいた。
「え～～～？！」
沢村君の目が丸くなり、めちゃくちゃ驚いている。なんでそんなに驚くことなの？
「…一回ふったのに、何で付き合うことになってるわけ？」
「やっぱ、脅されたとか」

「それより、怪我させたって、責任感じたんだろう？」
沢村君の周りにいる男子が、そう私に言ってきた。なんでそうなるの？話が振り出しに戻っているし。
「か～～～！わからないかな、これだけ言っても！」
麻衣が怒りだした。

「いいよ、麻衣。それよりも私、そろそろ部活に行ってくる」
私はその場にいた男子をほっておき、教室を出て美術室に向かった。
「私ももう帰るから、途中まで一緒に行く」
麻衣がカバンを持って、私の横に並んだ。

「それにしても、なんなんだろうね。責任とか、脅したとかって」
「うん。本当にまいっちゃう。そんなことわるわけないのに」

私がそう言うと麻衣が、本当だよねえって言ってため息をついた。
「なんでかな。美枝ぽんと沼田君は、そんなに付き合っても噂にならないのに」
「だから穂乃香の隠れファンがそれだけいたってことでしょ？」

「それ、絶対にないと思うよ」
「…ああ、そういえばさ、美枝ぽんと沼っちは仲いいじゃない。一緒に登校してくるし、見ててもべったりしているしさ。まあ、たいていが美枝ぽんのほうから沼っちに引っ付いてるって感じだけど」
「うん」
「あの仲の良さなら、付き合ってるのも一目瞭然だし、誰も何も言わないし、うわさも流れないんじゃないの？」

「じゃあ、私と藤堂君は」
「付き合っているように見えないもん。そりゃ、本当に好きで付き合ってるのか？どうなんだよって、気になっちゃうかもしれないよねえ」
「…」
ってことは？

「だからさ、もっと司っちと仲良くなったら？穂乃香のほうから、腕組んでみたり、引っ付いてみたりしたらいいんじゃないの？」
やっぱり、そうきたか。
「無理…」
「なんで？好きなんでしょ？」

「好きだからこそ、無理。とてもじゃないけど、恥ずかしくって」
「なんで？付き合ってるんでしょ？」
「だけど、無理なものは無理なんだってば」
手をつなぐのだって、やっとこだったんだよ？藤堂君だってすご

くシャイだし、これ以上の接近はありえないよ。

「だけどさあ、これからはわかんないよ」
麻衣がにやって笑って、私を見た。
「え？何が？」
「司っち、きっと慌てたと思う」

「？何を？」
「穂乃香のファンが多いから」
「へ？」
「他の奴に取られないよう、もっと積極的になってくるんじゃないのかな」
「な、何を？」
積極的にってどういうこと？

「だから～～。もっと、穂乃香に迫ってくるようになるってことよ」
せ、ま、る～～～～？！
「え？ええ？！」
私は、驚きのあまり、頭が一瞬真っ白になった。

迫る？迫る？迫るって、何？
あまりの驚きで、その場に佇んでいると、
「じゃ、私はバイトだからもう帰るよ～～。今日も、司っちと一緒に帰るんでしょ？ま、頑張ってね、穂、乃、香」
と麻衣は意味ありげな言い方をして、昇降口に行ってしまった。

え？

…え？

頭を真っ白にしたまま、美術室に行った。そして自分の絵の中の藤堂君を見て、私は麻衣の言葉を思い出した。

藤堂君が、迫る？

あ、ありえない。そんなこと絶対にありえないって。

絵の中の藤堂君を見ながら、私は思い切り麻衣の言葉を否定した。

でも…。でも、もし、そんなことになったとしたら？私はその時、どうしたらいいんだろう？

そんなことを考え出してしまって、私はなかなか絵を描くことができなくなっていた。

第４１話　藤堂君がいい！

時間は刻々と過ぎて行き、あっという間に5時になった。
「あ、あれ？」
ほとんど絵を描いていないというのに5時だ。部員が次々に片づけを始め出した。
「ねえ、結城さん」
クラスの違う、同じ学年の子が声をかけてきた。

「弓道部の藤堂君と付き合ってるって本当？」
「え？う、うん」
違うクラスの子まで知ってるのか。
「それって、やっぱり見学して好きになっちゃったの？」
ドキン。あ、この子そういえば、一緒に見学に行った子だ。

「それだけじゃなくて、私、藤堂君と同じクラスで…」
「ふうん。私は去年同じクラスだった。でも、一回も話したことなかったんだ。なんで、結城さんとは付き合うことになったんだろう」
同じクラス？じゃあ、藤堂君が落ち込んでたのも知ってたのかな。

「ほら、あの子に似てるんだよ」
もう一人の子が、話に加わってきた。あ、この子も見学に行った子だ。
「藤堂君がふられたっていう子。確か髪が長くて黒髪で」
「ああ。どこの誰だかしんないけど、藤堂君がめちゃくちゃ落ち込んじゃった…」
「そうそう。果てしなくへこんじゃった…」
そうなの？

「ひどいふられ方をされたんだっけ？」
え？
「それで女性不信になったんだっけ？」
ええ？！
「そんなひどい女に似ている人と、付き合うことにしたの？」
えええ？

「藤堂君って、いまだにその女のこと忘れてないんじゃない？」
「わあ、結城さんも大変だ」
「……」
２人は好きなことを好きなだけ言って、美術室を出て行った。

藤堂君をふった女は最悪で、その女に惚れ込み過ぎて、藤堂君は食欲もなくなりかなりやせたとか。
弓道部に行ってもまともに練習もできず、勉強にも身が入らず、藤堂君の１年の時の後半は、死んでるような顔で学校にも来ていたとか。

それ、勝手にそう言ってるだけだよね？だって、私、たまに見かけたけど、友達と笑ってたもん。
そんなに、傷ついたわけじゃないよね？女性不信にもなってないよね？それに、それに、そんなにひどいふり方、私していないよね？

どよよん。暗くなっているとそこに、藤堂君がやってきた。
「まだ描いてたの？」
「え？ううん。今、片づけてた」
「じゃ、もうすぐ帰れる？」
「う、うん」
私は必死で笑顔を作り、片づけをした。

藤堂君は窓のさんによっかかって、私の絵を見ている。
「…その絵の俺ってさ」
「え？」
「なんか、美化していない？」
「ううん。私から見たら藤堂君ってこうだよ？」

いや、実をいうと、もっともっと本人のほうが何倍も素敵。なんて口に出して言えないでしょう。
「…明日からさ、朝、駅で待ち合わせする？」
藤堂君が突然そんなことを言いだした。
「え？どうして？」
「どうしてって…」

あ、今の質問、変だよね。私は慌てて、
「うん。待ち合わせする」
とそう答えた。
「結城さんの時間に合わせるよ。いつも何時ころに着くの？」
「駅に？そうだな…」

藤堂君に時間を教え、改札で待ち合わせをすることになった。
それにしても、なんでいきなり朝、一緒に来ようとしてくれたんだろうか。

「中間終わったらさ、どこか行こうか？」
「え？鎌倉に行くんでしょ？」
「ああ、そっか。じゃ、鎌倉のどこか行きたいところある？」
「…駅のあたりをぶらぶらしたいかな」
「行きたいお店は？ああ、俺、どこかいいところあるか調べておくよ」
「え？」

「美味しいお店とかさ」

ど、どうしちゃったの？そんなことを積極的にする人じゃないと思ってた。

積極的…。ボワ！その言葉で、麻衣の言っていたことを思い出し、私の顔は熱くなった。

慌てて藤堂君から目線を外し、片づけを急いで終わらせた。

「今日はどこか寄ってく？」

藤堂君が聞いてきた。

「今日はいいよ。試験も近いんだし…」

「あ、そっか」

藤堂君と美術室を出た。ちょうど廊下を原先生が歩いてきて、

「お、結城、最後か？」

と聞いてきた。

「はい、最後です」

「そうか、じゃ、気を付けて帰れよ。ああ、藤堂も一緒に帰るのか」

「はい」

「いいね、若いもんは…」

原先生はそんなことをぽつりと言うと、藤堂君の背中をぽんとたたき、美術室の中へと入って行った。

「なんだ？」

藤堂君は何を原先生が言ったんだって、不思議そうな顔をした。

「きっと、原先生、知ってるんだ」

「何を？」

「私と藤堂君が付き合ってるのを」

「え？」

藤堂君はちょっと顔を赤らめた。
「そういえば、美術部員も知ってたよ。さっき、付き合ってるんでしょって聞かれちゃった」
「そうなの？」
「うん。藤堂君と1年の時、同じクラスだったって」
「女子？」
「うん」

「ふうん。あ、名前言われても俺、多分顔と一致しないから」
「そうなの？」
「うん」
1年も一緒のクラスにいて、名前と顔が一致しなかったんだ。まあ、私も、1年生の時、名前も覚えられなかった男子、いたもんな。

「それでね」
「うん」
ああ、どうしよう。聞いてもいいかな。私は藤堂君と昇降口に行き、靴を履きながら悩んでしまった。
「何？何か言われたの？」
藤堂君は靴を履くと、私に聞いてきた。

「あのね…。藤堂君がひどいふられ方をして、すごく落ち込んで、勉強も身に着かないほどだったって言ってたんだ」
「え？！」
藤堂君が目を丸くした。
「そ、そうだったの？」

ドキドキ。藤堂君、なんて言って来るかな。
「う、う～ん。そんなことはないと思うけど」
藤堂君はそう言うと、校舎を出て歩き出した。私の歩幅に合わせ、

ゆっくりと歩いてくれている。
日がだいぶ伸びてきて、まだ外は明るかった。

「まいったな。実は落ち込んでたし、ひきずってた。でも、そういうのはあまり、みんなに見せないようにしてたんだ。だけど、ばれてたってことかな」
「…」
そんなに落ち込んだの？
「だけど俺、もともとそんなにはしゃがないし、みんなとしゃべるほうでもないし、なのに、なんでそんなふうに言われちゃってるのかなあ」

あれ？そういえば、そうだよね。
「やっぱり、あれかなあ」
あれって？
「ちょっとね、体育でしくじって、怪我した時もあったんだ」
「え？」

「たいした怪我じゃないよ。突き指したり、打撲したりっていう程度だし。ただ、俺、運動神経いい方だから、周りが俺がへましたことで、びっくりしてたんだよね」
「…そうだったの？」

「それとあれかなあ」
あ、あれって、まだあるの？
「2学期の期末がさんざんだった。それを思い切り担任に、みんながいる前で言われちゃったんだ」
「そ、それ、私が原因で？」
「結城さんのせいじゃないよ。俺がただ、やる気をなくしただけだからさ」

「……」
それは、みんなに言われちゃうかもしれないな。
「あと、思い切り風邪をこじらせて、1週間学校も休んだっけ」
「え？」
「それもあるかなあ」
それで、やせちゃったとか、さっきの子言ってたのかな。

「俺さ、中学皆勤賞もらったし、風邪って、本当にひかないんだよね」
うそ。
「だからまあ、風邪を甘く見て、こじらせたんだろうけど…」
そうか。そんな元気な藤堂君が一週間も休んだら、そりゃみんな、ふられたせいだって思うかもしれないよね。

「…情けないね。こんな話して」
「ううん」
「実際、自分でも情けなかったよ。だから、年が明けてからは、極力考えないようにもしたし、忘れようって勉強も頑張ったし…。だから、成績がぐんとアップしちゃったんだけどさ。はは…」

ははって笑ってるけど、もう笑えることなの？ちら。藤堂君のことを見ると、
「まあ、今になっては、そんなこともあったっけって感じだよね？」
と涼やかな目をして言ってきた。
「え？」
「今はこうやって、結城さん、隣にいてくれるんだし」

「う、うん」
ドキン。藤堂君が嬉しそうにそう言うから、胸がときめいちゃっ

た。
「なんか変な噂、流れちゃってるけど」
「え？」
「あまり気にしないでくれていいから」
「ずっと思っていたっていう噂？」
「そう、それ」
「……」
気にしないでも何も、私には嬉しい噂なんだけど。
「ひどいふられ方もしてないし…」
「うん」
「今は、結城さんのことを思っても落ち込んでないし」
「…え？」
「前にふられたことで、確かに落ち込んだり沈んだりしたけど」
「う、うん」
「今はその分、めちゃくちゃ浮かれてるから、気にしないで」
「……」
そっか。私が藤堂君をふったことを気にしないでって言ってくれているのか。
「うん」
私はコクンとうなづいた。そして、藤堂君がかもしだす、あのいつもの優しいオーラを感じてあったかい気持ちになっていた。
はあ、やっぱり優しい。ときめきと安心と喜びと、いろんなものが交じり合って、すごく幸せを感じている。
「それで、結城さん。他にもどこか行きたいところある？」
「え？」
「鎌倉のほか…」

「？」
なんでかな。なんでそんなこと聞いてくるのかな。
「ディズニーランドとかは？」
「行きたいけど」
「けど？」

藤堂君が私の顔をじっと見た。
「藤堂君、部活で忙しいでしょ？いいよ。そんな無理しないでも」
「え？」
「試験終わったら、土日もほとんど部活でしょ？」
「う、うん、まあね」

「私も藤堂君が部活出る日には、学校に行くようにしてもいい？」
「美術部？」
「うん。うちの部変わってて、けっこう自主性に任せられてるんだけど」
「うん、いいけど」

「じゃ、じゃあ、もしお昼とか、部員と一緒に食べないなら、一緒に食べたり、一緒に帰ったりできるかな」
「ああ、うん。いいよ。あいつらもその辺はきっと、気を使って邪魔しないようにしてくれるだろうし」
「…」
そうなんだ。私を藤堂君も優先してくれるんだ。嬉しいかも。

「それだけでいいの？」
藤堂君はしばらく黙っていたけど、ぽつりと聞いてきた。
「え？」
「どっか、遊びに行きたいとかないの？」

「うん」

「…」

藤堂君は黙って私を見ている。

「だって、土日も学校に行けば会えるってことでしょ？それだけでも、私、嬉しいけどな」

「…そ、そうなんだ」

あ、藤堂君、赤くなった。

あ！もしかしてあれかな。今日、女子が沢村君と比べていたのを、気にしているのかな。

「あ、あのね？」

「え？」

「こうやって、藤堂君と一緒に登下校を歩いているだけでも、私にとっては十分すぎるほど、十分なの」

「え？」

藤堂君は目を丸くした。

「だから、その…。他の男子と比較しなくっても」

「なんだ、ばれてた？」

藤堂君はそう言うと、下を向いてコホンと咳払いをして、

「クラスの女子、言ってたじゃん。沢村のこと。俺、女の子と付き合ったこともないし、どうしたら結城さんが喜ぶかも、どこに行きたいかもまったくわかんなくってさ」

やっぱり。

「情けないね？ちょっと、あの話を聞いて、俺、焦ったっていうか」

「…」

「だけど結城さん。本当に行きたいところがあったり、俺にしてほしいことがあったら言ってくれていいよ？」

「え？」
「遠慮はしないでもいいから」
「うん」

と、藤堂君。優しすぎるよ～～～。
みんな知らないから、あんなことを言うんだ。なんで藤堂君と付き合うの？とか、付き合うなら沢村君のほうがいいとかって。
私は断じて、断然、何があっても、藤堂君がいい。
藤堂君の隣がいい。このあったかくって優しいオーラには、誰も勝てやしない。
そんなことを思いながら、私は今日も幸せをかみしめて、藤堂君との駅までの道を歩いていた。

第４２話　二人きりの教室

藤堂君はきっと気が付いていない。自分の優しさを。その優しさに私が、思い切りまいちゃっているっていうことも。

翌日からほとんどの部活が、試験前のために休みになった。美術部も弓道部も部活がないので、私と藤堂君は試験勉強を放課後、教室に残ってすることにした。

「私は今日と明日、バイトいれちゃったんだよね」

そう言って、麻衣はいそいそと帰って行った。

「私と沼っちは、沼っちの家で勉強するけど、２人も一緒にやる？」

美枝ぽんに聞かれた。

「いいよ、２人の邪魔しちゃ悪いし」

私がそう言うと、

「よかった。実は、本当に邪魔だったんだよね」

と美枝ぽんが言った。それを聞いていた沼田君は、横で真っ赤になっていた。

そういえば、沼田君の家、お母さん、看護師さんだっけ？お姉さんも働いているし、もしや誰もいないとか。だから、２人っきりだったりして？

わ～～～。

って、２人のことを考えてドキドキしていた私は、自分の身に何が起きているのかを、なかなか把握できないでいた。

「あれ？二人で残って勉強？」

「いいなあ。藤堂」

「いいから、ほら、帰ろうぜ」

そんなことを言いながら、クラスの男子が教室を出て行き、クラスの女子は藤堂君を怖がり、何も言わずに出て行った。

そうしてぽつんと、教室には藤堂君と私だけが残ったのだ。そのことに気が付いたのは、あまりにも教室が静かで、藤堂君が教科書をめくる音や、私がペンを走らせる音が、教室内で響いた時だ。

あ、私と藤堂君、2人きりになってる?

他の教室も静かだった。それにほとんどの部活がないせいか、グランドからも声が聞こえてこない。

し〜〜ん。静かだ。めちゃくちゃ静かだ。

ドキドキドキドキ。うわ。いきなり鼓動が鳴りだした。この音、藤堂君に聞かれちゃっていないよね?

藤堂君はさっきから、黙っている。私が問題を解いているから、それできっと、静かにしてくれてるんだ。

目の前に藤堂君の手がある。ちょっと節々がごつごつしていて、爪は大きくて、平べったい。

ドキン。ドキン。やっぱり、机を二つくっつけて、勉強したらよかった。一つの机に2人で向かうのって、こんなに距離が近くになっちゃうんだ。

藤堂君の顔も、こんなに近い。どうしよう。顔、絶対にあげられないかも。

「そこでつまづいてるの?」

「え?」

「悩んじゃってる?どの辺がわかんない?」

あ、ああ。私がずっと、一つの問題で止まっているからか。う、違うの。今、問題も解けないほど、ドキドキしちゃってただけなの。

なんて、言えないよね。言えないよ。うん。
「なんだか、この辺の計算が」
私はそう言ってごまかした。
「どれ？」
藤堂君は私のノートを自分のほうに向け、問題と照らし合わせてみている。

あ～～～。近い。近すぎる。
「ここはね…」
藤堂君が丁寧に説明を始めた。
「あ、そっか」
私はどうにか、その問題は解くことができた。

「と、藤堂君も、勉強して？私のばかり見てたら、自分の勉強できないでしょ？」
そう言うと、藤堂君は黙ってにこりと笑った。
「藤堂君のノート、広げられないよね？」
私は麻衣の席に座ってた。藤堂君は椅子を後ろに向け、私のほうを向いて座っている。

「大丈夫。俺、ノートは広げなくても。ちょっと教科書に目をとおしているだけだし」
いや、私が大丈夫じゃないんだってば…。
ああ、私ったら。離れすぎていると寂しいくせに、近すぎるとときめきすぎちゃって、離れていたほうがいいって思うなんて、なんて贅沢な悩みなんだ。

いや、待てよ。本心は近づいている方が嬉しいんじゃないの？本当は近くても平気になれるくらい、仲良くなりたいなんて思ってい

るくせに。
それにしてもいつも近くにあまり来ない藤堂君が、今日はやけに接近しているなあ。どうして？

迫ってくるかもよ…。という麻衣の言葉がいきなり頭に浮かんだ。うわ。違う。迫りたくて、近くにいるわけじゃないよ。違うよ。藤堂君はそんなことしない。
う～～。しないって言いきれる？言いきれるの？私～～～。

ああ、頭の中は今、まったく勉強モードじゃなくなっている。藤堂君と一緒に勉強をするっていうこと自体、無理があるのかなあ。
「次の問題も、悩んでる？」
藤堂君が聞いてきた。は！いけない。まったく勉強に集中していなかった。

「あ、あの…。数学あとにしてもいい？英語でもやるよ。私」
「うん。いいけど？」
私は英語の教科書を開いた。そして黙って、和訳を始めた。藤堂君は国語の教科書をだし、何やら黙って読んでいる。

「あのさ、結城さん」
ドキン。
「何？」
「腹、減らない？俺、購買でパンでも買ってこようか」
「う、うん」

「じゃ、ジュースも買って来るね」
「うん」
藤堂君はそう言うと、教室を出て行った。
「ほえ～～～～」

私は変なため息が出た。

ああ、緊張する。嬉しいのに緊張する。ときめいていて、まったく勉強なんてできない。いったい、どうしたらいいかな。

あ、そっか。藤堂君がいない今がチャンス。英語の和訳、頑張ってしちゃおう。そしてわからないところがあったら、あとで藤堂君に聞こう。

２０分以上が過ぎた。藤堂君がやっと戻ってきた。

ほ…。今度はまた別のため息だ。緊張するくせに、藤堂君がいないとやっぱり寂しいんだな、私は。

「結城さん、どのパンがいい？」

藤堂君はパンを４つも買ってきていた。これ、全部食べる気かな。

「私、選んじゃっていいの？」

「うん。好きなの選んで」

「じゃあ、これ」

私が一つパンを取ると、

「一つでいいの？」

と聞いてきた。

「うん、十分」

「そっか」

藤堂君は、パックのジュースも袋から出して、席に着いた。そして、いただきますと言って、パンを早速食べだした。

「食堂、あまり人いなかったな」

「みんな、もう帰っちゃったんだね」

「多分ね」

藤堂君はそう言うと、ジュースをゴクンと飲んだ。

「ただ、あいつがいた」

「あいつ？」
「柏木」
「声かけられた？」
「うん。何してんのってさ」
「え？」

「部活ないのに何してるんだって。そっちこそ何してるんだって聞いたら、部活だってさ。美術部ってあるの？」
「…ないよ。じゃあ多分、特別に美術室使わせてもらってるのかも」
「ふうん」

藤堂君はちょっと顔が不機嫌っぽい。
「それで？」
私が聞くと、
「…あいつ、俺が結城さんにふられたことは知らないんだな」
と藤堂君は眉をしかめた。

「…え？」
「1年の時にふられた相手のことを、まだ思ってんの？っていきなり聞かれて、俺、皮肉を言ってきたんだと思ったんだ。結城さんにふられたのを知っててさ」
「うん」

「それで、ああ、思ってるよってそう言ったら、あいつにやって笑って、それ、結城さんには教えたか？って聞いてきて」
「え？」
「なんでそんなこと聞くんだよって言ったら、俺がばらしておいてあげたって、柏木が言ってたけど…」

ギク。

「結城さん、まだあいつとかかわってんの？」
「あ、昨日の朝、たまたま美術室に行ったら、柏木君がいて」
「たまたま会ったの？」
「う、うん」
わ。今の変な言い回しになったよね。やばい。

「ふうん」
あ、藤堂君の顔、無表情だ。
「結城さんは、俺がふられた子をいまだに好きだって知っても、なんのリアクションもしなかった。お前って、本当は結城さんに好かれてないんじゃないかって、そんなことまで教えてくれたよ」
「…」
柏木のやつ。いったい藤堂君に何が言いたかったわけ？って、きっと藤堂君を困らせたり、落ち込ませたいだけだよね。

「…そ、それで？」
「別に、それだけ。俺はちゃんと結城さんの気持ちは、結城さんから聞いているからって言って、とっとと食堂から出てきた」
「そ、そう…」
バクバク。なんで私こんなに心臓がバクバクしてるの？藤堂君に柏木君と会ったことがばれて、なんでこんなに焦ってるんだろう。

別に浮気をしてるわけでもないし、藤堂君を裏切ってるわけでもないのに。
あ、でも、もう柏木君にはかかわらないって言っておいて、会ったんだから、やっぱり藤堂君に嘘をついちゃったってことかなあ。

「柏木のやつさ」

「え？」
「…また傷つけるようなこと言わなかった？」
「別に」
「…」
藤堂君が私の顔をまだ見ている。

「あ、そっか。きっと藤堂君がふられた子をまだ思ってるって言って、私を傷つけたかったんだね。でも、それで傷ついたりしないから、大丈夫だったんだけど」
「俺にはよくわかんないけど、あいつ、結城さんのこと傷つけて遊んでるように見える。自分が傷ついているから、他の奴も傷つけたいのかもしれないけど、やっぱり、結城さん、もうあいつにかかわらないほうがいいよ」

藤堂君が心配そうにそう言った。ああ、藤堂君、私が傷つくのを心配してくれてるんだ。
「う、うん。そうするね」
私はそう言って、下を向いた。
「それとも、なんか気になることでもあるの？」
藤堂君が聞いてきた。

「え？私？」
「柏木のことで、なんか気になる？」
「……。絵がね」
「うん」
「柏木君の絵が、すごく辛さや、苦しみを表現してて」

「うん」
「それを見て、痛みを感じちゃって」
「…」

「ちょっと、そのあと気になっちゃった。あ、でもそれだけなの」
「…気になって、会いに行った？」

ドキン。藤堂君、責めてるの？そんなことをしたから？
「あ、あの…」
うわあ。藤堂君の顔が見れないよ。
「そっか。気になってたのか」
藤堂君がぽつりとそう言った。

ドクン。ドクン。どうしよう。なんか変な風に思っちゃったかな。
ああ、でも、私だって、なんで気になったりしちゃったのか。
「……。柏木のことは、結城さん、どう思っているの？」
「へ？ど、どうって？」
い、いきなり、何？

「気になるだけ？」
「え？う、うん」
「それだけ？」
「嫌なやつって思ってる」
「え？」

「いつもからかってきて、嫌な奴だなって」
「なのに、会いに行っちゃったの？」
藤堂君の顔を見た。わ、目が責めてるよ。目が…。私はすぐに視線を下げた。
「私にもわかんない。でも、やっぱりからかわれて、頭に来て…。もう会うのはやめようって思ったよ」
「本当に？」

なんで？なんで藤堂君、そんなにしつこく聞いてくるのかな。

ドキン！！！

なんで藤堂君、顔が接近しているの～～～？
私はぱっと顔を下に向け、藤堂君の顔を避けた。
あ、やばい。
もしかして、今、すごくやばいことをしたんじゃ…。

１０秒もあったかどうかもわからない。でも、何秒も何分も私は下を向いていたような気がする。そして、藤堂君が姿勢を戻し、教科書を開いたのを確認してから、私は顔をあげた。

「ごめん」
藤堂君はぽつりと謝り、黙ってまた国語の教科書を見ている。
今、なんで謝ったのかな。
やっぱり、今のって、キスをしようとしていたのかな。

それを私が思い切り、拒んじゃった形になるのかな。
そうなるの？そうだったの？それとも、ただ単に、顔が近かっただけ？
だとしたら、今の「ごめん」は何？

駄目だ。それからも私は、まったく勉強をする気になれなかった。
それどころか、私の心臓はずうっとドキドキしっぱなしだし、なんだか、目も潤んで来ていて、今にも泣きそうだ。
なんでかな。びっくりしたからかな。それとも、私、何かに傷ついたのかな。

ううん。違う。そうじゃない。私が傷ついたんじゃなくて、藤堂君が傷ついたかもって思って、なんだかさっきから、心の奥が痛いんだ。

ごめんって謝るのは、私のほうなのかな。
藤堂君は黙っているけど、本当は今、傷ついていない？

私、きっと思い切り拒んだよね。きっと藤堂君からしてみたら、私が嫌がっているように見えたよね。
「と、藤堂君」
私は藤堂君に何か言わなくっちゃと思い、声をかけた。でも、声が思い切り震えてしまった。

「え？」
藤堂君がその震えた声を聞き、ちょっと驚いて顔をあげた。目が合った。あ、いきなり藤堂君が動揺したのがわかった。
「結城さん？大丈夫？」
「え？」

「ど、どうしたの？あ、俺のせいかな」
何が？
「ごめん。さっきのは、本当に…」
また謝った。なんで？ボロ…。あ、私の頬に涙がつたった。なんで？私泣いてるの？

「違うの。これ、違うの」
私は慌てて、藤堂君にそう言った。でも藤堂君は辛そうな顔をして、顔を下げてしまった。
「ごめん。俺、柏木に取られたくないって、一瞬思った。そんで、キスしようとしたりして、ごめん」
うわ。やっぱり、キスしようとしてたんだ。

「それだけじゃないな。結城さんのことを好きなやつが、俺のほかにもたくさんいるってわかって、かなり焦ってる」

「え？」
「結城さんのことを多分、誰にも取られたくないんだ」
うわ。顔が熱い。うわわ。

「ごめん。すげえ独占欲だ。俺って、こんなに嫉妬深いんだ」
藤堂君はまったく私を見ようとしていない。下を向いたっきり、一点を見つめたままだ。
「これじゃ、柏木と同じだよね」
「え？」
「結城さんのこと、自分の勝手で傷つけてたら、一緒だよね？」

「傷ついてないよ。私は」
「…だけど」
藤堂君がやっと顔をあげて私を見た。
「藤堂君のほうこそ、私、傷つけてない？」

「え？お、俺？」
「うん。今、私、傷つけなかったかな」
「…え？」
藤堂君が驚きながら私をじっと見ている。

「あ、これ、別に傷ついて泣いてるんじゃないから。ただ、なんだろう。藤堂君を傷つけたかもって思ったら、勝手に涙が出てきちゃって」
「俺が何で傷ついたと思ったの？」
まだ藤堂君は驚きの表情のままだ。

「だって、私が拒んだから…。私が嫌がったんじゃないかって思って、傷ついちゃったかなって」
「キスのこと？」

コクン。私は黙ってうなづいた。
「…え?俺が結城さんにキスを拒まられて、俺が傷ついてるって思ったってこと?」
「うん」

「……」
藤堂君はしばらく、ぼけっと私を見て黙り込んだ。
「いや、そうだな。嫌がられたって思ったけど、でも、俺の勝手でしようとしたことだし、逆に結城さんに嫌われたかなって、そんなふうに思ったかな」
「嫌ってないよ?」

「…本当に?」
「うん。全然…」
「そっか」
藤堂君はほっとした顔を見せた。
「それに、嫌がってもいない」
「え?!」

は!私ったら何を口走ってるの。
「でも、今さっき、嫌がった」
「違うの。びっくりしたっていうか、なんで顔を近づけたのかもわかんなくって。だって、いきなりで、その…」

ま、待てよ。今の私の言ってることって、いきなりじゃなかったら、キスしてもいいって言ってるようなもの?っていうか、嫌がってないから、してもかまわないですって、催促してるようにも聞こえちゃう?

どひゃ。自分で自分の言ってることに気が付き、私の顔から火が

出たように熱くなった。藤堂君を見たら、藤堂君は目が点になり、
それから私と同様、耳までボワッと真っ赤になっていた。

第４３話　心の内

ドクン。ああ、自分で変なことを言ったと、私は一気に後悔をした。どうしよう。

藤堂君は下を向き、コホンと咳払いをすると、

「えっと、なんか英語でわからないところある？」

と顔をあげずにそう聞いた。

「え？うん。こ、この訳が…」

そう言って教科書を見せると、藤堂君は教科書を覗き込み、

「どの辺？」

と聞いてきた。うわ！顔が一気に近づいた。私は思わず、顔を後ろにさげた。

「…」

それに藤堂君が気が付いたらしい。

「あ、ごめん」

藤堂君は教科書からいったん顔を離した。

「…こっちこそ、ごめんね」

私は思わず、必死に謝っていた。

「え？」

「藤堂君のことを、その」

う、なんて言ったらいいのかな。

「…」

藤堂君は下を向いたまま、私の話すのを待っている。ああ、変な沈黙の時間ができてしまった。

「今日は勉強、やめにする？それとも、図書館にでも移動する？」

藤堂君は穏やかに私にそう聞いてきた。
「…や、やめにしようかな」
私がそう言うと、藤堂君は自分の教科書をカバンにしまいだした。
「ごめんね?せっかく時間取ってくれたのに」

「ううん、全然」
藤堂君が静かに微笑んでそう言った。
キュン。その顔でまた、私の胸がキュンってした。

私も勉強道具をカバンに詰め込み、2人で教室を出た。
「あいつらはちゃんと、勉強できてるのかな」
ぽつりと藤堂君が言った。
「あいつら?あ、沼田君たち?」
「うん」

「ど、どうかな」
何しろあの二人も、沼田君の家で2人っきりだと思うし…。
「結城さん、明日は俺、ちょっと用事があって。あさってにでも、みんなで残って勉強しようか」
「え?」
「中西さんが数学教えてって言ってたんだ。だから、みんなでさ…」

「うん」
そうなんだ。麻衣、藤堂君に勉強教えてなんて言ってたんだ。
ちょっとだけ、ジェラシーを感じている。だけど、2人きりよりもみんなで勉強した方が、きっと気が散らずにできるだろうなって、そんなふうにも思う。

駅までの道を、2人とも黙って歩いていると、藤堂君がぽつりと口を開いた。

「あんまり、あれかな」
「え？」
「二人きりにならないほうが、いいかな」

え？

「結城さん、警戒してるよね？」
ドキ。そ、それは…。
あ～～。嫌がってないとか言っておいて、警戒してるのはバレバレなんだ。

「ごめん…」
「いいよ、結城さんが謝ることないよ」
「でも…」
「俺も、変に二人だと意識しちゃうし」
「え？」

「…」
藤堂君はずっとこっちを見ないで、まっすぐ前を向いている。私はその横顔を見た。
藤堂君の横顔は、いつもと同じように穏やかだ。
「俺、まだ結城さんとどう接していっていいかも、わかってないんだろうな」
「え？」

「…付き合うの初めてだし、それも、結城さんだし」
え？な、なんで私だと？
「1年の時、ふられて落ちこんでたら、女の子紹介するよって言ってきたやつがいたんだ」
「え？！」
何それ。

「違う高校の子だから、付き合いやすいんじゃないかってさ。そいつも違う高校に彼女がいて、その友達でも紹介するって言ってきたんだよね」
「う、うん」
「だけど、俺、まったくそんな気になれなかった。他の子は、まじで興味なかったし、だったら付き合えなくたっていいし、弓道にでも打ち込もうって思ったし」

よ、よかった。それでもし、付き合っちゃってたら、今の私たちはいないんだよね。
「結城さん以外の子と付き合うなんて、俺には想像もできないことだったし」
ドキ。そ、そうなの？
「だけど、結城さんと付き合うのですら、想像もしていないことだったんだよなって、今さらながら思うよ」

「へ？」
私と付き合うのも？でも、付き合って下さいって言って来たのに？
「俺さ、ただ好きでいたから、告白してオーケーもらって、付き合うことになってっていうところまで、考えていなかったみたい」

「…」
私がきょとんと藤堂君を見ていると、藤堂君はちらっと私を見て、
「だから、その…。告白するだけでいっぱいいっぱいだったみたいだ」
と顔を赤くしてそう言った。

わあ。なんだか、聞いてて照れる。それに、藤堂君が可愛い。
「だから、その…。今、付き合ってる状況が、あまり実感がなくて、

それにいったいどう付き合っていいかもわからなくって、ってそんな状態で…。ごめん」

か〜〜〜。そう言った後に藤堂君は真っ赤になってうつむいた。

「……うん。それ、私もだから」

「え？」

「好きっていう思いで、精一杯」

「俺のことを？」

私は黙って大きくうなづいた。

「今日も2人でいて、ドキドキしてて、勉強どころじゃなかったの」

「…」

藤堂君は黙って私をじっと見ている。ドキ。その目にまた、胸が高鳴る。

「あ、あの。こんなこと言ったら、びっくりしちゃうかもしれないんだけど」

「うん」

「あ、っていうか、引いちゃうかな」

「え？」

「……。と、藤堂君、この前、俺ばかりが好きでって、そんなことを言っていたよね？」

「うん」

藤堂君はうなづいたあとに、ちょっと照れくさそうに下を向いた。

「あれ…。違うから」

「え？何が、どう違うの？」

「私も、その…」

か〜〜〜。ああ、私は何を言おうとしているんだ。でも、やっぱり言っておいた方がいいよね。この前は結局言えなかったし。

「私も、藤堂君のこと、自分でどれだけ惚れちゃってるんだろうって思うくらい、好きだから」
「……」
藤堂君は一瞬、顔を固まらせ、そのあと一気に赤くなった。
「だから、意識しちゃって、ドキドキしちゃって、変なことを言ったり、変な行動に出たり、いろいろとしちゃってるかもしれない」

「え？」
「ドキドキして、動揺したり、固まってたり、近寄れなくなったりって、いろいろと…」
「…」
藤堂君が目を丸くした。だけど、そのあとすぐに、照れくさそうに目を細めた。

「うん。わかった。ありがとう。ちゃんと言ってくれて」
「う、うん」
か～～～。ああ、顔から思い切り火が出てるよ。私。
「結城さんが俺のこと、そこまで思ってくれてるって、ちょこっとまだ信じられないところもあるんだけど」

「え？」
「でも、嬉しいよ」
「信じていいのにな」
「…」
藤堂君は私を見た。私も思わず藤堂君を見て、目が合ってちょっとの間見つめあってしまった。

見つめあっている間、その場に2人して立ち尽くしたようで、後ろから来ていた小学生3人が、無理やり二人の間を割って入り、通

り過ぎて行った。
「カップルだよ。カップル」
「道の真ん中でやめてほしいよなあ」

小学生3人組は、そんなことをゴチャゴチャ言いながら、駅に向かって歩いて行く。その言葉を聞き、私たちはまた赤くなり、下を向きながら歩き出した。

駅に着くと、藤堂君の乗る電車のほうがもうホームに来ていた。
「結城さん、また明日ね。明日の朝も、切符売り場あたりで待ってるよ」
「うん」
明日も朝、一緒に登校できるんだ。嬉しいな。

今日は駅に来ると、藤堂君はすでに切符売り場の前にいた。私を見つけた藤堂君は、鼻の横あたりを掻きながら、照れくさそうに私のほうに寄ってきたんだよね。
「おはよう」
私が言うと、藤堂君も照れた顔で、
「おはよう」
と言ってくれた。

周りにはうちの高校の学生がたくさんいた。待ち合わせをしている学生が多く、その中ですぐに私は藤堂君を見つけ、藤堂君も見つけてくれたのが嬉しかった。
クラスの子もいた。私たちを見て、何やら内緒話をしていた。でも、何を言われていようと、どうでもいいやっていう気になっていた。

一緒に教室に入ると、すでに沼田君と美枝ぽんがいて、私らが一

緒に来たことをひやかしてきた。藤堂君は、いつものポーカーフェイスになり、ひやかしてきた二人に対して、何も言うこともなく席についていたっけ。

でも、耳だけが赤いのを私は、めざとく見抜いてしまった。

藤堂君は、あまり表情を変えないように見えて、よくよく見ていると、けっこうとっさに赤くなったり、照れたりしている。それによく、目を丸くして驚いていたり、目を細めて嬉しそうに笑っていたりもする。

って、私の前でだけなのかな、そんな藤堂君って。

私はそんな藤堂君を見るのが嬉しくて、幸せなんだよね。

家に帰り、夕飯を食べ終わり、勉強をし出した。時々藤堂君のことを思い出し、顔が赤くなっていたが、それでもどうにか、勉強のほうに集中して頑張っていた。

藤堂君と付き合ったら、成績が落ちましたなんて、藤堂君に申し訳ないもん。

翌日も朝、駅に着くと藤堂君はすでにいた。

「おはよう」

藤堂君のほうに行きながら、声をかけた。藤堂君は今日もまた、恥ずかしそうに鼻の横を掻きながら、

「おはよう」

とそう言った。

可愛いなあ。それから学校に向かって歩き出した。

「よ、藤堂」

後ろから藤堂君の背中を、ポンとたたいた人がいた。あ、弓道部の人だ。

「おはよ、結城さん」
私にも声をかけ、そのままその人は通り過ぎて行った。
藤堂君は特に何も答えず、私もぺこりとお辞儀をしたが、その人はさっさと行ってしまったので、多分私がお辞儀をしたのも気づいていないだろう。
そのあと、今度はクラスの男子がやってきて、
「あ、藤堂と結城さんじゃん」
とそう言って、でも、何も私たちには挨拶もせず、通り過ぎて行った。
クラスの女子も昇降口にいた。だけど、誰も藤堂君に挨拶をしない。
藤堂君ってもしや、クラスメイトから怖がられてる存在？だけど、弓道部のみんなとは仲いいよね。
「おはよう～～っす」
元気にそう言って、藤堂君の背中と私の背中をバチンバチンたたいてきた人がいた。
「いってえ」
「痛い」
誰？と思い振り返ると麻衣だった。
「仲良く一緒に登校？いいねえ」
麻衣はそう言って、さっさと上履きに履き替え、廊下を歩いて行く。
「中西さん、藤堂君怖くないの？」
クラスの女子が麻衣にそう言ってるのが、何気に聞こえた。
「え？司っち？ちょっと怖いって時もあったけど、今は全然」
麻衣の言葉に、その子たちは、

「え〜〜。そうなの？」
と興味深そうに麻衣のあとを追って行ってしまった。

昇降口に残された私と藤堂君は、静かに上履きに履き替え、廊下をゆっくりと歩き出した。
「藤堂君って誤解されやすい？」
「え？」
私のいきなりの質問に、藤堂君が驚いてこっちを見た。
「そんなに怖くないのに、なんで怖がられているの？」

「さあ。でも、いつもむっとしてるからじゃないのかな」
そうなの？そりゃ、ポーカーフェイスかもしれないけど、かっこいいと思うんだけどなあ。
「弓道部のみんなとは仲いいよね」
「ああ、あいつらは俺の内側も知ってるし」

「内側って？」
「う〜〜ん。ぬけてるところとか？」
え？ぬけてる？どこが？！それはびっくり。
「すごくしっかりしてそうに見えるよ？藤堂君」
「そうでもないよ。かなりずれてるらしいし」

「…たとえば？」
「流行に遅れてるらしいし、女の子のこととかうといし、たまにみんなと話がかみ合ってなくて、それが逆に受けちゃってるみたいだ」
「受ける？」
「お前、面白いって言われる」

「…」
そうなんだ。

「でも、なぜだかいろんな面で頼られる」
「あ、それ、見てると私も感じてた。部長も頼ってる感じだよね？」

「うん。多分、俺、ぬけてるからさ、あまり動じないところがあって、それでじゃないかな」
「ぬけてるのとは、関係ないと思うけど？」
「そうかな。みんながひるんだり、怖がったり、心配したりすることろで、俺、平気なんだよね。それってかなり、鈍感ってことじゃないかな？」
ええ？そうかな。心が強いっていうか、しっかりしていて頼もしいってことなんじゃないのかなあ。

教室に着き中に入ると、麻衣と沼田君と美枝ぽんが楽しそうに笑っていた。
「おはよう」
私と藤堂君がみんなの所に行くと、3人は笑顔で迎え入れた。
藤堂君を、沼田君は怖がったりしないし、しっかりと友情で結ばれてるみたいだし、きっと、沼田君は藤堂君の良さを知ってるんだろうな。

「司っち。昨日は何を勉強したの」
沼田君がそう藤堂君に聞いた。ギク。ほとんど勉強できなかったんだよね。
「お前らは？」
藤堂君が逆に沼田君に聞き返した。

「ああ、数学をやろうとして、2人して沈没した。今日、司っち、俺らにも数学教えてくれない？」
沼田君が藤堂君の肩を抱きながらそう言うと、美枝ぽんも、
「お願い。藤堂君。そりゃ穂乃ぴょんと2人のほうがいいとは思う

けど、私も沼っちも数学音痴で、駄目なんだよね」
と藤堂君のそばによって、お願いしている。

「明日でもいい？」
「今日はやっぱり、２人きりのほうがいいの？」
美枝ぽんが藤堂君の返答にそう返した。
「違うよ。今日は俺、用事があるからさ」

「じゃ、明日の放課後ね」
「私も明日だったら、参加できる。数学致命的なんだ」
麻衣もみんなの中に入って、そう言ってきた。やっぱり、ここでも藤堂君は頼りにされてるよなあ。
「明日は何の用事？部活？」
沼田君がそう聞くと、藤堂君はちょっと言いづらそうに、
「いや、ちょっとした用事」
とボソッと答えた。

「ふうん」
沼田君はそう言って、藤堂君をじっと見ている。なんでかな？
「ところで、美枝ぽん、沼っちの家に行ったんでしょ？どうだった？」
麻衣がそう聞くと、
「沼っちの部屋、綺麗に片付いてて驚いた。それにお母さん若くてきれいだった」
と嬉しそうに美枝ぽんは答えた。

「あ、あれ？お母さんって？」
「昨日はお母さん、ちょうど休みの日だったんだって」
なんだ。家に２人きりじゃなかったんだ。
「沼っちと、漫画や映画の話で盛り上がって、勉強どころじゃなく

なったんだよね。やっぱり、藤堂君でもいないと勉強はかどらないよねって言ってたんだ」

え。でも、藤堂君がいたって、勉強はかどらなかったけどな。なんて言えないよね。

だって原因は、2人して意識しちゃってたからだなんて。

いや、私だけ意識したのか。

「じゃ、明日はまじ、よろしく頼むよ、司っち」

沼田君はそう言って、藤堂君の肩をたたいた。

「ああ」

藤堂君は、一言だけそう言って、自分の席に着いた。

私も自分の席に行った。そして、いきなり気になりだした。今日の用事ってなんだろう。家の用事かな。ご家族でどこかに行くとか？

藤堂君を見ると、後ろを振り返っている麻衣と、笑いながら話している。

はあ。いつものことながら、羨ましいぞ。麻衣。麻衣はあんなに近くに藤堂君の顔があっても、大丈夫なんだね。って当たり前か。

藤堂君の笑っている横顔を見ていると、また胸がきゅんってなった。するといきなり、藤堂君がこっちを見た。

え？なんで？私が見ているのがわかっちゃった？目があうと、藤堂君は照れくさそうに笑い、ぱっと前を向いてしまった。

は～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～。可愛い笑顔だった。

私はそのまま、藤堂君から目が離せなくなってしまい、先生の話している内容もまったく、耳に入ってこなかった。

第４４話　やきもち

翌日の放課後、私、藤堂君、沼田君と美枝ぽん、それに麻衣は教室に残り、みんなで机をくっつけあって、勉強をしていた。
昼にすでにパンを買い込み、勉強を始める前にジュースも買ってきた。かなり本格的に勉強をする勢いだ。

私は時々、藤堂君の声だったり、真剣な眼差しだったり、手だったり、指だったりにときめいていたが、「いけない。勉強に集中」と頭を切り替えた。
意外だったのが沼田君と美枝ぽんが、真剣に勉強をしていて、２人で問題を解きあったり、相談しあったりしていることだ。

この前も２人で数学の問題に取り組んだらしいが、途中でわからなくなり、話が他にずれていったらしい。だけど、途中まではかなり真剣に勉強をしていたとか。
私なんて藤堂君のことを意識しちゃって、まったく勉強が手に着かなかったというのに。

１時間して、みんなで休憩を取った。パンを食べたりジュースを飲んだりしていると、
「そういえば、あの外人の女の人、誰？」
と、突然美枝ぽんが藤堂君に聞いた。
「え？」
「昨日、駅に一緒にいたでしょ？あ、背の小さい痩せた男の子も一緒だった」

「ああ、弟だよ。弟の守」
「へえ。藤堂君にあまり似てないね」

「ああ、そうかも」
藤堂君、答え方がそっけないなあ。ほら、美枝ぽんが黙っちゃった。

「それで？外人の女ってのは誰だったの？」
沼田君が美枝ぽんが黙ったからか、代わりに聞いた。
「小学校の時に、同じクラスだった子」
「へえ。江の島に住んでる外人さんなんだ」
麻衣がそう言った。

「あ、もしかしてアメリカで一緒だった、とか？」
私はなんとなくぴんときて、藤堂君にそう聞いた。
「あ、そうだった。藤堂君って小学校の時、アメリカに住んでいたんだっけ」
美枝ぽんが思い出したって顔をして、そう言った。

「え。帰国子女なの？お前って」
沼田君はびっくりしながら聞いた。藤堂君はちょっと眉をしかめた。ああ、帰国子女って言葉があまり好きじゃないんだっけね。
「…父さんの転勤で、住んでいたんだよ」
「その時の同級生ってことは、アメリカの学校に通ってたの？司っち」
「うん」

「わ～～。じゃ、英語ぺらぺら？」
麻衣が聞いた。
「いいや。普通の簡単な会話くらいしか、ついていけないよ。だから、授業はかなりハードだった」
「へえ。そうだったんだ。司っち、それであんなに英語が綺麗な発音なわけね」

沼田君がうんうんとうなづきながら、そう言った。

「その時のクラスメイトが、なんで江の島にいたの？」

美枝ぽんがまた口を開いた。

「交換留学とやらで、こっちの高校に通うんだって。昨日は久しぶりに会いたいからって会いに来た」

え…。

「司っちに？」

私の表情が固まったのを見てから、沼田君が藤堂君に聞いた。

「うちの家族にだよ。家族ぐるみで仲良かったからさ」

「…ふうん」

相槌を打ったが、私の相槌はやけに暗い相槌になってしまった。

「あの人、同じ年なんだ。すごく大人っぽく見えたよ。スタイルもいいし、すごい綺麗なブロンドだったよね」

「……」

美枝ぽんの話に、藤堂君はまったく無反応だった。そして藤堂君は、ちらっと私を見た。

私はどんな反応をしていいかわからず、視線を下げた。

「だから用事があるって言って、司っち帰ったんだね、昨日は」

沼田君がまた私の反応を見てから、藤堂君に言った。

「え？ああ、うん」

藤堂君の答えが、なんだか曖昧だ。

「さ、勉強再開しようよ」

麻衣がそう言いだして、ノートや教科書を開いた。みんなもパンの袋や飲み終わったジュースのパックを片づけ、ノートを開いた。

そして勉強が再開された。藤堂君は麻衣の質問に、丁寧に答えて

いる。
だけど私は、その外人の女の人が気になってしまって、まったく勉強をする気がなくなってしまった。
スタイルがよくて、金髪。仲の良かった女の人…。
ガイ～～ン。なぜだかわからないけど、やたらとショックだ。

5時になり、みんな荷物をまとめだし、それから教室を出た。私たち女子はそのままトイレに寄った。
そこで、何気に美枝ぽんに聞いてみた。
「美枝ぽんが見た外人の女の子、可愛かった？」
いや、何気じゃないね。思い切り気になってるって感じの聞き方だよね。私ったら。

「可愛いっていうか、なんていうの？大人っぽい感じかな」
「ふ、ふ～～ん」
「実はさ、駅の改札に入る前に、その人、守君にはほっぺにチュッてして、藤堂君にはハグして、唇にキスしてたんだよね」

……。え、今、なんて？

「え～～～？唇に？」
「し～～。声、大きいよ、麻衣。藤堂君、私がそんなこと言ってるって知ったら、あとで怒るかもしれないし、穂乃ぴょんも私から聞いたって黙っていてね」
「怒る？司っちが美枝ぽんに？」
「うん。さっきも私の話をしっかりと無視してくれてたし、時々、藤堂君、怖いんだよね」

「私も怖かったけど、気にすることないと思うよ。本気で怒ってるわけじゃないと思うし」

「そうかなあ。クラスの男子に怒ってたことあったでしょ?怖かったじゃん」
「美枝ぽんでも、怖いって思うことがあるんだ」
「あるよ。藤堂君はもともと私、苦手な人種なんだから…」

2人はそんな話をしながら、トイレを出た。私はさっきの、「唇にキス」がずっと頭の中を駆け巡っていて、クラクラになりながら、2人のあとをとぼとぼ歩いていた。

…ハグして、唇に、キス?
「み、美枝ぽん、待って」
昇降口に行く途中で私は、美枝ぽんの腕を掴んだ。
「と、と、藤堂君、その時、どんな反応をしてたの?」
勇気を振り絞って、美枝ぽんに聞いた。

「藤堂君は、やめろよって手で押しのけてた。そうしたら、シャイボーイって言いながら、その外人の女の人は笑ってたよ」
「……」
「そのキスが初めてじゃないね。きっと、いつも挨拶はキスをしてたんだよ」
麻衣が言った。

「それでいつも、司っちが照れて嫌がって、その子にシャイボーイってからかわれて…」
やめてくれ〜〜〜。それ以上は聞きたくない〜〜〜〜。

だって、あの藤堂君だよ?どっからどう見ても、和男子の、キスなんて無縁って感じの、藤堂君だよ?もし、もし、もし、私とキスをしたら、絶対に藤堂君だって、ファーストキスなんだろうなって、私は心のどっかで思っていたんだから。

それが…。挨拶代わりにいつもキス？ってことは何回もその女の人とは、キスをしていたってこと？

ず、ず、ず～～～～ん。

久々の地の底。

「お待たせ」

「遅いよ～～」

美枝ぽんの言葉に、沼田君が明るく答えた。麻衣も明るく、靴を履きかえ外に出ていった。私は思い切り暗くなりながら、靴を履きかえた。

そして、暗いまま昇降口を出た。

「あれ？どうしたの？穂乃ぴょん」

沼田君が私の暗いのに、すぐに気が付いたようだ。

「…」

藤堂君も私の顔を見た。そして、近寄ってきた。

「気分悪いの？」

藤堂君が優しく聞いてきた。うわ。やめて。優しい言葉も今、ハートに突き刺さる。

「な、なんでもないの。あ、ちょっと頭使い過ぎて、クラクラしているだけで」

「また貧血？」

「ううん。平気だから」

私は藤堂君にどうにか、笑顔を作ってそう答えた。沼田君は、

「そうだよなあ。かなり真剣に勉強しちゃったもんね。俺も今、頭痛いよ」

と明るくそう言った。
美枝ぽんはなんだか、よそよそしい感じだった。麻衣は私の顔を見ると、目で何かを訴えた。なんだろう。ああ、大丈夫だよ、気にするなって、どうやらそんなようなことだ。

そうだよね。普通はこんなことで落ち込まないよね。
付き合っていた人が前に誰かと付き合っていました…なんて、そういうのってけっこうあるし。麻衣だってそうだ。元彼は、付き合っていた女の子いたんだもん。そりゃ、キスもしたことがあっただろうし、麻衣だって、それよりも前に誰かと、キスをしたことがあったかもしれないんだし。

こんなことで落ち込んでちゃ、これから先、いろんな男の人と付き合っていけないよね。
あ、違う。私、いろんな男の人と付き合いたいなんて思ってない。藤堂君だけでいい。藤堂君だけで。でも、その藤堂君が…。

駄目だ。また落ちた。堂々巡りをしている、私…。

必死で作り笑いをして、どうにかみんなの話に合わせながら駅まで歩いた。そして、麻衣と藤沢方面の電車に乗った。ホームで沼田君に話しかけられ、藤堂君はそれに答えて、私のほうは見ていなかった。

麻衣と空いているシートに腰かけた。それから、
「は〜〜〜あ」
という暗いため息をしてしまった。

「やっぱり気にしてた。あんなのね、挨拶なんだから、キスのうちにはいらないって」

「……そうかな」
「そうだよ。それに、司っち嫌がってたんじゃない？そういうの嫌いそうじゃない」
「…そうかな」

「そうだよ。気になるなら本人に聞いてみたら？まだ、電車出そうにないよ」
そう言って、麻衣は立ち上がろうとした。私はとっさに麻衣の腕を掴み、
「いいよ。いいって」
と麻衣をシートに座らせた。

「麻衣の言うとおりだよ。気にするようなことじゃないよね」
「うん、そうだよ」
ドアが閉まり、電車が出発した。私はちらっとホームを見た。すると、藤堂君は私のことを、じいっと見ていた。
わ。いつから見ていたんだろう。私はとっさに目を背け、藤堂君のことを無視してしまった。

ガタン、ガタン。ああ、なんだか、気まずい。藤堂君、変に思わなかったかな。
「私、駄目だよね」
「え？何が？」
「ほんと、こんなことだけで落ち込んだりして、こんなでこれからちゃんと付き合って行けるかな」

「大丈夫だって。それからさ、もし気になるなら、ちゃんと司っちに聞いたほうがいいよ」
「え？」
「私もね、気になることがあっても、聞かなかったし、平気なふり

までしちゃってたの。元カノのこともすごく気になっていたのに、聞かなかったんだよね。そういうの、素直に聞いてたらよかったって、今さらながら思うんだ」

「そうなの？」

「美枝ぽんのことは気にしないでいいよ。司っち、美枝ぽんには怒ったりしない。きっとね」

「うん。藤堂君、優しいからそんなことはしないとわかってるけど…」

「そうだよね。優しいんだよね。でも、勘違いしちゃうよね。あの、なんかこう無言の威力というか、圧力？」

「無言の？」

「そう。何も言ってくれないと、へこむよね。私もそうだったし、美枝ぽん、今日へこんだみたいだし」

「……」

私も、藤堂君は優しいって知ってるけど、冷たくされたらへこむだろうな。地の底の底まで。

は～～～。聞けるのかな。それに、なんて聞いたらいいの。これ、私の単なるやきもちだよ。そんなこと言ってもいいの？藤堂君、呆れない？

あ～～～～～～。頭、本当に痛くなってきたよ～～。

誰かに相談してみる？こういうのって、男の子のほうが、どんなふうに感じるかわかるのかな。

だったら、沼田君に…。

私は家に着き、夕飯を食べ終えてから部屋で、携帯を手にしてまたため息をついた。

藤堂君にか、沼田君にか、どっちに先にメールするか。
＞今、メールしても平気？
＞いいけど。やっぱり暗かったのは、何か悩んでたんだ。
沼田君、すぐに返事が来たなあ。なんかぴんと来ていたんだなあ。
＞わかった？実は美枝ぽんから、藤堂君と外人の女の子のことを聞いて…。
＞やっぱり？俺も聞いたよ。ハグしてキスしたところ見ちゃったって。そのことだよね？
＞そう。そのこと。よくおわかりで…。
＞それだったら、気にしないでいいよ。美枝ぽんも言ってなかった？司っちは嫌がってたって。
＞照れてたんじゃなくて？

しばらく沼田君のメールが来なくなった。そして、
＞微妙だけど、やっぱり嫌がってたんじゃないの？
と5分してからやってきた。あ、今、考え込んでいたのかな。
＞こんなこと藤堂君に聞いたら、嫌がるよね？

＞こんなことって？外人の女の子とハグしてキスしてのは、嫌だった？って？
＞そんなふうには聞けないよ。いくらなんでも。
＞じゃ、どういうふうに聞くの？
＞だよね。聞けないよね。は～～～～。
＞あははは。また、地の底までいきそうなため息だね。

ああ、沼田君にはみんなバレバレだね。
＞まあ、そうだな。聞くなら電話かなんかで、昨日の外人の女の子のことを、もっとちゃんと聞きたいな、とか言って、聞きだすんだね。

＞話してくれるかな？

＞直接顔を見てのほうが、わかりやすいかもね。司っち、顔に出やすいから。

ああ、沼田君はそういうの、わかってるんだな。

＞ありがとう。明日の朝にでも聞いてみるよ。

私は携帯を置いた。そしてお風呂に入りに行った。

沼田君も、藤堂君が嫌がってるって言ってたけど、それはどうなんだろう。でも、嬉しがったりはしなさそうだなとも思うし。でも、どうなんだろう。

ぶくぶく。お風呂のお湯に沈んでいき、おぼれそうになり私は慌ててお風呂を出た。

ボ～～っとしながら部屋に行くと、携帯が点滅していた。

うわ。藤堂君から、電話が来てた！ど、どうしよう。やっぱり、ちゃんとかけたほうがいいよね、電話。

プルル…。プル…。

「もしもし」

わ。すぐに藤堂君が出た。電話、待ってたのかな、もしかして。

「あ、ご、ごめん。お風呂に入ってて、電話出れなかった」

「…ああ、風呂？」

「うん」

しばらく藤堂君は黙った。それから、一回息を吸う音が聞こえた。

「なんか、結城さん、様子変だったから。体の具合、どう？」

「大丈夫だよ。もう全然」

「…ほんと？」

「うん。心配して電話してくれたの？ありがとう」
「いや…」
藤堂君はまた黙り込んだ。
「大丈夫ならいいんだ」

ぼそってそう言うと、藤堂君はまた、黙ってしまった。
「今日は、いろいろとありがとう」
「え？」
「勉強見てくれて」
「あ、ああ。やっぱりみんなで勉強した方が、張合いがあるね」
「うん」

し～ん。また黙っちゃった。
「じゃあ、また明日ね、藤堂君」
「あ！」
え？
「その…。もしかして、なんか聞いた？」

「え？なんかって？」
はっ！外人の女の子のことかな。
「その…八代さんに何か…」
やっぱり。ああ、どうしよう、なんて言ったらいいのかな。

「えっと、あの…。ううん。たいしたことは、その…」
駄目だ。完全にしどろもどろだ。これじゃ、動揺しているのまるわかりだよね？
「な、なんか、えっと。別れ際に、えっと…」
ああ、こんなじゃ、もっと藤堂君、変な風に思うよね？

「……」

藤堂君がまた、黙っている。沈黙だ。やっぱり、直接顔を見て話したかったな。でないと、どんな表情をしているのかがわかんないもん。

「やっぱり、聞いてるんだ…、八代さんから」

「え？」

ドキン。美枝ぽんのこと怒ってる？まさか。

「あ、でもね、美枝ぽんからじゃなくて、私が美枝ぽんにいろいろと聞いちゃったの。その、き、気になったから」

「何を？」

「だから、えっと。藤堂君がその外人の女の子と、仲良かったのかなとか、どんな感じだったのかなとか…」

「……」

また、藤堂君は黙り込んだ。まさかと思うけど、話しにくいことなのかな。実はすごく仲がよくって、私には話しにくいとか。

「う～～ん。わざとなんだ」

「え？」

「キャロルはいつも…、ああ、キャロルっていうんだけどさ、名前。ああやって、俺のことからかって遊んでるんだ」

え？遊んでる？からかってる？わざと？

「面白いんだろうな。俺がいちいち、嫌がるから。日本人はシャイだって、からかってくるんだけど、シャイとかじゃなくって、本当にああいうのは苦手だから」

本当に、本当に、本当に？

「…気にしてた？よね？」

「う、うん」

「日本とアメリカは違うんだから、そういう挨拶もやめてくれって

言ってるんだけどさ」
「…実は、キャロルさんは藤堂君が好きで、とか、そういうのは？」
「ない！」

そんなはっきりと…。
「あいつには、彼氏いるしさ。3歳上のかなりのエリート」
「…ふうん」
そういうのも知ってるんだ。それだけ仲いいのかな。
「気にしないでいいから」

「え？」
「俺のことも、同じ年なのにてんでガキだって思ってるみたいだし、だから、気にすることないから」
「う、うん」
そうは言われてもな。いや、藤堂君がそう言うんだから、気にするのはやめようよ、私。

「わかった。もう気にしないね」
「……あ、そっか」
「え？」
「それってあれか…。俺が沢村や、柏木のことを気にするのと一緒か」
「……え？」

「や、やきもちってやつ、だよね？」
「…うん」
か～～。今、顔見られないで良かった。私、真っ赤だ。
「そっか。だったら嬉しいことかな」
「え？」

「まったく結城さんが気にしないでいるっていうのも、寂しいよね。気にかけてくれた方が、俺としては嬉しいってことだね」
そうなの？そう思ってくれるの？うざかったり、重たかったりはしないの？
「…えっと。でも、まじで気にしないでも大丈夫だからさ。だけど、うん。やきもちは嬉しいかな…」
藤堂君も今、もしかして顔赤かったりするのかな。

「じゃあ、また明日ね。朝、待ってるから」
「うん、おやすみなさい」
「おやすみ…」
電話を切った。はあ。いきなり安心して、ほっとしている私がいる。

だけど、心の奥底ではまだ、藤堂君、キスしたことあるのかって、気にしている。
誰とも付き合ったことがないって言うから、キスの経験もないって勝手に思っていた。まさか、挨拶のキスをしていただなんて。

気持ちを持ち上げて、もう気にするのはやめようとすればするほど、なんだか落ち込んでいく。
ごめん、藤堂君。明日にはちゃんと、元気になるからね。そんなことを思いながらも、その日の夜はなかなか眠ることができなかった。

第４５話　知らなかった藤堂君

私ってもしかして、藤堂君のことをあまりよく知っていないのかもしれない。と、思ったのは、キャロルさんの出現だけじゃない。他にもいろいろと、知らないことが多かったんだって、最近思い知らされている。

たとえば、藤堂君と沼田君との会話。彼らがなぜ仲がいいのか、最近よくわかった。好きな映画のジャンルや、音楽の趣味が本当によくあっているんだ。

それを横で聞いていても、私はちんぷんかんぷんだ。

それから、なんであんなに藤堂君は、みんなに怖がられているのかなって不思議だったけど、それもだんだんとわかってきた。藤堂君は本当に、怖いのだ。

あ、切れると怖いとか、そういうんじゃなくって、理不尽なことをしている人や、そういうことを言ってる人に対して、けっこうズバッと言いたいことをしっかりと言っているのだ。

それは先生に対してもだし、平気で先輩にでも言ってしまう。だけど、理にかなっていることだったり、しっかりとしている発言なので、誰も文句が言えないでいる。

それを評価している先生や、先輩も多くて、担任の先生はかなり、藤堂君のことを気に入っている。

弓道部の顧問や部長が、藤堂君に一目置いているのもそのせいみたいだ。みんなが慕っているのも、藤堂君がすごく頼りになるからであって、けして藤堂君が言っているように、ぬけているからっていう理由ではないらしい。

そんなことがわかったのは、弓道部のみんなと藤堂君が話をしているのを横で聞いていたからだ。

中間試験も終わり、部活動が始まった。勉強会は一回だけで、あとは各自それぞれが勉強をしていた。それは私と藤堂君も一緒で、どちらからともなく一緒に勉強しようということはやめるようになっていた。

昼休みに藤堂君のところに弓道部の部員や先輩が来て、話をしていることが最近多くなった。どうやらこの前の大会で先輩たちは引退をするらしく、これからの部のことであれこれ藤堂君に相談をしにやってきているようだ。

今日もまた藤堂君の所に昼休み、弓道部の川野辺君がやってきて、藤堂君を連れて行ってしまった。

「藤堂君って、やっぱりどこかすごいよね」

取り残された私は、そんな話をみんなにしていた。

「すごいって？」

美枝ぽんが聞いた。

「先輩にすごく頼られてるの。それに先生にも一目おかれてるみたいだし」

「怖がられてるんじゃなくて？」

美枝ぽんがまた聞いてきた。

「あはは。怖がられてないよ。司っちって、弓道部じゃみんなにすごく慕われてるよ？」

沼田君が笑いながら美枝ぽんに答えた。

「沼田君は藤堂君のよさを、本当にわかってるよね」

私がそう言うと、沼田君はえへんって偉そうに咳払いをして、

「まあね。だから友達してるんだけどさ、俺」
と自慢げに言った。

「そっか。沼っちは藤堂君の良さが分かっているのか」
「美枝ぽんはわかんないの？中学一緒でしょ？」
「…わかんないよ。話したこともなかったし。それにいつも、むすっとしてるし」
「…そうかな。見てるとけっこういろんな表情をしてて、面白いけどな」
沼田君がそう言った。さすが！友達してるだけあるなあ。

「そういえば、司っちにあの外人のこと聞いた？」
沼田君が聞いてきた。
「え？ああ、うん」
「穂乃ぴょん。私がキスのことばらしたって、藤堂君に言っちゃったの？」

「ううん。私からあれこれ聞きだしたっていうことになってるから、大丈夫だよ」
美枝ぽんが真っ青になったから、私は慌てて美枝ぽんに言った。
「美枝ぽん、そんなに司っちが怖いなら、外人の女の人がキスしただなんて、穂乃ぴょんに言わなかったらよかったのに」
麻衣がぼそってそう言った。美枝ぽんはそれを聞き、また青くなった。

「ごめん。私もあとでそう思った。でも、ついどうしても、話したくなったっていうか、口が滑ったっていうか…。こういう話をするのが元来好きだからかなあ」
「人が困るところを見て楽しむってところあるもんね、美枝ぽんは」
沼田君がそう美枝ぽんに言った。

「あ、沼っち、そんなふうに思ってたの？」
美枝ぽんがまたショックを受けたっていう顔で、沼田君に聞いた。
「……小悪魔的なところあるじゃん？」
「そういうところまで魅力なんでしょ？」
沼田君の言葉に麻衣が突っ込みを入れた。

「う、まあ、そういうことだけどさ」
沼田君が真っ赤になりながらうなづいた。
「え？」
美枝ぽんまでが真っ赤になった。
「だけど、穂乃香のことまで困らせたりしないようにしてね。この子は他の子と違って、うぶなんだから」

う、うぶ？
「うん。ごめんね、穂乃ぴょん。まさか挨拶のキスくらいで、そんなに暗くなるとは思ってもみなかった」
うそ。そうなの？これが沼田君だったら？やっぱり美枝ぽん、落ち込まない？
って喉まで出かかったけど、そこに藤堂君が戻ってきて、私は口を閉じた。

「司っちって、次期部長だっけ？」
麻衣が聞いた。
「いや、部長はさっき来た川野辺だけど？」
「え～～。そうなの？やけに最近、弓道部の人が司っちの所に来るから、司っちが部長になるのかと思っちゃった」

麻衣の言葉に一瞬、藤堂君は眉をしかめた。
「俺、そんな器じゃないよ」

うそだ。部長の器、超えちゃってるって。
「みんなを引っ張っていったり、一つにしていくような力量ないし」
「…でも、藤堂君が部長になったら、みんな引き締まりそうだけどね。怖くって」
美枝ぽんがそう言うと、無言で藤堂君は美枝ぽんを見た。
「あ、こ、怖いんじゃなくって、えっと、真面目で…」
美枝ぽんは藤堂君の顔色を気にしながら、必死に言いなおしている。
「部長にならなくても、藤堂君が部にいるだけで、部全体が引き締ってるよね」
私がそうぼそって言うと、藤堂君は今度は私を見た。
「怖くって？」
美枝ぽんが小声で私に聞いた。
「え？ううん。違うよ。藤堂君って誠実で、まっすぐで、弓道を心から愛しちゃってるから。そういうのが部、全体に伝わって」
私が美枝ぽんにそう言うと、藤堂君が照れたのか下を向いてしまった。
「穂乃ぴょん、さすがだね」
沼田君が私を褒めた。そして麻衣までが、
「司っちの彼女してるだけあるよ」
とそんなことを言った。
「……」
美枝ぽんは黙り込んで、そっぽを向いた。そして藤堂君はというと、耳を赤くしたまま、その場に立ち尽くしていた。
放課後、麻衣はさっさとバイトだからと教室を出て行き、美枝ぽ

んは華道部に、沼田君は教室で男友達とじゃれあっていた。
私はカバンを持って、藤堂君と一緒に廊下に出た。弓道部の部室は美術室の奥にあるので、美術室まで一緒に行くのがなんとなく二人の間で、暗黙のうちに取り決められていた。

「今日から弓道できるんでしょ？嬉しい？腕の傷、もう大丈夫なんだよね？」
「うん。医者の許可おりたから…」
藤堂君は口数が少ないものの、嬉しそうに笑った。それだけで、嬉しいっていうのが伝わってきた。
「結城さんも、絵、はかどってる？」
「う、うん」

確かに、最近は藤堂君を描いている時間が至福の時だ。ただ、柏木君が部に出ていなかったらの話。
一回は気になった存在だった。だけど今は、なるべくかかわりたくないっていうのが本音だ。いまだに放課後は部に現れないけど、ずっと来ないのかどうか、わからないもんなあ。

「次の土曜日、部、休みなんだ」
「え？そうなの？」
「日曜には、先輩たちが最後の部に出てくる。そのあと引退のお祝いをする予定で、１年があれこれ買い出しに行くんだ」

「２年は？」
「当日に何をするか、相談したり…」
「藤堂君もその相談に行くんでしょ？」
「行かない」
「なんで？」

「だって、なぜだか知らないけど、カラオケボックスで相談するらしいから。結局、カラオケで盛り上がりたいだけなんだ。ほんと、適当だよね、みんな」
「……」
藤堂君、カラオケ嫌いとか？
「当日司会は川野辺だし、盛り上げるのは他のやつらがするだろうし、俺はそうだな～。力仕事でもやらされるくらいかな～」
「じゃあ、土曜は…」
「うん。空いてるから、鎌倉に行こうよ」
「うん」
嬉しいかも。
キャロルさんのことで、いっとき変な風になっちゃって、そのまま中間テストに突入して、どうしようかって思っていたんだ。でも、ちゃんとデートのこと考えてくれてたんだな。
「そういえば…」
藤堂君がふと顔をあげ、天井を見ながら思い出したかのように話し出した。
「？」
「最近、沼田と八代さん、変？」
「え？」
「なんとなくあの二人、お互いさけてない？」
そういえばそうかも。放課後はさっさと美枝ぽん、部活に行っちゃったし。
「テスト中に何かあったのかな。あんまり俺も沼田と最近、話してないからわかんないけど」
「私も美枝ぽんから何も聞いてないけど…」

何かな？喧嘩？まさかね。昼休みは別に普通に話していたしなあ。

美術室に着くとドアの前で藤堂君は、
「じゃ、またあとでね」
とちょっと照れくさそうに笑い、そのまま廊下を歩いて行った。
私はしばらく美術室に入らず、その後ろ姿を目で追っていた。
あとでね…ってことは、もちろん一緒に帰れるんだよね。

キャロルさんのことは、気にしないって決めた。藤堂君が気にしないでいいって言ってくれたんだから、もう気にしない。
確かに、キスをしちゃったのかって思うと、胸がちくんと痛むけど、挨拶だし、握手をするのと一緒だよ、とかなんとか自分に言い聞かせている。

さて、絵を描くとするか、と椅子に座った。するとそこに、柏木君がやってきた。絵を描く気が一気に失せた。どころじゃない。私は目を点にして柏木君を見た。
「久しぶり。元気？結城さん」
「そ、その髪、どうしたの？それに耳…」
「ああ、いいでしょ。似合う？」

似合うも何も、なんでいきなり金髪？！それに耳にピアスまで！ど、どうしちゃったの？
「……」
無言で柏木君を見ていると、
「俺のこと、気になる？」
とまた、そういうことを言ってきた。

「べ、別に」
「素直じゃないね」

うるさい。いきなり髪の色を金色にしてきたら、誰だって気にするって。ほら、周りの他の部員もみんな注目してるじゃないか。

「お！なんだ、柏木。久々に来たと思ったら、その髪の色は」

原先生がやってきて、柏木君に聞いた。ほら、先生だって驚いている。

「いいじゃん。なんかさ、今までの俺が嫌になって、変えたくなったんだよね」

柏木君、もしかして相当投げやりな生き方になっちゃってるの？

ああ。気にしないんだった。もう、かかわるのもやめるんだった。髪の色が変わろうと、耳に穴をあけようとなんだろうと、そんなこともうどうでもいいんだった。

柏木君は椅子に座り、絵を描く準備を始めた。

「俺、朝早く来るの、しんどくなって…。放課後に来ることにしたよ」

多分、私に言っているんだろう。でも、私は真正面を向いて、柏木君のことは無視していた。

「絵が完成したら、学校もやめようかな」

「え？！」

さすがに今の言葉には、反応してしまった。

「くす」

柏木君が笑って私を見た。

あ…。まさか、今のわざと？

「気になるんだ。やめてほしくないんだ、俺に…」

「ち、違う。そうじゃなくって。ただ、やめてどうするんだろうって思って」

「そうだな～。フリーターにでもなるか、それとも、部屋に閉じこもって、ニートにでもなるか」
「……」
何をどう言ったらいいんだろう。
そんなんでいいの？あなたの人生。柏木君は絵のセンスすごいんだから、もったいないよ。美大に行って、絵をずっと描くことを私は勧めるよ。なんてね。そんなことを言ったとしてもまた、鼻で笑われるんだ。

「うそ。高校はやめないよ」
「え？」
「ただ、転校する」
「…」
転校？

「親がもう別居するって。離婚まではなんかあれこれ、時間がかかるらしいけど、その前に俺とおやじが今の家を出て行くことになったんだ。で、転校」
「遠くに行くの？」
「東京。おやじの会社、東京だし。親父の親も東京にいるし」

「……」
そうか。東京に住むなら、ここまで通うのは大変だよね。
「この髪の色、両親とも驚いてるくせに何も言わないんだぜ。怒ることもしないし、嘆くこともしない」
「…」
精一杯の抵抗だったのかな。その髪は…。

5時を過ぎ、みんなが片づけを始めた。でも、柏木君はそのまま絵を描き続けた。

私も片づけをし始めた。もうすぐ藤堂君が、弓道部を終えて美術室にやってくる時間だ。
「俺、結城さんに会えてよかったよ」
突然、柏木君がそう言った。

「え？」
「まじで。結城さんの絵、好きだったんだ。あの桜は癒された」
「…」
「もっと早くに話しかけたかった。でも、きっかけがなかったからさ」

そうだよね。1年生の時には、まったく話もしなかった。
「俺、結城さんのこと好きだったのに、どうしていいかもわかんなかったしなあ」
また、そんなことを言ってる。私は眉間にしわをよせ、柏木君を見た。すると、
「あ、また嘘ついてるって思ってるでしょ？でも、本当だよ」
と柏木君は、静かにそう言った。

「結城さんって、話しかけづらいオーラ放ってるし」
「私が？」
「うん。そういうところが、好きだったんだけどね。でも、もっと早くから話しかけて、付き合ってって言っときゃよかった。そうしたら今頃、俺の彼女だった？」

「どうかな。私、交際申し込まれても、断っていたかも」
「…藤堂のこともふっちゃってたもんね？」
「え？知ってるの？」
「はは。すげえ噂になってるよ。知らないの？たまにしか教室に行かない俺の耳にも入ってきたよ？」

うそ。

「俺は、藤堂が好きだったのが結城さんじゃないと思ってた。だから、頭に来てた。なんとなくね」

「え？」

「でも、あいつ、ずっと結城さんのことが好きだったってことだろ？」

か～～～。私の顔がいきなり火照った。

「で、結城さんは見事に藤堂に落とされたってことか」

「え？」

「…そういうことでしょ？」

「う、うん」

「悔しいけど、しょうがないよね」

「……」

私は柏木君の絵を、椅子から立ち上がって見た。

「私、柏木君の絵、すごいと思ってるよ」

「俺の？」

「1年の時から」

「どういうふうに？」

「力強いよ。すごい力がある」

「……ふうん。でも、俺自身には惚れなかったんだ」

「…私、ずっと聖先輩のことが好きだったし」

「ああ、俺じゃ勝ち目なかったってこと？じゃ、藤堂は聖先輩に勝ったわけ？」

柏木君は、椅子に座ったまま私を見上げて聞いてきた。

「勝ったとか、負けたとかじゃなくって。ただ…」

私はしばらく黙り込んだ。
「藤堂君といると…」
そう言ってからまた私は黙り込んだ。

柏木君はじっと上目づかいで私を見ている。そこに、藤堂君がやってきた。
「あれ？」
柏木君がいるのに驚いたのか、柏木君の髪の色に驚いたのか、藤堂君がびっくりしている。
「あ、終わった？部活」
「うん」

「私ももう片づけ済んだから…」
私はそう言って、カバンを持った。
「待ってよ。まだ、聞いてないけど？話の続き」
柏木君が私を引き留めた。

「…あ」
藤堂君のことか。でも、本人がここにいるのに、言いづらいな。
「何？」
藤堂君は心配そうに私の顔を見た。

「なんでもないの。ただ、えっと…」
私は藤堂君を見て、それから柏木君を見た。
「なんか、幸せな気分になるの…」
私は柏木君にそう言った。
「幸せ？」
柏木君が聞き返してきた。

「う、うん。そう。あったかいし、幸せ…」

「ふうん。そっか。それは俺には無理だ」
「え？」
「苦しみだったら、あげられるけど、幸せは無理そうだな」
「…」

そんなことないよ。きっといつかは誰かに、幸せをあげられるよ。
なんて言いそうになった。でもまた、鼻で笑われそうでやめにした。

「じゃあね、絵、頑張って」
私はそう柏木君に言って、藤堂君と一緒に美術室を出た。
「何の話だったの？」
藤堂君が聞いてきた。

「…うんとね。藤堂君の話」
「え？俺？」
「そう…」
藤堂君はしばらく黙り込んだ。それから数歩歩いたところで、一気に赤くなった。あ、今ごろ気が付いた？

あったかくって、幸せ。藤堂君から来る優しいオーラ。きっとそれにまいっちゃったんだよね、私。
いつの間にか、私は藤堂君に恋してた。柏木君が言うように、落とされちゃったってやつなのかな。

廊下を歩きながらまだ、耳を真っ赤にさせている藤堂君が可愛いなあって私は思っていた。今は隣にいるのがすごく嬉しくて幸せだ。

第４６話　いきなりのキス?!

今日は、藤堂君と鎌倉に行く日だ。昨日から私はうきうきわくわく。昨夜は藤堂君からメールが来て、時間や待ち合わせを決めてくれたり、それだけじゃなくって、どこに行きたいかもいろいろとメールしあって、決めたりもした。

今回は普通にジーンズを履いた。歩くかもしれないからスニーカーにした。可愛くもなければ、色っぽさもないけど、かえってこういう格好のほうが私は楽でいられる。

藤沢の駅で待ち合わせをした。今日も私は、１０分も前に着いてしまった。

ドキドキ。わくわく。２回目のデートだ。今日も手、つなげるのかな。

そうだ。写真撮りたいな。２人でなんて撮れないよね。まだ藤堂君の写真って持っていないし、写メでもいいから撮れたらいいな。

５分前、藤堂君がやってきた。改札を抜け私を見つけると、例のごとく藤堂君は鼻の横を掻きながら、

「…結城さん、早いね」

と照れくさそうにそう言った。

「藤堂君も…」

くす。藤堂君がちょっと耳を赤くして、照れながら笑った。

「じゃ、行こうか」

電車に乗継ぎ私たちは鎌倉の駅に着いた。

さすが人がいっぱいいる。

「天気良くて、良かったね」

藤堂君がまた微笑みながらそう言った。ああ、今日はいっぱい可愛い笑顔を向けてくれる。嬉しいな～。

今日の藤堂君は、Tシャツにジーンズだ。シンプルな恰好なのに、どこか品がある。やっぱり藤堂君は、育ちがいいのかもしれない。

「まず、どこに行く？小町通りを抜けて八幡宮に行ってみる？」

「…うん」

ん？待てよ。八幡宮って言ったら、恋人と行くと別れるとかいうジンクスってなかったっけ？

う～ん、でもそんなのきっと嘘嘘。信じなかったら、そんなことにはならないって。うん。

なんて思いながらも、やっぱりよそうかとか、あれこれ頭の中を駆け巡りだした。だけど、藤堂君はどんどん小町通りの人ごみの中を突き進んでいく。

「ちょっとこっちの道に入ろうか。人ごみすごいからさ」

藤堂君はそう言うと、細い道に入って行った。あ、そうか。人ごみ嫌いなんだっけ。私は藤堂君のあとを必死で追った。

「あ…。ごめん、また俺、早足になってたね。そうだ。手、つなごうか？」

え？！！手？！

「う、うん」

私がゆっくり手をさしだすと、藤堂君はさっさと手をつないできて、

「これで人ごみでも迷子にならないで済むね」

と言ってにこっと笑った。

あれ？この前はすごく照れていたのに、なんで今日は違うの？と

思いつつ、藤堂君を見ると、やっぱり藤堂君の耳は真っ赤になっていた。

なんだ、照れてるんだ…。

藤堂君は前を向き、さっきよりもゆっくりと歩き出した。私は藤堂君の手のぬくもりを感じながら、ドキドキしながら歩いていた。

ドキン。ドキン。2人の間には会話何てないけれど、でも、この瞬間が幸せでずっと続いたらいいなって、私はうっとりとしていた。

八幡宮に着いた。大きな銀杏の木がずいぶんと前に倒れたって、祖母から聞いたことがある。

そういえば、祖父と祖母は、鎌倉の近くに住んでいたらしく、よく八幡宮にも来ていたって言ってたっけ。それでもずっと仲のいい夫婦なんだから、別れるなんてジンクス、嘘っぱちだよね？

藤堂君と私は八幡宮の奥へと進んでいった。するといきなり、

「ツカサ～～～！」

という雄たけびに近い声が聞こえてきた。

「え？」

私はびっくりして、藤堂君の手を思わず振り払ってしまった。

「ツカサ！鎌倉キタノ？スゴイ偶然ネ！」

あ、金髪の外人。もしかして、この人がキャロルさん？！って一歩引いたところで見ていると、いきなりキャロルさんが藤堂君に抱きついて、藤堂君の両頬をつかみ、思いっきりキスをした。

え～～～～～～～～～～～っ！！！！！？？？？？

「やめろ。キャロル！ここは日本なんだから、そういう挨拶はやめろっていつも言ってるだろ！」

藤堂君がキャロルさんを自分から引きはがし、かなりきつい口調でそう言った。でも、キャロルさんは笑いながら、
「ツカサ、マタ照レテル」
と英語なまりの日本語でそう言って、また藤堂君に抱きついてしまった。

「……」
駄目だ。思考回路止まった。目の前で思い切りキスはするわ、抱きつくわで、私はどんなリアクションを取ったらいいかもわからない。

「キャロル！誰？その人。彼氏～～？」
２人の女の子が走ってやってきて、キャロルに聞いた。
「ノー！彼氏じゃなくって、ボーイフレンド」
「だから彼氏でしょ？紹介して！」

「ノー。友達、ツカサハ友達。私、アメリカニ、フィアンセイルカラ」
「え？フィアンセ？え～～～？」
女の子二人がのけぞった。でもまた、
「友達なのに、そんな抱きついたりキスしたりしちゃうの？」
と目を丸くしてキャロルさんに聞いた。

「イツモシテル。デモイツモツカサ、照レテ嫌ガル」
い、いつもしてるって言った？！
だ、だ、だ、…駄目だ～～～～。心が折れた。
今もまだ、藤堂君の腕にひっついて、キャロルさんは離れようとしない。

「ツカサ。紹介スルネ。敏美ト博子。学校ノ友達」

「こんにちは。わ、しょうゆ顔でかっこいい」
「こんにちは。あの、彼女いるんですか？」

その女の子たちが聞いた。藤堂君はむすっとして、キャロルさんの腕をひっぺがすと、
「彼女いるよ。ここに」
と私のほうを向いた。そして私の手を取ると、
「キャロル、紹介する。俺の彼女」
とぶっきらぼうにそう言った。

「え？」
２人の女の子は固まった。でも、キャロルさんが目を輝かせ、
「ツカサ、彼女イタノ？！」
と大きな声で藤堂君に聞いた。

「……」
私はずっと引きつっていた。
「いるよ。だから、もうあんなふうに抱きついてきたりするなよ。日本じゃああいうことは、恋人同士しかしないんだから」

「ツカサノ彼女！キレイナ人ネ、ツカサ！」
キャロルさんは私を見降ろしてそう言った。きっとキャロルさんは１７０センチはあるだろう。
「俺の話、聞いてたか？」
藤堂君がそう言うと、キャロルさんは藤堂君を見て、
「ツカサト彼女モ、一緒ニ鎌倉見学シヨウ」
と言い出した。

「だから、キャロル！」
藤堂君は苛立ちながらそう言ったが、キャロルさんは全く聞く耳

も持たず、なぜか藤堂君と腕を組んでいる。
「わ…、私…」
駄目だ。ひるんだ。藤堂君と一緒に歩くのもかなりきつい。
さっきのキスが目に焼きついて、キャロルさんの顔も、藤堂君の顔も見れない。それに何より、今、泣きそうなくらいショックを受けている。このままだと、本当に泣いてしまう。
クル。私は後ろを向いて、早足で歩き出した。

「結城さん?」
藤堂君が私を呼んだ。キャロルさんも、
「ドウシタノ?一緒ニ行カナイノ?」
とまた英語なまりの日本語で聞いてくる。でも、私は返事もせず、どんどん反対方向に向かって歩き出した。

「キャロルがキスなんかするから、怒ったんだよ。当たり前だよ」
という敏美さんだか、博子さんだかわからないけど、そんな声が後ろから聞こえた。
「結城さん!」
それに藤堂君の焦った声も。

「待って。俺も一緒に行くよ」
「いい」
「え?」
「キャロルさんと一緒に見学していい」
私はなぜか、そんな言葉を勝手に言っていた。

「結城さん?怒ってる?」
藤堂君が私の横で、一緒に歩きながらそう聞いてきた。私はブルブルと首を横に振った。

怒ってない。だって、藤堂君は悪くない。キャロルさんだって、あれがアメリカ式の挨拶だって言うなら、悪気はないはずだ。誰も悪くない。

ただ、私がお子ちゃまなだけだ。藤堂君とキャロルさんのキスを目の前で見て、ショックを受けてるだけだ。

ああ、やっぱり涙が出てきた。どうしよう。泣いているのを知られたくない。私は藤堂君のほうを見ないようにして、早足で駅に向かって歩き出した。

「結城さん、どこに行くの？」

「帰る」

「え？」

「今日は帰る…」

「うそ」

藤堂君の言葉も聞かず、私はずんずん先へ先へと歩いた。人が行きかっている道に出た。時々人とぶつかりながらも、私は来た道を逆方向へと歩いていた。

藤堂君はもう何も言わず、ただ私の速度に合わせ、黙って歩いている。

駅の前に来た。私はカバンからバスモを出そうとした。でも、動揺していてなかなか出てこない。

「本気で帰るの？」

藤堂君はそんな私を見て、ぼそって聞いてきた。私は黙ってうなづいた。

「俺、まだ結城さんと別れたくないな」

……え？

別れる？

嘘。ここで私が帰っちゃうと、藤堂君とは別れることになっちゃうの？

私の頭の中で、八幡宮のジンクスがグルグルとまわりだし、ああ、八幡宮になんか行かなかったらよかったという思いが、どんどん大きくなっていく。

顔から血の気が引いた。でも、なぜか手はカバンからパスモを取り出していた。

いいの？私…。ここで帰っちゃっても。

「結城さんは、今日のこと楽しみにしてなかった？」

「え？」

「俺はすごく楽しみにしてた。まるまる1日、結城さんといるつもりで来たし、こんなに早く別れたくはないな…」

え？

あれ？

もしかして、今日のことを言ってるの？別れるって…。

なんだ。私はいきなりほっとして、体の力が全部抜けたようになった。

「…ひっく」

そして張りつめていた糸が、切れたようだ。

「ゆ、結城さん？」

ああ、泣かないように我慢していたのに、涙が止まらない。

駅前は人がたくさん行きかっていて、泣いている私をみんなが振り返って見ている。いけない。これじゃ、藤堂君が泣かせてるみたいになってる。

ううん。泣かされたのか。
いや、違う。やっぱり勝手に私が泣いているだけで…。こんな人ごみの中で泣いたりしたら、藤堂君に悪い。

私は泣きながら、歩き出した。駅前から歩き出すと線路の下に道があり、線路の反対側に行けるようになっていた。私はその道を歩きだし、そのまま駅の向こうへと行った。そしてなんとか人ごみから抜け出し、細い路地に入った。

藤堂君は黙って私のあとをついてきた。そして私が立ち止まると、いきなり頭を下げ謝ってきた。
「え？」
なんで謝ってるの？
「キャロルのあれだよね？いきなりのキスとハグ…。それで泣いてるんだよね？」
コクン。私はうなづいた。

「ごめん。キャロルには本当にいつも言ってるんだけど…」
いつも、あんなに勢いよく抱きついて、あんなに思い切りキスしてくるの？
チュ。なんて軽いもんじゃなかった。藤堂君の両頬を掴んで、思い切り唇を重ねていた。

ショックだ。まだショックだ。駄目だ。もっと涙が止まらなくなった。藤堂君が私の真ん前で、おろおろしながら困っているのがわかる。だけど、泣き止むこともできず、私はそのまましばらくひっくひっくと泣いていた。

「結城さん」
藤堂君が時々小さな声で私を呼ぶ。でも、返事もできない。

「……」

そのあと、藤堂君が小さくため息をつく。ああ、こんなに泣いて、呆れているのかもしれない。もう、泣き止まないと。

必死で涙を止めて、手で涙をふいた。

「あ、これ、使って」

藤堂君がジーンズのポケットから、ハンカチを出した。ポケットにちゃんとハンカチが入ってるんだ。

私はそれを受け取り、黙って涙をふいた。

「泣き止んだ?」

ううん、でも、無理やり止めた。だから、喉が痛いし苦しい。でも、黙ってうなづいた。

「ごめん…」

藤堂君はまた謝った。私は黙って、首を横に振った。

「と、藤堂君のせいじゃないから」

それだけ言うと、また涙が出そうになり、必死にこらえた。

「…結城さん?」

ドキン。泣くのをこらえているのがばれた?私は藤堂君に顔を見られないよう、思い切り下を向いた。

「ショックだった…?」

「う、うん」

「だよね…。もし俺が逆の立場だったら、やっぱりショックだろうし、いや、頭に来て、ブチ切れてるかな」

え?

「たとえば、相手が柏木だったりしたら、一発か二発、ぶんなぐっているかも」

「…」

私は顔をあげて藤堂君を見た。すると、私の顔を藤堂君は思い切り覗き込んだ。
ドキン。うわ！顔、近い！

「ごめん、泣かせた…」
藤堂君は目を細めそう言うと、顔を私の顔から離した。
あ、ああ。驚いた。キスをしてくるのかと思った。
バクバク。心臓がいきなり早くなった。

「ごめん…」
藤堂君がまた謝った。
「わ、私、やっぱり帰る」
「え？」
「今日は、私、きっと1日こんなだろうし、かえって藤堂君に悪いから」
「…俺に？なんで？」

「沈んで、落ちこんで、とても明るくできないから」
「……」
「ごめんなさい」
私は頭を下げて、歩き出そうとした。すると藤堂君は私の手を取って、私を引き寄せた。

え？
うわ！
私、藤堂君の胸にくっついちゃってる？っていうか、藤堂君、私のこと抱き寄せちゃったの？！

「…帰したくないな」
え？

「まだ一緒にいたいな」
え？え？

「どうしたら、落ち着く？明るくなれる？」
「……」
「ショックから立ち直れる？」
そ、そんなこと言われても。あ、駄目だ。藤堂君の胸が真ん前にあって、胸がドキドキしちゃって、顔が熱くって…。

「……」
藤堂君は黙って、私を引き寄せたままじっとしている。私の胸の鼓動は、どんどん早くなるばかりだ。きっとこのドキドキは、藤堂君にも伝わっているはず。

「結城さん…」
藤堂君はすごく小声で私の名前を呼ぶと、私の顔に顔を近づけた。
え？
ドクン！

うわ。うわわわわ。
きゃ～～～～。今、唇に、藤堂君の唇が触れた～～～～！！！！
一瞬だった。かすかにだった。でも、今の、キス…だよね！？

私のファーストキスだよね？！

バッ！私は藤堂君からはねのけ、下を向いて固まった。ドキドキドキドキ。心臓がもっともっと早くなる。
「怒った？」
藤堂君が聞いてきた。私は下を向いたまま、グルグル首を横に振った。

「……」

藤堂君は黙ったまま、じいっと私を見ているようだ。視線だけを感じる。その視線ですら、私の胸の鼓動をもっと早くさせる。

「……なんか、やばいな」

藤堂君の小さなつぶやきが聞こえた。

「全然、違う」

というつぶやきも。

え？何が？何が？！何が違うの？

私はいきなり気になってしまい、藤堂君を見た。でも、今度は藤堂君のほうが顔を背けていて、藤堂君の顔を見ることができなかった。

第47話　ファーストキス

藤堂君は、私に顔を見せないようにしているみたいだ。だから今、どんな表情をしているのかがわからない。

もしかして、違うっていうのはキャロルさんとのキスと違うってこと？

まさか、私とのキスは嬉しくもなんともなくて、がっかりしてしまった…とか。

まさか、私なんか女らしくもないし、興ざめしちゃったとか。

だって、キャロルさんは本当にナイスバディで色っぽかったし。あんな綺麗な外人さんにキスされたりハグされたんじゃ、私なんかごぼうか長ネギみたいなもんだよね。こんな痩せててひょろひょろしただけの薄っぺらい体じゃあ…。

「……」

私、また落ち込んでる。藤堂君とファーストキスしちゃったっていうのに。なんでこうも、すぐに地の底に行っちゃうのかな。

せめて藤堂君、こっちを見て。

ああ、でもこっちを見たら目が思い切り冷めていましたとか、顔がげんなりしていましたとか、そんなだったら地の底どころか、魂抜け出ちゃうから、顔を向けられるのも怖いなあ。

そう思ったら、顔をあげていられなくなり、私はまた下を向きその場に固まっていた。

「……ゆ、結城さん？」

ドキン。藤堂君、こっちを向いたのかな。それで、話しかけてきたんだよね。顔、まだ怖くてあげられない。

「…怒った?」
クルクル。下を向いたまま、顔を横に振った。
「……ごめん、勝手に…、俺…」
藤堂君が言葉に詰まったようだ。

し〜〜ん。しばらく沈黙が続いた。この沈黙すら怖い。
「あ、あの…」
「え?」
ドクドク。違うっていうのが気になる。きっと気になって夜も眠れず、何日も私は悩んでしまいそうだ。

「違うって?」
「え?何が?」
「藤堂君がさっき言ってた、全然違うって、キャロルさんと…ってこと?」
「うわ。それ、口から出てた?」
私は藤堂君の顔も見ないでうなづいた。

口から出てたってことはやっぱり、キャロルさんと全然違うって思ってたってことだよね?
「あ〜〜〜。えっと」
藤堂君がものすごく困っているのがわかる。
だ、駄目だ。心が沈んでいく。

「……ごめん。結城さん、なんか落ち込んでる?やっぱり俺が勝手なことしたから」
「…」
私は少しだけ首を横に振った。落ち込んでいる原因はそこじゃないし。

「…ごめん。結城さん、もしかして初めて…」
「え？」
何が言いたいの？あ、もしかしてファーストキスって聞きたかったとか？
「えっと、ファーストキスだった？」
コクン。当たり前だ。付き合った人だっていないんだから、他の誰かとするわけがない。あ、そうか。藤堂君は違うか。外国に住んでいたら、付き合ってなくてもキスすることもあるのか。
だけど、ずうっと日本に暮らしてるんだもん。挨拶がキスって習慣の友達だっていないんだから、初めてに決まってるじゃないか。
じわ…。藤堂君は違うかもしれないけど！キャロルさんがファーストキスの相手かもしれないけど！わ、私は藤堂君が…。なんて思っていたら、また涙がこみあげてきた。
私は藤堂君が貸してくれたハンカチで涙を拭いた。
「な、泣いてる？」
藤堂君がすごく驚いて聞いてきた。
泣いてるよ。泣きたくもなるよ。だって、私のキスなんてキャロルさんとは全然違うんでしょ？
「……ごめん！」
藤堂君が頭を下げて謝った。
そんな、謝られても…、どうしていいか…。
「結城さんが泣いてて、落ち込んでて…。どうしたら元気になれるかわからなくって…」
え？
「結城さんがこのまま帰るのも、引き留めたくて…」

藤堂君？
「だから、つい…。か、軽はずみだった、俺…」
軽はずみ？って？
「き、キスしてわかった」
ドキン。何を？何がわかったの？わあ、なんだか聞きたくないかも。
キャロルさんと全然違うって？私なんかまったく、キスしたくなるような女の子でもなんでもなかった…とか？！
「……キャロルがキスしてくるのと、まったく違う」
グサ。
「心臓、今もあばれまくってる」
……え？あばれ…まくってる？！
「やばい…」
藤堂君はいきなりその場に、しゃがみこんでしまった。
え？え？え？なんで？
「は～～。結城さんが落ち込んじゃってるのに…」
え？
「まじで、ごめん。泣かせちゃったし。俺、ほんと最低だよね」
ううん。キスされて泣いたわけじゃ…。
「でも、こんな状況なのに…」
それから藤堂君は下を向き、黙り込んでしまった。
な、何？その続き…。こんな状況なのに、何？
気になる。藤堂君。その続き…。
それに真ん前でしゃがみこまれちゃって、私、どうしたらいいのかな。下を向いたままの藤堂君の顔、見れないし…。

ドキドキ。ドキドキ。どのくらい時間たったかな。わ、私、本当にどうしたらいいのかな。

「と、藤堂君？」

小さな声で話しかけた。すると、藤堂君は顔をあげて私を見た。

うわ！真っ赤だ、藤堂君。それにものすごく照れた顔をしている。

「ごめんね？結城さん…」

「う、ううん」

藤堂君はまたぱっと顔を下に向けてしまった。

私は藤堂君の横に、ちょっと距離を置いてしゃがみこんだ。

「…俺さ」

「え？」

ドクン。

「アメリカに行ったのが、3年生の時。キャロルとは家が近所で親同士がなんだか仲良くなって、それでうちにキャロルの家族が遊びに来たり、こっちが遊びに行ったりってしてたんだよね」

「う、うん」

「最初、俺もびっくりした。キャロルの親、お父さんもお母さんも、俺のことハグしたりキスしたりしていつも歓迎するんだ。あ、でもキスはほっぺだけど。でも、驚いていたんだ」

「う、うん」

「そういうのがアメリカなんだって、だんだんとわかってきて、他の家に遊びに行っても、どこのご両親もそうだったし…」

「…」

「キャロルは、特に明るい子で、俺以外のやつでもその頃から平気でハグしてキスしてた。犬や猫にするのと同じ感覚みたいで…」

犬や猫？

「最初は戸惑ったけど、そういうのを見てるうちに、そんなもんかって…。俺も犬や猫にするようなもんだし、まあいいかって」

まあ、いいか？！

「さすがに俺も6年生になったら、抵抗するようになって、キャロルにもやめろって言うようになったんだけど、あいつはまったくそういうの無視してたしさ」

「……」

「その延長で、日本に交換留学で来た今でも、ああいう挨拶を平気でしていると思う」

「う、うん…」

そんな話をされてもな…。それに小学3年生の時からずっとアメリカじゃ、キャロルさんとキスしてたってことでしょ？

「俺、ほんとキャロルとは、犬や猫と一緒って感じで…」

藤堂君はぼそっと、また話を続けた。

「キスしてきたって、抱きついてきたって、ああ、まただよっていうくらいで、なんていうのかな」

「…」

「ドキドキしたこともないんだよね、一回も」

「え？」

「だから、その…。さっき、結城さんにキスして、自分で驚いたっていうか」

「え？」

驚いた？

ちら。藤堂君が私を見た。目が合った。ドキン。私はすぐに目をそらして下を向いた。

「……結城さんって」
ドキン。何？何？何？犬や猫以下なんて言わないよね？！
「可愛いよね」
え？！！！
私はびっくりして思わず、藤堂君を見た。わわ。まだこっちを見てた。それも、じいっと…。
「結城さんの腕を掴んだら、すごく細かった」
ゴボウやネギみたく？

「肩も、すっぽり俺の肩に入るくらい、小さいんだね」
ゴボウやネギみたいに？
「なんか…、すごく線が細くて、そのへんもキャロルと違うんだなって思って」
ギクギク～～～。色っぽさも何にもない？

藤堂君はまた下を向いてしまった。
「私、ゴボウやネギみたい？」
「は？」
私の質問に藤堂君が目を丸くしてこっちを見た。

「細くて、色っぽくもなくって」
「……え？」
「キャロルさんみたいに、女らしくもない…」
「え？」
藤堂君はしばらく私を、目を丸くして見てから、
「俺、そんなこと何も言ってないけど？」
とそのままの表情でぽつりと言った。

「で、でも…」

「違うよ。その逆。キャロルに対しては、女性だって意識したこともなかった。だけど、結城さんは女の子なんだって、すごく意識しちゃって…」
「…」
でも、女の子…なんだ。女性じゃなくて…。
「今、ものすごく、俺…、まいってるんだ…」
……。
「まいってる…って？」
「結城さんに…」
「？？？」
「今さらだけど…」
「？？？」
「前から結城さんのことは、すごく好きだけど…。もっと意識したっていうか、なんていうかさ…」
え？！
か～～～。あ、藤堂君、また真っ赤になった。
「ね？俺の顔赤いよね？」
「うん」
「自覚してる。顔がすごく熱いし。今も心臓あばれてるし。キスしただけでこんなになるなんて、思ってもみなかった。それもちょっと触れただけで…」
え？
「ごめん。本当にごめん。結城さんにとってはファーストキスなんだよね？それって、けっこう女の子にとって大事っていうか…その…。なのに俺、軽はずみにしちゃったし…、っていうか、俺が奪ってもよかったのかな」

う、奪う?え?私のファーストキスを?
「ごめん。嫌だった?だよね。泣いてたもんね…」
違う。
「あ、やばい。やっと冷静になってきた。俺、もしかして取り返しのつかないことを…」
あ、藤堂君の顔がみるみる白くなっていく。

「い、嫌がってないし、泣いていたのは違う理由だから」
「え?」
藤堂君が私を見た。
「藤堂君が違うって言っていたのは、キャロルさんに比べて、私なんて女っぽくもないし、体だって貧弱でごぼうみたいだし、藤堂君、がっかりしたのかなって、そんなことを思って…」

「……」
藤堂君の目が点になった。
「もう私のこと、嫌になっちゃったかなって、そんなことも思っちゃって…」
ブルブル!藤堂君は無言で首を横に振り、
「まさか!そんなこと思うわけない。その逆はあっても、がっかり何て、絶対に…」
と顔をまた赤くしてそう言った。

「…ほ、ほんとに?」
私はこわごわ聞いてみた。藤堂君は黙ってコクンとうなづいてから、顔を赤くしたまま、
「結城さんこそ、ファーストキスの相手、俺でよかった?」
と照れくさそうに聞いてきた。

「え？」
そんなの、そんなの、藤堂君じゃなきゃ嫌だったよ。
バクバクバク。そんなこと私から言えない。とてもじゃないけど、恥ずかしい。私は真っ赤になって、うつむいてしまった。

「ゆ、結城さん？」
藤堂君が、気弱な声を出した。
「と、藤堂君でいいです」
「え？」
わ～～。変な言い方をしたよね？

「今の、無し！」
私が慌ててそう言うと、藤堂君の顔が引きつった。
「な、無しって？」
「だ、だから、藤堂君でいいんじゃなくて、藤堂君がいいっていうか、藤堂君じゃなきゃ嫌だっていうか、藤堂君だから嬉しいっていうか」

あわわ。私、結局言っちゃってる。か～～～。言って顔が火がついたようにほてった。でも、目の前の藤堂君も真っ赤だった。
「そ、そっか。よかった」
藤堂君はそう言うと、また目を伏せた。

じわじわじわ。だんだんと実感がわいてきた。私、藤堂君とキスしちゃったんだよね？
と、藤堂君と…。
うきゃ～～～～～～～。

いきなり恥ずかしくなってきた。私は顔がどんどん熱くなっていくから、両手で顔を隠して顔を伏せた。

バクバク。そうだよ。キスしちゃったんだ。
「結城さん？」
そんな私を見て、また藤堂君が気弱な声で私の名前を呼んだ。
「な、なんか今頃、恥ずかしくなって」
「え？」
「顔、あつ～～～～」
私は下を向いて、顔を隠したままそう言った。
「……」
藤堂君は黙って、しばらく私を見ているようだ。視線を感じる。
「やっぱ、可愛い」
という小さなつぶやきが聞こえた。そのあとで、
「あ、やべ。また口に出てた」
という独り言もしっかりと聞こえてきた。
コホン。藤堂君は咳払いをして立ち上がった。
「そ、そろそろ行く？あ、結城さん、帰らないよね？」
「うん」
私も立ち上がった。
藤堂君はそっと手を私のほうに差し出した。ドキン。私はその手に自分の手を重ねた。
藤堂君が優しく、私の手を握った。
ドキドキドキ～～～～。藤堂君の手のぬくもりだけで、胸がときめく。
「う、わ…」
藤堂君が耳を赤くした。
それから鼻の横を掻くと、

「なんか、手、つなぐだけで照れるね？」
とすごく照れくさそうに笑いながら、私に向かってそう言ってきた。
私は藤堂君をちらっと見て、コクンとうなづいた。

「…！」
藤堂君はそんな私を見て、目を丸くしてからクルッと前を向いてしまった。
え？どうして？
「ゆ、結城さんって、すごく女らしいと思う」
「え？」
どこが？！

「俺、何度もそのたびに射抜かれてるって思う」
は？射抜かれる？
「だ～～～。俺、何を言ってるんだろう？」
「私のどこが女らしいの？どこも女らしくないと思うけど？」

「い、いいよ。結城さん、わかんなくても」
「え？」
「とにかく、俺がまいっちゃってるってことだから、その…。だから、あまり落ち込んだりしなくていいからさ」

「？」
私は少し藤堂君の手を、くいって引っ張った。意味が分からないから、教えて？というつもりで。すると、藤堂君はこっちを見て私の顔を見た。
私がきっときょとんとした顔をしていたんだろう。藤堂君は、
「だから…、俺、他の子なんて目にも入ってないし、結城さんのことだけでいっぱいなんだ。いっぱいどころか、自分でももてあましているくらい、どうしようもなくなってるし」

え？
「…結城さん。そのへん、わかって？」
「え？」
「ああ。このくらいでいい？これ以上、こういう話をしているのもすごく照れる」
「……」

藤堂君はまた前を向いて、ゆっくりと歩き出した。
「はあ…」
藤堂君がため息をついた。
「なんで、こんなに好きになってるのかな、俺」
もしかして今のも、独り言？

「なんでだと思う？」
前を向いたまま、藤堂君が聞いてきた。
「え？」
独り言じゃなかった？

「な、なんでって聞かれても」
困った。ああ、だけど、
「私も藤堂君のことが、すごく好きだけど、それもどんどん好きになってるけど、なんでだと思う？藤堂君」
と逆に聞いてみた。

バッ！藤堂君は立ち止まり振り返って私を見た。わ。真っ赤だ。
「それ、ほんとに？」
「うん」
私がうなづくと、藤堂君はもっと赤くなった。

それからまたクルッと前を向くと、
「顔、あつ…」
とボソッと言った。今度のは独り言だよね？

第４８話　早い展開

藤堂君は、きっとあまり自分の感情を表に出すのが得意じゃないと思う。自分の気持ちを言葉にするのも、苦手かもしれない。
だから普段は、ポーカーフェイスだ。それに言葉数も少ない。

一緒にこうやって歩いていても、藤堂君はあまり話をしてこない。
だけど、私が困ったり、私が悲しがったりしていると、ちゃんと自分が何を思っているのかを、一生懸命に伝えてくれる。
でも、元来それは苦手なことだから、ああやっていつも、顔を赤くしたり、顔を隠したりしながら話してくれるんだろうなあ。

だけど、そんな藤堂君の言葉はすごく信頼できて、すごく嬉しい。

鎌倉でのデートも、キャロルさんの出現であわや悲しいデートになるかと思いきや、藤堂君のキスで幸せいっぱいな1日になった。

翌日、日曜日。藤堂君も部活だし、私も藤堂君会いたさに学校に行った。
絵を描いていても、時々藤堂君を思い出し、胸がキュンってしていた。
鎌倉の帰りの電車で、なぜか藤堂君は黙って私のことを見ていたなあ。あの目に、ドキドキしちゃったなあ。

藤沢の駅に着いたら、藤堂君はまた鼻の横を掻き、
「じゃあ、またね」
と照れくさそうに笑ってた。今、あの笑顔を思い出すだけで、胸がキュンってする。

日記にはキスしたことも書けなかった。だって、もし誰かに見られたらって思ったら…。って、見る人なんかいないんだけど。

いや、わかんないな。最近の私の様子が変なことに、母が気が付いてきたようだし。学校に行ってる間に日記を見られたりしたら、たまったもんじゃないし。

キスしたことは、なんとなく美枝ぽんや麻衣にも言いたくないな。そっと胸の中にしまっておきたい。

う。でも、もし2人に言ったとしても、そんな唇がそっと触れたのなんて、キスのうちに入らないよって言われそう。

昼になった。藤堂君、食堂に来るかな。でも、部員の人も一緒かな。

あ、そうか。部活終わったら送別会か。もしかして昼からするのかもしれないし、行ってもいないかな。

あれ？じゃ、私今日、藤堂君に会えないとか？

それは寂しすぎる！

なんてあれこれ思っていると、美術室にいた部員はみんな、お昼を食べに行ってしまった。

「結城さん」

え？藤堂君？藤堂君が弓道着のまま、美術室に入ってきた。ああ、道着を着た藤堂君ってなんて凛々しいんだろう。特に袴。すごく似合うんだよね！

「これから昼？」

藤堂君は私の真ん前まで来てそう聞いた。

「うん」

「弓道部はもう終わりなんだ。これから着替えて、部室で送別会を

するんだけど、結城さんも来る？」
「ううん。部外者が行っても悪いし、私はいいよ」
私は首を横に振りながら答えた。

「じゃ、俺、これでもう行っちゃうけど…」
「うん。また明日ね」
「……」
藤堂君は黙って私を見て、なかなか出て行こうとしない。あれ？
なんでかな。

「うん、また明日。朝、駅で待ってるよ」
「うん」
「じゃあね」
藤堂君はそう言うと私に一歩近づき、いきなり私の頬にキスをした。

「それじゃ…」
藤堂君はパッと後ろを振り返り、そのまま颯爽と美術室を出て行った。
う、わ～～～～～～。ほっぺにキスされた！
ドキドキドキ。い、いきなりすぎるよ。いつも心の準備ができない。

きゃ～～～。
私は藤堂君の唇が触れたところを手で押さえ、その場に立ち尽くしていた。
それから冷静になり、あたりを見回した。よ、良かった。誰もいない。っていうか、誰もいないから藤堂君は、キスなんてしたんだよね？

なんだか、いきなりの進展で、私の心臓がついていけそうもない。
今にも、ボン！って爆発しちゃいそうだ。
奥手の藤堂君が、キスしてくるなんて…。

ん？奥手？
そういえば、美枝ぽんも麻衣もみんなが藤堂君は奥手だ。国宝ものだって言っていたけど。（あ、国宝ものは私のほうか？）本当に奥手なのかな。

いくら犬や猫にしている感覚だとはいえ、小学校3年生でファーストキスだよ？そのあとも、キスされたり、ハグされたりしてたんだよ？
そんな人が奥手なのかな。

う。なんか頭の中グルグルしてきちゃった。駄目だ。目が回りそうなほどだ。
確か私、奥手なほうがありがたいって思っていたんだった。それが、なんだか展開が早くなってきて、ものすご～～く戸惑っている。
う～～～。でも、嫌じゃないんだ、藤堂君のキス。嫌どころか、めちゃくちゃドキドキしながらも喜んでいる。

藤堂君に今日は会えそうもないし、このまま片づけてもう帰るとしよう。そう思いながら私は片づけを始めた。
そしてなんとなく携帯を見ると、沼田君からのメールが届いていた。

＞穂乃ぴょん、今日、部活？帰りに藤沢に寄れない？
寄れないも何も、家が藤沢ですけど…。
＞もう部活おしまいにして、これから帰るところだよ。
そう送ると、一分もたたないうちに返信が来た。

＞昼飯、どっかで一緒に食わない？
いいのかな。美枝ぽんに悪いような気がするけど。
＞2人で？それとも、美枝ぽんも一緒？
一応そう聞いてみた。すると、意外な返事がやってきた。

＞美枝ぽんとのことを相談したいんだ。
美枝ぽんとのこと？あ、そういえば、最近ちょっと二人の間に何かある感じはしていたっけ。
＞わかった。じゃあ、３０分後に藤沢で。
なんだろうな。喧嘩かな？まさか別れたなんて、そんなことはないよね？！あ、それじゃ、単なる報告か。相談なんだから、別れているわけないね。

藤沢の駅に着くと、沼田君はすでに改札口にいた。そこから、沼田君がよく行くというカフェに入った。
駅から少し離れているので、うちの高校の生徒もいないだろう。小さめのカフェで、メニューも少な目。その中から私は食べやすそうなミックスサンドを頼んだ。沼田君はいつも同じものを頼むらしく、「またナポリタンね！」と店員に言っていた。

「相談って？」
水を飲んで一息ついてから、私は沼田君に聞いた。
「…あのさ、これ、絶対に美枝ぽんには言わないでほしんだけど」
「うん」

「…俺、どうも美枝ぽんと合わないような気がしてきたんだ」
「え？！合わないって？」
何が？
「一緒にいて、最近、窮屈でさ」

「窮屈？」

「穂乃ぴょんはないの？そういうの…。司っちといて疲れたりとかって」

「美枝ぽんといると疲れるの？」

「気を使っているからかな、俺が…」

「でも、好きなんでしょ？」

「……」

え？なんで何も答えず、下を向いちゃったの？沼田君。

「それも、最近、よくわかんなくて」

「…好きかどうかを？」

「は～～。こんなことで、悩んだりもするんだな」

「……」

ずっと片思いしてたのに？付き合ったら、違ってましたってこと？

私は何も言わず、また水を飲んだ。こんな相談をされても、どうしていいものやら。

「穂乃ぴょんはどう？司っちとうまくいってる？」

「う、うん。多分」

「多分？」

「ううん。うまくいってる」

沼田君の前であまり、のろけられないなと思い、多分なんて言ってしまった。

「そっか。うまくいってるのか」

「……」

沼田君、暗い…。

「どういうところが合わないって思ったの？」

「…合わないっていうか、俺、すごく美枝ぽんにいろんなことを合わせようとしてるんだよね」
「それで疲れたの？」
「美枝ぽんといると、明るくしてないとならないし、言葉もすごく選ぶし、そういうのも最初は付き合ってるんだから、このくらいは当たり前、みたいに思ってたんだけど」

「うん」
「だけど、どんどんどんどん、俺が俺じゃなくなっていく気がしてさ」
「じゃあ、沼田君って、どんななの？どんなのが沼田君で、今はどう違ってるの？」
「……俺は…」
沼田君はしばらく黙り込み、
「けっこう暗いかな」
とボソッと言った。

「え？嘘～～。明るいじゃない、いつも」
「まじでそう思う？穂乃ぴょんと恋の相談してた時って、俺らよく暗くなってたじゃん」
「あれはだって、私が暗かったからでしょ？それに合わせていたんじゃないの？」
「いや、合わせてない。っていうか、あの時は思い切り、素でいたよ、俺」
そうなの？

「じゃ、学校では？いつも明るいよね」
「ああ、まあね。それはいつもの俺かもしれないけど、だけど、暗い時もあれば、静かな時もあるしさ。それをいつもいつも、明るく前向きではいられないでしょ？」

「じゃあ、美枝ぽんの前でも、静かにしてたらいいんじゃないの？無理したりしないで」

「…うん。俺もそう思う。静かにしてたりもしたし、たまに愚痴ったり、暗い話にもなった。だけど、そのたびに美枝ぽんが、俺らしくないとか、もっと前向きにもっと明るく考えてって言うんだよね。それが沼田君でしょ？って…」

「美枝ぽんも明るくて前向きだもんね」

「…そう。それが俺は好きだった。だけど、それが今はきつい」

「どうして？」

「きついんだよ。多分、俺と違うんじゃないかな」

「…一緒にいてきついの？」

「うん」

沼田君はため息をついた。

「こんなふうにね、美枝ぽんの前でため息なんてついたら、一緒にいてつまらないの？って怒られるんだ」

「それは私だって、藤堂君が一緒にいてため息をついたら、嫌だと思うな」

「いや、それはいきなりだったり、理由もなく…でしょ？たとえばさ、司っちが部活で大変なんだよ、とか、テストで悪い点取っちゃったんだよ、って落ち込んでてため息をついたとしたらどうする？」

「う～ん。あまりそういう弱音を吐きそうもないけど、もしそんなことを言ってため息をついたら、大丈夫？って聞くか、じゃなかったら、黙ってただ横にいるかな。って、そんなじゃ私、何の役にも立ってないね。やっぱり、そういう時は明るく励ましてあげないとだめなのかな」

「いや、黙って隣にいてくれるだけでもいいと思うけど？」
「…美枝ぽんは？」
「だから、つまらないのかって怒ったり、もっと明るくしてって言ってきたりする」
「…励ましてるんじゃなくって？」
「うん。ちょっと違うと思う」

「…そうなんだ」
「俺が変なの？司っち、そんなに弱音吐いたりしないの？」
「うん」
「…そっか。そうだな。強そうだもんな、司っちは」

「わかんない。強いんじゃなくて、強がってるのかもしれないし、もしかすると、弱さや辛さを誰かに見せる術を知らないのかもしれないし」
「え？どういうこと？」
「藤堂君って、あまり自分の気持ちを表さないでしょ？あれ、ただ単にどう表現したらいいか、わからないんじゃないかなって思ったんだ」

「でも、顔に出てることあるよ？」
「うん。あれはきっと無意識で。でも、よく感情を抑えてることあるし」
「ああ、そうかもね。顔、無表情にして、動じていないふりとかしてそうだ」
「…私はもっと、見せてほしいような気もするの」

「何を？」
沼田君がそう聞いたときに、サンドイッチとナポリタンが運ばれた。そしてすぐに、アイスコーヒーとオレンジジュースも店員が持

ってきた。
「ご注文はおそろいですか?」
「はい」
沼田君が明るく答えた。

「いただきます」
私はサンドイッチをバクって食べたが、沼田君はまだ食べようとしない。
「で、司っちの何を見せてほしいの?」
あ、さっきの話の続きか~。

「嬉しいとか、悲しいとか、辛いとか。そういう感情や気持ち。抑えないで、見せてほしいなって」
「嬉しいってのはいいけど、悲しいや辛いってのは、穂乃ぴょんが辛くならない?」
「…わかんない。でも、藤堂君が手を怪我した時、なんの役にも立てないのが悲しかった。私に苦しいとか、辛いとか言ってくれた方がよかったな」

「司っち、言うかな」
「わかんない」
「…そっか」
沼田君はやっとナポリタンを食べだした。食べだすと、あっという間にぺろりと食べてしまった。

沼田君はテーブルの上にあった紙ナプキンで口をふき、アイスコーヒーをゴクンと飲んだ。
「俺、前から思ってた」
「何を?」
「そういうところが、穂乃ぴょんのすごいところだよなって」

「え？」

どこが？！

「健気で一途。司っちは幸せ者だよな」

「そ、そうかな」

「…穂乃ぴょんといると、司っちって癒されるんじゃない？」

「ど、どうかな」

「俺は癒されるよ」

「誰といると？」

「だから、穂乃ぴょんといると」

「嘘だ～～。暗くってじめじめしてて、癒される感じじゃないでしょ？逆に怒ってたじゃない。私があまりにも後ろ向きで」

「…あんときにはわかんなかったんだよ。でも、聖先輩の言ってたことも、最近やっと理解できた」

「聖先輩の言ってたこと？」

「そのままでいいんじゃないかなって、前に食堂で水ぶっかけた時、言ってたでしょ？」

「ああ、あの時。うん。すごく嬉しいことを言ってくれた」

「無理に明るくふるまったり、無理して好きになってもらおうとしたりしないでもいいんだ。そのまんまの俺を好きでいてくれて、そのまんまの相手を好きでいられたらそれでいいんだって、最近そう思うよ」

「そのままの美枝ぽんは駄目なの？」

「…そうだね。きっとそのままの美枝ぽんだと、疲れるんだ」

「…そっか」

やっぱり、合う、合わないって相性があるものなのかな。好きだ

けじゃだめなのかなあ。
「俺にはきっと、穂乃ぴょんみたいな子がいいんだろうな」

「……私？な、なんで？」
「一緒にいて安心する。癒されるし、ほっとする。疲れないし、すごく楽だ」
「それ、好きっていうのとは違わない？」
「違わないんじゃない？」

「そうかな。それ、友達だよ、きっと」
「男と女の友情って、あると思う？」
「うん。あ、わかんない。わかんないけど、でも、あってもいいと思う」
「……」
沼田君はじっと私を見た。

「それ、絶対、恋じゃない。そりゃ、無理したり、自分を誤魔化すのは違うと思うけど、好きな人のために何かをしようとしたり、歩み寄ろうとするのは、別に悪くはないと思う」
「だけど、疲れない？」
「好きな人のためなら、疲れないよ、きっと」

「じゃ、俺、別に美枝ぽんのこと好きだったわけじゃないのかな」
「え？」
ドクン。なんでそんなこと言うの？なんだか、悲しくなってきた。
好きじゃなかったの？恋じゃなかったの？ドキドキしたり、沈んだりっていう一喜一憂していたのは、恋じゃないの？

第４９話　隣の席

カフェを出た。沼田君は、
「話、聞いてくれてサンキュー」
と作り笑いでそう言った。
「…私も、よくわからないけど」
「え？」

「美枝ぽんも無理してるのかもしれない」
「どういうこと？」
「なんとなく…。たまに無理して明るくしてたり、無理に前向きになろうとしているところが見えるんだ」

「じゃ、俺と一緒？」
「そうかも…。あ、でも、わからないよ？」
「……うん」
沼田君は一瞬黙り込み、そしてまた笑顔で、
「じゃあね」
と私に手をふって、くるりと背中を向けた。

その背中を見ながら考えた。合う、合わないってあるのかな。
だから、別れちゃうカップルもあるのかな。
すごく好きだって思っていても、駄目になっていくものなのかな。

ズキン。私たちは？
沼田君と美枝ぽんがこれからどうなっていくのかも、すごく気になったが、自分と藤堂君の未来も、一気に怖いものに感じてきた。

藤堂君と別れたり、離れるのは嫌だ。ずっと一緒にいたいよ…。

そんな気持ちを抱えながら私は家へと向かった。

翌日、家を出てからもぼ〜〜っとしてしまった。沼田君のことをまさか、藤堂君に相談もできそうもないし…。麻衣なら話しても大丈夫かな。いや、やっぱり誰にも言わないほうがいいよね。

今日、美枝ぽんの顔を見るのが辛いな。

電車を降りて改札を通ると、すぐに藤堂君の姿が目に付いた。はあ、今日もかっこいいよ。

私は早足で藤堂君に近づいた。

「あ、おはよう」

藤堂君は私が真ん前まで行って、ようやく私に気が付いた。何か、考え事かな？

「おはよう。藤堂君」

私がそう言うと、藤堂君は照れくさそうに笑った。ああ、またこの笑顔だ。キュン！

クラスの女子が横を通って行った。ちらっとこっちを見たが、私たちには声をかけてこない。

だけど、話声だけが聞こえてくる。

「毎朝、一緒に登校してるんだね」

「どんな話をしてるのかな」

「話、しないんじゃない？」

う〜〜わ〜〜〜。なんで、そう言う話を、聞こえる範囲でするかな。ちょっとむかつく。

藤堂君を見た。すると、じっと私のことを見ていた。ドキン。

「な、なあに？」

「え？」

あ、なんでもないのか。じっと見てると思ったのは私の思い過ご

し？

「おはよう、藤堂。おはよう、結城さん」
弓道部の人だ。この人は必ず声をかけてくるなあ。
「今日も一緒に登校？仲いいよね」
そう言うとその人はさっさと行ってしまった。

藤堂君を見ると、一瞬照れて耳を赤くしていたが、すぐに顔はいつものポーカーフェイスになった。
「藤堂君って、いつからポーカーフェイス？」
「え？いつって」
「中学の頃から？」
「うん。ああ、もっと前からかな」

そうなんだ。
「父親がそんな感じなんだ。よく母親に、司は父親似よねって言われるよ」
「へえ。お父さんもポーカーフェイスなの？」
「うん。あの人は何があっても動じない。ちょっと変わってる」
「？」

「剣道、柔道、合気道を習ってた。武士道ってのがやたら好きで、そういう類の本がうちには何十冊とあるし、俺も読まされてた」
「へ～～～～」
「映画もそんなものばっかり見せられてた」
だから、好きな映画が侍の映画なのか。

「ラストサムライって知ってる？」
「うん。あ、でも見たことはないな」
「あれも、好きだよ、父さん。アメリカでは向こうの子供たちに合

気道を教えてたんだ。子供もその親も、父さんのことをすごく尊敬しちゃって…。なんか武道ができるってだけで、もてはやされるんだよね」

「ふうん。藤堂君は合気道しなかったの？」
「してたよ。その道場も行ってたし」
「そうなんだ」
「でも、中学は陸上に入った。父さんに武士道のことを教えてもらってた頃は、わけわかんないし、あまり興味なかったんだ。それよりも俺は走るのが好きだったし」

「走るのが？」
「…ストイックってよく言われる。黙々と走ってるのとか好きなんだよね」
「へえ…。あ、長距離だったんだっけ？」
「うん」

「…すごいな。私、マラソンとか嫌いだし、尊敬しちゃうな」
「そんな尊敬するようなことじゃないよ。ただ、一人の世界にいられるし、そういうのが好きってだけだよ」
「ふうん」

「…武士道っていうのはまだよくわからないけど、弓道してから、日本の伝統的なものには興味を持つようになったかな」
「……」
「夏休み、部活が5日間休みの日があるんだ」
「うん」

「その時は、どっか旅行にでも行こうかと思っている」
「旅行？」

「うん。日本のどっか」
「一人で？」
「うん」

すごい。一人旅か。いいなあ。一緒に行きたいなあ。
…って、一緒に旅行っていったら、一緒に旅館に泊まるってことで…。きゃあ、私、何を考えてるの。
一気に顔がほてった。赤くなったのをばれないように、ちょっと下を向いた。

「何の話をしてたんだっけ？ああ、俺のポーカーフェイスか」
「うん」
「…あまり感情を出さないようにする。いつも平静。それが父さんの教えだったから、それでこうなったかな」

なるほど。お父さんの影響だったんだ。なんだか、藤堂君の歴史をちょっと垣間見れたような気がするな。
なんて、実際のことろはまだまだ知らない藤堂君がいるんだろうけど。
家族といる時の藤堂君。一人でいる時の藤堂君。そんないろんな藤堂君をまだまだ私は知らないんだ。

学校に着くと、教室にはもう美枝ぽんも沼田君もいた。沼田君は男子とふざけていて、美枝ぽんはすでに席に着いていた。

「おはよう」
私も席に行き美枝ぽんに声をかけた。美枝ぽんは明るく、
「おはよう」
と返してきた。でも、目が真っ赤だった。まさか昨日泣いたとか？

まさか、もう別れ話をしてたりして？
「寝不足？」
わざとそんなことを聞いてみた。すると、
「うん。昨日漫画ずっと読んじゃって、寝たのが朝の3時なの」
と美枝ぽんが作り笑いをして言った。それ、本当のことかな。

美枝ぽんは自分の弱さをあまり見せない。それどころか、弱さや暗さは悪いものだと思っているような気もする。
私なんてすぐに落ち込むし、暗いわ弱いわで、よく美枝ぽんが私の友達でいてくれてるよなって、時々思う。

その日朝のホームルームで、
「席替えをする」
と突然田島先生が言った。すでに先生はクジを持っていて、一人ずつクジを引いて、さっさと席を移動させられた。ほんと、この先生って、いきなり何かをするのが好きだよなあ。

「うっそ。一番前？」
麻衣が嘆いている声が聞こえた。それから、沼田君の、
「俺もだ」
という声も。

私はど真ん中。美枝ぽんは廊下側の一番後ろ。そして藤堂君は…。ドキドキ。近くになれたらいいのに、と思ったけど、残念。一番後ろの窓際から2番目だ。
ああ、これじゃ、視界の中にも藤堂君は入ってこないじゃないか。ガックシ。

席を移動しようとカバンを持って歩き出すと、私のところに一人の女子がすっとんできた。えっと何さんだっけ？確か、香苗ってい

う子の友達の、ああ、望さん。誰かが2人が並ぶと「望かなえ」だって言っていたっけ。

「結城さん、席どこ？」
「私、教室のど真ん中」
「替わって～～。お願い～～」
「え？どうして？」
ど真ん中がいいの？

「私。窓際の一番後ろ」
え？そこって藤堂君の隣？！私の胸がいきなり舞い上がった。
「とてもじゃないけど、あんな席にいたら私1日で登校拒否になりそう」
望さんが必死な目でそう言ってきた。
「どうして？窓際だから？」

「違う。あの席、前はずっとだんまりの岩倉さんだし、隣は藤堂君だし、そんな二人に挟まれたら、話す相手もいないし…、毎日が暗くなる～」
ああ、そっかあ。藤堂君、女子と話さないもんなあ。

「藤堂君、怖いし。隣りにいるだけで威圧的だし…。って、ごめん。結城さんの彼氏だっけ？」
「…い、いいのかな。席、交換しても」
「みんなしてるって！お願い！」
「うん、いいよ」

「よ、よかった～～～～」
望さんはめちゃくちゃ喜んで、私に何度もありがとうと言って、席に座りに行った。

私もカバンを持って、藤堂君の後ろを通過して、窓際の席に着いた。
「え?結城さん、ここ?」
藤堂君がびっくりして目を丸くした。か〜〜。私は顔が熱くなった。
「席、替わってもらっちゃった」
そう言うと、藤堂君のほうが真っ赤になった。
「そ、そうなんだ」
そう言ってから、藤堂君は目を伏せた。それからまた私を見ると、すごく小さな声で、
「やばい。授業まともに受けられるかな」
と照れながら言った。

顔、藤堂君の顔、照れくさそうな笑顔…。可愛い〜〜〜。キュン!こんな顔を毎日隣で見れちゃうの?ここ、天国じゃない!
ああ、望さん、ありがとう。私の望みを叶えてくれて!なんてわけのわかんないことまで、思ってみたり…。

ドキドキ。隣りにいるって言うだけで胸が高鳴る。
前を向いていても、視界に藤堂君が入ってくる。ドキドキ。横顔がかっこいいよ〜〜。
ちら。藤堂君のほうを見てみた。すると藤堂君も私のほうに視線を移した。わ!目が合った。
そして同時に、目を伏せた。

く〜〜〜。照れる!もう一回藤堂君を見てみた。あ!耳が真っ赤だ!藤堂君も照れてるんだ。
く〜〜〜〜。幸せすぎちゃうよ〜〜〜〜。

授業が始まった。英語だ。藤堂君当たらないかな。すぐ隣であの流ちょうな英語を聞いてみたい。なんて思っていたら、
「次のところ、結城、読んで訳せ」
と私が当たってしまった。

え?!
私は慌てて立ち上がったが、
「や、訳までわからないよ」
と小声の独り言を言い、それからしどろもどろで読みだした。ああ、隣に藤堂君がいるのに恥ずかしい!そんな藤堂君はさっきから、何やら忙しそうにペンを走らせている。

「結城、ちゃんと予習して来たんだろうな?今のところ、訳してみろ」
先生がしかめっ面をしてそう言った。ああ、あまりにも読み方がひどすぎるからか…。
困った。訳…。ここ、特に難しいところ…。と、真っ青になっていると、
「結城さん」
と藤堂君がそっと自分の教科書を私の机に置いた。

あ!私が読んだところ、全部和訳が書いてある。そうか!今、書いていてくれてたんだ!
感激!!!
私は藤堂君が訳してくれているのを、そのまんま読んだ。
「よし、完璧だ。なんだ。読み方はぼろくそだったが、ちゃんと予習はしてきたようだな」
ああ、良かった。ほっとしながら私は席に着いた。

次の人が当てられ、その人もしどろもどろになって読み始めた。

「藤堂君、ありがとう、助かった」
私はそっと藤堂君に教科書を返した。
「うん」
藤堂君はただ一言そう言うと、こっちを見てにこっと微笑んだ。

キュン！
嬉しい。隣りって、いい！！！！！

次の時間は体育。男子はサッカーを校庭で、女子は体育館で創作ダンスだ。
ただでさえ、創作ダンスは苦手なのに、そのうえ藤堂君のサッカーをしている姿が見れないだなんて…。

暗くなりながら、更衣室に行った。すると、
「結城さん、席、ありがとう。あ、もしかしてあの席で、暗くなってるの？」
と望さんがすすすっと私に近寄り小声で聞いてきた。

「え？ううん。あの席に替えてくれてありがとう」
私はそう望さんに答えた。
「ほ、ほんと？あの席で大丈夫？前の岩倉さん、暗いでしょ？」
「さあ。まだ話したことないし」

「きっと一回も口をきくことはないと思うよ。あの人、誰とも話さないから」
「そうなの？」
「藤堂君は？」
「…」
あ。やばい。今、にやけそうになった。

「藤堂君は、いろいろと授業でも助けてくれるから。さっきも英語の訳、教えてくれたし」
「え？そうなの？！」
あ、そうか。望さん、私よりも前のほうの席だし、後ろは見れないのか。
「藤堂君は、優しいから」

私の言葉に、そのへんにいたクラスの女子が同時に振り返った。
「藤堂君が優しいの？」
「あの、藤堂君が？！」
わ。しまった。言わないほうがよかったかも。

「やっぱり、彼女には優しいんだ」
「そうだよねえ。１年の時から藤堂君って結城さんが好きだったんでしょ？」
「でも、想像つかない。優しい藤堂君って！」
「笑顔も怖そうだもんね」
「怖そう～～～～」

ひどい。怖くないもん。めちゃくちゃ可愛いんだからね！
と心の中で言ってみた。でも、口には出さない。だって、可愛い藤堂君を知られたくないもん。

創作ダンスが終わり、私は麻衣と一緒に更衣室に戻った。今日は美枝ぽんは、私たちにあまり話しかけてこない。
やっぱり、おかしい。

「ね、穂乃香。美枝ぽんと沼っち、どうしちゃったの？」
麻衣が私にこっそりと聞いてきた。あ、麻衣も気が付いていたのか。

「なんか、変だよね？」
「美枝ぽん、目も赤いし…。今日、まったく沼っちと話してないよ。喧嘩？」
喧嘩ならいいけど、もしかしてもしかすると、別れたのかもしれないよなあ。

はあ。それを考えると、ちょっと暗くなる。藤堂君と席が隣になって浮かれてたけど、沼田君と美枝ぽんのことは、そうそう明るくなっていられないような問題なんだよね、きっと。
とか言いつつ…。私は自分の席に戻ると、すでに隣に藤堂君が座っていて、沼田君のことは頭の中からすぽっと消え去り、ウキウキドキドキでいっぱいになってしまった。

ガタン。席に着く。藤堂君の横顔が視界に入る。藤堂君は体育をしたからか、シャツのボタンを3個くらい開けたままだ。
わあ。藤堂君の鎖骨が見えた。ドキ。ああ、こんなことでドキッてしているなんて！

「顔あつ～～～」
私は思わず、下敷きで顔をあおいだ。でも、勢い余って下敷きが手からすっとび、前の席のところまで飛んで行ってしまった。
前の席は岩倉さんだ。取ってくれるかな。とちょっと待ったけど、岩倉さんはまったく無視をしている。

しょうがない。と席を立とうとすると、藤堂君がすっと立ち上がり、私の下敷きを取ってしまった。
ガタ…。
下敷きを取る時、藤堂君は岩倉さんの椅子にぶつかった。

「ごめん」

藤堂君は無表情で岩倉さんに謝ると、下敷きを私の机に置いた。
「ありがとう…。ごめんね？」
わざわざ拾わせちゃったみたいだ。私…。

「ううん」
藤堂君は一言だけそう言うと、またにこっと微笑み席に着いた。
すると、岩倉さんがちら～～っと藤堂君のほうを見た。
それと同時くらいに、岩倉さんの隣の席の男子もなんとなく後ろを向いた。

「なに？手塚」
手塚って名前なんだ。初めて知った。
「いや、別に」
手塚君はそう言いつつも、まだこっちを見ている。岩倉さんはもう前を向いてしまっていた。

「なんだよ？」
藤堂君はまた、ぶっきらぼうに手塚君に聞いた。
「お前、相変わらず愛想ないなって思ってさ」
「え？」

「1年の時もそうじゃん？女子との会話、いつも一言で終わってたけど、今もなんだな。それも彼女にもそうなんだな」
あ、1年同じクラスなんだ。藤堂君と…。

「聞いてんなよ」
藤堂君はもっとむすっとした。あ、もしや照れ隠し？
「結城さん、大丈夫なの？こんなやつで…。怖くないの？」
手塚君が私に聞いてきた。私は思わず、ブルブルと首を横に振った。

なんでそんなことを言って来るんだろうと、私はそのあと首をひねった。藤堂君は今日、ずうっと優しいよ？そりゃ、「うん」と「ううん」くらいしか話してないけど、そのあとの「にこ！」がめちゃくちゃ可愛いのに…。

って、ああそうか。手塚君も前を向いてるから、話す内容は聞こえても、表情まではわからないのか。

「なんか、結城さんって健気だね」

手塚君がそう言って前を向いた。

健気？

どこが？よくわかんないけど、私はただただ、隣にいられる喜びをかみしめているだけだもん。

藤堂君を見た。藤堂君も私を見た。藤堂君の目は、ちょっと不安げ。あ、もしかしてもしかすると、何か心配している？

私はメモ帳を出して、そこに書き込み、藤堂君の机の上に置いた。

「…」

藤堂君は黙ってそれを読むと、顔を一気に赤くした。あ、やっぱり…。そしてちらっと私を見ると、メモ帳に何かを書き込み、私の机に置いた。

『藤堂君の笑顔で、ちゃんと優しさ伝わってるよ』

『よかった』

たった一言だけの返事。でも、真っ赤の藤堂君を見ると、照れているのがよくわかる。

可愛い。可愛いっていうのを伝えたい。伝えちゃう？

『藤堂君が照れているのも伝わってる。藤堂君、可愛い』

そう書いて、メモ帳を藤堂君の机に置くと、藤堂君はそれを読み、パッと私のほうを向き、それからパッと、今度は顔を隠してしまった。

あ～～～。照れた、照れた。可愛い～～～。

しばらく藤堂君は下を向き、顔をあげないでいたが、しばらくしてメモ帳に何かを書きだし、私の机に置いた。

『からかってる？こういうの書いてこられると、もっと照れるからやめて』

か～～わ～～～い～～～。駄目だ～～～。

私はしばらくメモ帳の藤堂君の字を見て、にやけるのを抑えていた。それを何気に藤堂君は横目で見て、

「暑いな。ここ…」

と言いながら、下敷きで顔をあおぎだした。

第５０話　素直に

昼休み近くになり、お腹が鳴りそうになった。わ、やめてくれ。ここで鳴ったら、藤堂君に聞こえちゃうよ～～。頼む～～。

そうか、隣って嬉しいこともいっぱいあるけど、こういう困ったこともあるんだな。大あくびもできないし、ぼけっとした顔も見せられない。

視界に入る藤堂君の横顔は、今日も凛々しい。

４時限目は歴史。とても苦手だ。歴史自体は嫌いじゃないけど、どうもこの先生の授業は面白みがないので、私はいつも眠くなってしまう。だけど、隣に今日は藤堂君がいるから、全然眠くはならない。

「プリント配ります。後ろの人に渡してくださいね」

先生はいつも穏やかな口調の５０過ぎの男の先生。あまり生徒を当てて答えさせることもないし、淡々と授業をするので、ほとんどの生徒がうつろな目をして授業を受ける。

だけど、そんな歴史の授業も藤堂君は凛々しい顔で受けるんだなあ。

プリントが回ってきた。岩倉さんは、ゆっくりと腕だけ回し、下を向きながらプリントを渡してくれた。

「ありがとう」

そう言うと、岩倉さんは黙って、顔だけ少し上げるとちょっとだけ目線をあげ、また前を向いた。

あれ？今、岩倉さんの目線は藤堂君に行っていませんでしたか？

何気に藤堂君を見ると、藤堂君はちょうど手塚君からプリントを

受け取ったところだった。
「はいよ、藤堂」
「ああ、ありがと」
藤堂君は無表情なまま、プリントを受け取った。

「なあ、藤堂」
手塚君が椅子をほんの少し後ろにずらし、藤堂君に声をかけた。
「お前、養護の桂子ちゃん、知ってる？」
「うん」

「あ、そっか。腕怪我したし、保健室行ってるか」
「ああ」
「噂は聞いてる？」
「なんの？」
「柏木とできてるって噂」

「…知らない」
「そういうの桂子ちゃんから聞いたことある？」
「ねえよ。そんなに話したこともないし」
「…お前は迫られたことないの？」

「誰に？」
「養護の桂子ちゃん」
「ないよ」
「そっか。やっぱり、桂子ちゃんにも好みのタイプがあるのか」
「…」

藤堂君は黙って、プリントを読んでいる。
「柏木とできてるって噂もあるけど、実は聖先輩狙いだっていう噂もある」

「…」
藤堂君は返事すらしない。きっと興味がないんだろうなあ。

聖先輩を狙ってたって、聖先輩って保健室嫌いなんでしょ？それにあんな可愛い彼女いるんだし、絶対に無理なんじゃないかな。
「体育の時間に聖先輩が怪我してさ、でも保健室嫌いだからそのまんまにしてたらしくって、そうしたらわざわざ教室まで桂子ちゃん、傷の手当てに来たらしいよ」

え。本当？
「わざわざ来ると思う？」
「怪我してたからだろ」
「たいした怪我じゃなかったって」
「誰かが呼んだんだろ？」

「…お前とこういう話をしても、盛り上がらないからつまらないよな」
「じゃあ、するなよ」
手塚君は、つまんねえと言って、椅子をもとの位置に戻した。そしてちょっと左側を見て、
「こっち見てんなよ。気持ち悪いなあ」
と岩倉さんにそう言った。

ええ？！何よ、それ。そんな言い方しなくたっていいじゃん！なんだかムカつく。とそう思った次の瞬間、
「言葉、気をつけろよ」
と藤堂君が手塚君の背中をこつきながら言った。

「あ～？」
手塚君がうるさそうに振り向いた。すると藤堂君は、いつもより

もさらに迫力ある怖い顔をして、
「そういうことを簡単に口にするな。言われたら傷つくってお前だってわかるだろ？」
と低い声で手塚君に言った。

手塚君はその威圧的な声と、怖い顔でひるんだらしく、おとなしく前を向いた。
すご～～～。そうか。こういうところが怖がられてるところなのね。でも、藤堂君、かっこいいって思っちゃった。

岩倉さんはほんのちょっと後ろを見て、藤堂君のほうに目線を向けたが、パッとまた前を向いてしまった。
藤堂君はそんな岩倉さんのことを見向きもせず、さっき配られたプリントを読んでいる。

「……」
藤堂君、かっこいい。
「何？結城さん」
ドキン。
「え？」

「さっきから、こっち見てるけど、何？」
藤堂君がプリントを見たまま聞いてきた。
「わかっちゃった？」
「わかるって」

藤堂君はちらっと私を見た。
「ごめん。プリントを見てるのに、邪魔した？」
「いや、そういうわけじゃ…」
藤堂君は耳を赤くした。あ、ずっと見てたから照れたのかな。

私は口にするのは恥ずかしいから、またメモに書いてそれを切って、小さく折り畳み、先生に気づかれないよう藤堂君の机に置いた。
藤堂君はそれを机の下で広げて読んで、また赤くなった。

「だから…」
と何かを言おうとして、それからその切ったメモに何かを書き込み、私のほうにそっと手渡してきた。
あ！メモを受け取る時、手が触れちゃった。きゃあ。それだけでドキッとした。
ああ、もう、私ってば。もう手をつないで歩いたりもしているのに、こんなことでドキッとしちゃうなんて、我ながら呆れちゃうよ。

メモには、私が書いた『藤堂君かっこいいから見惚れてた』という文字の下に、『からかわないように！』という藤堂君の文字が書かれていた。
からかっていないのに。本気なのに。だって、藤堂君本当にかっこいいんだもん。

はあ。あ、いけない。今もまたため息つきながら、藤堂君に見惚れてたよ…。やばい、やばい。
私は前を向いた。するとまた岩倉さんがそっと斜め後ろを向き、藤堂君に目線をやっていた。
もしや、まさか、藤堂君のことが好き?とか?！

昼休み、麻衣が私たちの席にやってきた。
「いいな、一番後ろ。私先生の真ん前だからこれから授業中居眠りもできないよ」
「いや、意外とあそこらへんは盲点だよ。先生って一番前の席の人のことはあまり見てないから」

と藤堂君は冷静に麻衣に言った。

「沼田君は？」

「うん、それが今日は俺、他の奴らと食べるって…」

「じゃ、美枝ぽん」

「まだ席にいるから、私誘って来るね」

「……やっぱり、変だね？八代さんと沼田」

藤堂君が麻衣の後姿を見ながらそう言った。

「う、うん」

私はなんて言っていいかわからず、ただうなづいた。

美枝ぽんも一緒に食堂に移動した。美枝ぽんは作り笑顔をずっとしていて、こっちのほうが逆に気を使ってしまった。

「…沼田と何かあった？」

しばらく和やかにお昼を食べていたのに、いきなりずっと黙っていた藤堂君が口を開き、その場を凍り付かせた。

「…」

美枝ぽんの作り笑顔が一瞬にして消えた。麻衣は、藤堂君の顔を見ながら、目で何かを訴えた。そんなこと聞いちゃだめだよって、そう言っているようだ。

「喧嘩？だったら、早くに仲直りしちゃえば？」

そんな麻衣の目の訴えに気が付かなかったのか、気づいても無視したのか、藤堂君は話を続けた。

「…喧嘩じゃない」

美枝ぽんが暗い声でそう言った。

「沼っちが、少し距離を置こうって言ってきたの」

わあ、そうか、そんなことを言っちゃったのか。

「なんで急に？」
麻衣が驚いてそう聞くと、
「急じゃないよ」
と美枝ぽんはまた作り笑顔でそう答えた。

「…無理して笑わないでもいいよ」
藤堂君がぼそっとそう言った。あ、作り笑いをしていたことに、藤堂君も気が付いたんだ。
「無理してない。だからみんなもあまり、暗くならないでくれる？こういうのって苦手なんだ」
美枝ぽんがそう言うと、いきなり声をもっと明るくさせ、
「他のこと話さない？そうだ。麻衣ってバイトどうなの？うまくやってるの？」
とそんなことを言いだした。

「……」
藤堂君の顔が思い切り無表情になった。それを見て美枝ぽんが顔を引きつらせた。あ、怖かったのかな、もしかして。
「み、美枝ぽん。よかったら私たち、何があったか聞くけど？」
私は、美枝ぽんにドキドキしながら聞いてみた。美枝ぽんの反応がちょっと怖かった。

美枝ぽんは一瞬、眉をしかめて黙り込み、すぐにまた表情を明るくして、
「なんか、合わないのかも、私たちって」
と軽い感じでそう答えた。
「合わないって？」
麻衣が聞いた。

「沼っちってもっと明るくって、楽しい人かと思ったの。でも、違ってた。なんだか美枝ぽん、がっかりしちゃったんだ」
美枝ぽんはぎこちなく笑って、シナリオ本を棒読みでもしてるかのような口調でそう言った。
「…」
私たちは何を言っていいかわからず、黙り込んだ。藤堂君はさっきよりもさらに、表情を硬くして黙り込んでいる。

「あ、ごめんね？藤堂君は沼っちと仲いいんだもんね？明日から私が昼休み抜けるから、沼っちとみんなでお昼を食べてよ」
「…いいの？」
藤堂君が聞いた。
「うん、いいよ、私は。他の友達と食べるし」

「そうじゃなくって、別れちゃってもいいの？」
「え？」
「本当に沼田に愛想つかしただけ？」
「そうだよ。それだけだよ。なんでそんなこと聞くの？」

美枝ぽんの顔色が変わった。声も低くなった。
「…だったら、作り笑いやめたら？」
わ。藤堂君、そんなことはっきり言っちゃう？
「な、なんでそんなこと言うの？だいたい私、作り笑いなんかしてないし」

「そう？でも、辛そうだよ？」
藤堂君はまっすぐに美枝ぽんを見てそう言った。
「わ、私、別に辛くなんか…」
美枝ぽんの目に涙が光った。それにみるみるうちに鼻の頭が真っ赤になっていく。

「美枝ぽん…」
麻衣が優しい声をかけた。すると美枝ぽんは麻衣を見て、ボロボロと涙を流してしまった。
「だ、だって、こうでもしていないと私、泣いちゃうから」
美枝ぽんがそう言って、頭をテーブルに伏せた。

「泣いてもいいのに」
私がそう言って美枝ぽんの頭をなでると、美枝ぽんは、もっとひっくひっくと泣きだしてしまった。
「ハンカチ使う?」
麻衣が自分のハンカチを美枝ぽんに渡した。

「あ、ありがと」
美枝ぽんがそれを受け取った。
「……無理しても、うまくいかないよ、きっと」
藤堂君がぽつりとそう言った。その声はさっきよりもずっと優しい声だった。

「…無理したからうまくいかなかったってこと?」
美枝ぽんがハンカチで目を覆いながら、顔をあげて藤堂君に聞いた。
「そうじゃないの?無理したから続かなくなったんじゃないの?」
「…そうかも」
美枝ぽんが、ハンカチで涙をふいてそう言った。

「…沼っち、きっと美枝ぽんが素のままでいても、受け止めてくれると思うなあ」
麻衣が今度はそう話し出した。
「え?」

「沼っちって、明るいよ?でもさ、人間みんな、暗い時もあれば、落ち込むときもあるんだよ。私だってそうだもん。美枝ぽんだってそうでしょ?無理して明るくしないでも、沼っち、わかってくれるんじゃないの?」

「…」

麻衣の言葉に美枝ぽんは黙り込んだ。

「……別れたくないなら、そう沼田に言ってみたら?」

藤堂君が優しくそう言うと、美枝ぽんはしばらく藤堂君を見て、

「びっくり。藤堂君、優しい顔もするんだね」

とぼそってつぶやいた。

「…あのね、今は俺のことより、自分のことだろ?」

「あ、ああ、そうか」

美枝ぽんはそう言うと、なぜかくすって笑って、

「ありがとう。ちょっと勇気出てきた」

と藤堂君に言った。

「あ、それは本物」

藤堂君が美枝ぽんの顔を見てそう言うと、目をふせてくすって笑った。

私はその笑った顔を見逃さなかった。ああ、その笑顔も好きなんだよね。

「なんだか、ちょっと誤解してたかも」

美枝ぽんは藤堂君の笑った顔を見て、ぽつりと言った。

「何を?」

「藤堂君。ちょっと怖かったけど、違うんだね」

「ああ、八代さん、俺のこと怖がってたもんね」

知ってたんだ。藤堂君。
「わかった？怖がってたの」
「そりゃ、わかるよ。話し方や表情で。今は、思い切り岩倉さんに怖がられてるみたいだ、俺」
「え？」
私はその言葉を聞いて、驚いてしまった。

「それ、ないんじゃないの？だってさっきも、岩倉さんのこと藤堂君かばったし」
「かばったわけじゃないよ。ただ、手塚の言った言葉に頭に来ただけだ」
「だけど、きっと岩倉さんは藤堂君にああ言ってもらって、嬉しかったんじゃ？」
「…そうかな。にらまれたけどな、俺」
にらんだ？ううん。あれは絶対に藤堂君のことを気にして、岩倉さんは藤堂君を見たんだよ～～～。

「岩倉玲子でしょ？1年の時、同じクラスだったよ」
美枝ぽんが話しに加わってきた。
「え？そうなの？1年でもあんなふうだったの？」
私がそう聞くと、美枝ぽんはうんとうなづいた。
「男子からちょっと気持ち悪がられてたんだよね」

ああ、だからさっきも手塚君、あんなこと言ったんだ。
「でもさ、岩倉さんも聖先輩のファンでさ」
「え？」
「去年の文化祭では、じいっとステージの上の聖先輩を見ていたよ」
「そうなんだ」

じゃあ、藤堂君を好きなわけじゃないのかな。

「聖先輩のファンって、どんだけいるんだろうね。ほんと、びっくりだ。そういえば、新しく来た養護の先生も聖先輩のこと狙ってるらしいし」

「麻衣、どこでそれ聞いたの？」

私が質問すると、

「え？噂になってるじゃない」

と麻衣が知らないの？って顔で私を見た。

「…そっか。それ有名な噂なんだね」

「どうでもいいじゃん」

藤堂君はお弁当をいつの間にかたいらげ、ぼそっとつぶやいた。

「もし狙ってても、聖先輩はきっとどうにもならないだろうし」

「え？」

「なんか、聖先輩、彼女一筋みたいだし、他の人なんかどうでもいいんじゃないの？」

「…よくわかるね。一筋だって」

麻衣が言った。

「見たらわかったよ。聖先輩が彼女にベタ惚れだって」

ああ、まあね。あんな笑顔を見せられたら、そう思うよね。私もそう思う。

「藤堂君でもわかるの？そういうの疎そうなのに」

美枝ぽんがそう言うと、藤堂君は、

「疎いけど、さすがにあんだけ仲がいいところを見せられちゃうと…。それに俺もあんななんだろうなって、聖先輩の顔を見て思ったし」

「あんなって？」

美枝ぽんが聞いた。

「いや、なんでもない」
藤堂君は慌てて、お弁当を片づけだした。
「なんで知ってるの？彼女といるところを見たの？」
麻衣が聞いた。

「偶然、浜辺で見かけた。手をつないで、仲良く笑いながら通り過ぎて行ったよね？こっちにも気が付かずに」
藤堂君が私にそう言ってきた。
「え？うん」

「なんだあ。２人もデート中だったんだ」
麻衣がそう言った後、私たちをひやかした。
「しっかりデートもしているし、仲いいよねえ」
麻衣はまだ私たちをひやかして遊ぶつもりだ。藤堂君はむすっとして、
「うっさいな」
と一言言った。

「そんなふうに仲良く居られる秘訣は何？」
美枝ぽんは真面目な顔で藤堂君と私に聞いてきた。
「え？秘訣？」
藤堂君はたじろいだ。それからしばらく下を向き黙り込み、
「う～～ん、何かな。俺にもよくわかんないけど、やっぱり結城さんが素直だからじゃないかな」
とそんなことを言った。

「え？私が？」
嘘。私なんて、ものすごくひねくれてると思うけど。
「ああ、穂乃香ね。健気で一途で、素直だもんね」

「そうなんだ。理想の彼女だね。いいな」
美枝ぽんがそう言うと、なぜか私よりも藤堂君が顔を赤くした。

「あ、司っちが照れた」
「うっさい」
藤堂君は麻衣の言葉に、また一言だけ言い返し、それから顔をずっと背けていた。
照れてる。今、すごく照れてる。
私は仲はいいのかどうかわからないけど、もし秘訣があるとしたら、この藤堂君の可愛いところや優しいところを、見れたことなんじゃないかなって思う。

藤堂君は自分でわかってないよね？きっと私の前では藤堂君のほうが、ずっと素直だよ。顔にも出るからわかりやすいし、一生懸命に思ったことを話してくれるし。
そっぽを向いた藤堂君の後姿を見ながら、は～～～っと目をハートにして私はうっとりとしていた。

第５１話　唇

藤堂君の好きなところを挙げよ…。ともし聞かれたら、たくさんありすぎて、大変かもしれない。
隣にいると、今までよりももっともっといろんな藤堂君を知ることができる。
たとえば、今日も…。

「よう、藤堂。悪いけど今日の部活さあ、俺、委員会があって遅れるんだよ。で、先にこの筋トレメニューをみんなでやっていてくれない？」
５時限目のあとの休憩時間に、川野辺君が藤堂君の席までやってきてそう言った。
藤堂君は川野辺君から渡された用紙を見て、
「いいよ」
と一言返事をした。

「じゃ、頼んだよ」
川野辺君はそう言ってから、私のほうを見て、
「あれ？もしかして席、隣なの？」
と聞いてきた。

「うん。席替えがあって」
「へ～～。藤堂、よかったじゃん」
川野辺君の一言で、藤堂君は一瞬顔を赤くしたが、またすぐにポーカーフェイスに戻した。だけど、川野辺君には赤くなったことがばれているらしく、
「藤堂、照れるなって」
と川野辺君は、藤堂君の背中をつっついた。

「うるさいよ。ほら、もう教室戻れよ。チャイムなるぞ」
「うへへへ。結城さん、こいつって照れ屋で面白いでしょ。たくさんからかってやってね」
「うるさいって、川野辺！」
「ほんじゃ、筋トレ、頼んだよ」

川野辺君はそう言いながら、教室を明るく出て行った。
「ったく…」
藤堂君は耳を赤くしたまま、ちょっとふてくされた顔をしたが、それもどうやら照れ隠しの顔らしい。
可愛い。

そうか。弓道部の人は藤堂君が照れ屋なのを知ってるんだ。へ～。

「川野辺君が部長になったんだっけ？」
「うん」
「藤堂君はいろいろとサポートしてるの？」
「まあね」
藤堂君は穏やかな目をしてそう答えた。
きっと川野辺君にも他の部員にも頼られているんだろうなあ。

それとか…。
「藤堂。明日のホームルームの前に職員室来てくれない？」
帰りのホームルームが終わると、担任の田島先生が藤堂君の所に来た。
「いいですけど、何の用ですか？」
「う～～ん。ちょっとプリントを持って行ってほしんだけど、それと相談事」

「あ～～。わかりました」
藤堂君がそう答えると、田島先生は、
「じゃ、よろしくな」
と言って、教室を出て行った。

「相談事って？」
「うん。まあ、いろいろと」
「？」
「ちょっとね、うちのクラスでもいるじゃん、一人」
「何が？」

「…登校してこないやつ」
「え？そういうことの相談事なの？」
「う～～ん、そんなところ」
うそ。うそ～～。いったい藤堂君って何者？

「ごめん。これ以上は…。個人情報ってやつ？」
「え？」
「違うか。えっと…。ちょっと結城さんにも話せないんだ。ごめんね」
「ううん」
そんなに深いことまで、相談されているのかな。ますます藤堂君って何者？！

でも、何よりも隣になってよくわかったこと。それは…。
「……」
たまに私をじっと見ているってこと。そりゃ私も、見惚れていることはあるけど、藤堂君もじっと私のほうを見ていることがあって、ドキドキしちゃうんだよね。

「えっと…？」
戸惑って藤堂君を見ると、
「ああ、ほら。外、気持ちよさそうだなって思って…」
と言って、私の後ろに目線を移す。私はそれを最初は真に受けて、ああ、何だ。外を見ていただけか～って思っていたんだけど、どうやら言い訳だったみたいだと最近気が付いた。

外を見ているふりをしながら、私を見ている。しばらく見てから、ふっと視線を戻して下を向いている。
なんだろう。私、何か変なことでもやらかしているんだろうか。

気になって気になって、よし。今日の帰りに聞いてみるぞ！と一大決心をした。そして私はドキドキしながら部活が終わるのを待ち、美術室で片づけをしていた。

そういえば、ずっと柏木君は見ていないなあ。絵はどうやら描いているようだから、また朝描きに来ているんだろうか。もう朝早いのは大変だから、朝はやめるって言ってたのになあ。

「結城さん」
あ、藤堂君がもう来ちゃった。ドキドキ。まだ心の準備ができていないのに。
今日はほんのちょっと部員がまだ残っていた。そして藤堂君を見ると、何やらこそこそと話しだし、さっさと私に、
「お先」
と言って、美術室を出て行った。

なんだろう。ちょっと嫌な感じだ。
「…俺が来たから、怖がって逃げた？」
藤堂君がそう言った。

「え？まさか。違うでしょ」
それはないと思うけどなあ。

藤堂君は窓際に行き、
「夕焼け、今日も綺麗だね」
とぼそって言った。
「うん」
片づけも終わったので、私も窓際に行き、藤堂君と一緒に夕焼けを見た。

あ、今ってチャンスかも。
「ねえ、藤堂君」
「ん？」
藤堂君の顔は夕焼けに照らされ、赤くなっていた。
「なんで授業中、私を見ているの？」
「え？」

「たまに、見てるよね？私、何か変なことをしてるとか？」
「はは。変なことって何？別に、何もしてないけど？」
「じゃ、なんで？」
「見てないよ。俺、窓の外見てるだけだし」
「……」

どうしてもシラをきるおつもりですか？
「窓の外を見ていると、視界に結城さんが入ってきちゃうんだ」
「…じゃ、私、邪魔？」
「え？」
「景色を見るのに、私がいたら邪魔なの？」
「…」

藤堂君は目を細め、それからクスって笑った。
「わかった。白状する。そう、結城さんのこと見てるよ」
ドキン。
「な、なんで？」
「……なんでって…、見たいから？」

え～～～。何それ！
「結城さんだって、たまに俺のこと見てるときあるよ？」
「え？」
ああ、見惚れている時？
「それと一緒だよ」

え？
「でも私は藤堂君に見惚れて…」
藤堂君は夕焼けに染まり赤くなっていた顔が、さらに赤くなり、
「うん。それと一緒」
と目を伏せてそう言った。

え？見惚れているってこと？私のどこに？！
わあ、なんだかいきなり心臓が高鳴りだした。
「…結城さん」
「え？」

あ…！また藤堂君がいきなり、頬にキスをしてきた。
きゃ～。また突然だった。……でも、頬にだった。
そういえば、この前も頬にだった。
…なんで？唇じゃないんだ。……どうしてかな。

私は頬を手で押さえ、下を向いたまま黙っていた。藤堂君はそんな私を見て、

「あ…。怒った？」
と聞いてきた。私は首を横に振った。
「……」
まさか、なんで唇じゃなくてほっぺなの？とは聞けないし…。
あれ？これじゃまるで、私は唇にキスをしてくれなくって、悲しんでいるみたいじゃないか。
いや、悲しんでるのかな。顔を近づけた瞬間、頬じゃなく唇にキスをされるかと思って、構えちゃったし。

「ここ、いいよね。なんか落ち着く」
「え？」
「結城さんといるから、落ち着くのかな」
落ち着くの？私はさっきからドキドキしてるよ？

「……藤堂君」
は！私今、何を聞こうとした？どうして唇じゃないのって、思わず聞きそうになった。だけど、それはさすがに聞けないよね。
「なに？」
「ううん、なんでもない」
私は作り笑いをして首を横に振った。

「……なに？」
藤堂君がまた聞いてきた。
「……」
私はさっきキスされた頬をまた手で押さえた。
「なんで、ほっぺ？」

ものすごい小声でそう聞いてみた。藤堂君は「え？」と言って、ちょっと私に顔を近づけ、

「何て言ったの？」
と聞き返してきた。
「なんでもない。なんでもないの」
私は慌ててまた、首を横に振った。

「……ああ、そっか。なんでほっぺなのかって聞いたのかあ」
聞こえてたんじゃない…。か～～～。顔が熱くなってきたよ。
「それ、もしかするとなんで口じゃないかってことかな」
ドキン。ああ、そんなこと聞いてる私って、変だよね！私は真っ赤になり下を向いた。

「…だってさ」
藤堂君の声も小さくなった。私はちらっと藤堂君を見た。藤堂君も下を向いて、頭をぼりって掻くと、
「唇は、抵抗があるから」
とぼそって言った。

抵抗？！！抵抗って？！！！
「え？」
ちょっとショックなんですけど…。私の顔が引きつった。それを見て藤堂君は、
「あ、変な意味じゃなくて。その…、ものすごく照れるっていうか、いや、違うか。えっと、心臓があばれまくるっていうか」
と慌てて早口でそう言った。

「…」
それ、この前も言ってた。
「ものすごく、心臓に悪い…」
「そ、そうなんだ」
私は赤くなったまま、下を向いた。藤堂君も下を向き、顔をなか

なかあげなかった。

あれ？じゃあ、頬にキスから先は進展しないってことかな。もしかして…。

「って言っても、その…、ほっぺにキスもかなり動揺しちゃうんだけど」

「え？」

藤堂君の言葉に私は顔をあげた。

「じゃあ、なんでしてるんだよって、言われそうだよね？」

「ううん」

藤堂君は私の顔を見てから、真っ赤になりまた下を向いた。

「なんか、俺、変だよね？」

「え？」

「うん。変なんだ。特に最近は隣になっちゃったし、毎日浮かれてるし」

「え？」

そうなの？そうは見えなかったけど。いつも落ち着いてるように見えてたけどな。

「学校に来るのが、嬉しいんだけど、朝からかなり緊張もしていて」

「え？」

「あ、いい意味で。その…」

緊張してるの？私の隣の席でってこと？絶対にそうは見えないんだけど。

「……。俺、たまにかなりずれてることしてたり、言ってたりしない？」

「しない」

「じゃあ、俺、結城さんに呆れられたり、嫌われるようなことは」
「してない」
「じゃあ、結城さんががっかりするようなこと」
「まったくないけど？」
「よかった」

うそ。そんな心配をしていたの？だから緊張？
「……ほんと、隣にいても、俺、手塚が言うように口数少ないし、結城さん、つまらない思いしていないかなとか、ちょっと気になってた」
そうなの？

「メールも、あまり頻繁にできないし。結城さんはくれるのに…。ごめんね」
「ううん」
よかった。こっちこそ、しつこくないか心配だったんだよね…。
「気にしないで、藤堂君」

「え？」
「いつもと同じで大丈夫だよ」
「…俺？」
「うん。いつもと同じ藤堂君でも、私好きだよ」
「…！」
藤堂君がまた、赤くなった。

あ、私ってば、また大胆発言してるんだ。
「そ、それにまだまだいろんな藤堂君を知っていきたいし」
「…うん」
藤堂君はまだ真っ赤だ。

「あ～～～。熱い、顔…」
藤堂君はそう言うと、窓の外を見てしばらく黙り込んだ。
「結城さん」
「え？」

「本当は、その…。ほっぺじゃなくて唇にしたいって思ってたんだけど」
え？！
「心臓に悪いって言うのもあったけど」
「うん」
ドキドキ。何？

「結城さんにまた泣かれたり、嫌がられる方がちょっと、心配でさ」
「え？」
「……」
藤堂君はゆっくりとこっちを向いた。
ドキドキ。ど、どうしよう。

「私、あの時泣いたのは」
「キャロルが原因？」
「うん」
「…嫌がってたわけじゃない？」
「うん」

ああ、だから、こんなことを言ったら、催促してるみたいに聞こえちゃうよ。
でも、催促してるのかな、もしかして。

藤堂君は私の頬に手をそっと当てた。
ドクン！もしや、キス…？

ゆっくりと藤堂君が顔を私に近づける。
うわ。ドキン！やっぱり、そうだよね。バクバクバク。私の心臓のほうが持たないよ。

ギュ！思わず私は目をぎゅってつむった。心臓が口から飛び出そうだ。だから、口も堅く閉じた。
ふわ…。固く閉じた唇に、藤堂君の唇が重なった。
う～～わ～～～。この前はほんの少し触れただけだったのに、今度はちゃんと唇の感触がある。

1、2、3秒？そっと藤堂君が唇を離した。それから私の頬から手も離し、そしてまた窓の外を見てしまった。
私はそんな藤堂君の背中を見ていた。どうしよう。やばい。泣きそうだ。泣かないって言ったのに。

ドキドキドキドキ。心臓がずうっと高鳴ってる。高鳴りすぎて泣きそうだ。
まだ藤堂君の唇の感触が、私の唇に残っている。頬には藤堂君の手のぬくもりが残っている。

どうしよう。本当に胸の高鳴りがおさまらない。ドキドキドキ。藤堂君の背中が愛しすぎて、背中にまで恋をしそうだ。

藤堂君がゆっくりと振り返った。私は藤堂君の顔がまともに見れなかった。
「結城さん」
名前を呼ばれても、返事もできない。
両手で私は顔を覆った。手で触ってもわかる。頬が熱い。

「結城さん？」

藤堂君が心配そうに名前を呼んだ。
「違うの…」
「え？」

「違うから。泣いてるんじゃないの。嫌がってもいないし」
私はなんでだかわからないけど、そんなことを言った。きっと藤堂君が誤解しないようにするために。
「う、うん」
藤堂君はちょっと戸惑ったようにうなづいた。

「ただ…、ドキドキがおさまらなくて」
「俺もだ」
え？
「さっきからドキドキしてる」
藤堂君も？

「……やっぱ」
「え？」
「結城さんのこと、すごく好きみたいだ」
ドキン！

わ～～～。私の顔がもっと熱くなる。
「そ、そ、それは、私も」
か～～～。もっと赤くなってる、きっと。

藤堂君の目を見てみた。藤堂君は私をじっと見ている。
ドキン。目が合った。あんまりじっと見られているから、恥ずかしくなり目を伏せた。胸はますます高鳴りだした。そして、なんでだか知らないけど、私は勝手に口が開き話し出していた。

「私も、藤堂君のことが、めちゃくちゃ好きみたいで…」
恥ずかしいくせにそんなことを口にしている。
「本当に？」
「うん」

「……ほんとに？」
藤堂君は2回も確かめた。
「……」
私は2回目はうなづかず、藤堂君の目を見た。それから、
「きっと大好きだから、こんなにドキドキするんだと思う」
と目を見ながらそう言った。

藤堂君も目をそらさなかった。そして、今度はなぜか吸い寄せられるようにキスをしていた。
唇を離すと、藤堂君は下を向き、
「やばいね…」
とつぶやいた。

やばい？何が？
「キス…。ほっぺじゃなくなった」
ドキン。

藤堂君の「やばいね」には、もっと奥深い意味があるような気がして、私はそれからもずうっとドキドキがおさまらないでいた。

第52話　光

藤堂君って、やっぱり美枝ぽんや麻衣が言うみたいに奥手じゃないんじゃないかな。
そんなことを最近時々、思ってしまう。そして勝手にドキドキしている私がいる。

そんなドキドキの私とはうらはらに、美枝ぽんは今日も暗かった。
夜、最近ずっと話をしていない沼田君にメールした。
＞今、いい？メールしてても。
5分くらいして返信が来た。

＞いいけど、なに？
あ、めずらしくそっけない感じのメールだ。
＞美枝ぽんとどうなってるの？
こうなったら直球で聞いてみよう。
＞距離を置いてるよ。

＞いつまで？
＞わかんない。自分の気持ちがわかるまで、かな。
＞自分の気持ちがわからないの？なんで？
そう送ると、何分待っても返事は来なかった。

結局、沼田君のほうがお昼を他の男子と食べるようになり、美枝ぽんは私たちと食べている。藤堂君は私たちとだったり、弓道部の部員と食べたりしている。
藤堂君も気になり、沼田君と話をしているようだが、沼田君は俺たちの問題だからと最後にはそう言って、話をやめてしまうらしい。

私と麻衣は、美枝ぽんに素直にこっちから沼田君に話しかけてみたら?と言っている。だけど、美枝ぽんはそう言う話をすると、黙り込んでしまう。
「ごめん、私暗いね」
とそのあとに必ず美枝ぽんは謝ってくる。

「私だって、藤堂君に片思いをしていた時は暗かったよ」
「私も、ふられた直後は真っ暗だった」
麻衣と私がそう言うと、美枝ぽんは力なく笑い、
「ありがとう」
とそう小さな声で言った。

沼田君はどういうつもりなんだろう。メールもその後、来なくなっちゃったし。別れちゃっても本当にいいのかな。

翌週、放課後美術室に行くと、柏木君がいた。
「久しぶり、結城さん」
「来たんだ」
「うん。今日が最後だけどね」

「え?」
どういうこと?
「完成したんだ。それで、もうこの学校には用がなくなったから」
「完成した絵はどうするの?」
「おいていくよ。原先生が秋の文化祭に展示してくれるって」

「…絵、見てもいい?」
「どうぞ」
私は完成したという柏木君の絵を見た。
「!!」

すごい！波のうねり、空の雲、引き込まれるようだ。

「絵にぶつけたんだね。今、すっきりしてるんじゃない？」

「うん。けっこうね…」

柏木君はそう言うと、ふっと笑ってから、

「結城さん、いろいろとありがとう」

と私に向かって手を差し出した。

握手？

私はその手に私の手を重ねた。すると、柏木君は私の手をギュって握りしめ、私を引き寄せてしまった。

「え？」

美術室にいる他の部員が、いっせいにこっちを見た。

「か、柏木君？」

ギュ。柏木君が私を抱きしめ、そしてすぐに私の手を離した。私は慌てて、柏木君から遠ざかった。

「そんな目で見ないでくれる？今のは別れのハグ」

「……」

「もう会うこともないだろうからさ」

「と、東京、すぐに行くの？」

「うん」

「東京のどの辺？」

「聞いてどうすんの？会いに来てくれんの？」

「…」

私が黙り込むと、柏木君はまたクスって笑って、

「東京のどっかだよ。もしかしたらまた、偶然会うこともあるかもね」

と首をかしげてそう言うと、掌をぴらぴらさせて、
「じゃあね」
と美術室を出て行った。

え？もしかして、本当に本当にこれで最後？
なんてあっけないの？

「か、柏木君」
思わず私は美術室を出て、柏木君を追いかけた。柏木君は、私の声に気が付き振り返った。
「…あ、あの」
どうして私、呼び止めたりしたんだろう。

「何？」
「げ、元気でね」
「…それだけ？」
「えっと…」
私は少し柏木君に近づき、
「私は柏木君の絵、すごいと思っているよ。だから、東京に行っても、絵を続けて」
と一気にそう言った。

「……そうだな」
柏木君は下を向き、それからまた顔をあげると、
「描きたい衝動にかられたら描くよ」
と笑いながらそう言って、またくるっと後ろを向き昇降口に向かって歩き出した。

私は美術室に戻り、柏木君の絵をもう1度見た。荒れ狂った海。空。暗い色の中に、ほんの小さな光が見える。

私は自分のキャンバスの前に座ると、キャンバスの下に何か、手紙のようなものがはさまっているのを見つけた。

「なに、これ？」

それを広げてみた。その手紙は柏木君からの、私宛の手紙だった。

『結城さん、いろいろと迷惑かけた。悪かったって思ってるよ。本当は俺、すぐにでも学校やめてやろうと思ってた。それでも学校に来て絵を描いていたのは、結城さんがいたからかもしれない』

うそ…。

『俺の絵、最初はただ荒れ狂ってた海だった。でも、そこにわずかな希望の光が見え始めてるんだ。わかる？』

ああ、小さな光は希望の光だったの？

『それ、結城さんだよ』

柏木君の手紙はそこで、終わっていた。

「……私？」

ガタン。私は思わず席を立ち、また廊下に出た。それから急いで昇降口に向かったけど、もう昇降口には柏木君はいなかった。

靴に履き替え、校舎を出た。校門まで走って行ったが、そこにも柏木君の姿は見えなかった。

もう、帰っちゃったの？

「はあ…」

思い切り走ったから息があがった。校門から駅までの道も見てみたが、柏木君はどこにもいない。

まだ、校舎の中？

私はまた走って、校舎に戻ると上履きに履き替えた。

教室？いや、きっと教室には行かないだろう。じゃあ、職員室？

あ、もしかして保健室？
保健室に向かって走っていると、保健室から養護の先生と一緒に柏木君が出てきたのが見えた。

「柏木君」
私はまた柏木君の名前を呼んだ。柏木君は驚いて私を見た。
「結城さん？」
「て、手紙、読んだの…」

「ああ、そっか」
「はあ、はあ…」
「もしかして走ってきたの？」
「うん…」
私はしばらく下を向いて、息を整えた。

「柏木君、じゃあ、私は職員室に行くから。東京行ってもちゃんと学校行くのよ。それでちゃんと卒業はしなさいよ」
養護の先生はそう言うと、柏木君の背中をぽんとたたき、廊下を歩いて行ってしまった。
「い、いいの？」
「え？」

「もうちょっと、先生と話したかったんじゃないの？」
「でも、結城さんが邪魔しに来たんじゃん」
「私、邪魔をしに来たわけじゃ…」
「じゃ、何？」
柏木君はさっきからにやにやしている。

「手紙…。私は希望の光なんかじゃないよ」
「俺には希望の光だったよ」

「どこが？私、柏木君を避けてたし、私なんか全然」
「でも、結城さんの存在は俺に光をくれてたよ」

どうして？どこが？私は何もしていないのに。
「結城さんが藤堂を好きなのは、もうわかってる。だけど、俺のことも気にかけてた。それは本当でしょ？」
「恋じゃないよ？そういうんじゃなくって」
「うん」

柏木君は下を向いて、またしばらく黙り込み、
「わかってる。だけど、気にかけてくれてたこととか、絵をすごいって言ってくれたこととか、そういうことがもうすでに、俺には光になってたんだなって思ったんだ」
「…」
「だから、ありがとう」

「ありがとうなんて、お礼を言ってもらうようなことを私はしていない」
「してくれてた。十分してくれてた」
なんで？なんでそんな穏やかな目をしているの。
「俺、きっと東京行ったら、結城さんのこと思い出して、けっこう真面目にやっていくと思うよ」

「え？」
「親の離婚、かなりきつかったけど、今はそうでもない。すっきりしてるんだ」
「……」
「結城さんも、ずっと絵を続けて」
「私？」

「結城さんの絵は優しい。人を癒す力があるよ」
「…私の絵が？」
「うん。俺とは正反対の絵だよ」
「……」
「藤堂は結城さんに似てる」

「私と？」
「一見怖そうに見えるけど、藤堂って優しいんだろ？」
「うん」
「藤堂なら結城さんを大事にしてあげるだろうし、お似合いだよ」
柏木君。本当にどうしちゃったの。顔、ずっと穏やかだよ？

「じゃ、俺、本当にもう行くよ」
「う、うん」
「俺のこと見つけに来てくれてありがとう」
「ううん」

「じゃあね」
「…うん。元気でね」
「サンキュ」
柏木君はそう言って、歩き出した。私は柏木君の後姿をしばらく見ていたが、柏木君とは反対方向を向き、私も歩き出した。

私の存在が、誰かに光をあげることになるんだ。そんなことを思うと、驚きでまだ心が震えている。
穏やかな表情になった柏木君は、転校したら本当に変わるんだろうか。それはわからない。だけど、なんとなく絵を続けていたら、また本当に会えるんじゃないかって、そんな気もした。

5時を過ぎた。

「柏木君、今日で本当に最後なの？」
とそんなことを言いながら、美術室を出て行く部員が何人もいた。
「はあ～～」
私は大きなため息をついた。

しばらくぼけっと自分の絵を眺めていると、そこに藤堂君がやってきた。
「まだ描いてた？」
藤堂君が私の横にまで来て、そう聞いてきたので、
「ううん」
と首を振り、私は席を立った。

「もう片付けるね。ちょっと待ってて」
「うん」
藤堂君はそう言うと、少し私から離れ、私の絵を眺めている。私はその間に片づけをして、手を洗いに行った。

「結城さん、これ落とした」
手を洗ってから戻ってくると、藤堂君が柏木君からの手紙を手にしていた。
「ごめん。手紙だってわかんないで、読んじゃった。これ、柏木から？」
「うん。今日で最後だったんだ」
私はそう言って、手紙を藤堂君から受け取った。

「柏木の絵ってどれ？」
「それだよ」
私は柏木君の絵を指差した。
「これ？」
「うん」

藤堂君は柏木君の絵を見て、しばらく黙っていた。
「…光って、これか…」
藤堂君は目を細め、それから私に視線を向けた。
「柏木、もしかするとふっきれたのかな」

「え？」
「苦しんでいたけど、こうやって希望の光が見えたってことはさ」
「うん。抜け出せたみたい。すっきりしたって言ってたし」
「そっか…」
藤堂君の目もなぜか、穏やかだ。柏木君に対しては、敵対心みたいなものを持っているのかと思っていたのにな。

「絵ってすごいな」
「…すごいって？」
「柏木のは引き込まれる強さがある。結城さんのは癒しや優しさがある」
藤堂君はもう一回柏木君の絵を見て、ふうってため息をついた。

「結城さんはもしかして、柏木のことが好きだった？」
「私？」
「あ、柏木のことって言うより、柏木の絵って言ったほうがいいかな」
「…うん。柏木君の絵には惹かれてたよ」
「そっか」
藤堂君はそう言ってから、今度は私の絵を見に来た。

「柏木もきっと、結城さんの絵に惚れてたと思うよ」
「私の？」
「うん、きっとね」

藤堂君はそう言うと、私の隣に来て私の手を握ってきた。

「藤堂君も私の絵に惹かれたって言ってたよね？」

「うん」

「最初に、私の絵を好きになったってことだよね？」

「違うよ。初めは絵を描いている結城さんに惹かれたんだよ」

「私に？」

「真剣に絵を描いている結城さんが綺麗だったんだ」

「き、綺麗？！」

「うん。真剣な目も、表情も、綺麗だったよ」

ドキン。そんなことを言われると、顔がどんどん熱くなっていく。

「だから、結城さんの絵を見たくなったんだ」

「…そうだったの」

「うん。それで絵を見て、もっと惹かれた」

「……」

ドキン。ドキン。さっきから藤堂君がぎゅって手を握っているから、胸がドキドキして顔が熱い。

「柏木には悪いけど、転校してくれてちょっとほっとしている」

「なんで？」

「ライバルだから」

「柏木君が？なんで？」

「結城さん、だって、柏木の絵が好きなんでしょ？」

「絵だけだよ」

「そう？でも、そのうちに中身にも惹かれていったかもしれないよね？」

「……」

私は藤堂君の目をじっと見た。藤堂君も私を見つめている。
「それはないと思う」

「なんで？」
「だって、私が好きなのは」
藤堂君なんだから。そう言おうとした。でも、そんなのとっくに藤堂君は知ってるはずだ。
「藤堂君、ちょっとさ」

「え？」
「認識不足なの？もしかすると」
「え？なんの？」
藤堂君が首をかしげた。
「私が藤堂君を好きなのは知ってるよね？」

「…うん」
「それがどれだけ好きかは、知らないのかなって思って」
「え？」
藤堂君は目を丸くして私を見た。
「まあ、いっか」
私がそう言うと、藤堂君はさらに目を丸くした。

「いや、まあ、よくない…」
藤堂君は目を丸くしたままぽつりとそう言った。でも私は、もう一回、
「まあ、いいよ」
と力なくそう言った。

「よくないって。どれだけ俺のことが好きかってことだよね？」
「うん」

「それを俺がわかってないってことだよね？」
「うん」
「よくないって。わかってないなら、もっとよくないって」
藤堂君はまた、私の手をギュって握った。

「いいよ」
「なんで？」
「…そのうち伝わるよね？」
「……」
藤堂君は黙ったまま、私をじっと見ている。

「そのうちわかってくれるよね？」
「ど、どうかな。俺、そういうの疎いから、なかなかわかんないかも」
「じゃ、どうしたら伝わるかな」
「…言葉にしてもらったり？」
「してると思う。もう十分に」

「え？じゃ、じゃあ、態度？」
「態度に出ていないの？私」
「……ど、どうかな」
藤堂君はそう言うと、下を向いてしまった。

「だけど、メールもしてる。どっちかって言えば私のほうがしてる」
「うん」
「藤堂君からしてくれたことってないよ」
「そうだっけ」
「そうだよ」

「ごめん」

「……ね？こんなじゃ私のほうが、藤堂君のことを好きで、片思いでもしてるみたいだよ？」
「…え？！」
「より好きなのは私のほうかもって、時々思うもん」
「……ほんとに？」

私はコクンとうなづいた。藤堂君は赤くなり、
「そ、そうだったんだ。ごめん。これからはちゃんと、俺からもメールするし、ちゃんと俺も、意思表示をするし」
とかなり慌てて必死にそう訴えた。

「うん」
私がまたコクンとうなづくと、藤堂君はほっとした表情を見せた。
そうして、
「キスしたら、もっと俺が結城さんを好きだってこと、わかってくれるのかな」
といきなりそんなことを言いだした。

え？
ドキン。そこはうなづいていいところ？どうなの？でも…。キスしてほしいからか、うなづいてしまった。

藤堂君は顔を近づけた。私はそっと目を閉じた。藤堂君の唇が触れた。ドキドキドキドキドキ。
唇が離れても、目を開けられない。顔が思い切り熱い。
藤堂君はどうやら、顔を私から離し、黙っているようだ。私はそっと目を開けた。

藤堂君とはまだ手をつないでいた。その手を藤堂君はひいて、
「帰る？」

と聞いてきた。

「うん」

手をつないだまま美術室を出て、廊下の向こうのほうに人影が見えて、藤堂君はぱっと手を離した。そして藤堂君は照れくさそうにしながら、私の横を黙々と歩いていた。

第５３話　盗み聞き

一週間があっという間に過ぎ去った。いまだに沼田君は美枝ぽんと話もせず、美枝ぽんがだんだんと腹を立ててき始めていた。
「いつまで距離を置くつもりなのかな」
昼休み、中庭で私と美枝ぽんと麻衣がお弁当を食べている時、美枝ぽんが話し出した。

「あれからまったく沼田君は話をしてこないの？」
「うん」
「沼っち、どういうつもりなのかな」
「麻衣からも沼田君に聞いてみたら？」

私がそう麻衣に言うと、麻衣はため息をついた。
「聞いてみたよ。だけど、言葉を濁しちゃうんだよね。それになんとなく私のことも避けてる」
「なんなの。なんでほっとくのかな。私、もうこれ以上宙ぶらりんは嫌だよ」
「美枝ぽん、切れた？」
麻衣が聞くと美枝ぽんは、鼻を膨らませうなづいた。

「だって、このままじゃ私、次の恋だってできやしない」
「確かに。付き合っていくのか別れるのか、はっきりしてほしいところだよね」
…。そうなの？別れることなんて私だったら考えたくもないけどな。

「あ～～。どうしよう」
美枝ぽんが頭を抱えた。

「今日、部活ない日でしょ？美枝ぽん」
「うん」
「帰りに沼っちつかまえて、聞きだせば？」

「そ、それより、美枝ぽんは沼田君のことをどう思っているの？」
麻衣と美枝ぽんの話に、私は無理やり入り込んだ。
「わかんない。なんかだんだんと好きだかどうかもわかんなくなってきた」
え～～～～？
「ううん。好きだと思う。だけど、こういう状態が嫌なんだ」

「付き合っていきたいの？」
「こっちが付き合いたいと思っても、向こうにその気がなかったら無理じゃない？だったら、もう別れるよ」
「いいの？！」
「いいも何も、しょうがないじゃん」
なんでそんなふうに、割り切れるんだろう。

「ちょっと悔しいけど」
「え？」
「こうなったら、私からふってやろうかな」
美枝ぽん？

美枝ぽんはそう言うと、残っていたお弁当をばくばくと食べ、お弁当箱を片づけた。
「穂乃ぴょんはうまくいってるの？」
美枝ぽんはお茶を一口飲んでから、私に聞いてきた。
「うん」

「そうなんだ。席も遠くなっちゃったし、最近2人が一緒のところ

をあまり見てないから、どんな感じなのかまったくわかんなくって」
「…か、変わらないよ？」
「本当？席隣りなのに、あまり会話もないっていう噂だけは耳に入ってくるんだけど。本当は穂乃ぴょんと藤堂君はうまくいってないんじゃないか…なんていう噂も聞く」

「ええ？！」
何？その噂！
「藤堂君、口数が異常に少ないんだって？」
「え？」

「あ！それにさあ。岩倉さんが藤堂君を好きだっていう噂も聞いたんだ。ねえ、どうなの？」
「美枝ぽん、どっからそんな噂を聞いてくるの？」
麻衣が驚いている。
「でも、それはちょっと思い当たるかも、私」

私がそう言うと、２人が驚いた顔をして私を見た。
「岩倉さん、時々藤堂君のほうを見てる。あ、ちらっと見るだけなんだけど、そのあとほんの少し顔が赤くなってるんだよね」
「穂乃香って、よく見てるんだね、そういうの」
「だって、前の席だもん。よく見えちゃうんだもん」

「藤堂君は気がついてるの？」
「ううん。岩倉さんに怖がられてるって思ってるみたいだし」
「なんでそんなふうに思ってるのかな」
「岩倉さん、藤堂君を見る時っていつも、おどおどしてるの。この前も岩倉さんが落っことした消しゴムが藤堂君の席のほうにころがって、それを藤堂君が拾ってあげたら、びくびくしながら岩倉さん、ありがとうって言ってたから、俺、相当びびられてるよねって、あ

とで藤堂君が言ってたんだよね」

「ええ?!」

美枝ぽんが必要以上に驚いている。

「あの、岩倉さんがお礼を言ったの?っていうか、言葉を発したわけ?信じられない」

「そ、そうなの?」

「そうだよ。先生に当てられたって何も話さないから、最近じゃ先生だって岩倉さんに当てないじゃない?」

「そういえば、そうだね」

麻衣が相槌を打った。

「でも、藤堂君にはありがとうって言ったんだ。それはもう、絶対に藤堂君のことが好きだね」

美枝ぽんの目が輝いている。ほんと、こういう話が好きだよなあ。

美枝ぽんは。

「やっぱりね」

「だけど、司っちは嫌われてる、怖がられてるって思ってるんだ」

「うん」

「いいんじゃない?そう思わせておけば。好かれてるって知ったとしても、どうしようもないだろうし」

美枝ぽんが冷たくそう言った。あれ?さっきは目を輝かせていたのにな。

「そうだね。それより最近はデートしてるの?穂乃香」

「…ううん」

「ね、確かに司っちはこっちが話しかけないと、なかなかあっちから話さないけど、でも話しかけたら答えるんだしさ、どんどん穂乃香から話してみたらいいんじゃないかな」

「…話してるよ」
「本当？」
２人が同時に私に聞いた。
「うん。登下校中はいろいろと、話してると思うよ。ただ、席にいると前の手塚君が耳をダンボにしてたりするから、藤堂君も会話を控えてるみたいだけど」

「…なんで？」
「照れくさいんじゃないのかなあ。たまにメモ書きで、会話してるんだ」
「メモ？」
「授業中とか、こっそりと」
「藤堂君と？」

美枝ぽんが驚いている。
「うん」
「…な～～んだ。じゃ、本当に仲が悪いわけでもなくて」
「…うん」

私はそれ以上はなんだか話すのが照れくさくなり、下を向いた。
どうやらこの二人は、私と藤堂君の間には何の進展もないと勝手に思っているらしく、キスしたこととかそういうのもまだ話していないし、２人も聞いてこないんだよね。

藤堂君はあれから、時々美術室で二人きりになるとキスをしてくる。そのたび、私はドキドキして何も話せなくなるし、いまだに緊張しちゃうんだけど、藤堂君はなんだか違うんだよね。ちょっと私よりも余裕があるみたいで、キスが終わるとすぐに背を向けたりしていたのに、最近は私の顔をじっと見ていたり、私の反応を見てい

るようなんだ。

それにキスも、日に日に唇を重ねている時間が長くなっているような気がする。一回離れても、もう一度唇を重ねてくる時もある。

絶対に、絶対に、藤堂君は「奥手」じゃないと最近は断言すらできる。時々、2人きりでいると、藤堂君は男なんだっていうことをやけに意識してしまい、私は余裕がなくなり、怖さすら感じてしまう時もある。

そんな時には、早目に美術室を出て、昇降口に向かうようにしている。

昨日は藤堂君は、
「教室に忘れ物だ」
と昇降口に向かっている途中に言いだした。
「じゃ、昇降口で待ってる」
「え？一緒に来ないの？」

「うん。待ってる。放課後の学校って怖いし」
「…でも、昇降口で一人でいるのも怖いんじゃ」
「ううん。まだ明るいし、平気」
私がにこっと笑ってそう言うと、藤堂君はちょっと眉をしかめたけど、
「わかった。じゃ、すぐに戻ってくるから」
と言って、廊下を走って行った。

前に、幽霊は何もしないよってそう言った藤堂君の言葉を思い出した。私、藤堂君は何かするの？って、純粋に意味も分からず聞いたっけ。だけど、今ならわかる。あの時の藤堂君の動揺ぶり。何が言いたかったのかも。

今の藤堂君なら、あんなふうに動揺するかな？余裕かまして、キスとかしてきちゃうんじゃないかな。

昨日はそのあと、本当にすぐに藤堂君は昇降口に戻ってきて、それから手をつないで駅まで帰ったっけ。

もし他の生徒がいたら、藤堂君は手をつないだりしない。その辺は前も今も変わらない。

「今日、私バイトがない日なんだ。穂乃香は部活だよね」

「う～～ん。さぼっちゃおうかなあ」

「え？どうして？」

「藤堂君、ミーティングだけなんだって。一緒に帰りたいから、私も部活出るのやめようかと思って」

「なんだ。本当に仲いいんだね」

美枝ぽんがそう言って、そのあと小声でいいなってつぶやいた。

「美枝ぽん。帰りに沼っちとっつかまえるんでしょ？協力しようか？」

「ううん。いいの。一人でも大丈夫」

麻衣の言葉に美枝ぽんは、にこっと笑って答えた。

放課後、美枝ぽんはつかつかと沼田君の席まで行き、沼田君に何かを告げていた。沼田君は美枝ぽんの勢いに負けたのか、うんうんとうなづいている。

それから二人は教室を出ていった。

「穂乃香」

麻衣が私の席に走ってやってきた。

「美枝ぽんが行動に出たけど、ちょっと見に行かない？」

「え？」

「あと、追いかけようよ」
「悪いよ」
「でも、心配じゃない？美枝ぽん、もしかするとまた強がっているかもしれないし」
「う、うん」

私も席を立った。隣りで藤堂君は私と麻衣の会話を聞き、
「八代さん、何か沼田に話でもあるの？」
と聞いてきた。
「決着をつけるみたいだよ」
麻衣が藤堂君にそう答えると、
「そっか」
と藤堂君は一言、穏やかに言った。

「藤堂君、ミーティング終わったら、教室にいてくれる？」
「うん。わかった」
私は藤堂君にそれだけ伝え、麻衣と一緒に教室を出た。

「どこに行ったのかな」
「なんとなく見当はつく」
麻衣はそう言うと、階段を下りて体育館に向かう渡り廊下を歩き出した。
「体育館に行くの？」
「ううん。体育館の裏だよ」

そこって、前に私が藤堂君から告白された場所？
「あそこ、本当に人が来ないんだよね。そうだったでしょ？」
「え？」
た、確かに。
「もし沼っちがあまりにも手を出してこないようなら、そこに連れ

て行って強引にキスでもするって前に美枝ぽんが言ってたんだ」

ええ?!

「結局そうなる前に、距離を置かれちゃったようだけど」

「じゃあ、あの二人、キスとかそういうのは」

「まだみたいだったよ?美枝ぽん、さすがにキスは催促できないみたいだったから」

「…」

「あ、穂乃香と司っちは…」

「え?」

ドキ。

「まだだよね。ごめんごめん、変なこと聞いて」

麻衣が悪かったっていう感じで、苦笑いをした。

「……」

困った。でも、本当のことは言えないよ。恥ずかしくて。

「あ、でも司っちはキスの経験はありなんだよね?キャロルだっけ?」

「その話はもう…」

「ごめんごめん。この話をすると穂乃香、落ち込んじゃうんだもんね?」

違う。その話はもうとっくに終わってるっていうか、藤堂君、言ってたもん。もうキャロルもキスしてこなくなったって。

あの時、一緒にいた敏美さんと博子さんがキャロルに、日本じゃ恋人じゃなかったらキスなんてしないんだよって、さんざん言ったらしく、キャロルもようやくそれがわかったようだって。

「あ、やっぱりいた」

麻衣がそう小声で言って立ち止まった。私もその場に立ち止り、

体育館の裏をのぞいて見た。
わ。すぐそこにいる。私たちは息を殺して、そっとのぞいていた。

「何？話って」
沼田君の声が聞こえた。
「私、こんな状態もう嫌だ。はっきりとさせようよ」
美枝ぽんが声を震わせながらそう言った。

「…別れるってこと？」
「そうじゃなくって。距離を置いて自分の気持ちをみたかったんでしょ？わかったの？」
「美枝ぽんはわかったの？」
「私のことじゃなくて、沼っちのことを聞いてるんだよ？」
美枝ぽんの声はもっと震えた。

「…俺は…」
「もういい加減はっきりとした？」
「……」
沼田君は黙り込んだ。
「私に悪いとか、そんなふうに思って言えないでいるの？」

え？
なんのことかな。麻衣も私の顔を見て、首をひねった。美枝ぽん、もしかして沼田君の心の中を知っているかのような言い方だな。

「私、なんとなく気が付いてたよ」
「…うん。気が付いてるだろうなっていうの、わかってた」
「じゃ、なんではっきりと言わないの？」
「ごめん。美枝ぽんに悪くて言えないんじゃなかった」
「じゃあ…。穂乃ぴょん？それとも藤堂君に？」

「…うん。あの二人の仲を壊したくないし、俺が黙っていたらすむことだから」
え？え？え？！
麻衣のゴクンと言う生唾を飲み込む音が聞こえてきた。
「だけどそれじゃ、私はどうなるの？」

「…ごめん。でも、俺、本当に美枝ぽんのことをどう思っているのかも、自分で知りたかったんだ」
「…そ、それで？」
「うん。やっぱり、美枝ぽんのことは……」
沼田君の言葉が詰まった。それから何秒も黙ったままになってしまった。

「わかった。わかったよ。だけど、沼っちはそれでいいの？」
「……」
「穂乃ぴょんに気持ち告げなくていいの？」
「……それも考えた。でも、いいよ。俺の気持ちは封印するからさ」

や、やっぱり？
麻衣が今の沼田君の言葉を聞き、私を見た。私は麻衣の顔を見れなかった。それから私はその場を、静かに立ち去った。麻衣も静かに私の後を追ってきた。

一気に2人で教室まで戻った。教室にはすでに誰もいなかった。
「…ど、ど、どういうこと？」
麻衣が息を切らしながらそう言った。私たちは知らないうちに小走りで廊下を駆けていたようだ。
「ぬ、沼っちは穂乃香のことが好きなわけ？」

ああ、そういえば、相談を受けた時に、そんなようなことを言ってた。でも、それは友達としてそう思ってるだけだよって、私はそんな言葉を返した気がする。

だって、私みたいな子のほうが自分には合うって、そんな言い方していたし、落ち着くとか、ほっとするとか、そんなふうに言われたし。それは恋じゃないよって思わず言っちゃったんだ。

でも、本当は美枝ぽんと別れてほしくないとか、私のことを好きになってもらっても困るとか、そんなふうに思ってしまって、私は沼田君にそう言っていたのかもしれない。

もしかするとあの時の私の言葉は、沼田君を傷つけてしまったんだろうか。

「穂乃香。どうするの?」

「どうするも何も。今の話を聞いていたことも2人には内緒でしょ?」

「でも、知っちゃったんだよ?沼っちが穂乃香を好きだってことを。それなのに知らないふりとかできる?」

「で、でも…」

どうするも何も、どうすることもできないじゃない。

ガタン。

その時ドアが開く音がして、驚いて私と麻衣は振り返った。まさか、美枝ぽん?それとも沼田君?

すると、

「今の話、ほんと?」

と藤堂君がドアを開け、教室に入ってきた。

あ〜〜〜〜。一番聞かれたくない人に、聞かれてしまった…。

私の顔は引きつった。麻衣も、なんて返していいのかわからないようで、私の顔と藤堂君の顔を交互に見て、黙り込んだ。

「沼田が結城さんを好きだって、それ、本当？」
「うん」
麻衣がうなづいた。
「誰がそんなこと」
「本人が言ってたのを聞いちゃったの。私たち…」

麻衣がそれもばらした。ああ、藤堂君の顔色が変わっていく。
なんで？
「そうなんだ」
藤堂君がため息を吐くようにそうつぶやくと、黙って下を向き何やら考え込んでしまった。

「私、帰る」
麻衣は自分のカバンを持って、
「ごめん。ここから先は2人だけのほうがいいでしょ？じゃあね」
と急ぎ足で教室を出て行ってしまった。
2人だけのほうがいい？え？どうして？なんで？麻衣！

藤堂君は眉をしかめ、下を向いたまま、それっきりしばらく黙り込んでしまった。ああ、この沈黙はいつまで続くんだろう。それに、なんでそんなに藤堂君は考え込んでいるんだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9298u/

もう１度恋をして

2011年10月10日03時12分発行